佐渡金銀山遺跡調査報告書14

佐渡金銀山

鶴子銀山跡分布調査報告書

2010

新潟県佐渡市
佐渡市教育委員会

佐渡金銀山

鶴子銀山跡分布調査報告書

２０１０

新潟県佐渡市
佐渡市教育委員会

序

佐渡市では、平成 12 年度より佐渡島内に残る鉱山遺跡の調査を行っています。本書は、平成 14 年度から 18 年度にかけて行われた鶴子銀山跡の分布調査成果と、その後の史料調査成果をまとめたものです。

佐和田地区に所在する鶴子銀山は、天文 11 年の発見から昭和 21 年に閉山するまでの長い歴史をもつ銀・銅山で、相川金銀山と共に、佐渡を代表する鉱山の一つです。その歴史のなかで、文禄４年、石見銀山の山師らによって鶴子銀山にもたらされた技術は、その後の相川金銀山の発見につながり、佐渡の鉱山史上、重要な位置を占めることとなりました。

鉱山の所有者が、時代ともに移り変わるなかで、閉山後は歴史の中に埋もれていましたが、このたびの調査によって、中世・近世・近代の様々な採掘技術の痕跡が、今なお山野に生々しく残されていることがわかりました。

今回の調査成果が、郷土の歴史教育や地域活動に広く活用されることを願うとともに、文化財に対する一層の関心と理解を深めるための契機となれば幸いです。

最後に、今回の調査及び本書の編集にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成 22 年 3 月

佐渡市長　髙 野 宏 一 郎

例　　言

1　本書は佐渡市沢根、沢根五十里、相川下戸村地内に所在する鶴子銀山跡の平成14年度から平成21年度にかけての分布調査及び史料調査に関する報告書である。
2　本書は本文・挿図・表・図版・写真図版からなる。
3　分布調査は、史跡指定を目的とした遺跡内容確認のためのものである。
4　調査は、佐渡市教育委員会が実施し、平成21年度の報告書作成は佐渡市が実施した。
5　本調査は、平成14年度～21年度に文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助事業の事業採択を受けて実施した。
6　調査に係る資料は、すべて佐渡市教育委員会が保管・管理している。
7　本書で用いた方角は、特に表示の無い場合、すべて真北である。
8　作成した挿図・図版のうち、既存の図を使用した場合にはそれぞれの出典を記した。
9　引用・参考文献は著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に掲載した。
10　引用絵図のうち、絵図に表題の無いものについては、整理者の勘案した名称を〔　〕で示した。
11　付表は見開きで構成されており、冒頭に全体の凡例を付した。
12　巻末に遺跡範囲と代表的な採掘技術を示した付図を付した。
13　地形図は株式会社オリスに委託し、航空写真及びレーザーの併用による地形測量成果をもとに作成した。
14　遺構実測図は株式会社セビアスに委託し、デジタルカメラによる画像解析及び、３次元情報の復元を行った。
15　本書の図版作成、編集は株式会社セビアスに委託した。
16　本書の執筆は宇佐美が担当した。
17　発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多大なご教示とご協力を賜った。厚く感謝申し上げる（敬称略）。
故 石瀬佳宏　遠藤浩巳　小田由美子　加藤友則　鎌田直治　上林章造　菊池初雄　小菅徹也
斎藤恭真　坂井秀弥　澤田　敦　清水靖雄　田中圭一　田海義正　土屋龍太郎　永松武彦
萩原三雄　故 畑福新太郎　羽二生正夫　本間盛昭　本間澪子　本中　眞　山下信一郎　余湖明彦
土地所有者の皆様　株式会社ゴールデン佐渡　沢根五十里財産区　沢根生産森林組合
鶴子銀山を歩こう（地域保存団体）　新潟県教育庁文化行政課　文化庁記念物課

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 1

3　体　　制 …… 3

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

1　地理的環境 …… 5

2　位置と範囲 …… 7

3　歴史的環境 …… 9

A　鶴子銀山跡の歴史的環境 …… 9

B　周辺の遺跡 …… 11

第Ⅲ章　調査の概要

1　分 布 調 査 …… 15

2　史 料 調 査 …… 18

A　絵図・図面史料 …… 19

B　文 献 史 料 …… 20

C　鉱山集落と周辺集落の規模 …… 22

3　道　調　査 …… 27

第Ⅳ章　総　　括

1　遺　　構 …… 30

2　鶴子銀山と周辺集落の変遷 …… 31

A　銀山の発見と初期開発 …… 31

B　戦国期末における上杉氏の銀山経営 …… 33

C　慶長期における銀山と経営 …… 34

D　元和期以降の銀山の衰退 …… 36

E　18 世紀における銀山 …… 37

F　19 世紀における銀山 …… 38

G　鉱山の近代化から閉山まで …… 39

3　今後の課題 …… 40

≪観　察　表≫ …… 42

≪要　　約≫ …… 64

≪英 文 要 約≫ …… 65

≪引用・参考文献≫ …… 66

≪関 連 資 料≫ …… 71

付　　表　銀山及び関連地域変遷表・間歩稼動時期変遷表

付　　図　鶴子銀山で見られる代表的な採掘技術

挿図目次

第 1 図　佐渡島内の地質概略図……6
第 2 図　大佐渡地域の地質鉱床図……7
第 3 図　鶴子銀山立合図……7
第 4 図　周辺の地名……8
第 5 図　鶴子銀山跡の位置と範囲……9
第 6 図　周辺の遺跡……12
第 7 図　昭和十年代の鶴子坑　釜の口付近図……18
第 8 図　慶長期史料にみる稼場の範囲概略……21
第 9 図　周辺の寺社……23
第 10 図　相川往還と銀山道……28
第 11 図　銀山と鉱山集落の変遷（1）……32
第 12 図　銀山と鉱山集落の変遷（2）……38
第 13 図　佐渡一国海岸図……73
第 14 図　松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図…74
第 15 図　鶴子間歩惣敷絵図……75
第 16 図　鉱山金坑絵図……76
第 17 図　銀山岡絵図……77
第 18 図　〔鶴子立合筋見取図〕……78
第 19 図　佐州金銀山之内彌十郎間歩鋪内墨引……79
第 20 図　弥喜知間歩……80
第 21 図　弥喜知間歩墨引……80
第 22 図　弥十郎間歩鋪内墨引……81
第 23 図　百枚間歩墨引……82
第 24 図　百枚間歩敷内絵図……82
第 25 図　鶴子重一郎間歩墨引……83
第 26 図　鶴子しなみ沢煙貫釜ノ口開発風合式供物図
……83
第 27 図　御料佐渡鉱山之図……84
第 28 図　御料佐渡鉱山之図……84
第 29 図　大正初期の鶴子坑……84

表　目　次

第 1 表　佐渡島内の地質……6
第 2 表　周辺遺跡一覧表……13
第 3 表　鶴子銀山に関係する寺院一覧表……24
第 4 表　鶴子銀山に関係する神社一覧表……25
第 5 表　鉱山用語一覧表……41

図版目次

図版 1　遺構分布図
図版 2　遺構分布図 1（鶴子沢周辺）
図版 3　遺構分布図 2（屏風沢･仕出喜沢･松ヶ沢周辺）
図版 4　遺構分布図 3（松ヶ沢・大滝周辺）
図版 5　遺構分布図 4（西五十里茶屋平金山周辺）
図版 6　百枚平周辺遺構平面図
図版 7　大滝周辺遺構平面図
図版 8　鶴子鉱山代官屋敷跡･鶴子荒町遺跡遺構平面図
図版 9　鶴子銀山跡　個別遺構図（1）
図版 10　鶴子銀山跡　個別遺構図（2）
図版 11　遺跡遠景
図版 12　露頭掘り跡（1）
図版 13　露頭掘り跡（2）・ひ押し掘り跡（1）
図版 14　ひ押し掘り跡（2）
図版 15　間歩跡（1）
図版 16　間歩跡（2）
図版 17　間歩跡（3）
図版 18　間歩跡（4）
図版 19　試掘坑跡、石組み遺構、テラス、石垣、竪坑跡
図版 20　銀山道、相川往還
図版 21　銀山関連遺跡（城館跡・代官所跡）
図版 22　銀山関連遺跡（代官所跡・鉱山集落跡）
図版 23　銀山関連遺跡（集落跡・製錬所跡）、寺社
図版 24　寺社、沢根町・沢根五十里の町並

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

1　調査に至る経緯

平成９年、佐渡島に残る金銀山の重要性を世界に発信し、その保護と活用を目的として佐渡郡町村会により「佐渡金銀山遺跡調査検討準備会」（以下準備会、平成16年3月市町村合併まで）が発足した。準備会は分野ごとに調査部会が設けられ、旧市町村と協力して各種の調査を進めてきた。準備会及び関連市町村のこれまでの調査成果については、平成 14 年度に旧相川町教育委員会の『佐渡金銀山相川町鉱山間歩分布調査・寺社調査報告書』、平成 16 年度には佐渡市教育委員会の『佐渡金銀山相川地区石造物分布調査報告書』が刊行されて、佐渡島内に所在する主要な石切場跡の分布図や県指定史跡「佐渡鉱山遺跡（鎮目奉行墓）」の実測図が掲載された。また、行政組織の改編として、平成 15 年度に旧相川町町長部局に佐渡金銀山課が設置されている［佐渡市教育委員会 2008a］。

平成 16 年３月には市町村合併が行われて新たに佐渡市が誕生し、準備会及び旧相川町佐渡金銀山課、相川町教育委員会の調査を引き継ぐ形で、佐渡市教育委員会生涯学習課に佐渡金銀山室が設置された。平成 18 年度に組織改編により文化行政を主な用務とする文化振興課として独立し、平成 19 年度には課名を世界遺産・文化振興課へと変更した。平成 19 年度には、それまでの鶴子銀山跡の分布調査成果をまとめた分布調査報告書として『佐渡金銀山鶴子銀山跡分布調査報告書』が刊行された。平成 21 年４月、教育委員会から総務部へと所属が変わり、総務部世界遺産推進課として新たに課が立ち上げられ、佐渡金銀山遺跡に関係する調査事業が引き継がれた。

鶴子銀山跡は、これまで研究者や佐和田町史編纂に伴う調査によって、佐渡鉱山史上、相川金銀山に先行する鉱山として重要な位置付けがなされてきたが、詳細な調査は行われてこなかったため、代表的な採掘跡を除き遺跡の範囲や内容には不明な点が多かった。平成 14 年度から 18 年度にかけて、佐渡市では国史跡への指定を視野に入れて範囲・内容等の確認を目的に分布調査を実施した。また、平成 19 年度以降は、現存する史料の調査をとおして、採掘域の変遷や周辺遺跡との関連性を探るため、史料調査を行った。

2　調 査 経 過

分布調査は、遺跡が山中にあることから、草木が繁茂する夏期を避け、見通しが良く積雪の少ない 12 月及び２月～３月を中心に実施した。以下に調査経過と調査の際の現場での留意点を述べる。

平成 14 年度

平成 15 年２月より、鶴子銀山跡西部にある鶴子沢を中心とした約 500,000㎡の範囲について分布調査を開始した。事前に佐和田町史編纂の際に収集した史料（特に絵図資料）中に表記された間歩の位置や地域住民への聞取り調査を基に、調査範囲を設定した。調査の結果、沢に面した斜面や尾根に近い緩斜面において、間歩・露頭掘り等の採掘跡など総数 121 基の遺構が確認された。沢に近い場所に立地する遺構の多くが土砂の崩落等により埋没していたが、急斜面に立地するものは、土砂崩落の影響が少なく、現在も坑口が開口しているものが多かった。調査当所、沢ごとの頭文字と発見順を組み合わせて遺構番号とし

たうえで、現地に目印となる木製の標識を立てていたが、尾根付近では沢同士の境界が不明瞭となること、一日に数十箇所の遺構が確認されることもあって、標識用の資材を持ち込むことが困難となったことから、標識設置を断念し、発見順に通し番号を付け、座標計測のみを行うこととした。

平成 15 年度

平成 16 年 2 月より、鶴子銀山跡東部にある屏風沢を中心とした約 500,000㎡の分布調査を実施した。調査の結果、間歩・露頭掘り等の採掘跡など総数 100 基の遺構が確認された。渓谷部や樹高の高いスギが密集する山林内、衛星の配置状況によって、GPS の受信状況が極めて悪くなるため、座標計測のできない地点及び誤差の著しい地点が見られた。このため、調査区上空に衛星数が多くなる時間帯を狙い、再度現地へ行き、座標の再計測を行った。鶴子沢では鶴子間歩等の下流部以外は、ほとんどの遺構で座標計測が行えたが、この年以降の調査(屏風沢以東)は、沢が深くなる傾向にあるため、座標計測が難しく、再計測を行う必要のある地点が増加した。

平成 16 年度

平成 16 年 12 月より、屏風沢から東方にある仕出喜沢・松ヶ沢を中心とした約 750,000㎡の分布調査を実施した。調査の結果、間歩・露頭掘り等の採掘跡など総数 236 基の遺構が確認された。沢両岸の尾根や緩斜面に小規模の露頭掘り跡が多く見られた。昨年度に引続き、座標計測のできない地点及び誤差の認められる地点の再計測を実施した。

平成 17 年度

平成 17 年 4 月、12 月、平成 18 年 3 月より、大滝間歩、弥吉間歩の所在する範囲及び、相川地区の蛇谷周辺(市道二ッ岩線以北)の約 750,000㎡の分布調査を実施し、鶴子銀山跡の北、南、西端における分布範囲を確定した。また、鶴子銀山から上相川へ至る西五十里道の旧道調査と茶屋平金山の分布調査を併せて実施した。調査の結果、間歩・露頭掘り跡等の採掘跡など総数 213 基の遺構が確認された。昨年度に引続き、座標計測のできない地点及び誤差の認められる地点の再計測を行った。

平成 18 年度

平成 19 年 3 月より、鶴子銀山跡の東端の分布域を確定するため、古岩周辺と古岩・小滝参拝道の約 630,000㎡の分布調査を行い、東端の分布範囲を確定した。調査の結果、古岩大明神堂宇や古岩参道に伴う遺構が確認されたものの、鉱山に関係する遺構は極めて少なく、遺構が存在しないことを確認するだけで調査を終了する日が多くなった。また、分布調査によって取得した遺構の座標を使い、銀山全体の縮尺 5,000 分の 1 の遺構分布図を作成した。

平成 19 年度

国史跡指定に向けた添付資料とするため、西側の採掘域周辺の航空写真及びレーザー測量を併用した地形測量を実施し、縮尺 500 分の 1 の地形図を作成した。分布調査成果に基づいて、従来の鶴子銀山跡の遺跡範囲を 611,000㎡から 850,000㎡拡大し、周知化を図った。銀山内最大の露頭掘り跡(№23)を含む採掘跡の地形測量を実施し、分布調査の成果をとりまとめた調査報告書作成を行い、報告書を刊行した[佐渡市教育委員会 2008a]。この他、鶴子鉱山代官屋敷跡及び鶴子荒町遺跡の樹木伐採作業を行い、地表面で確認できる遺構の分布調査を実施した。

平成 20 年度

翌平成 21 年度に実施を予定していた地形測量に先立ち、詳細な地形図を作成するため、3 月に大滝間歩坑口全面に展開するテラス群の倒木･下草等の伐採作業及び、採掘域の集中する大滝間歩上流部の樹木･

下草の伐採作業を実施した。

平成 21 年度

国史跡指定に向けた添付資料とするため、東側の採掘域周辺の航空写真及びレーザー測量を併用した地形測量を実施し、縮尺 500 分の 1 の地形図を作成し、併せて総合的な調査報告書刊行に向けた報告書作成作業を行った。

3　体　　制

平成 14 年度

調査主体	佐和田町教育委員会（教育長　岩田　伸）
総　括	髙野イツ子（生涯学習課長）
庶　務	野崎　政明（課長補佐）
	向山　正則（社会教育係長）
担　当	宇佐美　亮（社会教育係主事）
作業員	鎌田　直治、上林　章造、羽二生正夫〔敬称略、五十音順〕

平成 15 年度

調査主体	佐和田町教育委員会（教育長　岩田　伸）　→　佐渡市教育委員会（教育長　石瀬　佳宏）
総　括	髙野イツ子（生涯学習課長　→　佐和田事務所生涯学習課長）
庶　務	野崎　政明（課長補佐）　→　近藤　信子（課長補佐）
	向山　正則（社会教育係長）
担　当	宇佐美　亮（社会教育係主事）
作業員	鎌田　直治、上林　章造、羽二生正夫〔敬称略、五十音順〕

平成 16 年度

調査主体	佐渡市教育委員会（教育長　石瀬　佳弘）
総　括	髙野イツ子（佐和田事務所　生涯学習課長）
庶　務	近藤　信子（課長補佐）
	向山　正則（社会教育係長）
担　当	宇佐美　亮（社会教育係主任）
作業員	鎌田　直治、上林　章造、羽二生正夫、本間　盛昭〔敬称略、五十音順〕

平成 17 年度

調査主体	佐渡市教育委員会（教育長　石瀬　佳弘）
総　括	坂本　孝明（生涯学習課長）
庶　務	齋藤　義昭（佐渡金銀山室長）
	下谷　　徹（佐渡金銀山室係長）
	斎藤　本恭（佐渡金銀山室主任）
担　当	宇佐美　亮（同　佐渡金銀山室主事）
作業員	鎌田　直治、斎藤　恭真〔敬称略、五十音順〕

平成 18 年度

調査主体	佐渡市教育委員会（教育長　石瀬　佳弘〔5 月 7 日まで〕→渡邉　剛忠〔5 月 8 日から〕）
総　括	石塚　秀夫（文化振興課長）
庶　務	齋藤　義昭（佐渡金銀山室長　　→　世界遺産推進室長〔10 月から〕）
	下谷　　徹（佐渡金銀山室係長　→　世界遺産推進室係長〔10 月から〕）
担　当	宇佐美　亮（佐渡金銀山室主事　→　世界遺産推進室主事〔10 月から〕）
調査員	若林　篤男（佐渡金銀山室主事　→　世界遺産推進室主事〔10 月から〕）
作業員	鎌田　直治

3 体　　制

平成 19 年度

調査主体	佐渡市教育委員会（教育長　渡邉　剛忠）
総　括	石塚　秀夫（世界遺産・文化振興課長）
庶　務	齋藤　義昭（課長補佐）
	下谷　　徹（世界遺産調査係長）
担　当	宇佐美　亮（世界遺産調査係主事）

平成 20 年度

調査主体	佐渡市教育委員会（教育長　渡邉　剛忠）
総　括	高藤一郎平（世界遺産・文化振興課長）
庶　務	齋藤　義昭（課長補佐）
	下谷　　徹（世界遺産調査係長）
担　当	宇佐美　亮（世界遺産調査係主任）

平成 21 年度

調査主体	佐渡市（市長　高野宏一郎）
総　括	北村　　亮（世界遺産推進課長）
庶　務	濱野　　浩（課長補佐）
	下谷　　徹（調査係長）
	本間　一夫（調査係調査員）
	市橋　哲史（調査係主任）
担　当	宇佐美　亮（調査係主任）

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

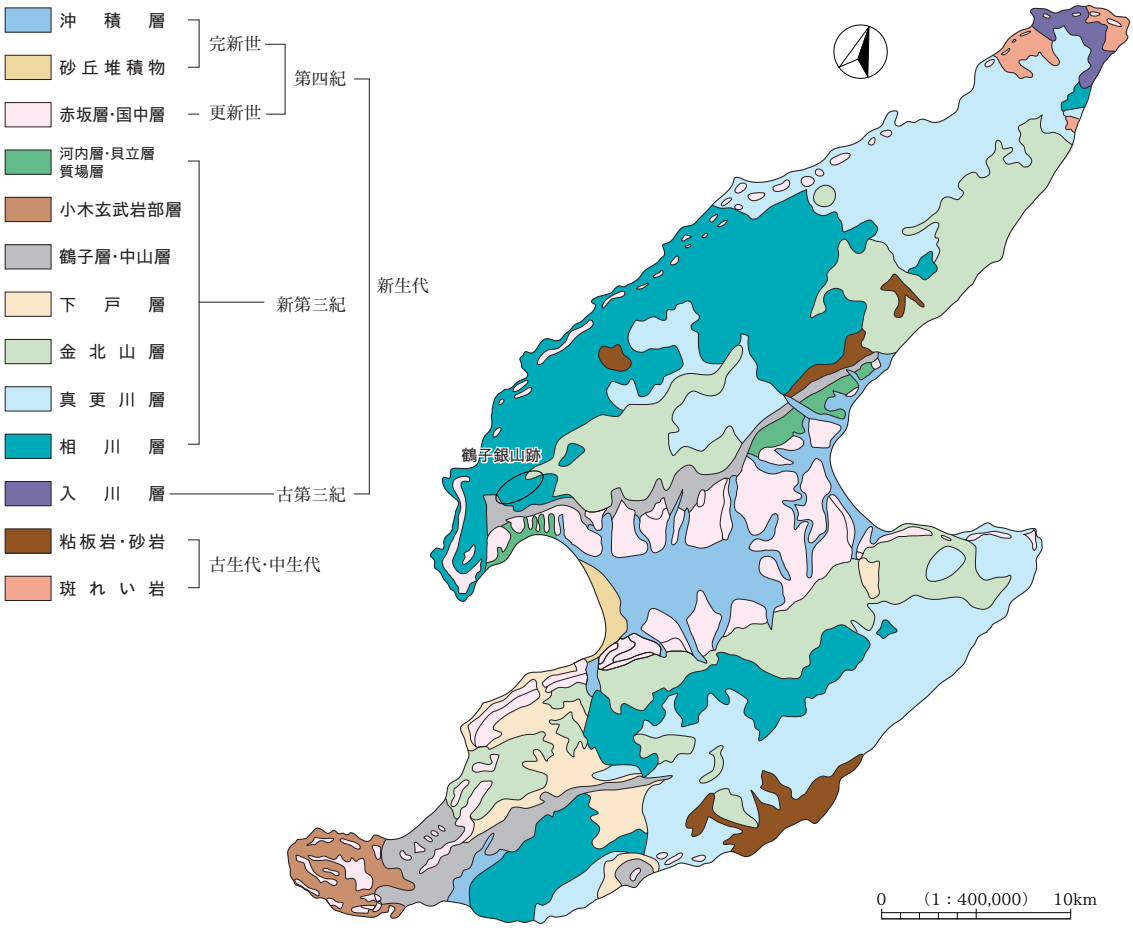
1　地理的環境

佐渡島は、本州、北海道、九州、四国、沖縄本島を除き、我が国最大の離島で、新潟県海岸(角田岬)より 32㎞西の日本海上に位置し、面積は約 855.27㎢、周囲の海岸線は 280.4㎞を測り、山林と雑種地が島面積の 80％以上を占めている。地勢は、大まかに山地、海岸段丘及び低地・台地を含む平野から成り、地形要素の複合という点では本州とほぼ同一の性質を持つことが特徴である[式 1964]。島中央には国中平野が広がり、北に大佐渡山脈、南に小佐渡山地が並行する形でそれぞれ長軸を NE － SW 方向に延ばしている。大佐渡山脈は、標高 1,173 mの金北山をはじめとする 1,000 m近い比較的高い山並みが連続し、小佐渡山地は、標高 645 mの大地山をはじめとする比較的低い山並みが連続する。

佐渡島で確認される最古の岩石は、今からおよそ 2 ～ 3 億年前の古生代後期のものであるが、佐渡島における地層の大部分は、火山によって形成された火山岩類及び日本海の海底で堆積した地層が重なって形成されたものである。このうち、相川金銀山が立地する大佐渡山脈を構成する地質は、古第三紀・斬新世(2300万年前)から新第三紀中新世初期(1800万年前)に堆積したグリーンタフである。また、その他の岩石として、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩がみられる。グリーンタフは、デイサイト(石英安山岩)や安山岩の溶岩類やそれらの火砕岩からなる火山噴出物を主体とし、下位から入川層・相川層・真更川層・金北山層の順に堆積しているが、これらをまとめて相川層群とよんでいる〔**第 1 図・第 1 表**〕。日本海が誕生した約 1,700 万年前には、海浸期に伴う砂岩・礫岩・シルトを主体とする堆積岩からなる下戸層・鶴子層・中山層が形成され、これらの地層が隆起運動により変形しながら海上に現れ、佐渡島が誕生したと考えられる。佐渡島が現在とほぼ同じ形状となったのは、今からおよそ数十万年前とされ、第四紀中頃になると隆起運動が活発化して、高い山地が形成され、氷期・間氷期の繰り返しによる海水面の上下運動が重なり、海岸段丘が形成されていった。こうした段丘面は、現在 5 段まで確認されている。国中平野は中央部が沖積層であるが、周辺部には低位段丘、中位段丘がよく発達し、加茂湖はこの中位段丘によって囲まれている。また、平野西側には真野湾に沿って八幡砂丘が発達しており、こうした砂丘列が 8 列確認されている[新潟県教育委員会 2000]。

鶴子銀山では、相川層の安山岩質凝灰岩と珪質頁岩の互層に銀・銅が多く集まるのが特徴で、石英岩脈の中に縞状となって混入しており、こうした金銀を含有する鉱脈を俗に「銀黒」などと呼称している。形成時期をみると、相川層が形成される末期までには金銀鉱化作用は終息していたと考えられる。鉱床の方向は相川金銀山と同じく、東西方向のものが顕著である〔**第 2 図**〕。江戸期の絵図を見ると、鶴子沢で 5 ～ 6 本、仕出喜沢で 1 本の鉱脈(立合)が東西方向に描かれている〔**第 3 図**〕が、絵図中に図示されていない屏風沢や大滝などにも鉱脈がある。相川金銀山と鶴子銀山は、南北方向の乙断層によって連結されており、このような複数の断層に鉱液が繰り返し充填されて鉱脈が連結し、相川や鶴子に広い鉱床地帯が形成されていることに特徴がある[佐和田町史編さん委員会 1988]。

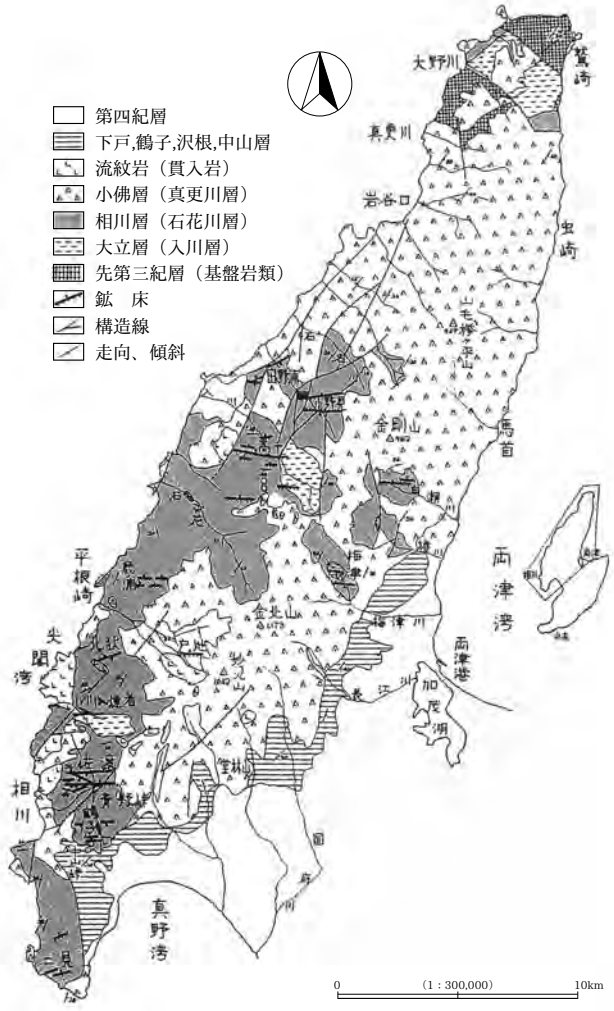
鶴子銀山の所在する沢根地区は、大佐渡山脈丘陵部を水源地とする、播磨川、玄道川、沓掛川、荒町川、三瀬川等によって侵食されて形成された河岸段丘や真野湾沿岸部の海岸段丘が発達しており、段丘上には



第１図　佐渡島内の地質概略図　　〔[新潟県1989]を一部改変〕

地質時代					地層名	層厚m	岩相	おもなできごと
新生代	第四紀	完新世		1万	金丸層	110	粘土・シルト・砂および礫の不規則互層	国中平野の誕生
		更新世	後期		国中層	3～20	褐色粘土 シルト・砂および礫の互層	佐渡島の隆起と段丘の形成
				15万	赤坂層	10～40	褐色粘土、不淘汰礫層	
			中期		質場層	30	砂とシルトの互層、礫	佐渡島の誕生
				?	貝立層	60	粗粒砂礫と細粒砂の互層、砂礫	
			前期		河内層	110	細粒砂と石灰質砂の互層 砂質シルトと細～中粒砂の互層 塊状シルト	
		鮮新世		170万				
	第三紀	中新世	後期	510万	中山層	320	珪藻質泥岩、グロコナイト	深くなる古日本海
			中期	1000万	鶴子層	200	硬質頁岩、グロコナイト質砂岩 玄武岩（枕状溶岩、ハイアロクラスタイト）	
			新前期	1600万	下戸層	10～30	礫岩、砂岩 石灰岩質砂礫層	古日本海の誕生
					金北山層	300	デイサイト溶岩・火砕岩	火山活動をともなう大陸の時代
					真更川層	1500	デイサイト溶岩・火砕岩・溶結凝灰岩 玄武岩・溶岩・火砕岩、シルト岩	
					相川層	1500	変質安山岩溶岩・火砕岩・溶結凝灰岩 礫岩、硬質頁岩、金鉱床	
		漸新世		2400万	入川層	500	デイサイト質火砕岩・溶結凝灰岩	
中生代				6500万		?	花崗岩 粘板岩、チャート、砂岩、礫岩 石灰岩、結晶質石灰岩、変玄武岩、変ハンレイ岩、蛇紋岩	大昔の海の時代
古生代				2.5億	基盤岩類			

第１表　佐渡島内の地質　　〔[神蔵・小林1998]を一部改変〕



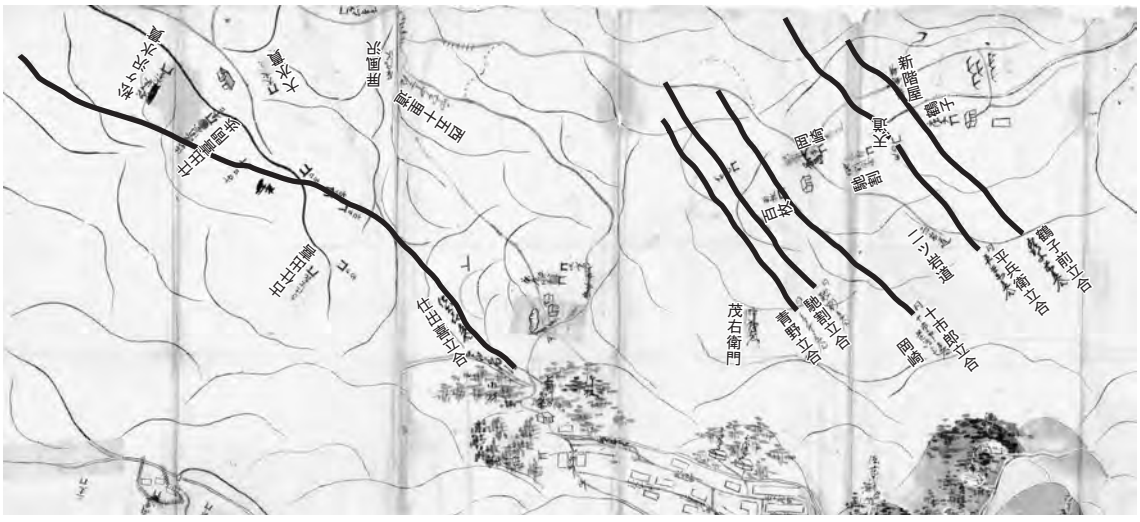
第２図　大佐渡地域の地質鉱床図
〔[坂井･大場1977]より転載〕

中山、鶴子、田中、西野、東野と呼ばれる集落が形成され、段丘上や沖積地は開田がすすんでいる。また、真野湾沿岸部には、町屋造りの建物が建ち並び、沢根町、沢根篭町、沢根炭屋町といった町並を形成している〔第４図〕。

2　位置と範囲

鶴子銀山跡は、相川金銀山から大佐渡山脈の低山地、佐渡市沢根及び沢根五十里(佐和田地区)、相川下戸村(相川地区)の山林に所在する鉱山遺跡で、国中平野側の大佐渡山脈中腹を走る広域林道国仲北線と、大佐渡山脈の尾根に近い旧相川町・佐和田町の町境付近を走る市道二ッ岩線に挟まれた南向き斜面を中心とする、標高約 50 ～ 420 ｍ付近に立地している〔第５図〕。現在、埋蔵文化財包蔵地として周知化されている遺跡の面積は、約850,000㎡である。

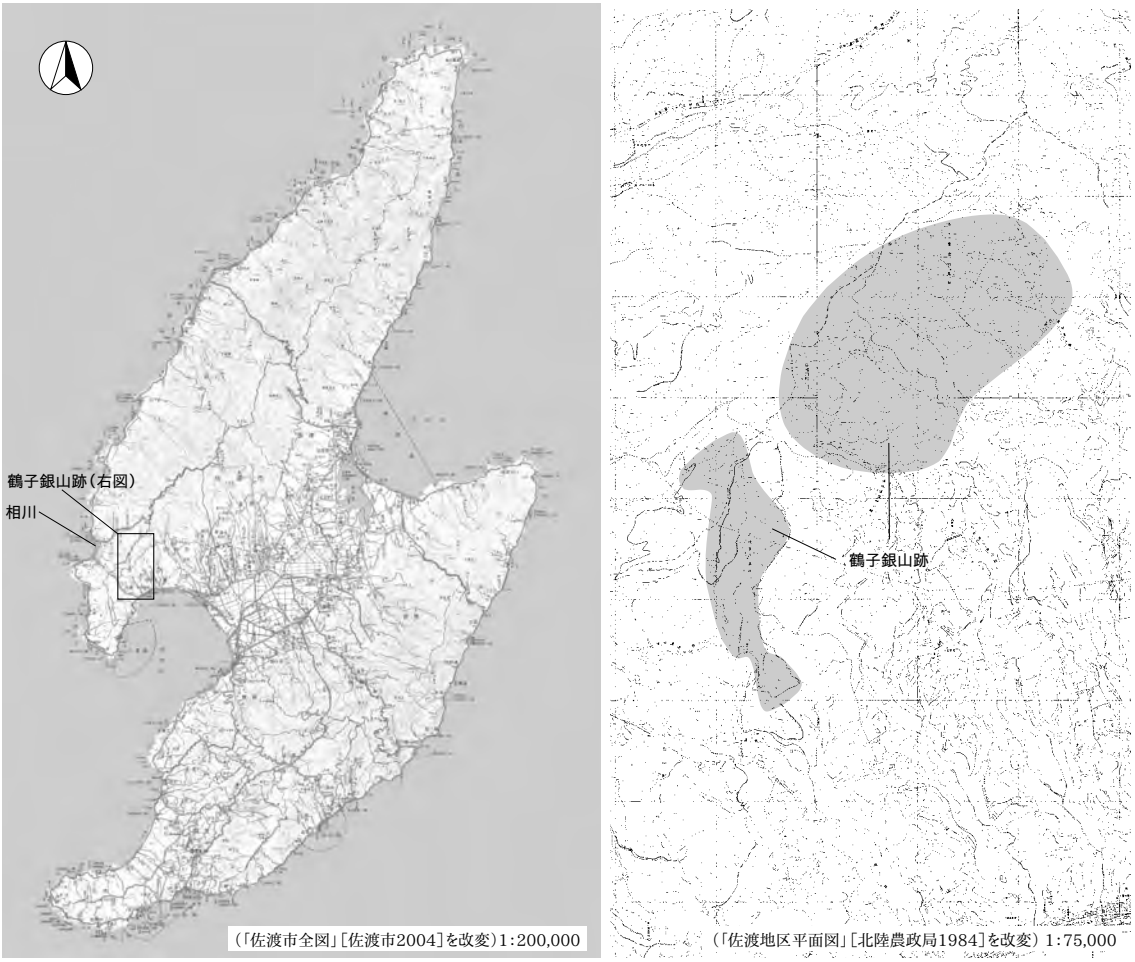
遺跡の分布する範囲は、西側の沢根地内を流れる播磨川上流域の鶴子沢、しなみ沢及び相川下戸村地内を流れる大仏川上流域の蛇谷を中心とする範囲と、東側の沢根五十里地内にある玄道川上流域の屏風沢、荒町川上流域の仕出喜沢･松ヶ沢・大滝を中心とする範囲に大別され、両者は250 ｍほど離れた場所に所在する。また、北へ約 1㎞の位置には、佐渡最大の金銀山であった相川金銀山や上相川遺跡(相川初期鉱山集落跡)がある〔第４図〕。



第３図　鶴子銀山立合図　〔「銀山岡絵図(部分)」(延享4年)に加筆〕

第４図　周辺の地名

〔「相川」「河原田」［国土地理院2007］1:25,000を改変〕



第５図　鶴子銀山跡の位置と範囲

銀山の名称となっている「鶴子」名は、銀山内に地名として残されていないものの、現在でも沢根、沢根五十里の字界に立地する鶴子集落に鶴子の字名が残る。鶴子銀山の場合、この鶴子という名称の由来は定かではないが、西尾氏は露頭掘りの採掘技法の一つである竪穴掘法が、古来ツルシ掘りと称せられ、鶴子掘の字を当てられたということから、鶴子銀山の場合もそれに由来するのではないかとしている［西尾1943］。

銀山の採掘期間は、16 世紀半ばから閉山した昭和 21 年（1946）と長期にわたるため、遺跡内で見られる遺構も多種にわたり、戦国期の採掘技術と推定される露頭掘り跡やひ押し掘り跡のほか、近世の間歩跡、井戸跡、平坦面（テラス）、近代以降の竪坑跡や建造物基礎などの近代化遺産といった戦国期～近代までの各年代の遺構が存在することが判明している［佐渡市教育委員会 2008a］。

3　歴史的環境

A　鶴子銀山跡の歴史的環境

佐渡島内の金銀採掘の歴史は古く、平安時代末期に成立したとされる『今昔物語集』巻二六、鎌倉時代初期の成立とされる『宇治拾遺物語集』巻第四に佐渡の産金について、ほぼ同じ記述がある。『今昔物語集』では、能登（現石川県）の国司の命令で、製鉄集団の長が佐渡で金を採取したという記述がある。この頃の鉱

山技術形態は砂金採取で、製鉄集団との関連から、採取の行われていた場所は西三川川の河口付近であろうと推測されている[佐渡市教育委員会 2009]。また、永享 4 年(1434)に佐渡へ流罪となった世阿弥は、その著書『金島書』の中で、佐渡を「こがねの島」とする表記があり、引き続き佐渡で砂金採取が行われていたと考えられる。

16 世紀、大航海時代の到来によって、南米のポトシ銀山をはじめ大規模な銀山開発が行われ、世界の産銀状況は大きく変化していた。同時に中国との交易のために日本の銀鉱山も大開発され、当時世界の産銀の約 3 分の 1 が日本産であったと推定されている[島根県教育委員会 1999]。大永・享禄年間(1521～1531)、石見国(現島根県)大森で石見銀山の開発以降、生野銀山など全国的に多くの鉱山開発が始まると、その余波が佐渡におよび、各地から多くの鉱山技術者が佐渡に来島した。このような時代背景の中で発見されたのが鶴子銀山であった。

鶴子銀山発見の様子について、『佐渡古実略記』によると、天文 11 年(1542)、越後国の商人であった茂右衛門が、佐渡に渡海した際に、沢崎沖を航行中、沢根の山中が鉄吹炎のように光っていたので、船を近づけてみたところ沢根の奥山に金気が立っていた。このため、土地の者と相談し、地頭(沢根)本間氏に一カ月銀百枚の運上を差し上げ開発を行い、銀山は次第に繁栄したとある。この発見譚がすべて真実とすることはできないが、この記述は石見銀山のものと人名・地名が異なるのみでほぼ同じ構成であり、佐渡においても石見銀山にかかわる人々の影響がうかがえる。

天正 17 年(1589)、越後国(現新潟県)の大名であった上杉景勝が佐渡攻めを開始し、上杉方に味方した佐渡の領主は、鶴子銀山を持つ沢根本間氏や新穂地区の新穂銀山を持つ潟上本間氏らであったことは、銀山という経済流通によって、他国の実情を知っていたためではないかと推測される。また、上杉氏による佐渡攻略の背景には、鶴子銀山などの佐渡における金銀山掌握が目的であったとされており、同年に河原田本間氏や羽茂本間氏などの佐渡島内の主だった支配階級が滅亡すると、景勝は銀山経営のために鶴子外山に陣屋を建て、代官を置いて銀山の経営を統括させた。

文禄 4 年(1595)、石見国より来島した石見忠左衛門、同弟忠次郎、石田忠兵衛らによって鶴子「本口間歩」が稼がれた〔**史料一～五**〕。本口と名付けられたこの間歩は、その名称から、当時の最先端技術であった横相による「坑道掘り」が導入された場所と考えられている[田中 1986] [1)]。また、史料からは確認できないものの、石見銀山より銀の製錬技術である「灰吹法」が伝わったのもこの頃と推測されている。このような新たな鉱山技術の導入により、「鶴子千軒」ともいわれるほどの繁栄期が訪れたことで、物資搬入港であった沢根港が栄え、同地には商家が軒を連ねた。

鶴子銀山の繁栄は、鶴子の奥山と呼ばれていた相川における金銀山開発をも促した。慶長元年(1596)以降、相川で良質な金銀鉱脈が発見され、慶長 6 年(1601)、佐渡代官であった田中清六によって導入された運上入札制による開発ラッシュと、道遊の割戸・父の割戸・六十枚間歩での大規模開発を契機として、相川金銀山はゴールドラッシュを迎えた。同年、佐渡奉行に着任した大久保長安は、金銀山開発に沸き立つ相川を政治経済の中心とするため、慶長 8 年(1603)、鶴子の陣屋を相川に移転(翌年完成)し、相川市街地の整備を進めたことで、金銀山の中心地は相川へ移行した。この際に鶴子鉱山集落にあった町屋や寺院が相川へ移転したといわれている[佐和田町史編さん委員会 1991]。慶長 9 年(1604)、長安によって銀山経営に直山制が導入され、幕府の直営による金銀山開発が行われ、鶴子銀山でも多くの御直山の間歩が開坑した。慶長期後半～元和期にかけて、銀山は衰退へ向かったが、慶安年間(1648 ～ 1652)以降、西五十里村を拠点とした山師秋田権右衛門によって、屏風沢・仕出喜沢・松ヶ沢・百枚平を中心に再開発が行われ

た。これにより秋田権右衛門は、莫大な財産を得たといわれ、その財力をもとに西五十里村に吉祥寺や金北山神社を建立・再建した[佐和田町史編さん委員会 1991]。

秋田氏による開発以後、産出量の減少に伴い銀山は次第に衰微し、幾度かの閉山・再興が繰り返されるようになった。生産性の低い間歩は廃棄され、大規模な開発が可能な場所に立地し、有力な鉱脈が存在した間歩のみで断続的な採掘が行われていた。宝暦 13 年(1763)、百枚間歩が再興されて、銅の採掘が開始された〔**史料七九**〕。天明 8 年(1788)に銅山取明として鶴子間歩及びしなみ沢水貫の開発が進められ〔**史料九五**〕、宝暦年間以降、銅山としての性格を強めていった。江戸時代後半には、弥十郎間歩が再興され、長期間にわたる採掘が行われている。

明治 2 年(1869)、相川金銀山が官営「佐渡鉱山」となると、鶴子銀山は「相川鶴子鉱区」として佐渡鉱山に組み込まれた。明治初期には小規模な採掘が行われたが、明治 20 年代に本格的な近代化が進められ、明治 23 年(1890)、鶴子竪坑の開削、明治 27 年(1894)、鶴子～沢根間に軽便鉄道が開通するなど、大規模な資本投入が成されたことで、一時的に産出量が増大した。

明治 29 年(1896)、相川金銀山とともに鶴子銀山も三菱合資会社に払い下げとなると、以後、三菱による採掘が続けられた。昭和 10 年代には国策による銅の採掘が続けられたが、昭和 21 年(1946)、鉱量枯渇により閉山となった[佐和田町史編さん委員会 2001]。

閉山後、鶴子銀山の鉱区 27ha は、昭和 32 年(1957)に所有者であった三菱鉱業株式会社より沢根地区、五十里地区へと払い下げとなった。両地区では、沢根生産森林組合を結成し、同年以降、同地での杉の植林を行った[佐和田町史編さん委員会 2001]。現在では、植林された杉と雑木林が広がる鬱蒼とした山林となり、鉱山の痕跡は山中に埋没している。

B　周辺の遺跡〔第 6 図・第 2 表〕

1）沢根地区における中世以前の遺跡

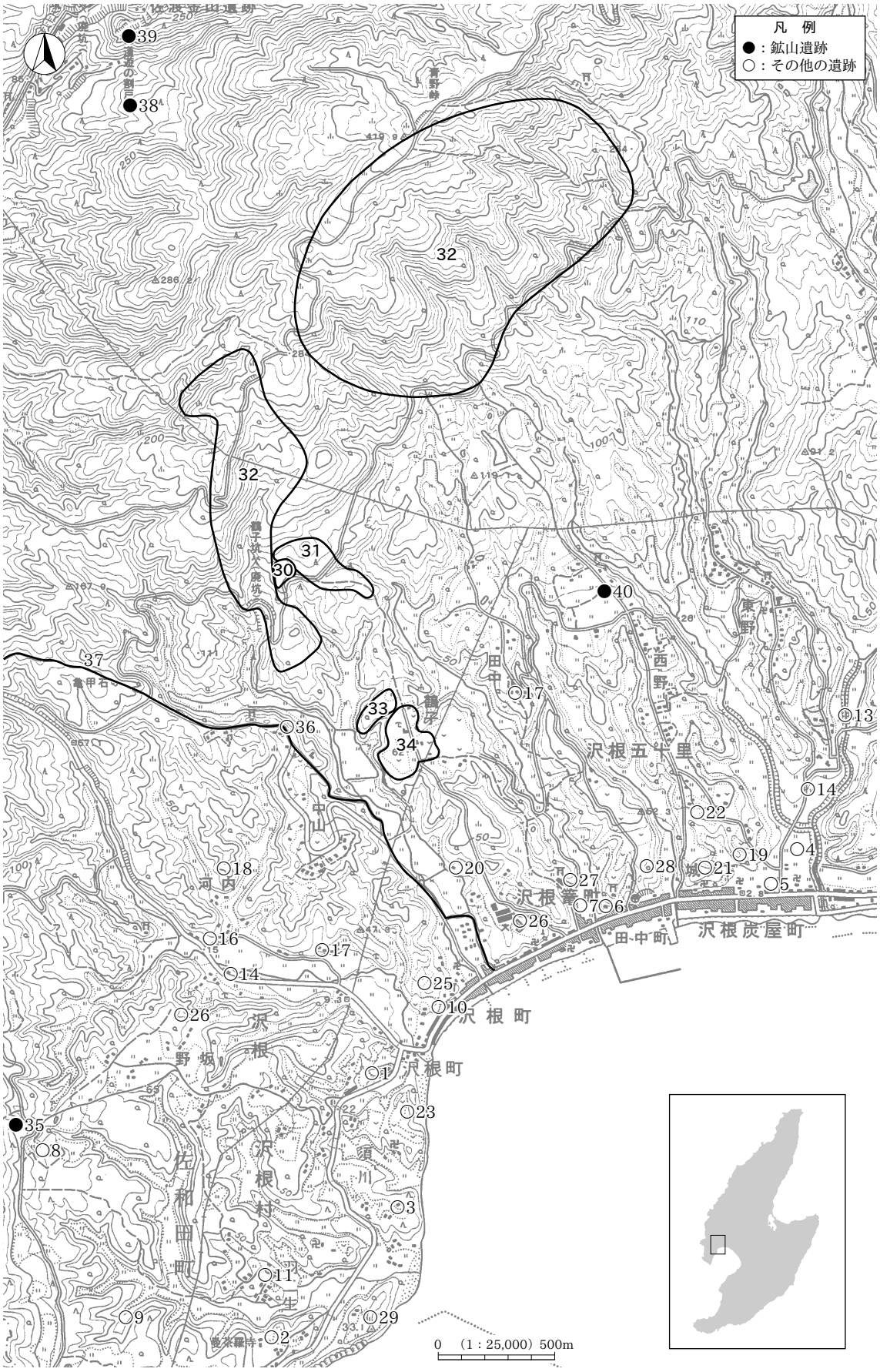
沢根地区における縄文時代の遺跡(1～5)は、台地縁辺や台地上に多く分布している。質場川河口に近い質場遺跡(1)、羽二生川右岸の沢根羽二生遺跡(2)、現在須川集落のある須川遺跡(3)、荒町川河口に近い沢根東野遺跡(4)、沢根炭屋町遺跡(5)があり、いずれも縄文時代後期や晩期の遺物のみが採集されている。これらのなかでも沢根炭屋町遺跡は、明治時代より石鏃が多く採集された遺跡として知られている[佐和田町史編さん委員会 1988]。

弥生時代の遺跡は、現在までのところ確認されておらず、この時代の遺物も確認されていない。

古墳時代の遺跡(6･7)は、沢根古墳(6)、沢根篭町遺跡(7)が確認されている。台地端にあったとされる沢根古墳は、横穴式石室(主軸南)を伴う後期古墳とされている。明治末年の開墾により湮滅しており、遺構を確認することができないが、須恵器、馬具片、刀子が出土したとされている。

奈良～平安時代に入ると、令制による里制または郷里制の集落が増加したことにより、遺跡数が増加する傾向にある(8～15)。沢根地区南西部の山間部には、野坂穴釜(8)、上川内製鉄跡(9)などの製鉄遺跡がある。一方で、現在の集落内や周辺部には遺跡が多く見られ、海岸段丘に立地する沢根本町遺跡(10)や沖積地に立地する五十里Ａ遺跡(13)・五十里Ｂ遺跡(14)、河岸段丘上に立地する沢根五十里田中遺跡(15)な

1)　佐渡の鉱山のうち、史料上に「本口」と明記される間歩名が登場するのは、鶴子銀山の本口間歩が初出である。このため、佐渡に初めて坑道掘りが導入されたのが鶴子銀山とする説がある。小菅氏は初期坑道掘りとしてのひ押し掘り導入と横相による坑道掘りの２段階の技術導入が行われたとしている［日本ゆり板の会 2001］。



第６図　周辺の遺跡

〔「相川」「河原田」〔国土地理院2007〕1:25,000を改変〕

No.	遺跡名	時代	種別	備考	No.	遺跡名	時代	種別	備考
1	質場	縄	遺物包含値		21	五十里城跡	室	城館跡	五十里本間氏居城
2	沢根羽二生	縄	遺物包含値		22	五十里西野城跡	室	城館跡	
3	須川	縄･中･近	散布値		23	沢根城跡	室	城館跡	沢根本間氏居城
4	沢根東野	縄	遺物包含値		24	野坂城跡	室？	城館跡	
5	炭屋町	縄	遺物包含値		25	沢根元城跡	室？	城館跡	沢根本間氏旧居城
6	沢根古墳	古	古墳		26	田上城跡	室？	城館跡	
7	沢根籠町	古・平	遺物包含値		27	鶴子城跡	室？	城館跡	
8	野坂穴窯	奈	製鉄跡		28	田中城跡	室？	城館跡	
9	上川内製鉄跡	奈～平	製鉄跡		29	沢根羽二生城跡	室？	城館跡	
10	沢根本町	平・中世	遺物包含値		**30**	**鶴子鉱山代官屋敷跡**	**安～江**	**遺物包含値**	
11	羽二生そで	平	遺物包含値		**31**	**鶴子荒町**	**安～江**	**遺物包含値**	**鉱山集落跡**
12	河内垣ノ内	平	遺物包含値		**32**	**鶴子銀山跡**	**室～近代**	**鉱山跡**	
13	五十里Ａ	平	遺物包含値		**33**	**五十鶴子床屋跡**	**近世･近代**	**生産遺跡**	**床屋跡**
14	五十里Ｂ	平	遺物包含値		**34**	**鶴子田中**	**近世**	**集落跡・寺社跡**	**鉱山集落跡**
15	沢根五十里田中	平・中世	遺物包含値		35	野坂鉱山跡	近世	鉱山跡	
16	河内道下	平	遺物包含値		36	中山の一里塚	江	一里塚	市史跡
17	河内平田	平	散布値		37	中山街道	江	古道	一部市史跡
18	河内舞台	中世	遺物包含値		38	上相川	江	鉱山集落跡	
19	西野経塚	中世	塚		39	道遊の割戸	江	採掘跡	国史跡
20	田上丸山	中世	散布値		40	山師秋田権右衛門墓	江	墓	山師一族の墓

第２表　周辺遺跡一覧表

どの散布地が多く確認されている。このため、これらが中世以降も引続き集落として継続していった可能性が高い[佐和田町史編さん委員会 1988]。

これまでのところ、同地区における中世以前の遺跡の本発掘調査事例が無いため、遺跡の規模や内容については不明であるが、周知化されている遺跡のほかに、地中に埋蔵された遺跡がこの他にも存在している可能性がある。

2）沢根地区における中世以降の遺跡

佐渡島内における中世以降の鉱山遺跡は、鶴子銀山跡の他に、相川金銀山を始めとする多くの鉱山が存在している。島内所在の鉱山の概要や分布状況については、『佐渡金山遺跡上相川地区分布調査報告書』[佐渡市教育委員会 2008b]に詳しいため、ここでは割愛し、鶴子銀山跡周辺部や沢根地区における中世から近世を中心とした遺跡の分布状況を述べる。

鶴子銀山発見以前は、河川周辺部を中心に開田が進み、現集落の原形となるものが形成された時期と推測される。後に佐渡国地頭となった本間氏らの入国・土着と前後し、各集落を拠点とする有力者が国人層として台頭し、各地に城館が建てられる時期と考えられる。鎌倉期には、西野経塚遺跡(19)など経筒を埋納した遺跡が確認されている。

銀山が発見される戦国時代に入ると村殿や殿原と呼ばれる国人層たちの城館が築かれる(21～29)。遺跡分布状況を見ると、鶴子銀山統治に係ったとされる沢根地頭代の沢根本間氏の旧居城で、上杉景勝の佐渡攻めの際に陣が敷かれたとされる沢根元城跡(25)、沢根本間氏が銀山による経済力を背景に、戦国時代末に沢根元城から質場崖上に新たに築城し、後に上杉景勝在番衆の番城となった沢根城跡(23)、五十里本間氏の居城である五十里城跡(21)をはじめ、真野湾沿岸の銀山と港町を結ぶ旧道の町側出口にあたる海岸段丘先端部分に、村殿とよばれる中世の地方領主の小規模な城館跡が多くみられる。これらの城館は、沿岸部の街道沿いと沿岸部から銀山へ至る交通網を押さえた要地に配置されており、沢根本間氏や五十里本間氏によって、重要視されていたことがわかる。このような城館跡のほかに、中世の遺跡が分布しているが(18 ～ 20)、いずれも発掘調査が行われておらず、遺跡の詳細は不明である[佐渡市教育委員会 a2008]。

鶴子銀山の発見ともに、周辺には、銀山に関連する遺跡が多く残されている。鶴子間歩が所在する鶴子

沢の東側には、鶴子鉱山代官屋敷跡遺跡(30)と鶴子荒町遺跡(31)が隣接する。

鶴子鉱山代官屋敷跡は、「代官屋敷」という地名が残り、上杉景勝によって山口右京が目代として置かれ、後に相川に陣屋が移転するまでの間、佐渡金銀山の経営を統括していた際の陣屋跡と推定されている。これまで本格的な発掘調査は行われていないが、平坦面(テラス)間の斜面を中心にトレンチによる部分的な発掘調査が行われており[汰板の会 1993]、現在も地表面で沢を利用した空堀跡とされる沢やテラスが確認できる〔**図版 19・20**〕。

鶴子荒町遺跡は、鉱山集落跡で、「新町」が集落廃絶後に荒町に転訛したものと考えられており、現在もテラス群や井戸跡が残る〔**図版 12**〕。鶴子銀山に関係する遺跡の調査事例は少ないが、平成３～４年に行われた分布調査や広域林道国仲北線工事の際に、16 世紀末～ 17 世紀初頭の伊万里・唐津焼などが採集されている[佐藤 1994]。

鶴子銀山の南方、沢根及び沢根五十里地内に所在する現在の鶴子集落付近には、四十物町や大工町といった鉱山町や専得寺等の寺院があった鉱山集落跡の鶴子田中遺跡(34)、同遺跡の北側に隣接する形で床屋(精錬所跡)とされる鶴子床屋跡(33)がある〔**図版 22**〕。鶴子床屋跡は、「金くそ平」という字名が残り、弘化４年(1847)、海岸防備用の大砲が鋳造された場所〔**史料二七〇**〕で、この際、砲身の模様を鋳造する際に使用された技術が、「佐渡の蝋型鋳金技術」として新潟県無形文化財に指定されている。

また、山中の銀山と沢根の港や相川金銀山を結ぶため、多くの銀山道が開通していた。中世に沢根元城跡から中山を通り、鶴子銀山へ向かう「百枚道」や沢根から鶴子集落を通り、代官屋敷跡や鶴子銀山へ向かう「鶴子道」、百枚から二ッ岩神社へ向かう「二ッ岩道」をはじめとする銀山道が多く存在していることが、絵図や文献史料、道の痕跡から判明している。中でも沢根を通り現在の西野集落を抜けて鶴子銀山の屏風沢へ向かう「西五十里道(西野道)」は、鶴子道と合流して、笠取峠を越えて相川金銀山に関係する鉱山集落のあった上相川(38)や大工町、中寺町等の相川市街地へ向かう道に接続しており、寛永期に「中山街道(相川往還)」(37)、一里塚(36)が整備されるまでの間、重要な幹線道路の一つであったと考えられる。

このほか、沢根地区には、近世の開発と考えられる野坂鉱山(35)や鶴子銀山の山師であった秋田権右衛門によって再建されたという金北山神社や吉祥寺跡、山師秋田権右衛門一族の墓(40)が残されている。

第Ⅲ章　調査の概要

1　分 布 調 査

分布調査は、鶴子銀山跡及び周辺部を含めた約 3,130,000㎡を調査対象範囲とし、江戸時代の絵図や近代以降の鉱区図に描かれた間歩の位置情報を参考として、平成 14 ～ 18 年度にかけて分布調査を行った。分布調査の対象や調査基準等については、『佐渡金銀山　鶴子銀山跡分布調査報告書』[佐渡市教育委員会 2008a]に詳しいため、ここでは銀山に関連する遺構の概要のみを述べ、巻末に遺構観察表を掲載した〔**別表**〕。

調査によって確認された遺構は、露頭掘り跡 556 基、ひ押し掘り跡[1] 4 基、間歩跡 108 基、試掘坑 7 基、石組み遺構 4 基、テラス状遺構(テラス群含む)9 基、溝状遺構 1 基、石造物 2 基、近代化遺産 4 基で、このほかに西五十里道に関連する塚跡 4 基、石造物 1 基、古岩参道に関連する石造物 2 基、神社堂宇 1 軒、寺跡 1 ヵ所、炭窯跡 1 基である〔**図版 1**〕。

1）露頭掘り跡〔図版 1 ～ 4、別表〕

分布調査によって確認された露頭掘り跡は 556 基である。

遺構は、下流部を除くほぼ全域に分布し、遺跡内で見られる露頭掘り跡の形状は、地形や鉱脈の形状により円形、楕円形、溝状等を呈するものがある[2]〔**付図**〕。分布状況を見ると、尾根に近い比較的緩やかな傾斜に円形のものが多く、傾斜の急な場所では溝状のものが多く見られる傾向にある。遺構と自然地形の区分にあたり、周辺地形や岩盤の有無、ズリの散布状況から判断したが、発掘調査による鉱脈の確認をしていないため、露頭掘りとしたものの中には、自然地形のものが含まれている可能性がある。

銀山発見とともに開発が始まったとされる百枚平(鶴子沢上流部の緩傾斜地)では、沢及びその両岸に規模の大きい露頭掘り跡が連続しており、中には長軸 16 m、短軸 7 m深さ 4 m以上の巨大な露頭掘り跡(№23)が見られる〔**図版 2･6･8**〕。百枚平では、斜面の起伏が激しく、ズリが広範囲に散乱していることから、古い露頭掘りを埋め戻して新たに採掘を行っている可能性が高い。

百枚平以外の露頭掘り跡の分布をみると、市道二ッ岩線の通る鶴子沢西側の尾根筋や屏風沢以東の尾根筋には、直径 2 m以下の小規模な露頭掘りが集中しているほか、大滝地区では、小高い丘陵頂上付近に露頭掘り跡が集中し、周辺部では見られない。同地区では、こうした露頭掘りによる採掘の尾根を挟んだ反対側や露頭掘り下の斜面裾部に間歩が採掘される例がみられる。

2）ひ押し掘り跡〔図版 1 ～ 3、別表〕

調査によって確認されたひ押し掘り跡は 4 基である。

鶴子沢(百枚平)で 1 基(№48)〔**図版 12**〕、屏風沢の弥十郎間歩跡付近で 2 基(№133･134)〔**図版 13**〕、仕出

1)　ひ押し掘りの名称については、鉱脈を追って斜めに掘り下る「犬下り掘り法」と呼称することがあるが［西尾 1943］、ここではひ押し掘りで統一している。

2)　露頭掘りの技法については、鉱脈に沿って溝状に掘る「溝掘り法」、鉱脈を追って擂鉢状に下に向って掘る「竪穴掘法」があるが［西尾 1943］、本書では一括して露頭掘り跡とし、平面形状（円形・溝状等）により分類した。

喜沢左岸の斜面で１基(№307)である。間歩跡が方形の坑口であるのに対し、いずれも坑口形状が不整形である。屏風沢で確認されたものは、沢を挟んで両岸に立地するもので、鉱脈が掘り取られた痕跡が左右対称となっているため、河川の浸食作用によって地表面に現れた同一の鉱脈を掘削したことがわかる。

3）間　歩　跡〔図版１～４、別表〕

調査によって確認された間歩跡は108基である。

確認された間歩は、坑口が埋没しているものや土砂の堆積により一部が開口しているものが多い。急斜面に立地するものは、土砂の堆積が少ないため、遺存状況がよいものが多く、逆に沢内に立地するものは、土砂の堆積や水害により遺存状況が悪いものが多い傾向にある。間歩の中には、坑口前面に平坦地(テラス)を伴うものが見られる。

現存する間歩の名称特定は、遺構の稼行時期を調べるうえで重要な作業であるが、現地に複数の候補となる間歩跡が残されていたため、名称の特定できなかったものが多かった。このうち名称の特定できたものは、近代以降に主要坑道となったため図面類に位置が表記されていた鶴子間歩〔図版 14〕や百枚間歩、間歩坑口の上部に「弥十郎間歩銘の」石祠があることで特定できた近世の弥十郎間歩〔図版 15〕、絵図に描かれた位置に該当する遺構１基のみが所在し、周辺部で同種の遺構が確認できなかったことから名称を特定できた新階屋間歩〔図版 14〕、秋田権右衛門新切山、大滝間歩〔図版 16〕などがある。名称の特定できた間歩は下記のとおりである。

鶴子沢：「鶴子(本口)間歩」(№1)、「百枚間歩(百枚坑)」(№16)、「新階屋間歩」(№106)、
「外山茂右衛門間歩」(№52・53)、「しなみ沢水貫」(№643・644)
屏風沢：「弥十郎間歩」(近世)(№138)、「弥十郎坑」(近代坑道)(№123)
仕出喜沢：「仕出喜間歩」(№324・325)、「仕出喜上口」(№332・368・369)
松ヶ沢：「秋田権右衛門新切山」(№637)
大滝：「大滝間歩」(№663)、「弥喜知(弥吉)間歩」(№662)

4）試 掘 坑 跡〔図版１～４、別表〕

分布調査によって確認された試掘坑と考えられる遺構は７基である。

露岩に掘削した痕跡が見られるが、いずれも小規模なものである。確認された遺構のうち、鶴子沢下流の鶴子(本口)間歩跡付近で見られるもの(№2)は露岩を採掘したものであるが、大滝地区で見られるもの(№666･667)は、対岸に間歩跡があり、坑道掘りによる試掘を試みたが、鉱脈に到達せずに放棄されたと考えられる遺構である。

試掘坑と判断したもののうち、屏風沢や仕出喜沢で見られるもの(№188､333)は、露岩を方形に掘削しているが、いずれも高さ、幅ともに0.6ｍ未満の小規模なもので、小祠として利用されていた可能性も考えられる〔図版 18〕。

5）テラス状遺構〔図版１～４・７、別表〕

分布調査によって確認された平坦面(テラス)のうち、規模の大きいものは６ヵ所である。

鶴子本口間歩跡の坑口前面にあるテラスは、沢両岸の狭い範囲にテラスが分布し、鶴子沢右岸側の斜面には上下２段のテラスがあり、上部のテラス南端には平面円形､断面徳利形を呈する石組みの井戸跡を伴っ

ている(№702)。またその下段に位置するテラス(№703)は、近代に鉱山事務所が置かれていたことが同時代の図面類から確認されている。

弥十郎坑跡周辺のテラス(№124)では、下流部分を水害によって侵食されているものの、河床面に木製樋が確認されており[1)]、羽口や陶磁器、鉱滓といった遺物が、地表面にて採集された。

仕出喜間歩跡(№686･687)周辺部のテラスでは、一部で石組み遺構(石垣)(№634)を伴っている〔**図版18**〕。

大滝地区のテラス群(№699)は、大滝間歩坑口前面に複数のテラスが立地し、部分的に石垣で斜面を補強したものが見られる〔**図版7・18**〕。これらの石垣に利用された石材は、テラス東側斜面に多くみられる安山岩で、現在でも崩落による岩塊が無数に散乱している。大滝地区のテラスは、昭和期まで水田として利用されており、このような耕作地の脇には水田工作の障害となるために除去された礫が集められていた。これらのテラスが一概に鉱山に直接関連するものと判断はできなかったが、同地区を描いた江戸期の絵図「弥喜知間歩」〔**第21図**〕から推測して、大幅な土地の改変を行わず、後に水田として転用されている可能性が高いと考えている。

また、上述したテラスのほかに、小規模なものが独立して見られる例(№193･525･697)や間歩の坑口前面、露頭掘り跡に隣接して小規模なテラスが設けられる例もみられた。

6）石組み遺構〔図版１・３・４、別表〕

鶴子銀山で発見された石組み遺構は４基である。

遺構は、屏風沢から仕出喜沢間の小規模な沢(№148･149)、仕出喜沢(№634)、松ヶ沢(№635)に分布する。屏風沢から仕出喜沢間を流れる小規模な沢の右岸に立地するものは、南北に並び、北側が平面コ字形(№148)、南側が平面ロ字形(№149)を呈する〔**図版18**〕。いずれも高さ50㎝以下である。上屋の構造物を伴う作業場と推測されるが、発掘調査を実施していないため、構造物の有無は不明である。

仕出喜沢や松ヶ沢でみられるものは、いずれも間歩跡または間歩跡と推測される遺構の周辺に立地している直線的な石組みである。このような遺構は、「松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図」〔**第14図**〕で見られるように、坑口の左右の土留用や坑口と四ッ留番所を外部と遮断するために築かれたものである可能性が高い。

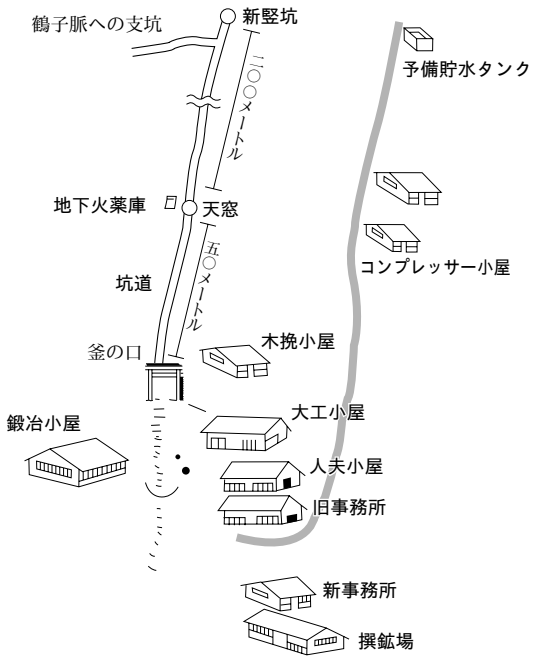
7）石　造　物〔図版１・３・４、別表〕

確認された石造物は、屏風沢と大滝で確認された２基である。

屏風沢のものは、弥十郎間歩跡(№138)に伴う石祠である。裏面に「弥十郎間歩大舗　□米右衛門手附若者中」、右側面に「嘉永五　壬子年　三月出来」、左側面に「施主　世話蔕火　八太」と刻まれる。このため、この石祠下の№138間歩跡が弥十郎間歩跡と考えられる。

大滝地区の№684は、沢沿いに建立された高さ1.1ｍ、幅0.6ｍ、厚さ0.3ｍの七字名号塔で、表面に「南無妙法蓮華経」の七字名号が、裏面に「大正十五年五月　名畑スマコ」と刻まれる。大滝間歩跡や同間歩坑口前面のテラス群に近い位置に立地するが、銀山との関係性は不明である。

1）　分布調査時に確認された木製樋は、その後の土砂の堆積により、現在では視認できなくなっている。



第 7 図　昭和十年代の鶴子坑　釜の口付近図
〔[佐和田町史編さん委員会2001]を一部改変〕

8）近代化遺産〔図版 2、別表〕

鶴子銀山において、明治時代以降、近代化が進められた主要な範囲は、鶴子坑(旧鶴子間歩)[1)]・百枚坑(旧百枚間歩)・弥十郎坑(旧弥十郎間歩)・百枚竪坑の 4 ヵ所であり〔**史料一六二～一八二**〕、明治 26 年(1893)には百枚坑に役局・鍛冶小屋〔**第 29 図・史料一七三**〕、鶴子坑に役員詰所・鉱夫部屋・附属施設が建てられていた〔**史料一七八**〕。

このうち、調査によって確認された近代化遺産の遺構は、鶴子坑周辺部の 4 基と百枚竪坑(№104)[2)]の 1 基である。明治期に役局が置かれたとされる百枚坑付近では、樹木が繁茂していたこともあり、遺構は確認できなかった。

鶴子坑周辺に現存する遺構は、広域林道国仲北線に隣接する鶴子坑の坑口より下流部に集中しており、当時の建築物の配置状況や大正～昭和期にかけてのものであることが、閉山時まで同鉱山で働いていた元従業員からの聞取り調査で判明している〔**第 7 図**〕[佐和田町史編さん委員会 2001]。これらの近代化遺産は、鍛冶小屋の土留用の石積を除き、いずれもコンクリート製で、鉱山事務所や作業員小屋のあったテラス(№703)に残るかけ湯用の風呂場水槽、鍛冶小屋跡の研磨機台座(№701)、坑内に空気を送るコンプレッサーの台座(№704)、コンプレッサー冷却水用のプール(№ 700)がある。

百枚竪坑は、近代以降の地形図上に表記される位置情報をもとに現地を探したところ、百枚間歩跡から東へ 250 ｍほどの位置に、竪坑跡と推測される遺構が確認されたが、主要部分が水没していたため、詳細は不明である〔**図版 18**〕。

2　史料調査

史料調査では、史料の中に散見される鶴子銀山の記述を拾い上げ、鶴子銀山の歴史的な変遷を再構築することを目的として調査を実施した。

現存する佐渡金銀山の絵図や文献史料は、歴史的変遷や鉱山の規模からも相川金銀山のものが最も多いが、鶴子銀山も島内の他鉱山に比べると、比較的多くの史料が残されている。これらの史料が帰属する年代は、江戸時代のものが最も多く、次いで明治・昭和期のものが多い傾向にある。確認された最も古い史料は、慶長 6 年(1601)7 月に鶴子の肴町屋敷の諸役免除を記した書状である〔**史料一九八**〕。

ここでは、代表的な絵図や文献の特徴を述べ、本文末に銀山に関係する絵図及び史料を掲載した〔**第 13 図～ 30 図・巻末資料**〕。

A　絵図・図面史料

鶴子銀山の絵図は、銀山の稼ぎ場が東西でやや離れているという立地条件のためか[3]、採掘域ごとに描かれた坑外の絵図(岡絵図)はあるものの、銀山全域を描いた岡絵図は確認されていない。天保 13 年(1842)の「佐渡一国海岸図」は〔第 13 図〕、銀山の岡絵図ではないため、坑口が描かれるものの、間歩の名称は無い。周辺村落や当時の道との位置関係を知る上では貴重であるが、市街地の街域までを含めて描かれた岡絵図が残されている相川金銀山とは異なり、銀山の全体像が掴みづらい状況にある。

一方で、採掘域を限定して描いた絵図はよく残されており、西側採掘域に立地する鶴子沢を描いた代表的な絵図には、「鶴子間歩惣敷絵図」〔第 15 図〕、「〔鶴子立合筋見取図〕」〔第 18 図〕、「〔鶴子本口脇より岡割目論見墨引図〕」等がある。

味方家所蔵の「鶴子間歩惣敷絵図」は、宝永 3 年(1706)の元図に加筆して作成されたと考えられているもので、鶴子惣水貫間歩(鶴子間歩)や天道間歩等の坑内の稼場(敷)の様子や周辺部に分布する間歩名や地名、立合の本数が描かれており、鶴子間歩稼行時の様相を知ることができる。

屏風沢以東の東側採掘域を描いた絵図には「松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図」〔第 14 図〕、「松ヶ沢・仕出喜沢屏風沢絵図」、「鶴子屏風沢坑口絵図」[4]等がある。

このうち、舟崎文庫所蔵の「松ヶ沢・仕出喜沢屏風沢絵図」と岩木文庫所蔵の「松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図」はともに慶安 5 年(1652)の絵図を元に、前者が天保 2 年(1831)、後者が安政 6 年(1859)に複製されたものである。屏風沢から松ヶ沢までの間歩及び関連施設を描いたこの絵図は、彩色方法を除き、絵図構成上の違いはほぼ見られない。元図となる絵図が描かれた慶安 5 年は、山師の秋田権右衛門が同地区の古間歩の再開発と草見立を願い出ている時期にあたり〔史料一五九 - 四〕、これに添付されていたものである可能性が高い。これらの絵図によって、松ヶ沢から屏風沢間における間歩の分布状況、番所や鍛冶小屋、荷置き場といった関連施設の配置状況といった当時の様相が読み取れる。

このほか、舟崎文庫所蔵の「鉱山金坑絵図」〔第 16 図〕のように、絵図構成の主体となる鉱山は相川金銀山であるものの、鶴子銀山が部分的に加えられる絵図がある。相川金銀山の間歩と同時期に稼行していた鶴子銀山の「鶴子間歩」「弥十郎間歩」「仕出喜間歩」も描かれており、両者の鉱山の位置関係や稼行時期がわかる[5]。

特定の間歩や間歩坑内を描いた絵図(敷絵図)は、作成年号の表記されていないものが多いが、後述する文献史料の調査から、鶴子沢の鶴子本口間歩・百枚間歩・天道間歩、屏風沢の弥十郎間歩、仕出喜沢の仕出喜間歩などの長期間にわたって採掘が行われた間歩や江戸時代後期に再開発が行われる弥喜知間歩・大滝間歩に関係するものが多い。年代が明記されないものも多いが、絵図の状態や開発時期から江戸時代後期に作成されたものが多いと考えられる〔第 19 ～ 25 図〕。

1)　近世の間歩跡のうち、近代以降に採掘が続けられたものは、坑道の名称が間歩から坑へと変更されている。また、坑道規模も鉱車等の導入によって、拡幅されていることが聞取り調査から判明している。
2)　百枚竪坑の名称については、「百枚竪坑」と「鶴子竪坑」の名称が使われている。鶴子竪坑の名称は、後に鶴子坑坑内に同名の竪坑が開鑿されており、混同を避けるためにここでは百枚竪坑の名称で統一している。
3)　慶長期の史料や絵図をみると、鶴子銀山、屏風銀山・五十里山、青野銀山等の名称が使分けられる事例が見られることから、時期によっては沢根、五十里の大字界を境として個別の銀山として認識していた可能性がある。
4)　実際の絵図内容は仕出喜沢を描いたものであるが、「舟崎文庫」目録に記載される名称を記載した。
5)　金銀山岡絵図の多くは、作成年代の書かれていないものが多いが、御直山となっている間歩には記号が付けられていることが多い。このため、相川金銀山と鶴子銀山の御直山となっていた間歩の時期や、相川市街地周辺の寺社・施設名を調査することで、これらの絵図の年代が特定できる可能性が高い。

群馬県赤石家所蔵の「佐州金銀山之内弥十郎間歩舗内墨引」〔**第 19 図**〕は、敷絵図のほかに坑口前に四ツ留番所や鍛冶小屋などの建造物が描かれ、それぞれに建坪が書かれている。また、味方家所蔵の「弥喜知間歩」〔**第 21 図**〕は、開発の由来、間歩の位置図、関連施設の配置状況が複数枚に渡って描かれていることに特徴がある。これらの絵図は、江戸時代当時の間歩と坑口前面に配置された鉱山施設の構成や規模を知るうえで興味深い史料である。

明治 2 年(1869)、鉱山の相川金銀山の官営化に伴い、相川鉱区に組み込まれた鶴子銀山は、相川に近いという立地条件から、佐渡鉱山の鉱区図の一部として描かれることが多くなる。明治 23 年(1890)に描かれた佐渡鉱山(相川)の高任・間ノ山地区の鉱山施設を俯瞰した「御料局佐渡鉱山図」と、3 年後の増刷版を比べると、図の右下に鶴子銀山百枚坑の坑口周辺に役局を含めた複数の鉱山関連施設が追加されていることがわかる〔**第 27・28 図**〕[1)]。明治 26 年(1893)に百枚坑に役局や鉱夫小屋、鍛冶小屋が建てられたとする記述〔**史料一七三**〕を補完するものである。このほか、本書では掲載していないが、新潟県指定文化財となっている株式会社ゴールデン佐渡所蔵の「佐渡鉱山関係施設等設計図」の中に、昭和 20 年(1945)に描かれた鶴子・高任間を結んだ架空索道の部品類設計図が残されている。

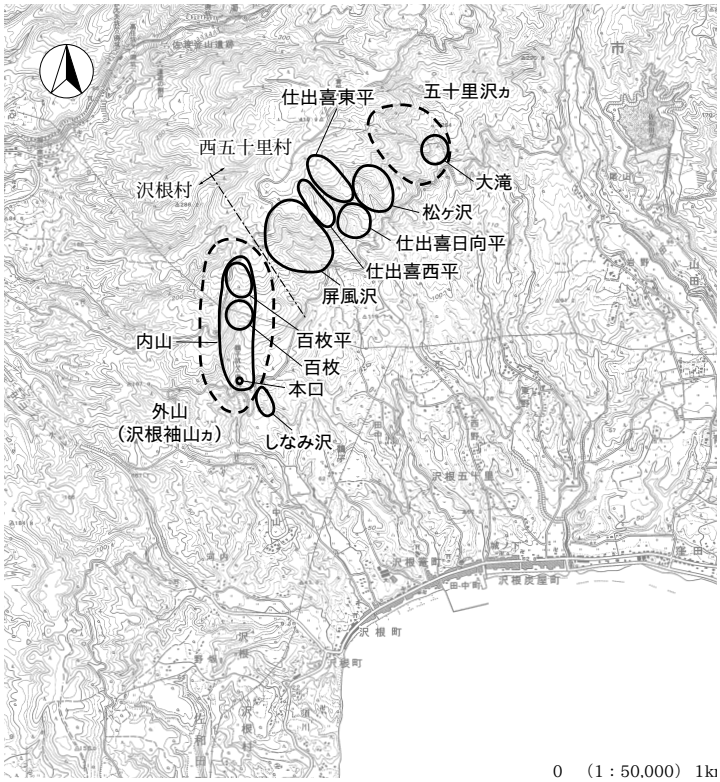
B 文献史料

鶴子銀山を記した佐渡の代表的な史書には、『佐渡相川志』、『佐渡風土記』、『佐渡年代記』、『佐渡四民風俗』、『佐渡志』があり、「佐渡の五史書」と呼ばれている。これらの史料のほかには、宝暦年間(1751～1763)、相川町年寄伊藤三右衛門が編纂した『佐渡国略記』などを中心に鶴子銀山に関係する記述がある〔**関連資料**〕。また、明治 40 年(1907)より岩木擴氏により資料が収集され、大正 11 年(1936)に刊行された『佐渡国誌』では、鉱山の項において、これら近世の史書を出典とした鶴子銀山の記述がみられる。

両津の川上賢吉氏が蒐集した慶長から元禄期の史料である『川上家文書』には、慶長 9 ～ 18 年(1604～1614)頃の鍛冶炭や蝋燭等の各間歩への渡帳などが収録されており、慶長年間に稼働していた鶴子銀山の間歩や山師の名前が多くみられる〔**史料一一～二一**〕。本史料では、鍛冶炭や蝋燭といった鉱山物資が五十里十分一役所を経て、相川金銀山の間歩へ運ばれていた点が指摘されており[田中 1986]、五十里港、五十里十分一と鶴子銀山・相川金銀山の関係を知るうえで貴重な史料である。このほかに、相川金銀山の山師として活躍した味方但馬家に伝わる『味方家文書』には、山師秋田権右衛門が行った採掘に関係する史料も多く収集されている〔**史料一五九**〕。また、江戸時代後期には、「百枚間歩」「鶴子間歩」「弥十郎間歩」などの開発記録と諸経費等の記録が残されており、同時期における鉱山経営の形態をうかがうことができる。本書では、これらの文献史料をもとに、断片的に登場する間歩の開発状況等を拾い上げて、鶴子銀山における各間歩の開発変遷を明確なものとするため、稼働時期の変遷表を作成した〔**付表**〕。

史料上でみられる鶴子銀山の間歩(坑道)の数は 82 ヵ所を数える[2)]。この中で、間歩の稼行時期をみていくと、慶長期の「川上家文書」に収録された鍛冶炭渡し帳や蝋燭渡し帳、相川郷土博物館所蔵の「乙種文書」といった史料に登場する間歩名を見ると〔**史料一一～二一**〕、30 ヵ所の間歩名があり、うち、25 ヵ所が御直山となっていて、慶長期における大久保長安が主導した御直山制による開発が盛んであったことがわかる。一方で、元和期に入ると御直山は 5 ヵ所に減少しており、慶安期に秋田権右衛門によって複数の間歩の再開発が行われているものの、以降は主要な間歩が断続的に採掘され、慶長期に見られた間歩の多くが放棄されていることがわかる。

次に鍛冶炭渡し帳や蝋燭渡し帳〔**史料一一～一三**〕、山師秋田権右衛門の開発願い〔**史料一六〇**〕等から、



第８図　慶長期史料にみる稼場の範囲概略

採掘場所を示す地名を見ると、「鶴子内山近藤間歩」のように間歩名の前に付けられた採掘場所を表す地名として、「内山」「外山」「百枚」「屏風沢」「仕出喜東平」「仕出喜西平」「仕出喜日向平」「五十里沢」といった名称がみられる。これらの地名と絵図に書かれた地名や採掘地域名とともに書かれている間歩名から、大まかな採掘地域名が判明している〔**第８図**〕。このうち、「外山」は、発見者である外山茂右衛門に由来する名称に由来すると考えられてきたが、これに対応する地名として「内山」があること、茂右衛門間歩の立地場所が他の南向き斜面とは尾根を挟んだ反対側の北向き斜面に立地することなどから、外山は銀山外縁部の総称ではないかと考えられる。

また、間歩名についても、時代によって名称が変化する事例がみられた。「川上家文書」中では、「鶴子大横相」や「鶴子屏風沢大横相」といった同種の名称が多く見られ、同名の間歩が大々的に開発されている印象を受けるが〔**史料一一〜一三**〕、鍛冶炭や蝋燭を受け渡された山師名が異なる事例が多くみられ、同文書中の開発地・山師名の明記される間歩名と山師名が重複しているものがあるため、これらが総称として便宜的に用いられたものであることがわかる。

また、長期にわたる採掘期間をもつ鶴子間歩の場合、再開発等に伴い、名称をたびたび変更する事例もみられた。鶴子間歩の場合、開坑年にあたる文禄４年(1594)には本口間歩〔**史料一**〕、御直山となる正保元年(1644)には鶴子総水貫間歩〔**史料二九**〕、宝永３年(1753)元図とされる「鶴子間歩惣敷絵図」では鶴子惣水貫間歩〔**第 15 図**〕、明治期以降は、鶴子坑と変化している〔**史料一六六**〕。鶴子間歩は立地的に採掘域の下流部にあたるため、早い段階で水貫としての性格を強めていったことがこのような名称の変更の中から読み取れる。

仕出喜間歩の場合、岩木文庫所蔵の「松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図」〔**第 14 図**〕をみると惣水貫(仕出喜間歩)のほかに、上流部に「古仕出喜」、「仕出喜上口」といった間歩名がみられる。このような事例は、初期開発時に上流部に開坑したものの、採掘深度が下がることで排水の処理が困難となり、新たに下流部から、同じ敷を目指して開坑したためと推測される[3)]。

このように、間歩名称は時代ごとに排水等の他機能が付与されることで、その時々に名称が変更されたり、

1)　「舟崎文庫」目録上の名称及び年代は明治 23 年となっているが、絵図内の後付に３年後に増刷されたことが書かれている。
2)　総称のみで間歩名の特定できなかったものや、同じ間歩が異なった名称で呼ばれている可能性があるため、あくまで推定数として計測している。
3)　相川金銀山の例をみると、鳥越間歩で、従来の抗口を放棄し、新たに坑口を開けて開発を行った記録がある。

下流部へ新たに坑口が設けられることで、同名の坑口で異なる場所に設けられる事例あることが判明した。

C 鉱山集落と周辺集落の規模

銀山の発展とともに、鉱山集落が形成されていったが、開発初期における鉱山集落の様相を記述した史料はなく、詳細は不明である。ただし、相川での初期集落形態で見られるように、鶴子銀山開発初期においても山小屋とよばれる掘立柱の仮住居とも呼べる集落の形成を端緒として、天正～慶長期における銀山の隆盛とともにこれらが集約し、現鶴子集落のある台地上に鉱山集落(鶴子田中遺跡)を形成していったと推測される。絵図等の史料から町域が明らかな上相川と異なり、鶴子の場合、町域は不明な点も多いが、相川四十物町や大工町の前身が、鶴子の四十物町や大工町の者が移転して開発されたとする史料〔**史料二五四**〕、慶安４年(1651)時に３つの町があったとする史料〔**史料二五八**〕から、少なくとも鶴子の鉱山集落には、四十物町や大工町といった町名があったことがわかる。また、台地上に形成された町域の肥大化に伴う宅地不足を解消するため、旧代官所東側に新町(鶴子荒町遺跡)が形成されたと推測される。集落形成の時期については、鶴子や沢根村・田中村に天正～慶長期に開基または移転してきた寺院が多いことから、この時期に形成されたものと推測できる〔**第９図・第３表**〕。のちに、鶴子銀山の鉱山集落は、相川金銀山発展に伴う人口流出と銀山の衰退によって規模を縮小させ、やがて廃絶し、農村集落へと変換する。

前述した鉱山集落のほかに、島内から鉱山への労働力や資材供給は全島規模に及んでいた。中でも鶴子銀山の発展とともに近郊で最もその影響力を受けてきたのが、沢根地区の銀山周辺部にあった農村集落や海岸線の町場の人々であったことは想像に難くない。戦国時代以降、沢根村、五十里村のみであった村落が、人口増加に伴い、江戸期までに沢根町・五十里籠町・五十里炭屋町の三ヵ町と沢根村・田中村・西五十里村・東五十里村・五十里本郷村の五ヵ村が成立したと考えられている〔**第４図**〕。とくに沢根町や五十里炭屋町の成立過程は、銀山の発展とともに形成されていった典型的な事例である。鶴子銀山の変遷をみるうえで、沢根地区の周辺村落とのかかわりは重要な要素となるため、以下に元禄期「元禄検地帳」、宝暦期「佐州巡村記」〔**史料二七〇**〕、天保期「佐州巡村記」等の史料をもとに、江戸期の町村規模や集落構成の概要を述べる。

沢根町(現沢根町)は、真野湾沿岸に立地する慶長年間に成立した港町で〔**史料二五二**〕、銀山の開発と共に鉱山諸資材や米・塩などの物資を集積した港湾として発展し、慶長９年(1604)には沢根十分一役所(後の沢根番所)が置かれた。商業の町であるため、耕作地は少なく、元禄・宝暦・天保期ともに畑高１町９反程度と、耕作面積はほぼ変化がない。番所は後に関所の体裁を整え、幕末には大筒場が設けられている〔**史料二五一**〕。番所には定役・番所役・下遣頭取・下遣等が置かれ、定役・番所役は奉行所の役人があたり、下遣頭取以下は問屋商人から任命された〔**史料二五〇**〕。鶴子銀山の衰退が与えた町への影響は大きく、一時期退転同前となったが〔**史料二六〇**〕、沢根港が相川へ向う船の風待ち港として栄えたことで、廻船業が発展した。元禄期に 86 軒あった屋敷数が、宝暦期で 126 軒に増加している背景には、鉱山港から商業港へ脱却を果したことによる人口増があったと考えられる。

五十里籠町(現沢根篭町)は、真野湾沿岸、沢根町の東側に立地する町で、町名ともなっている「籠町」は牢町の転訛といわれ[1)]、慶長 11 年(1606)、同地の牢屋を相川へ移転した記録がある〔**史料二五六**〕。屋敷数は元禄期の 43 軒から宝暦期に 53 軒と増加している。屋敷数の増減は、沢根町同様、銀山衰退の影響とその後の発展によると考えられる。海岸沿いの町であるため、耕作地は畑地のみで、元禄期に９反４

1) 篭屋が多かったことから付けられたという説もある［佐和田町史編さん委員会 1991］

第９図　周辺の寺社

〔「相川」「河原田」〔国土地理院2007〕1:25,000を改変〕〔〔小菅1991〕を改変〕

第３表　鶴子銀山に関係する寺院一覧表

№.	寺院名称	宗派	現住所	町名	面積（江戸期）	開基年代	合併・移転年代	廃年代	付記
1	普益山　光福寺	浄土宗	河原田本町	河原田本町	境内８畝 12 歩	文禄４（1595）or慶長4(1599）開基	慶長７（1602）現在地へ移転 or 寛永 12（1635）	—	『佐渡国寺社境内案内帳』(慶長４(1595）開基）下の境内は東福城二の丸『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第 12 輯に鶴子鉱山鋳造の鐘があったという
2	円頓山　大乗寺	浄土宗	沢根 79	沢根町	境内５反６畝 20 歩	天正７（1579）or慶長2(1597）開基	鶴子より現在地へ移転ヵ	—	『佐渡国寺社境内案内帳』(慶長２(1597）開基）『寺院明細書』『沢根町誌稿第二輯』（天正７（1579）創立）山（鶴子）から下りてきたとの伝承あり
3	法界寺（のち法然寺）	浄土宗	相川下寺町 4	田中村鶴子カ→下寺町（相川）	—	応永年中(1467～68)・河原田大坂町？に開山	河原田大坂町・鶴子と移転し慶長 11（1606）現在地へ移転、法然寺となる	—	『佐渡国寺社境内案内帳』
4	片貝山　願龍寺	真宗	相川大間町 35	河原田郷鶴子→弥十郎町（相川）	—	慶長7(1602)・鶴子に建立	寛永 10（1633）相川弥十郎町へ移転、正保年中に紙屋町移転、元禄年中（1688～1704）大間町へ移転	—	『佐渡国寺社境内案内帳』『佐渡相川志』
5	海覚山（黄雲山、無碍光山）西光寺	真宗	窪田 789	窪田村	境内１反４畝 20 歩	慶長３（1598）or 慶長 11（1606）開基	—	—	『寺院明細書』(慶長３（1598）開基)『佐渡国寺社境内案内帳』(慶長 11（1606）開基）
6	照光寺（のち知恵海山　勝広寺）	真宗	両津湊 199	原黒村→新穂大工沢→田中村鶴子→湊（両津）	—	天正元（1573）原黒村、天正 10（1582）新穂村大工沢	慶長元～ 15（1596 ～ 1610 新穂大工沢より）鶴子へ移転し照光寺となり、慶長 15 年（1610）両津湊へ移転して勝広寺となる	—	『佐渡国寺社境内案内帳』
7	本誓山　称念寺	真宗	沢根炭屋町 11	五十里炭屋町→現在地	境内７畝	慶長３（1598）or元和2(1616）開基	慶安元（1648）火災により現在地へ移転	明治元（1868）廃寺、明治 15（1882）再興	『称念寺由緒』(慶長３（1598）開基)『佐渡国寺社境内案内帳』(元和２（16161）開基）
8	修栄山　専得寺	真宗	沢根町 30-1	鶴子→沢根町→現在地	境内４反６畝 15 歩、畑６畝 21 歩	天正７（1579）or 天正 18（1590）建立	天正 18（1590）沢根町へ移転、慶長４（1599）現在地へ移転	—	『専得寺過去帳』(天正７(1579)建立)『佐渡国寺社境内案内帳』(天正 18（1590）沢根町に建立)『寺院調査書』『沢根町誌稿』須賀修理（上杉氏代官）埋葬寺、宗岡佐渡（大久保長安代官）の墓所
9	専照寺	真宗	相川茶屋町 5（合併により廃寺）	鶴子？→茶屋町（相川）	—	元和元(1615)・奈良町に建立	相川茶屋町へ移転ヵ、昭和 17 年（1942）相川諏訪町の万行寺に合併	明治元(1868)、同 10（1877）再興	『佐渡国寺社境内案内帳』鶴子から移転との伝承あり
10	長慶寺	真宗	（廃寺カ）	不明	不明	不明	不明	不明	宝暦寺社帳に未掲載
11	相川山　本光寺	真宗	沢根籠町 39	上相川→鶴子十八人場→五十里籠町→現在地	境内１畝 25 歩	慶長８（1603）鶴子十八人場へ移転	慶長８（1603）鶴子へ移転、宝暦元（1751）五十里籠町へ移転、天明元（1781）現在地へ移転	—	『佐渡国寺社境内案内帳』(慶長８(1603）開基）
12	思議山　本福寺	真宗	沢根五十里 1016	五十里城二の郭→五十里本郷村	境内 10 歩	慶長８（1603）開基	五十里城二の郭の寺地より現在地へ移転	—	『本福寺由緒』（慶長８年（1603）開基ヵ）『佐渡国寺社境内案内帳』（慶長 14（1609）建立）開基は五十里城主本間伊代守東野・西野を経て来たという伝承あり
13	大悲山　満行寺	真宗	沢根五十里 996	河原田郷鶴子？→西五十里村	境内９畝 18 歩	慶長４（1599）建立	銀山の麓河原田郷に一宇を建立するも、銀山衰微により、現在地へ移転	—	『佐渡国寺社境内案内帳』『満行寺縁起』
14	永慶寺	真言宗	（廃寺）	沢根村	境内３反３畝 10 歩	不明 慶長元（1596）改めの過去帳にあり	明治 15（1882）松林寺と合併→永松寺	明治 15(1882）合併により廃寺	『佐渡国寺社境内案内帳』旧寺地は河内永慶堂
15	永松寺	真言宗	沢根 614	—	—	明治 15(1882）永慶寺・松林寺合併により永松寺となる	大正 12（1923）道光寺と合併	—	現寺地は旧道光寺
16	古岩山・金北山吉祥寺	真言宗	（廃寺）	古城川端？→西五十里村	境内４反７畝 27 歩、畑９畝 25 歩	天文 21(1552）開基	昭和 47（1972）長安寺に合併	明治元（1868）廃寺、明治３（1871）復旧、昭和 47(1972）合併により廃寺	『寺伝』古城下川端の多聞寺を移転『佐渡国寺社境内案内帳』寛永 10（1633）上相川常徳寺退転により、この寺を以て山師秋田権右衛門建立同村北山権現別当
17	慶照寺	真言宗	（廃寺カ）	不明	不明	不明	不明	不明	伝承のみ、所在地不明
18	玄照寺	真言宗	（廃寺カ）	不明	不明	不明	不明	不明	伝承のみ、所在地不明
19	恵日山　長安寺	真言宗	沢根 1370	沢根村	境内６反８畝歩	天文年中(1532～1555)開基ヵ	昭和 47（1972）吉祥寺と合併	—	『長安寺寺伝』（天文年中（1532～1555）開基)『佐渡国寺社境内案内帳』

No.	寺院名称	宗派	現住所	町名	面積（江戸期）	開基年代	合併・移転年代	廃年代	付記
20	長福寺（のち松林寺）	真言宗	（廃寺）	沢根村	境内５畝 26 歩	宝永元（1704）開基	明治 15（1882）永慶寺と合併→永松寺	明治 15(1882)合併により廃寺	『佐渡国寺社境内案内帳』享保元（1716）寺名を松林寺に改める旧寺地は河内集落松林堂付近
21	道光寺・道弘寺	真言宗	（廃寺）	沢根村河内	境内３反９畝 10 歩	永禄元（1558）建立	大正 12（1923）永松寺と合併→永松寺	大正 12(1923)合併により消滅	『道光寺寺伝』（永禄元（1558）建立）『佐渡国寺社境内案内帳』（開基知れず）沢根殿祈祷所と伝わる。旧寺地は現在の永松寺
22	瑠璃山　曼荼羅寺	真言宗	沢根 1776	沢根村	境内３町８反５畝 18 歩、 畑４畝６歩	応永元(1394)ヵ	宝暦２（1752）門徒寺の慈眼寺が境内に移転	—	『佐渡国寺社境内案内帳』沢根地頭本間摂津守建立と伝わる。
23	臨江山　総鏡寺	禅宗	沢根籠町 24-1	五十里籠町	境内８畝 26 歩、畑２畝 26 歩	元和８元(1622)開基 or 元禄元（1688）開山	—	—	『総鏡寺由緒書』（元禄元（1688）開基）『佐渡国寺社境内案内帳』(元和８(1622)開基)
24	金宝山　円福寺	法華宗	沢根 609	田中村鶴子→沢根村河内	もと境内１反３畝 10 歩、境内東西 30 間、南北 13 間	慶長２（1597）開基	宝永４（1707）現在地へ移転	—	『佐渡国寺社境内案内帳』旧寺地田中村鶴子字「円福寺畑」ヵ
25	大法山　長性寺(のち本敬寺)	法華宗	（廃寺）	沢根村	境内５畝３歩（相川）	応永17(1410)建立	慶長 11（1606）相川下寺町へ移転し本敬寺と改める	不明	『佐渡国寺社境内案内帳』『佐渡相川志』
26	法泉寺	法華宗	相川下山之神町 29	五十里村→下山之神町（相川）→現在地	境内７畝２歩	寛永元（1624）開基	寛永６（1629）相川下山之神へ移転、宝永元年（1704）に現在地へ移転	—	『佐渡国寺社境内案内帳』
27	長光山　妙円寺	法華宗	相川下寺町 1	田中村鶴子四十物町→次助町（相川）→相川南沢（現在地）	境内３反２畝８歩？	慶長元（1596）開基	銀山衰微のため相川治助町へ移転、享保２（1717）現在地へ移転	—	『佐渡国寺社境内案内帳』『佐渡相川志』（慶長元（1596）開基）
28	行蔵院（のち大行院）	修験	（廃院）	西三川→鶴子→弥十郎町（相川）→夕白町	—	文禄年間(1592～1596)	西三川から鶴子へ移転、慶長頃に相川弥十郎町へ移転して般若院といい、のち夕白町で大行院と号した	不明	『佐渡相川志』

（宗派別・五十音順）

第４表　鶴子銀山に関係する神社一覧表

No.	神社名称	宗派	現住所	町名	面積（江戸期）	創立年代	合併・移転年代	廃年代	付記
1	春日若宮神社（稲荷社）	神社	沢根 809	沢根村河内	—	元徳3(1331)or 慶長 16(1611)勧請	不明	—	『社伝』（元徳３（1331）勧請）『佐渡国寺社境内案内帳』（慶長 16（1611）勧請） 境内の稲荷社が鶴子銀山にあったものと伝わる
2	北野神社	神社	沢根 1547	田中村鶴子	—	貞治2(1331)or 慶長 2(1597)勧請	—	—	『社伝』（貞治２（1331）勧請）『佐渡国寺社境内案内帳』（慶長２（1597）勧請） 上杉景勝奉納の鰐口があったが火災で焼失
3	金北山神社・北山権現	神社	沢根五十里 758	屏風越→西五十里村→現在地	２反７畝 18 歩	天文 18(1550)創建	屏風越にあった堂を正保元 (1644) 吉祥寺境内へ移転、のち現在地へ移る	—	『佐渡国寺社境内案内帳』 社殿再建・移祀には山師秋田権右衛門が尽力
4	沢根大神宮・神明社（五社神社）	神社	沢根 295		—	寛元２（1244）開創 or 宝永年中勧請	明治 5(1872) 沢根大神宮に移遷	—	『佐渡国寺社境内案内帳』（宝永年中勧請） 境内社の五社神社は開創年代不明ながら曼荼羅寺を経て、鶴子銀山へ移遷、その後再度曼荼羅寺に移り、明治５年（1872）現在地へ移された
5	白山神社・白山権現	神社	沢根	田中村本宮	—	天文 21(1552)勧請	宝暦 3(1753) 現在地へ遷座	—	『社伝』『佐渡国寺社境内案内帳』

（五十音順）

畝であったが、宝暦期以降は1町6反4畝2歩まで増加している。

五十里炭屋町(現沢根炭屋町)は、沢根地区南東の真野湾沿岸に立地する町で、銀山開発に伴い、銀山用の木炭を扱う炭問屋が集まったことが町名の由来と考えられ、村境を流れる荒町川は「新町」に因む命名とされる[佐和田町史編さん委員会 1991]。慶長5年(1600)、河村彦左衛門によって港が開かれ、翌年には五十里十分一役所が建てられている〔史料二〇七〕。元禄4年(1691)、銀山の衰微により役所も廃止となり〔史料二〇六〕、のちに漁業の町へと変化した。元禄期には23軒あった屋敷が、天保期には39軒と増加しており、銀山衰退による人口減の後、廻船業や街道筋の町場として発展していったと考えられる。海岸沿いの町であるため、耕作地は少なく、元禄検地の際に畑高は8反、宝暦以降は8反3畝5歩とほぼ変わらない。

沢根村(現沢根・羽二生・須川・野坂・川内・中山・田上集落、鶴子集落の一部)は、沢根地区の西側、真野湾沿岸から鶴子銀山(鶴子沢付近)に及ぶ同地区で最も範囲の広い村落で、複数の集落が点在している。中世は沢根本間氏の居城があった。慶長期には真野湾沿岸に形成された市町が、沢根町として分離している。また、鶴子集落の西側も沢根村に属しており、かつては鉱山集落として栄えた地域があった。元禄検地の際に羽二生村等が沢根村に合地している。元禄期に160軒あった屋敷数は、宝暦期で136軒、天保期で147軒と増減を繰り返している。これは鶴子銀山衰退に伴う人口流出が元禄～宝暦期間の屋敷数激減に影響していると考えられる。田高は66町6反余～4反9畝歩、畑高は46町7反のち49町4反9畝24歩とあまり変化はみられない。山林も多く、御林2ヵ所、百姓林25ヵ所、竹林、柴山、秣場61ヵ所があった。宝暦期には郷倉が置かれている。

五十里本郷村(現沢根五十里の東野・西野集落の一部)は、沢根地区の東端、三瀬川と荒町川に挟まれた台地上に位置する村落で、古代から開けたと推測される土地で、縄文・平安～中世の遺跡が多い。五十里六ヵ村(東五十里村・西五十里村・田中村・五十里炭屋町・五十里籠町・五十里本郷村)の親村で、中世は五十里郷を支配した五十里本間氏の居城があった。家数は元禄期に31軒、天保期には37軒と増加している。田高は21町8反余とほぼ変わらない。畑高は元禄期に9町余から天保期に10町1反19歩と増加している。宝暦期の佐渡巡村では御林1ヵ所、百姓林1ヵ所あった。村明細に「男は農業の間に銀山入用の荷筵を織り売り出す。女の稼ぎなし」とあり、銀山への労働力供給とともに鉱山で使用される物資の供給源であったといえる〔史料二六三〕。

田中村(現沢根・鶴子集落の一部、現沢根五十里・田中集落・田中町)は、玄道川両岸の河岸段丘上の村落で、周辺の村落と比較して「五十里」名の付かない村落である。慶長5年(1600)、徳川家康の代官として、佐渡へ渡った田中清六の名に由来するという説がある[佐和田町史編さん委員会 1991]。海岸部は田中町と呼称される。鶴子集落の東側は田中村に属し、銀山稼ぎや漁猟を行った村といえる。鉱山衰退時には海岸線沿いの町並が減少し、沢根町～炭屋町間は、閑散とした地域であったといわれている。屋敷数をみると宝暦期の68軒から天保期の78軒と増加しており、海岸線沿いの町並が廻船業や街道沿いの町として再度発展したものと推測される。田高は16町4反余と変わらず、畑高は元禄期の14町8反歩から天保期の15町1反5畝12歩と増加している。

西五十里村(現沢根五十里・西野集落)は、荒町川と沓掛川に挟まれた河岸段丘上に立地する村落である。山師秋田権右衛門が拠点とした場所で、鶴子銀山の鉱山稼ぎの人々がおり、秋田権右衛門と共に吉祥寺棟札に書かれた人々は〔史料二〇四〕、その協力者であったと考えられている[佐和田町史編さん委員会 1991]。元禄期から宝暦期にかけて、38軒から29件へと減少するが、天保期には43軒に増加している。元禄～

宝暦期間は、銀山が衰退している時期にあたり、天保期は西五十里村地内であった弥十郎間歩の開発が行われていた時期にあたるため、これが影響していると考えられる。田高は 19 町 5 反余から 19 町 7 反 9 畝 25 歩へとあまり変化はない。この村落は山林を所有しており、雑木林 3 ヵ所、松林 1 ヵ所、柴山 1 ヵ所、秣場 14 ヵ所を持っている。天保期には郷倉が置かれている。村明細に「男は農業の間に銀山入用の荷筵(叺)を織り売り出す。女の稼ぎなし」とあり、銀山への労働力供給とともに鉱山で使用される物資の供給源であったといえる〔**史料二六三**〕。

東五十里村(現沢根五十里・東野集落)は、三瀬川と荒町川に挟まれた河岸段丘上の村落である。近世の史料がないため、詳細は不明であるが、隣村の西五十里村同様、北側で鶴子銀山の大滝間歩をはじめとする稼ぎ場に隣接することから、田畑収入の他に銀山稼ぎ等の農外収入があったと推測される。元禄検地帳が現存しないため、享保期と考えられる「御巡見案内帳」等をみると家数は 21 ～ 22 軒とほぼ変化はなく、田高 16 町 4 反～ 6 反、畑高 5 町～ 6 町前後とやや変化がみられる。

3　道　調　査

銀山の開発は、坑内で使用する鉄製品(タガネ等)・蝋燭・油・留木、精錬や鍛冶に使用する鉛・炭、労働者への食料など多くの物資を必要とする。このため、物資の供給や産出した鉱石を運搬するためのインフラ整備は、鉱山経営の重要な地位を占めていたといえる。鶴子銀山の変遷を考えていくうえで、銀山とかかわる銀山道の調査は欠かせないものであることから、絵図・文献史料や田中圭一氏、小菅徹也氏らのこれまでの調査研究をもとに[田中 1986・小菅 1991]、銀山道の分布状況を調査した。相川往還(中山街道)については、新潟県教育委員会によって既に調査が行われているため、ここでは挿図上に示すのみ[1)]で詳細は割愛した[新潟県教育委員会 1998]。

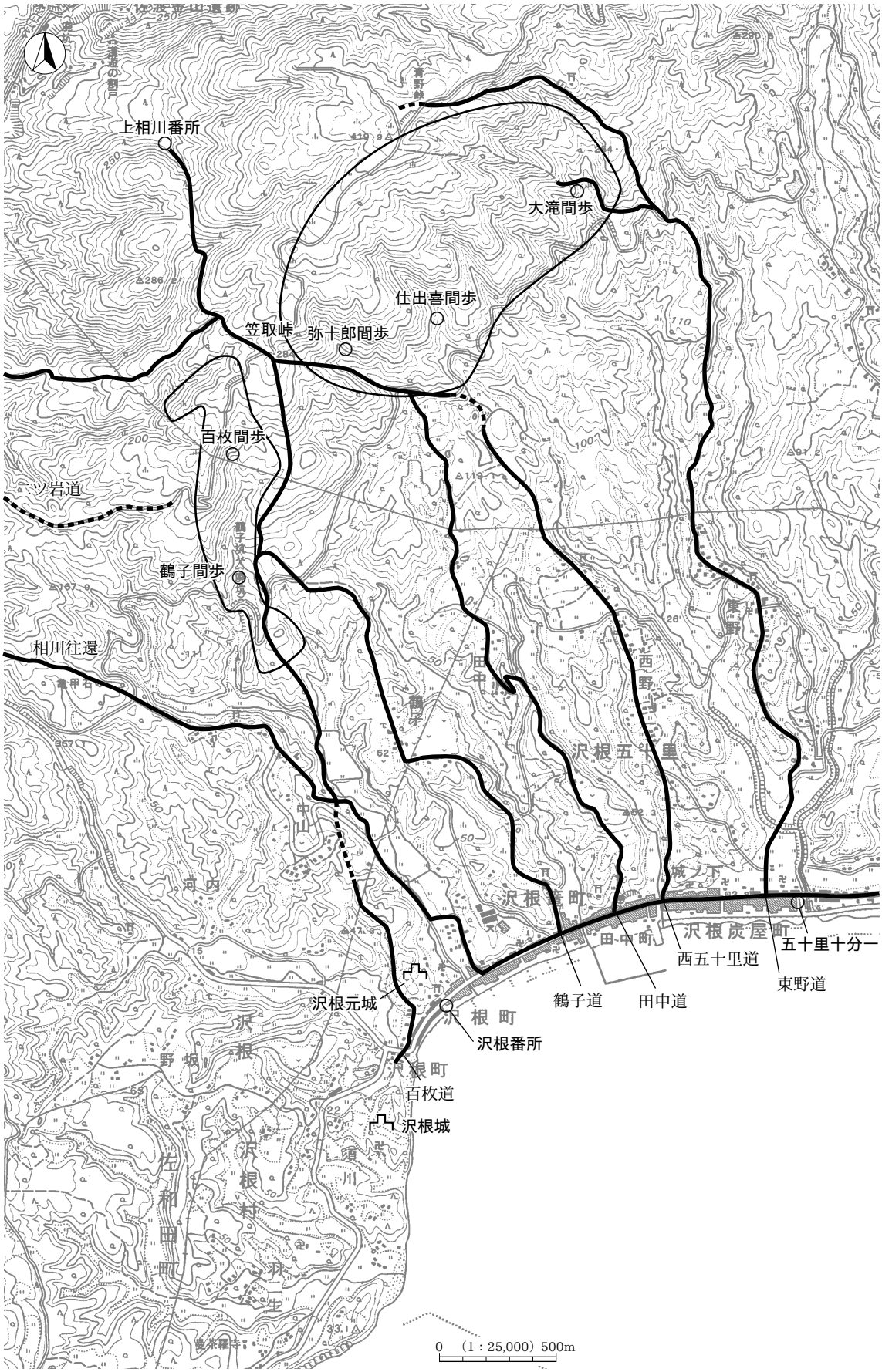
鶴子銀山の場合、稼ぎ場が広範囲に分散していたこともあり、港と銀山を結ぶ複数の銀山道があった〔**第 10 図**〕。基本的な道の構成は、沿岸部(港)から段丘上(集落)へと上がり、尾根伝いに銀山へ向うルートで、上流部で合流し、相川へ向うものがほとんどである。道の開通年代は、主要街道として整備された相川往還を除き、年代が明確なものはないため、いつ頃に開通し、銀山道としていつまで利用されていたのかは、立地条件や歴史的変遷から推測するしか方法はない。

最も早く開通したとされるものは、旧沢根港[2)]のあった質場川河口から、沢根本間氏の居城(沢根元城)付近を通り、沢越えで鶴子沢(百枚平)へ向かうための「百枚道」ではないかとされている[小菅 1991]。

上杉景勝による佐渡統治以降、外山の代官所、鶴子鉱山集落の形成によって、主要道になっていったと考えられるのが、前述の「百枚道」のほかに、五十里港から鶴子鉱山集落を通って、代官所・銀山へ向うルートであった「鶴子道」である。このほか、東西に広く分散する沢に立地した稼ぎ場へ向かい、港から段丘上の各集落を通って銀山へ向う、「田中道」「西五十里道」「東五十里道」「青野(上相川)道」といった南北方向へ延びる銀山道と「二ッ岩道」「百枚道(前述のものとはルートの異なるもの)」といった東西方向へ延びる道があったとされる[小菅 1992]。また、このような道の様子は、「佐渡一国海岸図」〔**第 13 図**〕や「鉱山金坑絵図」

1)　新潟県教育委員会の報告書中の相川往還の位置について、中山集落周辺の鬼坂を通る街道の位置が異なるとの指摘を地域住民より受けたため、街道の位置を変更している。

2)　小菅氏によれば、沢根本間氏時代に開かれた港が沢根七場（質場）にあり、のちに東側に新たな港が開かれたとされる［小菅 1991］。



第 10 図　相川往還と銀山道

〔「相川」「河原田」[国土地理院2007]1:25,000を改変〕

〔第 16 図〕といった絵図資料でも確認することができる。

銀山道のなかでも「西五十里道」は、当所、沢根港と銀山（屏風沢）を結ぶルートとして成立し、後に上相川へと延長されたルートで、江戸時代後期に上相川の衰退とともに相川側の登り口が変更されながらも、長期間にわたって稼がれた弥十郎間歩と相川を結ぶ重要な幹線道路として存続し[1)]、川路聖謨奉行や吉田松陰らがこの道を通って弥十郎間歩への視察に出向いた記録が残されている〔史料一二九・一四二〕。

現在、これらの道の多くが銀山の衰退とともに廃れ、道路拡幅や法線変更等があったことで、本来の道法を知る手がかりは少なくなっているが、山中の遺構や赤道として地籍図上で残されていることが多い。

分布調査では、当初、銀山の範囲内に含まれていた百枚道・西五十里道・鶴子道・東五十里道を調査対象としたが、百枚道・鶴子道・東五十里道は、これまでに作成されている地形図や地籍図に法線が記載されていたことから、地籍図や地形図と現道の位置にずれがないかどうか座標の確認を行ったところ、ほぼ一致していたことから詳細な分布調査は実施していない。

西五十里道は、真野湾岸の港町から西五十里村（現西野集落）を通り、屏風沢・笠取峠を経て相川へ向かい、途中上相川へ向かう（途中、大工町・相川四町目へと分岐するルートがあり）道である沢根地区から銀山の範囲内に入る直前は、林道により道跡が寸断されているものの、そこから屏風沢を経て市道二ッ岩線に至る区間の山中には道跡が良好に残されており、従来の地形図や地籍図上にも赤道として図示されていたことから、とくに計測はおこなっていない。二ッ岩線から上相川へ至る区間は、一部を除き合筆によって赤道の表記もなくなり、地形図上にも表れていない区間であったので、この間の詳細調査を実施している〔図版 5・19〕。道跡は途中、土砂の崩落や後世の開田等により湮滅している区間もあるが、概ね良好に遺構が残されている。道の脇には石祠を伴う塚跡や金北山道（青野道）への分岐点と石仏等が確認された〔別表〕。

1）　本来の西五十里道は、五十里港～西五十里村～鶴子銀山（屏風沢）を結ぶルートであったが、後に上相川まで延長されたと推測される。当所は西五十里道や笠取峠付近で同道に合流する百枚道が上相川へ向う幹線道路であり、上相川の衰退後は、相川の大工町や南沢町へ向かうルートに変更したと推測される。

第Ⅳ章　総　　括

1　遺　　構

間歩跡や露頭掘り跡といった採掘跡の分布範囲を見ると、鶴子沢の排水坑道であるしなみ沢水貫跡(№643・644)や茶屋平金山(№688・690)を除き、鶴子沢一帯、屏風沢・仕出喜沢・松ヶ沢一帯と大滝に遺構が集中しており、露頭掘り及び間歩跡の範囲が概ね重複している。このような分布域をみると、尾根やそれに近い部分の露頭鉱脈を採掘している露頭掘りに対し、山裾部分から坑道を掘削して、同一の鉱脈に向かう間歩が位置していることがわかる。

次に各地域における遺構の分布状況をみると、鶴子銀山西部の鶴子沢では、上流部の百枚平周辺に露頭掘り跡・ひ押し掘り跡が集中し、間歩跡はほぼ全域にわたって分布しているが、対照的に下流部では露頭掘り跡がほぼみられなくなり、間歩跡のみとなっている。このような遺構分布の様相は、山頂部付近をはじめとする上流部に露頭鉱脈が集中し、それを下流部の山裾から追いかける形で、坑道を開削していったためと想定される。絵図史料でみられるようにこのような下流部に立地する鶴子間歩やしなみ沢水貫などの間歩は、排水坑道を兼ねたものが多い。明治時代以降には、鶴子坑を中心に近代化が進められたこともあり、鶴子間歩跡周辺に近代化遺産が集中している。

鶴子銀山東部の屏風沢の南西側から松ヶ沢の北東側までの間については、尾根上に小型の露頭掘り跡が密集している。間歩跡も弥十郎坑跡(№123)から上流部分に集中している。また、坑口規模の小さい間歩が多く、そのほとんどが尾根上や尾根に近い斜面に集中していることから、尾根上を試掘的な感覚で掘削し、後に下部から横相による間歩を取明けて鉱石の採掘が行われたことが想定される。

その傾向がもっとも顕著にみられるのが大滝地区で、狭い範囲内に採掘跡とそれに伴うテラス群がコンパクトにまとまっている〔**図版 7**〕。山頂部の露頭鉱脈鉱床を採掘した露頭掘り跡、その山裾に地中の鉱脈を横相によって採掘する間歩跡があり、大滝地区南西の対岸には、探鉱のための掘削を行った結果、有望な鉱脈に当たらず放棄されたと考えられる試掘坑跡がある。また、南東部にはテラス群が見られ、番所や採掘作業に従事した人々の小規模な集落があった可能性が高い。同地区には、鉱山に関係する建物や堂宇が描かれた「弥喜知間歩墨引」〔**第 21 図**〕等の絵図も残されており、今後の調査によって、江戸時代における一鉱区の間歩跡と施設の関連性を知る上で格好の資料となる範囲であると考えられる。

テラスと間歩の関係をみると、坑口の前面に設けられる規模の大きいテラスの多くが、「銀山岡絵図」〔**第 17 図**〕にみられるように、四つ留番所などの銀山に関係する施設があったものと推測される。なかでも鶴子本口間歩跡・百枚間歩跡・弥十郎坑跡は、近代にも鉱山事務所や施設が置かれていることが判明している。大滝地区で見られるテラス群は、「弥喜知間歩墨引」には、大滝間歩付近に鍛冶小屋・役人詰所・堂宇などがあったことが描かれているが、現存するテラスの傾斜角が水平に近いため、閉山後に水田として再利用している可能性が高い。また、規模の小さいテラスは、横引場と呼ばれる鉱石の重さを計る小屋や作業場として利用されていたと推測される。

これまで、鶴子沢上流部の百枚平における開発は、『佐渡年代記』や『佐渡国略記』などに開発経緯とともに記載されており、現地でも巨大な露頭掘り跡やひ押し掘り跡によって、古い時期の開発が想定される

が、屏風沢以東の開発開始時期については、史料が無く不明確な部分が多かった。しかし、平成 14 年度～ 18 年度に実施した分布調査によって、屏風沢以東でも無数の露頭掘り跡が確認されており、屏風沢や仕出喜沢では、露頭掘りから坑道掘りへの転換期にあたるひ押し掘りと呼ばれる採掘跡が見つかったことは、銀山発見とともに開発の始まる百枚平とほぼ同時期に鶴子銀山全域での採掘が始まったことを示している〔**図版 2・3**〕。

露頭掘り跡の所属時期については、相川金銀山の「道遊の割戸」や「父の割戸」などに比べ、規模が小さいためか、江戸期の絵図中に露頭掘り跡が描かれる事例は見られない。このため、時期の特定にはなお確証は得られないが、島根県の石見銀山などの他の鉱山遺跡の事例から中世のものが多いと推測される［島根県教育委員会ほか 1999］。

16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて、全盛期を迎える鶴子銀山は、その後次第に衰微していくが、その過程の中で、慶長期の爆発的な間歩の増加を境に次第に間歩数が減少し、江戸時代前期以降、かつての古間歩の再開発や水貫（排水坑道）としての再利用したことが文献史料にあらわれる〔**付表**〕。間歩の稼行時期については、関連する絵図等が少なく、史料に掲載されない時期もあって特定することは難しいが、鉱山衰退期に向かう過程の中で、鶴子沢の鶴子本口間歩・百枚間歩、屏風沢の弥十郎間歩といった大規模開発が可能な鉱脈の下部に立地する間歩へと集約されていく形となり、近代以降には、新たに開削された鶴子竪坑を除くと本口間歩・百枚間歩・弥十郎間歩のみが近代化されており、史料と現地で確認される遺構が一致している。

分布調査によって間歩名の特定できた間歩は多くない。文献史料に見られる間歩名の中で、位置が特定できなかったものの多くは、現地で遺構が確認できない、絵図と実際の遺構の位置関係が重ならない、絵図で想定される位置に複数の間歩跡が確認され特定が困難であるといった理由によるもので、相川金銀山のように近世から近代に作成された絵図や図面類の数量が少ないことも起因していると考えられる。

2　鶴子銀山と周辺集落の変遷

鶴子銀山における鉱石採掘の歴史と周辺集落とのかかわりは深く、閉山に至るまでの間、大小の差はあれどもその関係は続いていた。銀山採掘域の変遷と周辺村落の形成の歴史を段階的にみると、①銀山発見と初期開発期、②上杉氏による鉱山経営、③慶長年間における徳川幕府の鉱山経営、④ 17 世紀の鉱山衰退期、⑤ 18 世紀の銅山としての再興、⑥ 19 世紀における鉱山仕法改革と経営、⑦明治時代から昭和 21 年に閉山するまでの近代化と操業の時期とすることができる[1)]。

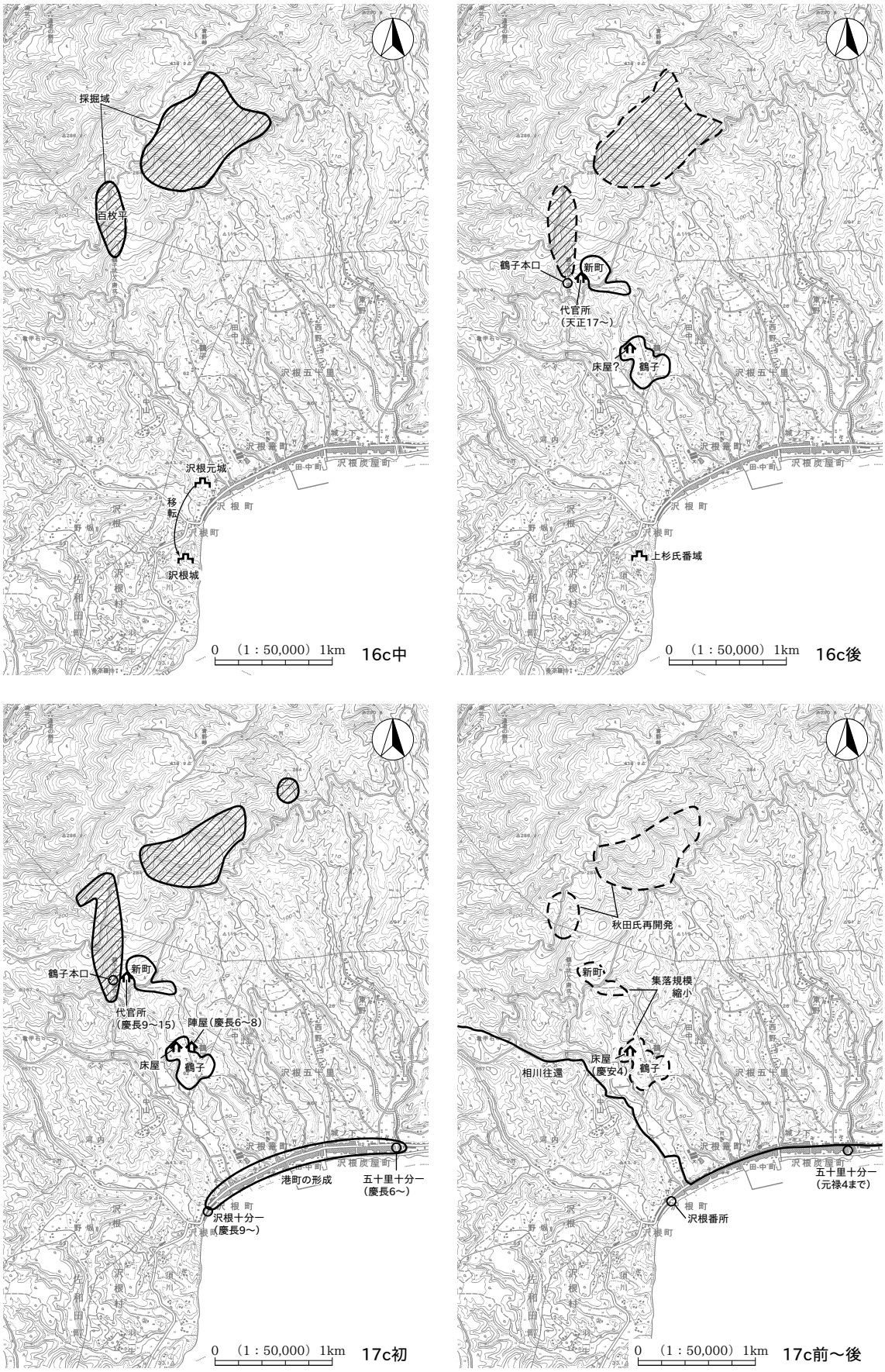
以下、銀山の開発と周辺集落の変遷を主として述べる。

A　銀山の発見と初期開発〔第 11 図〕

1）銀山開発と経営形態

天文 11 年（1542）の発見から、文禄 4 年（1594）に石見国の山師らによって鶴子（本口）間歩が開坑するまでの史料は、『佐渡古実略記』や『佐渡年代記』における簡単な記述のみにとどまり〔**史料一・二**〕、鉱山経営や集落の実態を言及することは難しい。『佐渡志』では、天文末～弘治年間（16 世紀半ば）、経営に行き詰まっ

1）　17・18・19 世紀は、銀山衰退とともに記録が大幅に減少するため。大まかにとりまとめた。



第 11 図　鉱山と鉱山集落の変遷(1)

〔「相川」「河原田」[国土地理院2007]1:25,000を改変〕

た発見者の茂右衛門は、越後国の大名上杉謙信に鉱山開発の協力を仰ぎ、上田銀山より技術者が派遣されたという記述がみられる〔**史料三**〕。この記述どおりであれば、越後国から採掘技術の流入があったと考えられるが、確証は得られていない[1)]。

開発初期の鉱石品位がどの程度のものであったのかを示す資料はないものの、採掘に伴い地元領主の沢根本間氏に一ヵ月銀百枚の運上を指し出していることから〔**史料二**〕、酸化富鉱帯となった露頭鉱脈を中心に露頭掘りによる採掘が行われたと推測される。外山茂右衛門による開発が行なわれたとされる百枚平周辺には、№23をはじめとする大型の露頭掘り跡が密集しており、大規模な採掘が行われていたことがわかる〔**図版6**〕。一方で、百枚平以外では、小規模な露頭掘りが多く見られることから、百枚平の採掘を端緒として、露頭鉱脈を求めて周辺部へと採掘域が拡大していったことが想定される。

2）集落の形成

史料類の不足から、銀山発見期における集落形成がどのようなものかを推測することは難しい。

慶長6年(1601)における相川での鉱山労働者の住宅事情をみると、山の雑木を切り、これをもって掘立の「山小屋」と呼ばれる住居を建てて、鉱山が不況になるとともに住居を壊して移動を繰り返したという［佐渡市教育委員会 2008b］。鶴子銀山の開発初期における鉱山集落も、同様なケースで稼ぎ場に近い場所に山小屋が建てられた小規模な集落が形成されたと考えられるが、現段階における集落の位置は不明である。

3）銀山～港町間の施設整備

沢根地区沿岸には、沢根本間氏の居城に伴う城下町が形成され［佐和田町史編さん委員会 1991］、沢根七場(賈場)に港町が形成されていた。銀山発見後、外山茂右衛門が地元領主から開発権を得たのち、銀山経営のために銀山と沢根城(沢根元城)を結ぶ区間に道路(百枚道)が整備されたとされる［小菅 1990］。この道は、本来、沢根七場の港と河岸段丘上の沢根本間氏の居城を結ぶ道であったものが、銀山の発見後に、銀山へ延長される形で成立したと考えられる。

B　戦国期末における上杉氏の銀山経営〔第11図〕

1）銀山開発と経営形態

天正17年(1589)、佐渡の領有化に成功した上杉景勝は、島内各所に在番衆を配置し、鶴子銀山は山口右京を目代(代官)として任命し、外山に陣屋を置いて鉱山経営にあたらせたという〔**史料一・二**〕。この時期、佐渡で産出する金が豊臣秀吉に送られ、伏見城の蔵納目録に佐渡で産出した金の上納額が書かれている。

上杉領内の金銀山経営の奉行となったのが直江兼続であった〔**史料一八三**〕。佐渡における金銀山経営の詳細な史料は無いものの、佐渡や領国の庄内などでの断片的な史料をもとに、当時の上杉氏による鉱山経営をみると、請負による金銀山開発や鉱山内での物品の売買を禁止し、命令に不服従な堀手(鉱夫)がいたら成敗する等の、直営鉱山として厳しい取り締まりが行われた一方で、実力のある者を案内人に取り立てるように述べており、領内の銀山開発に力を入れていたことがわかる〔**史料一八五・一八六**〕。

文禄4年(1594)、石見国の山師らによって鶴子本口間歩の開発が開始する〔**史料一・二・四・五**〕。「本口」とは横相による坑道の入口を指す言葉であり、それまでの砂金採取や露頭掘りによる開発とは異なる採掘

1）『新潟県南魚沼群志』によれば上杉景勝の時代のこととされている［南魚沼郡教育会編 1998］。

技術である。坑道掘りは鉱脈を目指して地中を採掘する技術として、露頭鉱脈を掘削していく露頭掘りやひ押し掘りに比べて、鉱脈の走行方向や坑内の採掘方向を見定めるため、高度な測量技術を必要とするが、複数の鉱脈の採掘を可能とし、同じ鉱脈を別の方向から採掘することができる。鉱石の産出量を飛躍的に増大させるもので、ほぼ同時期に伝わったとされる銀の製錬技法「灰吹法」とともに銀生産量を増大させたと考えられる。

2）鉱山集落の形成

鶴子銀山に伴う鉱山集落は、周辺部において、現在鶴子集落がある場所にあった鶴子田中遺跡や上杉氏の代官所跡地と推測される鶴子鉱山代官屋敷跡に隣接する鶴子荒町遺跡の存在が確認されている。

鶴子田中遺跡は、現在、宅地や耕作地となっており、鉱山集落の痕跡は字名等から推測するしかないが、銀山で使用された鉱山臼や扣石が散見され、鉱山集落であったことがわかる。一方で、鶴子荒町遺跡は、南側斜面を中心に数 10 基のテラスが存在していることが判明している。これらの遺跡では、平成 3 ～ 6 年頃に実施された分布調査や広域林道国仲北線の道路工事に伴う斜面の掘削によって、16 世紀末から 17 世紀初頭を中心とする陶磁器が採集されている[佐藤 1994]。

また、天正年間から慶長年間にかけて、鶴子や周辺部に開基・建立された寺院が多く、多数の人々の流入に合わせて寺院が移転したと考えられる〔**第 3 表**〕。この時期の鶴子及び田中村の寺院を見ると、沢根村鶴子の専得寺〈天正 7 年(1579)または同 18 年(1590)開基〉〔**史料三〇一・三〇二**〕、田中村鶴子四十物町の妙円寺〈慶長元年(1596)建立〉〔**史料二九四・二九五**〕、照光寺〈慶長元年(1596)移転〉〔**史料三〇〇**〕、田中村鶴子の円福寺〈慶長 2 年(1597)開基〉〔**史料二九一**〕、沢根村鶴子の称念寺〈慶長 3 年(1598)開基〉〔**史料三〇六**〕、行蔵院〈文禄～慶長期移転〉〔**史料三一一**〕などがある。

採集された遺物が表面採集によるものであり、遺跡の明確な開始時期を述べることは難しいが、上杉氏による鉱山開発や新たな鉱山技術導入によるシルバーラッシュ、慶長期における加賀藩などの日本海沿岸の諸大名が佐渡への渡海禁止令を出している状況、寺院の開基・移転状況から推測して、この時期が代官所跡をはじめ鉱山集落が本格的に形成された時期と推測される。

3）銀山～港町間の施設整備

この時期、銀山経営の拠点となったのが、鶴子間歩の東側 100 ｍに立地する鶴子外山の陣屋である〔**史料一九七**〕[1)]。現在、代官屋敷という地名が残る鶴子鉱山代官屋敷跡が、この陣屋が置かれた場所として考えられるが、当時の代官所の組織体系や構造物は史料が無いため不明である。平成 3 年(1991)に実施された分布調査では、16 世紀末～ 17 世紀初頭を中心とする陶磁器が採集されている[佐藤 1994]。この銀山に隣接する代官所から、現在の鶴子集落(鶴子田中遺跡)を通り、五十里港へ出る「鶴子道」がこの時期の主要な銀山道と推測される。

C　慶長期（江戸幕府天領以降）における銀山と経営〔第 11 図〕

1）銀山開発と経営

慶長期における鶴子銀山は、田中清六・河村彦左衛門と大久保長安によって大規模な開発が行われた時期にあたる。

慶長 5 年(1600)、徳川家康の命を受けた田中清六が佐渡接収のため入国すると、上杉氏の旧臣であっ

た河村彦左衛門と共に鉱山経営にあたることとなり〔**史料一八七**〕、田中・河村は鶴子肴町(四十物町)に役所(陣屋)を置いた〔**史料一九七**〕。

田中が採用した経営は「運上入札制」[2]とよばれるもので、この経営形態は、資金をもった者であれば誰でも鉱山経営を行えるものであった〔**史料一八八・一八九**〕。これを契機に多くの間歩が開坑し、諸国から大量の人が佐渡へ渡った。しかし、制度の特性上、短期間の開発であったため、坑内の排水施設の導入といった長期間に渡る経営には不向きであったことから、水没等により放棄される鉱区が増え、鉱山は急速に衰退の兆しを見せた。

慶長７年(1602)、年貢増を江戸へ愁訴する事件に連座して田中清六らが失脚すると、代わって佐渡代官(初代奉行)となったのが大久保長安であった。慶長８年(1603)、長安の佐渡入国に先立ち、事前に入国していた宗岡佐渡が鶴子外山の陣屋を相川に移転〔**史料一九六・一九八・一九九**〕、保科喜右衛門が鶴子銀山を担当したとある〔**史料二〇〇**〕。

長安によって導入された「御直山制」[3]は、直轄経営による公費の注入と、それによる確実な税収を見込んだものであり〔**史料一九〇**〕、銀山は再び活況を呈した。「川上家文書」は、慶長期における鉱山の鍛冶炭渡帳や蝋燭受渡帳の断片が多く含まれているが、この頃、鶴子銀山の間歩名も多く見られ、盛んに開発が行われていた様子がわかる。史料中の山師には、銀山巧者として大久保長安によって呼び寄せられた「一の山仕」であった田中助兵衛(のち宗徳)や関原主兵衛(のち宗清)、相川金銀山の割間歩などの開発に携った味方孫太夫など、相川金銀山の開発を担っていた山師も多くみられ〔**史料一一～一三**〕、豊富な資金を持った有力山師による経営が行われた時期とみることができる。しかし、慶長期後半にはすでに湧水によって採掘に支障が出ており〔**史料二〇**〕、人名を冠した間歩名が多く登場しながら、元和年間以降にはその数が激減していることからも、短期間での稼行を終えた間歩が多かったことがわかる。

2）鉱山集落と五十里港の発展

鶴子鉱山集落は、慶長６年(1601)に陣屋が置かれた場所で、同８年に相川への移転が決まったことで、政庁機能の多くは相川へ移転している。銀山の管理経営のため、慶長９年(1604)から同15年(1610)まで、保科喜右衛門がかつての上杉氏の代官屋敷があった地に配置された[小菅 1993]。また、相川市街地の整備が進むと、鶴子四十物町、大工町の住人が相川へ移転し、相川四十物町、大工町を形成するなど〔**史料二五三・二五四**〕、相川への人口流出が始まっている。

慶長年間初期には、鶴子銀山の物資集積地として、真野湾沿岸で、沢根村から沢根町が分離し〔**史料二五五**〕、慶長６年(1601)、五十里十分一役所が設置された〔**史料二〇七**〕。また、五十里十分一で受け取られた物資が相川金銀山の間歩へ運ばれていることや、他国からの炭を集積する問屋が集まって、五十里炭屋町が形成され、同港を中心とする市街地が形成されたと考えられる。

また、寺院の中では、願龍寺〈慶長７年(1602)移転〉〔**史料二九六**〕、鶴子十八人場の本光寺〈慶長８年(1603)

1)　史料上では陣屋となっているが、厳密にいえば代官所に類する施設と考えられている。

2)　運上入札制は、田中清六が導入した鉱山経営法で、試掘者（草見立人）が試掘箇所の目当てを付けて、その場所を陣屋に届出て、鉱脈に向かって穴を穿る。鉱脈にぶつかると代官に注進する。そして山奉行人立会の上、いままでの作業にかかった日数･経費を計算し、その経費に見合う掘り取りが許された（一定の日数が与えられ、その期間はどれだけ掘ってもよい）。その期間が終わると一定期間日数を限って、運上銀を競争入札させ、高い者に落札した［田中 1984］。

3)　御直山制は、大久保長安が導入した鉱山経営法で、鑿や鍛冶炭、蝋燭を公給とし、その代金は掘り出された鉱石を荷分けして長安の取分で相殺した。諸物資の公給と引き換えに、各間歩から出た鉱石は荷分けのために詳細が控えられ、間歩ごとの経費と鉱石量をもとに荷分け率が決められ、山師と奉行所の取分に分けられた。これにより山師の経営は安定し、生産された金銀は生産費を除いて奉行所が全余剰を吸い上げる仕組みを確立した［田中 1984］。

開基〉〔**史料三〇四**〕など沢根の町場や相川へ移転していく寺院が増加した時代ということができる。

3）沢根～相川金銀山間への施設整備

相川金銀山の発見と繁栄は、鶴子銀山へも大きな影響を与えた。この時期における道路整備の記録や、道路法線を示す絵図は無いが、『佐渡古実略記』慶長９年(1604)の項に、「郷中より相川迄の往還は鶴子沢より山越えにてありしと也今も其跡残れり」とあり〔**史料二五四**〕、一般的な幹線道路はこのような山越えの道であったと想定される。

「川上家文書」の鍛冶炭や蝋燭が五十里港で陸揚げされ、相川金銀山へ運ばれた事例や、慶長６年(1601)、相川側の出入口にあたる上相川に番所が設けられたことから、当所、沢根～鶴子銀山間を結ぶ山越えのルートが相川へ延長され、沢根～相川金銀山間のルートへと変遷していったとすることができる。この頃までに、真野湾岸から河岸段丘上を通り、鶴子銀山へ向う銀山ルートは、途中集約されて相川へ向う幹線道路として再整備がされたのであろう。

代表的な山越えのルートには、戦国期からのルートと推測される沢根質場から鶴子銀山(鶴子沢)へ向う百枚道のほか、沢根籠町から鶴子集落を抜けて鶴子銀山(鶴子沢)へ至る「鶴子道」、沢根五十里から西野集落を抜けて鶴子銀山(屏風沢)へ至る「西五十里道」、いずれも笠取峠付近で合流し、上相川へ向うことが確認されている。五十里炭屋町から東野へあがり青野峠を越えて上相川へ至る「東五十里道」がある。間歩の開発を契機に道が整備されたと考えられる。

D　元和期以降の銀山の衰退〔第 11 図〕

1）銀山開発と経営

慶長期に 20 ヵ所以上あった御直山は、佐渡奉行所の経営方法の変更により、元和期の鎮目奉行治世時に２ヵ所(百枚間歩・仕出喜間歩)、寛永期の竹村奉行治世時に３ヵ所(下戸間歩・重一郎間歩・天道間歩)と大幅に減少した〔**史料二六・二七**〕[1)]。慶安年間(1648 ～ 1652)以降、西五十里村に拠点を置いた山師秋田権右衛門は、屏風沢・仕出喜沢・松ヶ沢を中心とする銀山東部の開発を行い〔**史料一五九**〕、巨万の富を得たという〔**史料二〇五**〕。秋田氏による銀山の再興には、西五十里村をはじめとする周辺集落の有力者も協力したことが知られている[佐和田町史編さん委員会 1991]。

2）鉱山集落の衰退

元和８年(1622)の諸役覚を見ると、五十里十分一、沢根に次いで鶴子小役の記載が見られる〔**史料二〇八**〕。沢根の諸役銀に比べ、五十里、鶴子のものは極めて少ないことがわかる。また、慶安４年(1651)の鶴子鉱山集落には、３つの町(上大工町･中大工町･下大工町)があり、勝場(ねこ４筋、ゆり板５枚、石磨２柄)、小床屋１軒、濁酒屋１軒があり〔**史料二五九**〕、鉱山集落としての形をかろうじて保っていることがわかる。同時期に、秋田権右衛門によって、屏風沢・仕出喜沢を中心に銀山が再興された時期にあたり、労働力を供給するために、依然として集落が継続していたと考えられる。

明暦４年(1658)以降、沢根町の名が出ながら鶴子の名は無く、『佐渡国誌』中で指摘されるように集落としての形態をなしえない状況に置かれていた可能性がある〔**史料二六〇**〕。また、延宝８年(1680)には、四十物町牛ヶ首にあった役屋敷[2)]が売買されており〔**史料二六二**〕、集落の衰退を間接的にうかがい知ることができる。一方、沢根の港町でも、元禄４年(1691)、五十里十分一番所が廃止されており〔**史料**

二〇六〕、五十里港が衰退した過程がわかる。

享保２年(1717)、銀山内の稼場として名がみえるのは鶴子間歩のみとなり、同間歩も本樋64艘を廃止し、市兵衛敷のみ採掘が行われているという状況であった〔**史料四九**〕。享保４年(1719)には集落規模は、小屋17軒60人という規模にまで減少しており、不況下の様子がわかる〔**史料二六六**〕。また、この時期の史料には勝場や床屋の記述がみられなくなっていることから、両施設ともこの頃には廃止され、鉱石は相川まで運搬されて精錬されていたと考えられる。

3）相川往還の整備

寛永５年(1628)、山越えの急峻なルートを避けるため、新たな幹線道路が整備された。これが相川札の辻から小木を結ぶ「相川往還」で、以後、代表的な幹線道路として明治期の新道開通まで利用された。相川往還の整備により、沢根町から中山峠を通るルートができたことで、幹線道路としての山越え道の重要性が薄れ、鶴子や上相川といった山間の鉱山集落は、衰退を招く一因になったと考えられる。

E　18世紀における銀山〔第12図〕

1）銀山開発と経営

江戸時代後期における鶴子銀山の開発は激減する。

この時期における主要な間歩は、「百枚間歩」・「天道間歩」・「馳割間歩」・「鶴子間歩」・「仕出喜間歩」で、数ヶ月～数年単位で再興と休山を繰り返す状態となる〔**史料四九～・付表**〕。

享保18年(1732)、「鶴子間歩」は長期に渡る開発を行うため、代官屋敷下流のしなみ沢にあった古敷を取明けて水貫を開鑿し、大規模な開発を計画していたが〔**史料五七～六二**〕、結果として排水に難があったため、享保20年(1735)、御直山を止め〔**史料六三**〕、結果的に寛保３年(1743)に休山となっている〔**史料七一**〕。

宝暦13年(1763) ５月、鶴子銀山の百枚間歩が銅山として再興した〔**史料七九**〕。

また、18世紀は不況であった鉱山採掘に変わり、河川や海浜部に堆積した鉱石を回収するため、川流しや浜流しが度々行われ、明和３～４年(1770～1771)〔**史料八〇・八三**〕、安永４年(1775)〔**史料八九**〕の３回にわたり実施され、奉行が見分に出向くこともあった。採掘を伴う鉱山開発が衰微したことで、河川に堆積した鉱石の処理に主体が置かれた時期があった。

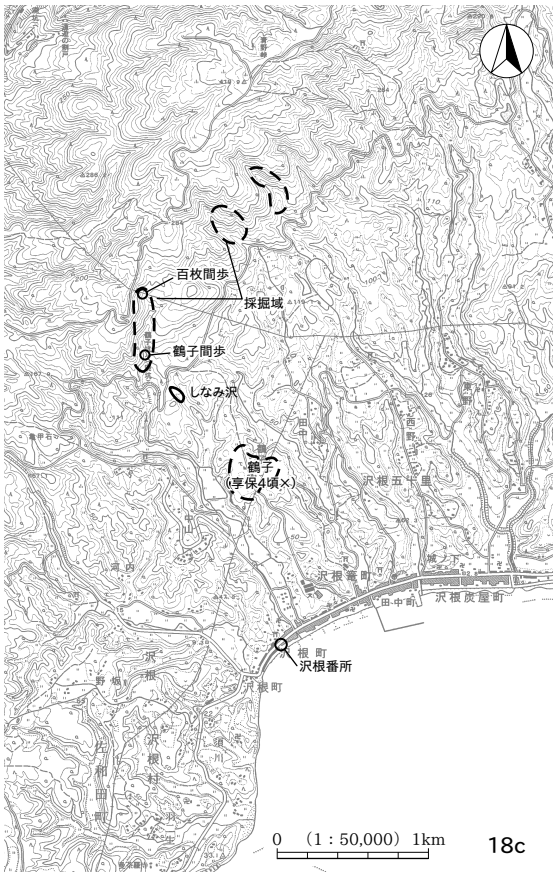
2）鉱山集落の消滅と港町沢根の発展

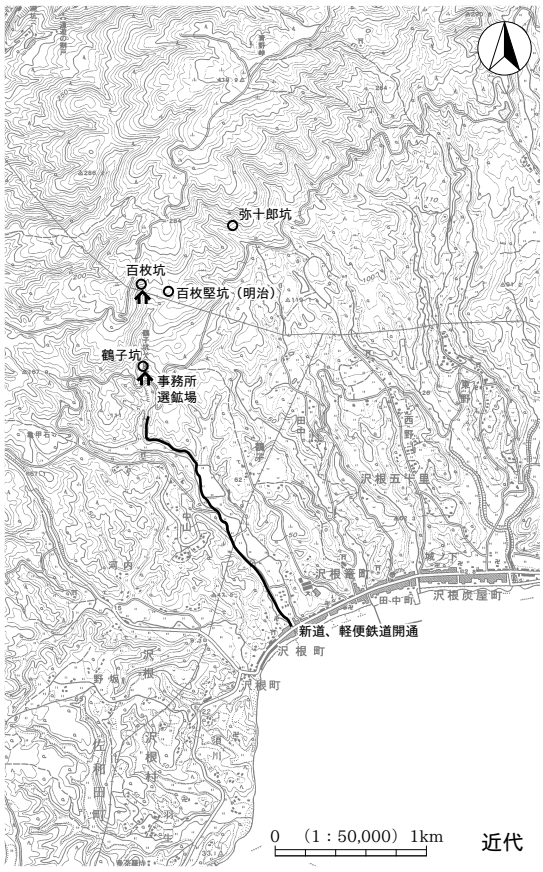
鶴子鉱山集落の記録は、享保４年(1719)の記述を最後に史料からみえなくなる〔**史料二六六**〕。また、宝暦８年(1758)には、鶴子銀山から山越えで相川へ向かう西五十里道の相川側入口に設けられた上相川番所が廃止され、山越えルートの往来が激減していたことがわかる。このような背景とともに、これ以降、鉱山集落の記載も無くなり、この頃、鉱山集落の廃絶があったものと考えられる。「銀山岡絵図」〔**第17図**〕の図中の脚注にはかつて鶴子新町鉱山集落があったことが書かれている。

一方で、銀山の港として成立した沢根町では、安永年間(1772～1781)に、廻船問屋が急増し、鉱山物資

1）　この頃、坑内は深敷となり排水処理の問題があったため、採算の見合う間歩を山師の自分山とし、将来性の見込まれる間歩は御直山とした［田中1984］。

2）　役屋敷の位置については、明確ではないが、現在牛ヶ首の地名が残る場所には、鶴子荒町遺跡の北東端にあたる小高い丘陵で、頂上部や裾部にはテラスとみられる平坦面が残されている。





第 12 図　鉱山と鉱山集落の変遷(2)
〔「相川」「河原田」[国土地理院2007]1:25,000を改変〕

の供給港から脱却し、廻船業に主体を置く、港町へ変貌していった[佐和田町史編さん委員会 1991]。

F　19 世紀における銀山〔第 12 図〕

1）銀山開発と経営

佐渡奉行所は、衰退する鉱山の建て直しを図るため、鉱山の仕法改革を実施した〔**史料一九五**〕。その一つが御仕入稼ぎと呼ばれるもので、鶴子銀山では「鶴子間歩」「百枚間歩」に変わり、「弥十郎間歩」の再開発が本格化する。特に天保年間より文久 3 年(1863)に休止するまでの間、御仕入稼ぎが行われた鶴子銀山唯一の間歩であり、同時期の史料類も多く残されている〔**史料一二三〜一二八**〕。

この頃の鶴子銀山の開発域は、ごく限られた範囲にとどまり、文化 11 年(1814)、大滝間歩で個人による試し稼ぎが行われている〔**史料一〇九**〕。

2）鉱山道としての西五十里道

江戸時代後期に弥十郎間歩が御直山となったことで、相川四町目弾誓寺付近や南沢町から西五十里道に合流し、弥十郎間歩へ向かう本道が主要な鉱山道であり、川路奉行や吉田松陰らがこの道を通って弥十郎間歩への視察に向ったこと日記に記されている〔**史料一二九・一四一**〕。国中平野と相川を結ぶ幹線道路は、相川往還に移ってはいたが、依然として山越えのルートは存在していた。

G　鉱山の近代化から閉山まで〔第 12 図〕

1）銀山開発と経営

幕末にガウル(ガワー)によって計画された鶴子間歩の再興は、明治維新とともに執行されないまま終わった〔**史料一六一**〕。変って明治 2 年(1869)から開発が行われたのが百枚間歩と弥喜知間歩であったが〔**史料一六二**〕、数年で開発は休止となった。明治 15 年(1882)に百枚間歩が再興されている〔**史料一六五**〕。明治 18 年以降は、鉱山局長となった大島高任や渡辺渡らによって佐渡鉱山の近代化が推し進められた時期にあたり、竪坑の開鑿や百枚坑・鶴子坑で再開発が行われた〔**史料一六六～一七八**〕。

明治 26 年(1893)、百枚坑の坑口周辺に役局が置かれ、鶴子銀山における開発拠点となった〔**史料一七三・一七八**〕。現在でも、百枚坑下流部には比較的規模の大きいテラスがみられるため、ここが明治期に役局が置かれた場所と推測される。鶴子坑の開発に伴い、沢根から鶴子坑を結ぶルートに軽便鉄道が敷設され〔**史料一七六**〕、鉱山用の新道が開通した〔**史料二七二**〕。

鉱山の経営は、明治２年(1869)の官営化以後、相川金銀山と同じ鉱区となったことで、御料局所管を経て、明治 29 年(1896)に三菱合資会社へ払下げとなった〔**史料一七九**〕。三菱合資会社以降、三菱の系列会社による採掘が続けられ、明治時代末期から昭和期にかけては、鶴子坑に鉱山事務所等の関連施設が設置され、閉山までの間、鉱山開発の拠点として機能した[1)]。また軽便鉄道があった道路は、昭和期に入ると、この新道を利用して、鉱石をトラックで運搬していたことが地域住民への聞取り調査で判明している。

2）周辺集落の銀山への関与

明治～昭和にかけて、鶴子銀山への労働力供給源として、依然として沢根地区が重要な位置にあった。鶴子坑再興に伴う鉱山開発工事の作業員〔**史料一六七**〕、沢根港から相川への石炭等の物資運搬に臨時的に雇用されるなど〔**史料二七一**〕、鉱山経営にあたり、地域住民からの雇用を第一としていたことがわかる。

戦時資材として銅の需要が高まったことで、戦時中も採掘が行われていた鶴子銀山は、鉱量の枯渇に伴い、昭和 21 年(1946)に閉山を迎えた。閉山後、鉱山関連施設の多くが撤去され、鉱区が設定されていた土地は払い下げとなった。坑口の多くは埋め戻されたが、なかには、大滝間歩上流に位置する間歩跡(№662)のように、地元業者により海鼠等の保存のため再利用された例もある。

1)　故畑福新太郎氏への聞取り調査によって、大正～昭和期にかけての建物配置状況を知ることができた。畑福氏の話では、毎日鶴子の鉱山事務所から相川の鉱山本部まで作業日誌を運ぶ人がいたという。現在、鉱山事務所等が置かれた鶴子坑の下流部は、一部公園として整備がされている。

3　今後の課題

今回の調査によって､鶴子銀山内における採掘地などの遺構の分布状況や遺跡の範囲を確定したうえで、資料をもとにした各間歩の変遷や開発期間、周辺村落やインフラ整備の変遷等について、ある程度再構築することができた。しかし、絵図や史料に記載されるすべての間歩の位置特定には至っていない。間歩名の特定される遺構が増加すれば、史料との照合による稼行時期の推定が可能となり、採掘域の詳細な変遷をたどることができるため、更なる史料調査と関連遺跡の発掘調査によって補完、修正を加える必要性を感じている。また、佐渡島内における鉱山遺跡は、依然として未調査のものが多く、個々の実態や全体像は不明である。

現在、鶴子銀山跡や代官所跡、鉱山集落跡といった関連遺跡の時期の明確化という問題のほか、従来、鶴子銀山の開発初期に、石見銀山からの灰吹法導入があったとされているが、佐渡で灰吹に係る明確な遺構は未だ確認されていない。また、テラスを伴う間歩における鉱山関連施設(四ッ留番所や鍛冶小屋・建場小屋等)の有無や内容、露頭掘り跡の採掘状況といった鉱山経営や採掘・製錬技術の実態解明も大きな課題として残されている。

国内の鉱山関連遺跡の総合的な調査は、石見銀山や長登銅山などで行われているが、その事例は限られているのが現状である。わが国最大規模の貴金属鉱山である佐渡金銀山の調査を進め、実態を解明することは、中・近世の鉱山技術の伝播や変遷を知る上で不可欠と考えている。

平成 22 年度には、鶴子鉱山代官屋敷跡で初めての確認調査を予定している。今後も継続的に各種調査を実施し、佐渡で最初に本格的な開発が行われた鶴子銀山の実態を明らかにするとともに、佐渡金銀山の全体像に迫りたい。

第５表　鉱山用語一覧表

用　語	よみがな	解　　説
請山	うけやま	自分山または請負山といい、請主が責任を持ち、産鉱を一定の割合で運上 (税) として納めた。一切を自己の経費と責任で稼行した。⇔直山
岡	おか	敷に対して坑外を岡と呼ぶ。⇔敷
釜の口	かまのくち	坑口。坑木で柱を左右に立て、留木で押さえた形が竈に似ているところから名付けられた。
切山	きりやま	間切に同じだが、規模が小さく、間数・方向も関係なく必要に応じて掘削した。
草見立	くさみたて	新しい鉱山・間歩を選定すること。草木の様子や山相などを見て決めたことから出た名と思われる。
鏈	くさり	金銀銅などを含む鉱石。低品位のものは薄鏈、金含有が豊富なものは筋金、銀は白銀鏈、銅は銅鏈、鉛はギロン鏈という。
けだへ・気絶え	けだえ	敷内の風の廻りが悪く、石煙、油煙が深くて採掘ができないことをいう。
煙貫	けむりぬき	通気のために掘る坑道で、通常は上方に抜けるように掘られる。鉱脈を利用して掘られることもあった。
間切	けんぎり	試掘で鉱脈を探る坑道。間数を定めて請負させているところから出た名。
敷（鋪）	しき	坑内の稼ぎ場をいう。または坑内の総称。坑の内外を総称して敷岡といった。⇔岡
直山	じきやま	大久保長安によって導入された制度。御直山といい、幕府直営の間歩。用具・器材などの厳しい規制があった。⇔請山
墨引	すみびき	墨を引く、すなわち図を描くこと。または、その絵図。
ズリ	ずり	金銀の鉱石を採取する際に出る鉱石にならない岩石や不要な鉱物のこと。
製錬	せいれん	鉱石から金銀を抽出すること。
精錬	せいれん	製錬で得た金銀から不純物を取り除くこと。
大工	だいく	たがねと鎚で鉱石を採掘する坑夫。金穿大工。家大工は番匠と呼んだ。
立合	たてあい	鉱脈のこと。相川金銀山では石英脈に金銀鉱が含まれており、これを白立合といった。土中にある砂金はネバ立合と呼ぶ。
鉉	つる	鉱脈または鉱石のことで、これに切り当ることを鉉につくといった。
床屋	とこや	精錬をする設備をもった場所。床屋はフイゴの床から付けられた名称という。
灰吹法	はいぶきほう	鉛を使用した製錬法で、日本へは大陸から伝えられた。佐渡では、鶴子銀山で用いられたのが最初といわれる。
馳割	はせわり	鏈があっても鉱脈が長く続かないもの。
ひ押し掘り	ひおしぼり	鉱脈を追いかけて地中を掘り進んで行く採掘方法。後に水平方向に掘り進んでいく「横相」に発展した。露頭掘りから坑道掘りへ移る過渡期の技術。
一十ヲ日	ひととおか	穿り取り計算の単位。３の日より２の日までを一十ヲ日といった（3 日～ 12 日など）。
振矩師	ふりがねし	測量技師。測量図面を振矩図といった。
間歩	まぶ	戦国時代から江戸時代における鉱山の坑道をさす。発見者や稼ぎ主の名を付けて呼ぶ習慣があった。
水貫	みずぬき	坑内にたまった水を抜くために掘られた坑道。
山師	やまし	古くは山先、山仕、山主ともいう。一山・一坑の持主として鉱山技術者などの関係者を従えていた。後には間歩差配人となった。
横相（坑道掘り）	よこあい（こうどうぼり）	鉱石の穿り取り現場から岡に向って穿られた水平坑道。しばしば水貫と兼用された。
四つ留	よつどめ	釜の口と同義語で、間歩の入口を指す。間歩の入口に置かれた番所を「四つ留番所」と呼び、鉱石の抜売りを監視した。
廊下	ろうか	釜の口から立合までの平らな坑道をいう。
露頭掘り	ろとうぼり	鉱脈が露出した部分（露頭）に沿って、鉱脈だけを掘り採る採掘方法。坑道掘り以前の技術。

［田中 1984］・［佐渡市教育委員会 2009a］に加筆

別表　鶴子銀山跡分布調査遺構観察表

№.	種別	立地	長さ・高さ（m）	幅（m）	深さ（m）	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
1	間歩跡	鶴子沢・右岸	2.00	2.00	—	南	坑道・水平坑	方形	鶴子間歩・本口間歩・惣水貫他鶴子坑（近代～）	文禄 11 ～昭和 21	坑内留木あり	有	223864.480 -20382.376	現在は埋め戻される
2	試掘跡	鶴子沢・左岸左岸	—	—	—	西	露頭掘り	不定形		江戸期			223867.338 -20363.667	露出した岩盤を掘り込む。下部土砂により埋没。
3	間歩跡	鶴子沢・左岸	0.45	0.80	—	南西	坑道	方円形		江戸期		有	223920.513 -20364.465	水害により遺構前面が浸食。
4	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸	1.50	1.50	0.50	—	露頭掘り	円形		江戸期			223927.420 -20381.637	
5	間歩跡	鶴子沢・左岸	1.10	2.20	—	南西	坑道・水平坑	不明		江戸期	坑口前面にテラス附属	有	223994.628 -20392.428	対岸に№. 6 あり
6	間歩跡	鶴子沢・右岸	—	—	—	東	坑道・水平坑	不明		江戸期	坑口前面にテラス附属	有	223997.605 -20409.281	坑口わずかに開口
7	間歩跡	鶴子沢・左岸	—	—	—	西	坑道	不明		江戸期		有	224031.588 -20401.019	坑口埋没、昭和 20 年代の図面より確認
8	間歩跡	鶴子沢・右岸	—	—	—	東	坑道？	不明		江戸期	坑口前面にテラス附属	多量有	224152.521 -20375.791	坑口埋没
9	間歩跡	鶴子沢・左岸	—	—	—	南東	坑道？	不明		江戸期		多量有	224237.356 -20341.071	坑口埋没
10	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	2.00	1.00	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224247.054 -20348.441	№. 11 と隣接
11	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	2.00	1.00	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224253.210 -20350.716	№. 10 と隣接
12	間歩跡	鶴子沢・左岸	2.00	2.00	—	南	坑道・斜坑？	不明		江戸期		少量有	224273.890 -20337.460	竪坑
13	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	東	—	不明		戦国～江戸初？	坑口前面を溝状に掘り込む	多量有	224060.410 -20418.528	坑口埋没
14	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南西	—	不明		戦国～江戸初？	坑口前面を溝状に掘り込む	多量有	224039.197 -20430.480	坑口埋没
15	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	不明	—	不明		戦国～江戸初？	坑口前面に小テラス附属		224304.480 -20402.912	坑口埋没
16	間歩跡	鶴子沢・右岸	—	—	—	南	坑道	不明	百枚間歩、百枚坑	慶長～昭和 21	東側斜面に陥没により開口した坑道あり。坑口より下流部に広いテラスあり	有	224372.992 -20380.487	坑口埋没
17	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸斜面	1.50	1.00	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224367.083 -20370.342	
18	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	6.00	5.00	1.30	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224380.753 -20346.928	
19	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	—	不明		江戸期	坑口前面を溝状に掘込む		224404.899 -20356.888	坑口埋没
20	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸斜面	4.00	2.00	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224431.618 -20336.255	
21	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道	不明		江戸期	坑口前面を溝状に掘込む		224452.287 -20380.378	坑口わずかに開口
22	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.50	3.50	2.50	—	円形	円形		戦国～江戸初？		有	224442.589 -20387.392	
23	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	16.00	7.00	4.20	西 - 東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		多量有	224479.814 -20366.484	最大の露頭掘り跡
24	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	6.00	5.00	3.00	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		多量有	224505.732 -20365.308	
25	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	5.00	5.00	1.80	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？		有	224510.827 -20381.836	
26	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	4.00	3.00	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224524.659 -20367.951	
27	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道？	不明		江戸期	坑口前面に 4 × 1.6 m の溝状の掘込み	有	224532.208 -20381.689	坑口埋没
28	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸斜面	11.00	6.00	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	南側にテラス	有	224554.177 -20341.723	
29	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸斜面	5.00	4.00	0.90	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224541.644 -20335.125	
30	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸斜面	5.00	4.00	0.90	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？	南西に向かって溝状に掘られる	有	224533.588 -20326.797	

№.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅（m）	深さ（m）	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
31	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸尾根斜面	5.80	5.80	1.00	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224551.237 -20324.448	
32	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸尾根斜面	12.00	7.00	2.30	—	露頭掘り	瓢箪形		戦国～江戸初？			224568.145 -20324.129	2遺構が連結したものか
33	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸尾根斜面	6.00	6.00	1.20	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224572.104 -20317.071	
34	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	9.00	6.00	1.30	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224557.917 -20352.552	
35	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	6.00	7.00	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224565.214 -20355.154	
36	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	5.00	6.00	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224553.834 -20375.533	
37	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	4.00	4.00	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224564.775 -20377.803	
38	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道？	不明		江戸期	坑口前面に9.2×5ｍの溝状の掘込み		224563.557 -20386.139	坑口埋没
39	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道？	不明		江戸期	坑口前面に7×6ｍの溝状の掘込み	有	224557.490 -20388.383	坑口埋没
40	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	2.60	2.20	—	東	坑道・斜坑	方形		江戸期		有	224579.682 -20375.216	
41	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	9.50	7.00	3.00	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224585.612 -20364.821	№.42隣接
42	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	3.30	3.00	1.30	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224587.728 -20364.036	№.41隣接
43	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	5.00	3.80	2.00	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224600.475 -20370.008	
44	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	4.00	4.00	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224599.231 -20384.943	
45	試掘跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	—	露頭掘り	不定形		江戸期			224612.440 -20383.395	
46	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	東	—	不明		江戸期			224616.269 -20384.439	坑口わずかに確認
47	試掘跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	1.50	—	東	露頭掘り	溝状		江戸期			224626.164 -20387.541	露出した岩盤を掘り込む、岩盤にくぼみあり
48	ひ押し掘り跡	鶴子沢・右岸	0.50	1.00	—	南東	ひ押し掘り	不定形		戦国～江戸初？	坑口前面に8×0.6ｍの溝、北東側に石組み遺構あり		224629.195 -20386.430	
49	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南？	—	不明		江戸期			224664.331 -20383.616	埋没、湧水あり
50	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南？	—	不明		江戸期			224652.173 -20392.119	埋没、湧水あり
51	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	0.80	0.80	2.50	南東	坑道・斜坑	方形		江戸期	坑口前面にテラス		224650.275 -20406.032	空気穴か
52	間歩跡	蛇谷・左岸斜面	0.60	0.65	—	北西	坑道	不明	外山茂右衛門間歩ヵ	江戸期	坑口前面にテラス		224731.029 -20448.707	坑口わずかに開口、相川地区内
53	間歩跡	蛇谷・左岸斜面	4.50	1.10	—	北西	坑道	不明	外山茂右衛門間歩ヵ	江戸期	坑口前面にテラス		224721.289 -20443.747	坑口わずかに開口、相川地区内
54	間歩跡	蛇谷・左岸斜面	—	—	—	北西	—	不明		江戸期	坑口前面に9×3.4ｍの溝状の掘込み		224700.709 -20426.437	坑口埋没、相川地区内
55	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.80	2.50	1.00	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224556.825 -20423.695	
56	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.50	2.50	1.30	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224555.075 -20420.852	
57	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	3.20	3.20	2.70	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？	東側斜面に向かい開口		224554.583 -20415.473	
58	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	1.80	1.20	0.80	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224546.203 -20419.846	
59	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	1.80	1.60	0.50	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224543.162 -20420.726	
60	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.00	2.00	0.80	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224544.686 -20424.009	
61	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.50	2.50	1.20	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224551.088 -20424.932	
62	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.00	2.00	0.60	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224553.043 -20426.765	

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
63	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.20	1.80	0.50	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224549.480 -20427.483	
64	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.00	2.00	0.50	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224551.442 -20430.062	
65	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	4.70	3.90	2.00	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224540.436 -20430.596	
66	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	3.00	3.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？	東側斜面に向かい開口		224554.250 -20412.928	
67	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	1.20	1.20	0.30	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224538.690 -20421.712	
68	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.30	2.30	0.80	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224532.488 -20422.740	
69	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.40	1.80	0.70	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224529.011 -20419.871	
70	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	3.80	3.20	1.20	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224526.075 -20425.617	
71	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	1.80	1.40	0.60	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224521.637 -20425.415	
72	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	3.00	2.60	1.10	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	南西側開口		224477.378 -20428.267	
73	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	2.50	2.50	1.20	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224560.998 -20437.609	空気穴の可能性も、相川地区内
74	性格不明遺構	鶴子沢・右岸尾根	—	3.50	1.30	南西－北東	溝？	溝状		江戸期	水路の可能性あり		224552.930 -20447.408	相川地区内
75	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸尾根	—	4.00	1.40	西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224522.777 -20456.886	相川地区内
76	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	東	—	不明		江戸期			224499.918 -20406.577	坑口わずかに開口
77	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.00	3.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224452.691 -20396.445	
78	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.00	2.00	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	東側斜面に向かい開口		224452.493 -20409.502	
79	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.00	3.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224450.419 -20412.400	
80	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.50	3.00	—	—	露頭掘り	方形		戦国～江戸初？	南西側斜面に向かい開口		224458.041 -20414.728	
81	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.50	2.50	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224447.038 -20406.787	
82	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224442.674 -20406.726	
83	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.00	2.00	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224439.316 -20416.672	
84	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.00	2.50	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224437.874 -20418.559	
85	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.50	3.00	—	—	露頭掘り	方形		戦国～江戸初？			224429.645 -20425.197	
86	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	1.50	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224430.022 -20404.626	
87	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224435.849 -20402.575	
88	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224450.592 -20399.105	
89	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.50	2.00	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224445.030 -20397.610	
90	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224434.832 -20395.483	
91	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224423.470 -20396.832	
92	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.50	2.50	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224415.065 -20380.229	
93	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224403.169 -20377.293	
94	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	3.00	3.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224411.513 -20398.971	
95	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224409.548 -20398.990	

№	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅（m）	深さ（m）	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
96	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224412.227 -20404.727	
97	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224417.370 -20407.348	
98	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224413.257 -20421.182	
99	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.50	2.50	—	—	露頭掘り	方形		戦国～江戸初？			224402.263 -20405.828	
100	露頭掘り跡	鶴子沢・右岸斜面	2.00	2.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224400.855 -20391.257	
101	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南	—	不明		江戸期			224383.889 -20405.527	坑口埋没
102	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	1.40	1.00	—	南東	坑道・水平坑	方形		江戸期	斜面を溝状に掘込む	多量有	224355.730 -20431.465	
103	間歩跡	鶴子沢水系・沢斜面	—	—	—	南東	坑道	不明		江戸期	坑口前面に小テラスあり		224307.512 -20422.106	坑口わずかに開口
104	竪坑	鶴子沢水系・沢右岸斜面	—	—	—	—	竪坑	不明	百枚竪坑	明治期（明治23～）	周辺にテラス、ズリ山等あり	多量有	224320.348 -20182.740	明治時代、水没
105	間歩跡	鶴子沢水系・沢左岸斜面	—	—	—	南？	坑道	不明		江戸期			224137.680 -20331.848	坑口埋没、湧水あり
106	間歩跡	鶴子沢・左岸斜面	0.80	1.00	—	西	坑道・斜坑	方形	新階屋間歩ヵ	江戸期	尾根から坑口へ向かう作業道あり、斜面上にテラスあり		224049.805 -20372.598	
107	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	東	坑道	不明		江戸期	斜面を溝状に掘込む		224061.171 -20472.145	坑口わずかに開口
108	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道	不明		江戸期	斜面を溝状に掘込む		224110.110 -20462.434	坑口埋没
109	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道	不明		江戸期			224114.109 -20441.764	坑口埋没
110	露頭掘り跡	玄道川水系・右岸斜面	5.00	3.50	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224508.235 -20046.595	
111	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸尾根斜面	3.00	3.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？	南側に溝が掘られる		224524.379 -20313.824	
112	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸尾根斜面	4.00	3.00	—	—	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224496.427 -20314.003	
113	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸斜面	2.50	2.50	0.50	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224482.898 -20339.828	
114	露頭掘り跡	鶴子沢・左岸	—	—	—	—	露頭掘り	不整形		戦国～江戸初？			224487.022 -20349.369	
115	露頭掘り跡	鶴子沢水系・沢内斜面	3.00	2.00	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224351.735 -20339.266	
116	露頭掘り跡	鶴子沢水系・沢右岸斜面	6.00	4.00	—	南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	北側一段下にテラス		224303.264 -20338.160	
117	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	東	坑道・斜坑	不明		江戸期	斜面を溝状に掘込む		224046.105 -20478.422	坑口わずかに開口
118	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	—	不明		江戸期	斜面を溝状に掘込む		224033.409 -20468.783	坑口埋没
119	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	—	不明		江戸期	斜面を溝状に掘込む		224023.742 -20459.116	坑口埋没
120	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	東	—	不明		江戸期	斜面を溝状に掘込む		224002.844 -20472.819	坑口わずかに開口
121	間歩跡	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	南東	—	不明		江戸期	斜面を溝状に掘込む		223979.464 -20468.320	坑口埋没
122	露頭掘り跡	屏風沢・左岸	5.70	5.00	1.00	北西-南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224690.576 -19767.700	
123	間歩跡	屏風沢・左岸	—	—	—	南？	坑道	不明	弥十郎坑（近代以降）	慶長～昭和21	斜面10.22×4ｍの堀込み、坑口前面にテラス	有	224802.068 -19910.989	坑口埋没
124	テラス状遺構	屏風沢・左岸	—	—	—	東～西	—	—		慶長～昭和21	沢内に木製樋露出、周囲にテラス、鉄滓が散乱する		224786.629 -19923.166	樋出土地点（沢内）
125	間歩跡	西屏風沢・左岸	0.70	0.54	1.50	南西	坑道？	不明		江戸期	坑口前面にテラス	有	224862.580 -19959.157	
126	露頭掘り跡	西屏風沢・右岸	3.00	3.00	—	南東	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？		有	224903.502 -19995.496	自然地形の可能性も、№127・128隣接
127	露頭掘り跡	西屏風沢・左岸	5.00	4.30	—	南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224911.328 -19991.672	№126・128隣接

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
128	露頭掘り跡	西屏風沢・右岸	3.00	3.00	—	—	露頭掘り	方円形		戦国～江戸初？		有	224901.075 -20001.467	№126・127 隣接
129	間歩跡	西屏風沢・左岸	0.73	0.80	2.76	南西	坑道・水平坑	方形		江戸期	坑口前面にテラス	有	224917.968 -19997.532	
130	露頭掘り跡	西屏風沢・左岸斜面	5.00	4.00	1.16	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224900.181 -19943.472	
131	間歩跡	東屏風沢・右岸斜面	—	—	—	南東？	—	不明		江戸期	№132 の主要坑道か	有	224892.609 -19921.742	間歩推定地、坑口埋没
132	間歩跡	東屏風沢・右岸斜面	0.60	0.60	3.20	南東	坑道・斜坑	方形		江戸期	№131 の通気坑か		224894.237 -19929.983	
133	ひ押し掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	4.70	0.80	5.75	東	ひ押し掘り	不定形		戦国～江戸初？		有	224902.434 -19917.575	鉱脈形状に掘削される
134	ひ押し掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	2.5, 2.0	1.4, 1.0	1.5, 2.2	南西	ひ押し掘り	不定形		戦国～江戸初？		有	224890.940 -19908.991	鉱脈形状に掘削される。上下の２遺構が連結したものか
135	間歩跡	東屏風沢・左岸斜面	1.10	1.30	4.40	南西	坑道・斜坑	方形		江戸期		有	224883.220 -19910.164	
136	間歩跡	東屏風沢・左岸斜面	0.90	0.70	2.60	南西	坑道・斜坑	方形		江戸期		有	224880.775 -19900.781	
137	間歩跡	東屏風沢・左岸斜面	0.60	0.60	1.20	南	坑道・斜坑	円形？		江戸期			224883.695 -19890.778	埋没、通気坑か
138	間歩跡	東屏風沢・左岸斜面	0.70	0.70	2.70	西	坑道	不明	弥十郎間歩ヵ	江戸期	坑口上方に「弥十郎間歩」銘の石祠		224887.490 -19896.904	坑口わずかに開口
139	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸尾根斜面	3.86	2.82	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224908.520 -19867.383	
140	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸尾根斜面	5.80	3.30	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224869.241 -19873.033	
141	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸尾根斜面	8.00	5.00	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224858.943 -19861.930	№142 と連結する可能性も
142	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸尾根斜面	6.20	3.40	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224852.745 -19858.855	№141 と連結する可能性も
143	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢右岸斜面	8.90	3.40	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	坑口前面にテラス	有	224857.197 -19834.228	
144	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	10.00	4.30	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	奥壁に岩盤露出	有	224837.557 -19877.350	
145	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	10.83	8.86	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224811.996 -19835.545	
146	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	16.50	5.52	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224799.993 -19819.897	
147	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢右岸斜面	7.00	5.60	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224800.707 -19799.178	
148	石組み遺構	屏風沢水系・沢右岸	2.36	2.21	0.78	北西？	—	コの字状		江戸期？	上流及び下流に土留の石垣を伴う	少量有	224813.919 -19789.671	東側開口
149	石組み遺構	屏風沢水系・沢右岸	3.95	3.56	1.32	南西？	—	ロの字状		江戸期？	上流及び下流に土留の石垣を伴う	少量有	224805.227 -19780.936	石組み一部崩れる
150	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	11.20	4.70	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224767.637 -19768.009	
151	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	5.40	4.30	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224740.729 -19758.169	
152	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	12.00	3.76	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224754.333 -19756.647	
153	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	4.66	3.47	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224782.287 -19758.687	
154	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	3.30	3.00	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224795.523 -19768.445	山側斜面に岩盤露出
155	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	6.12	4.08	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224806.519 -19747.540	北側岩盤露出
156	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	3.54	5.00	2.00	南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224777.648 -19745.447	
157	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	6.96	4.54	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224782.446 -19732.127	
158	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	9.00	5.00	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224766.079 -19728.018	尾根をはさんで№160 と隣接
159	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	10.51	4.11	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224741.183 -19705.485	

№.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
160	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	5.10	3.00	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224766.244 -19706.089	尾根をはさんで№.158と隣接。東側で一部岩盤露出
161	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	6.44	3.20	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224776.402 -19692.545	
162	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	5.00	4.12	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	南へ向かい溝が続く		224760.169 -19690.717	
163	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	5.00	2.63	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224762.367 -19682.201	
164	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	4.51	4.10	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224741.592 -19686.325	
165	間歩跡	屏風沢・左岸尾根斜面	0.30	0.30	1.88	南東	坑道	不明		戦国～江戸初？	坑口前面に5.54×2.8mの溝状の掘込み		224746.139 -19673.781	わずかに開口
166	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	4.20	4.20	—	—	露頭掘り	隅丸方形		戦国～江戸初？	№.165のテラスであった可能性も		224740.720 -19666.657	テラスか
167	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	5.68	3.75	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224741.217 -19651.334	
168	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	7.70	4.36	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224747.242 -19649.868	
169	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢斜面	4.60	2.02	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	開口部前面にテラス、作業道		224728.324 -19616.349	
170	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢斜面	6.35	3.78	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	作業道		224711.065 -19625.870	
171	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	5.68	4.82	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	斜面5.68×4.82mの掘込、土留石組み	有	224678.097 -19691.715	間歩の可能性も
172	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	8.60	5.28	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	斜面8.6×5.28mの掘り込み	有	224676.863 -19679.044	間歩の可能性も
173	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢内	3.44	3.42	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225023.257 -19933.644	
174	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢内	3.96	3.38	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225008.160 -19919.602	
175	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	5.71	2.64	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224994.085 -19919.318	
176	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	4.00	2.57	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225005.681 -19913.225	
177	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	4.10	2.64	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225005.584 -19909.124	
178	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	2.94	2.60	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225001.668 -19909.446	
179	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸尾根斜面	5.46	2.01	—	南西	露頭掘り	不整形？		戦国～江戸初？			224989.135 -19922.432	
180	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢右岸斜面	7.50	3.91	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225011.686 -19938.409	山側斜面に岩盤露出
181	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢右岸斜面	8.49	6.39	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225003.672 -19952.495	
182	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	7.38	3.91	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224991.537 -19949.809	
183	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸斜面	9.25	3.58	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224977.891 -19967.824	北西側に岩盤露出
184	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸	5.08	3.62	1.82	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	周囲に小規模テラスあり		225010.949 -19859.964	竪坑の可能性も
185	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	9.81	4.35	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225023.602 -19849.985	
186	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸	6.79	2.40	—	西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225026.147 -19863.593	間歩の可能性も
187	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	5.31	4.90	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225018.499 -19881.048	テラスの可能性も
188	試掘跡	東屏風沢・右岸斜面	0.60	0.60	0.85	東	試掘跡	方形		江戸期？		有	225035.857 -19880.017	祠の可能性も
189	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	4.40	4.18	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225027.020 -19890.855	
190	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	4.66	2.86	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225025.976 -19830.226	
191	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	3.00	3.00	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225000.127 -29832.408	
192	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	8.97	3.28	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	南へ作業道がのびる		224836.954 -19715.789	北側壁面に岩

観 察 表

№.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
193	テラス状遺構	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	7.61	2.78	—	—	—	方形		江戸期？	東へ作業道がのびる		224847.311 -19700.675	
194	間歩跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	—	—	—	南東	坑道	不明		江戸期	前面 6.48 × 4 m溝状の掘込み、岩盤切取		224857.725 -19689.683	坑口埋没
195	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	4.32	4.09	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224849.822 -19713.012	№. 196 隣接
196	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	4.43	3.40	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224857.168 -19711.364	№. 195 隣接
197	間歩跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	0.68	0.70	8.31	南東	坑道・水平坑	台形		江戸期	5 × 2 × 2 mの楕円形の掘込み		224867.377 -19715.264	
198	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	3.36	2.69	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224874.090 -19712.295	周囲に岩盤あり
199	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	4.50	3.75	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224877.950 -19691.279	
200	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	4.45	2.43	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224867.807 -19697.482	
201	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	5.00	4.00	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224883.979 -19721.259	自然地形の可能性も
202	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	4.98	3.66	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224894.847 -19703.381	
203	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸尾根斜面	6.76	4.27	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	南東へ作業道がのびる		224902.686 -19712.011	
204	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢斜面	8.36	2.53	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224999.778 -19752.963	№. 205 隣接
205	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢斜面	3.87	2.00	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224994.484 -19751.332	№. 204 隣接
206	間歩跡	屏風沢水系・沢内	—	—	—	南	—	不明		江戸期	斜面 7.56 × 4 mの掘込み、坑口前面にテラス	有	224954.435 -19775.158	坑口埋没
207	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢内	2.96	2.65		南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224910.489 -19771.455	自然地形の可能性も
208	間歩跡	屏風沢水系・沢左岸	—	—	—	南	—	不明		江戸期	斜面 3.58 × 8 mの掘込み、坑口前面にテラス		224877.839 -19769.448	坑口埋没。北側奥壁に岩盤
209	間歩跡	屏風沢水系・沢右岸	—	—	—	南東	—	不明		江戸期	斜面 4.64 × 2.1 m溝状の掘込み		224885.557 -19771.803	坑口埋没
210	露頭掘り跡	屏風沢水系・沢左岸	4.45	2.71		南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224852.926 -19753.593	
211	間歩跡	甚太郎百枚沢・左岸	—	—	—	南	—	不明		江戸期	斜面 3.49 × 2.64 mの掘込み	少量有	224774.316 -19957.519	坑口埋没
212	露頭掘り跡	甚太郎百枚沢・右岸斜面	5.12	2.08	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224737.217 -20020.705	
213	露頭掘り跡	甚太郎百枚沢・右岸斜面	5.60	2.63	—	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224728.645 -20020.358	
214	露頭掘り跡	西屏風沢・左岸斜面	—	—	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？	南東側開口		224947.444 -20041.500	
215	露頭掘り跡	西屏風沢・左岸斜面	4.40	2.17		南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224959.061 -20042.648	
216	露頭掘り跡	西屏風沢・右岸斜面	—	—	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	斜面 7.74 × 2.5 mの掘込み		224972.212 -20076.240	西側奥壁に岩盤
217	間歩跡	西屏風沢・右岸斜面	0.45	0.80	2.71	東	露頭掘り	坑道		江戸期	前面にテラス		224994.446 -20074.369	
218	露頭掘り跡	西屏風沢・右岸	6.21	4.05	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224953.304 -20053.465	
219	露頭掘り跡	西屏風沢・左岸斜面	5.68	4.00	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224929.730 -19999.111	東側に岩盤露出
220	露頭掘り跡	西屏風沢・左岸斜面	5.81	4.75	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面にテラス	有	224885.412 -19963.949	東側に岩盤露出
221	露頭掘り跡	西屏風沢・左岸斜面	6.56	2.57	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224892.593 -19962.445	北東側奥壁に岩盤露出
222	露頭掘り跡	屏風沢・左岸斜面	4.06	6.98	—	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？	前面平坦地あり	有	224758.767 -19887.191	
223	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	4.71	2.90	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	斜面下を作業道が通る	少量有	224901.704 -19562.358	
224	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	7.60	3.25	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		少量有	224929.678 -19554.617	

№.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
225	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	8.14	3.28	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224909.758 -19531.894	
226	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	11.54	8.76	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		有	224945.939 -19559.605	2遺構が連結したものか
227	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.92	3.30	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			224928.392 -19579.401	
228	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.59	3.86	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			224942.585 -19582.095	
229	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.75	2.96	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224946.192 -19588.801	
230	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	6.75	2.79	1.00	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224959.735 -19593.087	
231	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.53	2.32	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224937.190 -19593.616	
232	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	4.52	3.78	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	作業道通る		224932.297 -19606.026	
233	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	6.81	3.70	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224910.567 -19581.031	西～南側に岩盤露出
234	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.55	2.67	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224905.034 -19615.678	
235	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	6.21	3.40	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224926.762 -19652.535	
236	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	—	—	—	東	—	不明		江戸期	岩盤 2.5 × 3.42 m塌込		224948.269 -19610.289	坑口埋没
237	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	7.56	1.95	—	北西－南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224960.175 -19602.353	
238	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	6.79	2.14	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224968.305 -19609.050	
239	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.87	2.95	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			224981.513 -19607.300	
240	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	6.97	5.08	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224962.937 -19619.673	周辺部に岩盤露出
241	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	0.50	0.60	1.20	東	坑道	不明		江戸期			224960.257 -19616.175	坑口わずかに開口
242	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.03	3.00	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224985.671 -19627.071	
243	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.38	2.15	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224994.998 -19610.771	
244	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.93	2.74	—	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225004.960 -19612.903	
245	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	4.41	2.44	1.50	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224981.401 -19638.043	
246	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.96	3.81	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224987.000 -19636.209	
247	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.38	3.22	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224985.948 -19640.897	
248	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	8.71	3.07	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面にテラス		224954.498 -19640.666	
249	間歩跡	仕出喜沢水系・沢右岸	0.20	0.20	—	東	坑道・水平坑	不明		江戸期	前面 5.05 × 2.41 mの溝状掘り込み		224917.484 -19689.506	坑口わずかに開口
250	間歩跡	仕出喜沢水系・沢右岸	—	—	—	南東	—	不明		江戸期	前面 7.83 × 2.82 mの塌込、テラス		224892.899 -19676.371	坑口埋没
251	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸	6.12	5.92	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？		有	224956.140 -19696.351	テラスの可能性も、№.252・254 隣接
252	間歩跡	仕出喜沢水系・沢左岸	—	—	—	南西	—	不明		江戸期	前面にテラス	有	224960.082 -19690.285	坑口埋没、№.251 隣接
253	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸	4.31	3.90	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224950.861 -19689.490	
254	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸	4.09	2.95	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面にテラス	有	224954.030 -19699.548	№.251 隣接
255	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢内	6.18	4.89	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面にテラス		224953.739 -19712.831	
256	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸	3.57	3.68	—	—	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？	東側にテラス		224953.155 -19723.585	
257	間歩跡	仕出喜沢水系・沢右岸斜面	0.20	0.30	—	南東	露頭掘り	坑道		江戸期	前面 7.03 × 3.35 mの溝状掘込、№.258		224972.651 -19733.637	坑口わずかに開口

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
258	間歩跡	仕出喜沢水系・沢右岸斜面	3.29	2.64	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		江戸期	No. 257 に付随か		224979.120 -19744.660	埋没した空気穴か坑道が陥没したもの
259	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	2.88	2.55	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225004.999 -19717.034	
260	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.98	3.64	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225014.846 -19722.352	
261	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.00	2.00	—	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224995.862 -19704.923	
262	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.46	3.38	1.00	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224989.252 -19700.010	
263	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	5.10	3.15	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224979.547 -19697.257	No. 264、265 隣接
264	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.74	3.00	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224975.442 -19703.864	No. 263、265 隣接
265	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	4.47	3.24	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224970.241 -19707.997	No. 263・264 隣接
266	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	4.87	4.59	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224993.480 -19667.851	
267	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	2.93	3.46	—	—	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225001.344 -19656.168	
268	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	1.80	3.00	—	—	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			224997.747 -19650.652	
269	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.48	2.85	0.50	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225040.459 -19684.389	
270	間歩跡	仕出喜沢水系・左岸	—	—	—	—	坑道？	不明		江戸期	長さ 6.07 ×幅 4.9 m の掘込み		224762.396 -19479.199	
271	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	5.17	3.20	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225442.003 -19796.251	西野道そば
272	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.49	3.24	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225442.476 -19777.916	西野道そば
273	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.54	3.14	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225381.996 -19792.102	
274	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	4.18	3.27	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225387.777 -19790.802	
275	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.64	2.90	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225385.055 -19784.509	
276	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.82	3.31	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225381.462 -19785.896	
277	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.00	2.88	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225373.576 -19775.943	
278	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.37	2.82	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225375.315 -19762.382	
279	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	4.14	3.47	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225371.981 -19756.555	
280	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	4.17	2.30	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225366.195 -19743.711	
281	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.80	2.99	—	北西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225358.968 -19742.664	
282	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	2.86	2.46	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225352.207 -19741.427	
283	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	4.29	3.19	0.50	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225340.561 -19684.572	
284	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	4.44	4.08	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225353.730 -19679.599	
285	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	5.14	2.18	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225355.476 -19672.257	
286	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.76	2.38	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225350.098 -19678.675	
287	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	7.46	3.97	—	東－西	露頭掘り	瓢箪形		戦国～江戸初？			225373.056 -19664.523	2 遺構が連結したものか
288	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	5.01	2.84	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225372.071 -19648.096	
289	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	4.10	3.55	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225362.414 -19637.722	
290	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	3.95	2.36	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225356.299 -19647.093	

№.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
291	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	2.68	3.42	—	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225349.567 -19630.306	
292	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	3.60	4.35	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225348.114 -19627.411	
293	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	3.49	2.90	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225346.244 -19630.450	
294	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	4.29	2.92	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225306.652 -19694.617	
295	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	5.58	4.34	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225298.201 -19684.374	
296	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	3.62	2.47	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225297.357 -19680.460	
297	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	3.21	2.19	—	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225270.420 -19668.639	
298	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	2.52	2.45	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225268.154 -19664.095	西野道そば
299	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	3.08	2.93	—	—	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225260.187 -19653.676	西野道そば
300	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	3.63	2.75	—	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225251.553 -19627.996	西野道そば
301	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	3.93	3.20	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225243.140 -19618.715	西野道そば
302	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	4.39	2.94	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225245.577 -19617.250	西野道そば
303	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	3.09	2.66	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225175.598 -19577.125	西野道そば
304	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	4.46	3.53	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225181.280 -19537.842	
305	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	5.11	3.57	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225183.193 -19534.695	
306	間歩跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	—	—	—	南西	—	不明		江戸期	斜面 3.24 × 4.04 m の掘込み	有	225139.730 -19547.528	坑口埋没、西野道そば
307	ひ押し掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	1.03	1.15	3.47	南	ひ押し掘り	三角形		戦国～江戸初？	斜面 3.1 × 2.5 mの掘込、前面にテラス	有	225147.444 -19533.346	鉱脈に沿って掘削。石英脈残る、西野道そば
308	間歩跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	2.94	3.97	—	南西	—	不明		江戸期		有	225138.040 -19554.100	坑口埋没、露頭掘りの可能性も、西野道そば
309	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	4.79	3.82	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面に小テラス		225123.474 -19506.801	西野道そば
310	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	2.99	3.00	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225117.616 -19494.012	西野道そば
311	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸尾根斜面	5.95	3.12	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		少量有	225108.576 -19488.665	西野道そば
312	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢斜面	5.57	2.80	—	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面にテラス		225080.363 -19433.746	西野道そば
313	間歩跡	仕出喜沢水系・沢斜面	—	—	—	南西	—	不明		江戸期	斜面 5.97 × 3.47 mの溝状の堀込み、テラス	多量有	225050.313 -19452.427	坑口埋没
314	間歩跡	仕出喜沢水系・沢右岸斜面	—	—	—	南	—	不明		江戸期	斜面 6.8 × 3.98 mの溝状の堀込み、テラス	多量有	225055.305 -19463.609	坑口埋没
315	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.52	3.23	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	西側にテラス		225005.677 -19436.941	
316	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢左岸斜面	3.30	3.31	—	西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225064.611 -19437.951	
317	間歩跡	仕出喜沢・左岸斜面	—	—	—	南	坑道？	不明		江戸期	斜面岩盤 8.11 × 4.16 m堀込み、№.318		225080.121 -19526.812	坑口埋没
318	間歩跡	仕出喜沢・左岸斜面	1.50	2.00	3.25	南	坑道・斜坑	方形？		江戸期	№.317 付随か		225082.155 -19526.567	空気穴か
319	間歩跡	仕出喜沢・左岸斜面	0.55	0.60	0.80	南西	坑道？	方形		江戸期			225094.621 -19567.144	崩落により不明であるが、試掘坑の可能性も
320	間歩跡	仕出喜沢・左岸斜面	0.70	1.35	3.16	南西	坑道・斜坑	方形		江戸期		有	225105.566 -19582.934	
321	間歩跡	仕出喜沢・左岸斜面	—	—	—	南西	坑道？	不明		江戸期	斜面 4.86 × 7.28 m の堀込、前面テラス	有	225136.310 -19564.782	坑口埋没
322	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道？	不明		江戸期	斜面 10.49 × 6.54 m の溝状の堀込み	有	224889.581 -19508.563	坑口埋没、西野道そば
323	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	7.88	3.87	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面にテラス		224916.973 -19516.878	

観 察 表

№	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
324	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道？	不明	仕出喜大水貫（仕出喜間歩）カ	江戸期	斜面 8.11 × 5.7 m台形状掘込み。周辺部にテラス群あり	多量有	224938.452 -19518.312	坑口埋没
325	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	—	—	—	南東	坑道？	不明	仕出喜大水貫（仕出喜間歩）カ	江戸期	斜面 8.8 × 6.88 m台形状掘込み。周辺部にテラス群あり	少量有	224942.515 -19520.716	坑口埋没
326	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸斜面	4.78	4.77	—	南西	露頭掘り	半円形		戦国～江戸初？	前面にテラス	少量有	224956.282 -19467.158	
327	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸斜面	5.35	3.53	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224955.740 -19496.333	
328	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.44	3.81	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224960.832 -19512.054	
329	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸斜面	8.69	6.45	—	南	露頭掘り	台形状		戦国～江戸初？		有	225024.447 -19518.083	
330	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	8.17	4.36	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224980.496 -19520.807	
331	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	6.40	3.36	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224967.507 -19540.462	
332	間歩跡	仕出喜沢・右岸	0.30	0.40	2.30	東	坑道	不明	仕出喜上口カ	江戸期	岩盤 4.42 × 2.45 m のテラス状に堀込み	有	225050.341 -19582.445	坑口わずかに開口
333	試掘跡	仕出喜沢・右岸	0.60	0.53	1.00	東		方形		江戸期			225076.058 -19612.516	祠の可能性も
334	間歩跡	仕出喜沢・右岸	1.50	1.10	8.37	北東	坑道・斜坑	方形		江戸期	前面に広いテラス	有	225086.504 -19639.687	遺構南側に落盤によって開口した坑道が接続する
335	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸	8.60	5.53	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225099.232 -19620.263	
336	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸	7.98	5.31	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225117.902 -19633.772	
337	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	0.70	0.90	4.29	東	坑道・水平坑	方形		江戸期		有	225098.984 -19645.375	
338	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	—	—	—	北東	坑道？	不明		江戸期	岩盤 4 × 4.43 mの堀込		225090.222 -19656.850	坑口埋没
339	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	0.50	1.40	0.90	東	坑道	不明		江戸期	前面にテラス		225079.677 -19670.809	坑口ほぼ埋没
340	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	—	—	—	北東	坑道？	不明		江戸期	岩盤 2.45 × 2.03 の堀込、小テラス		225077.374 -19673.788	坑口埋没
341	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	—	—	—	北東	坑道？	不明		江戸期	2.64 × 3.5 m堀込、コの字状の掘込み		225104.020 -19681.802	坑口埋没
342	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	0.45	0.98	4.20	北東	坑道・水平坑	方形		江戸期			225104.892 -19690.352	
343	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	0.10	0.15	2.42	南	坑道	不明		江戸期	斜面 3.41 × 3.01 m の溝状掘込		225090.755 -19702.534	
344	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.55	2.44	—	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面に小テラス		225079.010 -19701.811	
345	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.08	5.07	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225064.419 -19702.981	2 遺構が連結したものか
346	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.23	3.77	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225062.538 -19706.189	
347	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.86	3.18	—	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225052.608 -19697.783	
348	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.90	2.82	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225044.626 -19698.519	
349	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.25	3.00	—	北東 - 南西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225048.373 -19685.526	
350	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.47	2.24	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225052.968 -19689.276	
351	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.38	3.34	—	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225044.287 -19670.145	
352	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.20	1.78	—	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面に小テラス		225056.849 -19671.833	間歩の可能性も
353	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.60	5.50	—	北東	露頭掘り	不整形？		戦国～江戸初？	2 段にわけて掘削		225061.207 -19666.292	
354	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	4.24	3.87	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225073.324 -19733.883	

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
355	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.47	5.35	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225081.604 -19749.972	
356	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.40	3.68	—	—	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225098.183 -19760.077	
357	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.41	2.98	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225091.768 -19733.883	
358	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.47	3.28	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225108.984 -19756.975	
359	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.85	2.85	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225110.388 -19763.000	
360	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	4.67	3.69	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225110.865 -19741.320	
361	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.30	3.07	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225129.130 -19747.863	
362	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.97	3.66	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225135.083 -19748.849	
363	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.00	4.00	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225136.071 -19747.040	
364	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	5.17	3.77	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225151.461 -19764.866	
365	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	4.99	3.28	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225153.576 -19765.048	
366	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.03	3.87	—	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225126.309 -19759.546	
367	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸	14.55	22.00	—	南西	露頭掘り	半円形		戦国～江戸初？	前面に広いテラス	有	225059.816 -19579.537	
368	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	0.60	0.77	3.32	北東	坑道・斜坑	方形	仕出喜上口ヵ	江戸期	前面に広いテラス	有	225048.331 -19590.691	No. 369 隣接
369	間歩跡	仕出喜沢・右岸斜面	0.80	0.70	5.25	北東	坑道・水平坑	方形	仕出喜上口ヵ	江戸期		有	225045.310 -19593.079	No. 368 隣接
370	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	6.00	5.38	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225300.210 -19834.912	
371	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	3.90	3.07	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225292.961 -19834.912	
372	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸斜面	5.83	6.12	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225282.333 -19846.189	
373	露頭掘り跡	仕出喜沢水系・沢右岸斜面	9.17	4.65	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225261.901 -19864.327	
374	露頭掘り跡	仕出喜沢上流・尾根斜面	4.00	3.57	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225287.813 -19817.689	No. 375 隣接
375	露頭掘り跡	仕出喜沢上流・尾根斜面	4.17	3.22	—	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225279.744 -19817.720	No. 374 隣接
376	露頭掘り跡	仕出喜沢上流・尾根斜面	4.74	3.23	—	北－南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225286.509 -19829.294	No. 377 隣接
377	露頭掘り跡	仕出喜沢上流・尾根斜面	3.57	3.14	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225282.699 -19828.285	No. 376 隣接
378	露頭掘り跡	仕出喜沢上流・尾根斜面	4.74	3.23	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225210.632 -19933.806	
379	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	4.78	2.77	—	北西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225201.463 -19865.625	
380	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.29	3.15	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225166.466 -19841.770	
381	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.85	3.57	—	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225171.579 -19832.101	
382	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	2.84	3.49	—	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225130.744 -19834.044	
383	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	4.00	3.48	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	北東側に排土堆積		225125.451 -19850.994	
384	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	2.48	2.43	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225120.717 -19837.436	
385	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	4.00	2.00	1.00	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225101.509 -19869.235	
386	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	3.00	2.50	0.60	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225111.167 -19872.342	
387	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	3.40	3.38	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225111.832 -19880.100	

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
388	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	3.78	2.30	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225097.163 -19885.391	
389	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	2.20	1.40	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225103.364 -19892.437	
390	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	2.80	1.90	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225110.690 -19898.457	
391	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	3.00	2.00	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225108.015 -19905.949	
392	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	3.20	1.60	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225120.336 -19906.519	
393	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	3.73	3.59	—	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225116.672 -19918.786	奥壁より湧水、茶碗表採
394	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	5.93	0.90	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225119.990 -19924.193	
395	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	2.70	2.80	—	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		有	225123.976 -19925.101	
396	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	4.10	4.10	0.80	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225118.604 -19932.306	
397	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	7.61	3.95	—	北東	露頭掘り	台形		戦国～江戸初？			225131.391 -19925.953	
398	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	3.55	1.70	—	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225138.234 -19936.127	No. 400 と連結、湧水あり
399	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	4.01	2.30	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225157.037 -19936.474	
400	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸	4.95	2.30	—	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225130.167 -19944.205	No. 398 と連結
401	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.45	2.98	—	南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225120.376 -19965.734	
402	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	2.98	2.35	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225116.133 -19972.159	
403	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.98	3.41	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225112.937 -19978.890	
404	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.57	2.41	—	北東 - 南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225095.196 -19976.014	
405	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.54	3.18	—	北東 - 南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225098.788 -19964.232	
406	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	2.20	2.20	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225078.145 -19951.658	
407	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.31	2.70	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225081.057 -19947.351	
408	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.15	2.41	0.40	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225087.342 -19942.647	
409	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	2.70	2.10	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225059.506 -19941.833	
410	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.54	2.83	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225057.477 -19915.772	No. 411 隣接
411	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	4.11	3.10	—	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225053.951 -19918.209	No. 410 隣接
412	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	2.98	2.47	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225051.189 -19915.549	
413	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.40	2.20	—	北 - 南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225036.725 -19920.009	
414	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	1.80	1.80	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225069.088 -19911.401	No. 415 隣接
415	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	2.60	2.20	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225069.357 -19908.732	No. 414 隣接
416	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	2.90	2.90	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225092.567 -19919.840	
417	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.40	3.39	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225106.838 -19933.534	
418	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	2.70	2.70	—	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225140.763 -19949.497	
419	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.50	3.08	—	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225163.677 -19954.623	
420	露頭掘り跡	東屏風沢・右岸斜面	3.00	2.80	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？	南側に排土と思われる土砂堆積		225176.114 -19959.537	

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
421	露頭掘り跡	東屏風沢・尾根斜面	3.61	3.20	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225204.390 -19978.524	
422	露頭掘り跡	東屏風沢・尾根斜面	4.16	3.80	—	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225220.797 -19979.161	
423	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	5.10	3.80	0.40	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225422.779 -19536.927	
424	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.84	3.82	0.20	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225407.586 -19526.284	
425	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.16	3.38	0.30	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225407.695 -19508.883	
426	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.75	2.73	0.20	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225424.717 -19495.490	
427	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.49	3.00	0.60	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225428.205 -19492.976	
428	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	10.00	2.30	0.50	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225431.900 -19491.571	
429	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.35	4.26	0.30	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225450.168 -19496.121	
430	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.94	3.25	0.80	北	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225461.867 -19503.023	
431	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	5.93	4.64	0.60	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225446.290 -19518.649	
432	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.00	3.60	0.50	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225444.417 -19521.953	
433	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.15	2.70	0.20	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225463.195 -19522.903	
434	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.69	4.13	0.60	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225472.479 -19529.619	
435	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.29	4.32	0.60	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225469.396 -19538.051	
436	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.50	2.00	0.40	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225461.145 -19557.161	
437	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.15	2.65	0.40	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225472.571 -19554.267	
438	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.20	3.45	0.40	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225476.623 -19548.912	
439	露頭掘り跡	荒町川水系・右岸尾根斜面	3.52	3.86	1.50	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225611.188 -19520.422	
440	露頭掘り跡	荒町川水系・尾根斜面	5.44	5.46	1.80	南	露頭掘り	台形		戦国～江戸初？			225670.976 -19576.400	
441	露頭掘り跡	荒町川水系・尾根斜面	2.80	3.57	1.00	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225658.778 -19595.485	
442	露頭掘り跡	荒町川水系・尾根斜面	4.22	3.52	1.00	南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225667.441 -19605.087	
443	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	3.30	2.95	0.60	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225445.207 -19541.708	
444	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.52	3.03	0.40	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	谷側に排土と思われる土砂堆積		225604.206 -19593.799	
445	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	10.50	6.00	0.60	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	谷側に排土と思われる土砂堆積		225469.868 -19614.319	
446	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	5.23	2.97	0.40	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225394.090 -19533.158	
447	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	4.76	3.05	0.40	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225384.365 -19498.052	
448	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・右岸斜面	5.11	3.79	0.30	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225387.836 -19477.904	
449	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・右岸斜面	5.13	3.86	0.30	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225384.630 -19477.462	
450	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	3.47	3.40	0.60	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225361.022 -19501.580	
451	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	3.44	4.09	0.30	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225374.017 -19509.708	
452	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	3.58	2.97	0.60	北－南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225358.364 -19493.216	
453	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	3.31	3.22	0.40	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225357.015 -19491.109	

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
454	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	7.85	4.43	1.80	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	作業道あり		225347.875 -19427.070	
455	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.43	3.36	1.00	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225342.249 -19374.617	
456	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	3.80	4.66	1.00	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225345.077 -19363.872	
457	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	5.44	7.00	3.00	南西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？	作業道あり	有	225283.306 -19363.154	
458	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	4.01	4.11	0.60	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	作業道あり		225278.121 -19345.685	
459	間歩跡	松ヶ沢・左岸斜面	0.60	1.10	1.10	南西	坑道・斜坑？		（古間歩）	江戸前期		有	225262.054 -19327.632	坑口わずかに開口。周辺に石英脈露出
460	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.10	2.70	0.50	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225259.256 -19307.454	
461	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.88	3.39	0.60	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225261.372 -19299.041	
462	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.13	3.00	0.30	―	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225273.002 -19313.907	
463	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.19	2.75	0.40	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225275.289 -19314.048	
464	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.29	3.25	0.40	―	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225273.752 -19320.552	
465	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.77	2.42	0.20	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225268.627 -19325.323	
466	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.18	2.97	0.30	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225286.842 -19310.098	
467	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	5.20	4.35	0.60	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225296.755 -19305.285	
468	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.40	3.15	0.30	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225304.001 -19300.531	
469	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.10	2.66	0.40	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225314.186 -19299.661	
470	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.93	2.85	0.30	―	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225279.042 -19290.900	
471	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.90	2.65	0.50	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225257.706 -19286.264	
472	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.64	3.35	0.50	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225250.178 -19287.375	
473	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.43	4.40	0.30	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225242.406 -19282.629	
474	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.67	3.35	0.40	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225239.879 -19286.729	
475	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.27	3.15	0.20	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225235.202 -19292.092	
476	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.24	2.35	0.40	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225226.392 -19306.097	
477	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.13	2.93	0.60	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225208.825 -19292.474	
478	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.12	2.99	0.40	北東－南西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225219.526 -19277.353	
479	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.79	4.37	0.50	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225218.693 -19250.416	
480	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.00	2.20	0.30	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225091.639 -19216.722	
481	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.40	1.80	0.30	北東－南西	露頭掘り	半円形		戦国～江戸初？			225102.701 -19223.721	
482	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	7.26	3.40	0.50	北東－南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225116.387 -19226.280	No. 483 隣接
483	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	8.20	3.10	0.50	北東－南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225116.864 -19227.131	No. 482 隣接
484	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.91	4.52	1.60	東－西	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225114.974 -19247.245	
485	間歩跡	松ヶ沢・左岸斜面	0.90	1.60	2.72	南西	坑道	方形？	（古間歩）	江戸前期		有	225109.125 -19291.193	周辺に岩盤露出
486	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸斜面	2.88	4.62	0.50	南西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225147.130 -19295.276	

№.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
487	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.46	3.30	0.80	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225178.750 -19268.094	
488	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.63	4.57	1.50	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225196.416 -19267.867	
489	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.31	4.33	1.00	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225207.303 -19276.803	
490	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.40	2.20	0.50	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225237.168 -19256.011	№. 491 隣接
491	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.00	2.40	1.00	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225232.684 -19249.233	№. 490 隣接
492	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.10	2.90	0.50	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225237.493 -19251.900	
493	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.02	3.65	2.50	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225233.410 -19247.762	№. 494 接続
494	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.91	3.61	1.00	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225228.729 -19244.385	№. 493 接続
495	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.89	3.38	0.60	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225209.075 -19247.570	
496	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.20	4.00	1.00	—	露頭掘り	不整円形		戦国～江戸初？			225203.453 -19241.384	
497	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.04	3.25	1.00	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225194.565 -19230.620	
498	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.98	3.26	0.60	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225186.873 -19227.386	
499	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	5.49	3.72	0.50	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225202.413 -19221.195	
500	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.44	2.65	0.50	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225209.494 -19219.661	
501	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.20	2.20	0.60	西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225213.582 -19222.976	
502	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.65	2.25	0.60	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225231.331 -19224.545	№. 503 隣接
503	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	5.28	2.40	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225234.562 -19221.604	№. 502 隣接
504	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	6.14	2.85	1.20	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225230.419 -19209.105	
505	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.87	3.32	0.50	北東－南西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		有	225240.172 -19213.664	
506	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.60	3.07	0.50	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	225245.012 -19220.879	
507	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.41	2.46	0.50	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	225261.305 -19226.286	
508	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	2.48	3.43	0.40	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		有	225250.285 -19245.690	
509	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.48	3.03	0.50	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225188.516 -19217.696	
510	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	2.20	2.10	0.30	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225193.039 -19109.908	
511	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	5.50	2.27	0.50	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225203.955 -19119.039	
512	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	9.47	2.72	—	東－西	露頭掘り	不整円形		戦国～江戸初？			225227.515 -19137.688	
513	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	3.57	2.52	—	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225230.717 -19141.785	
514	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	3.83	3.24	0.40	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225237.771 -19149.882	
515	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	5.36	2.26	0.30	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225241.266 -19158.528	
516	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	3.40	2.25	0.60	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225243.636 -19165.826	
517	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	2.86	1.90	0.30	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225247.146 -19165.960	
518	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	3.38	2.30	0.40	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225250.095 -19177.697	
519	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.40	2.70	0.50	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	南側に排土堆積		225206.078 -19210.568	

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
520	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.75	1.75	0.30	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225207.833 -19215.787	
521	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.12	2.91	0.60	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225198.520 -19182.079	
522	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	9.76	3.30	0.50	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225193.344 -19173.586	No. 523 隣接。テラス跡の可能性も
523	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	9.53	4.32	0.80	東 - 西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	南側に排土堆積		225193.056 -19169.230	No. 522 隣接
524	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.24	2.55	0.30	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225200.813 -19169.745	
525	テラス状遺構	松ヶ沢・左岸尾根斜面	13.20	6.66	—	北東 - 南西	—	方形		江戸期	土手状の段差あり		225207.833 -19156.607	No. 526 隣接
526	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.49	2.77	0.80	北東 - 南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225209.052 -19153.376	No. 525 隣接
527	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.36	2.28	0.30	北東 - 南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225197.159 -19146.793	
528	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.79	3.07	0.30	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225165.317 -19176.227	No. 529 隣接
529	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.43	2.62	0.40	北東 - 南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225162.348 -19181.429	No. 528 隣接
530	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.32	2.15	0.40	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225153.304 -19200.873	
531	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.91	4.12	0.50	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225151.612 -19212.402	
532	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.80	2.65	0.50	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225166.188 -19212.179	
533	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	5.86	2.60	0.40	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225173.901 -19221.735	
534	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.44	2.55	0.30	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225154.717 -19240.274	
535	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.00	2.65	0.40	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225138.786 -19273.378	
536	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.89	3.47	0.30	東 - 西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225117.401 -19260.269	
537	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.83	2.30	0.80	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面にテラス		225133.740 -19217.689	
538	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.65	4.24	1.84	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	前面にテラス？		225152.427 -19151.657	
539	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	4.11	3.56	0.40	北西 - 南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225206.569 -19109.383	
540	露頭掘り跡	松ヶ沢・左岸尾根斜面	3.93	5.28	0.50	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225179.077 -19113.744	
541	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	2.80	3.20	0.60	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225161.679 -19091.406	
542	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	3.00	3.28	0.60	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225176.132 -19063.270	
543	露頭掘り跡	荒町川水系・沢右岸尾根斜面	3.15	2.15	0.40	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225185.353 -19051.453	
544	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.30	2.35	0.50	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224965.203 -19347.025	
545	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.10	2.10	0.50	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			224993.284 -19373.150	
546	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	5.80	2.35	0.40	北東 - 南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225026.440 -19387.337	
547	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.45	2.45	0.20	北東 - 南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225040.793 -19391.992	
548	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.96	2.87	0.40	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225137.757 -19444.662	
549	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.84	3.13	0.40	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225139.772 -19446.287	
550	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.00	2.75	0.60	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225170.294 -19463.050	
551	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.40	1.68	0.40	北東 - 南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225174.196 -19468.687	
552	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.35	1.73	0.40	西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225184.806 -19483.110	

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
553	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.47	3.30	0.30	北	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225203.504 -19486.816	
554	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.68	2.05	0.30	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225200.541 -19503.220	
555	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	1.90	2.97	0.30	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225201.704 -19506.176	
556	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.54	1.75	0.30	北西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225205.911 -19497.707	
557	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	4.19	2.47	0.40	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		少量有	225218.773 -19494.842	
558	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.81	3.84	—	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		少量有	225229.046 -19493.327	
559	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.35	3.03	1.00	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225236.407 -19500.863	
560	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.22	3.22	0.20	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225222.007 -19512.428	
561	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.61	2.31	0.40	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225214.612 -19520.215	
562	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.56	2.62	0.20	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	東側に排土と思われる土砂堆積		225226.876 -19534.992	
563	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.51	2.42	0.30	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225241.520 -19501.885	
564	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.15	5.03	—	北	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225223.120 -19482.772	
565	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.45	2.00	0.40	西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225236.288 -19462.697	
566	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.24	2.98	0.50	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225235.697 -19460.837	
567	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.11	4.96	—	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		少量有	225255.123 -19491.995	
568	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	3.85	4.46	—	西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		少量有	225262.592 -19499.469	
569	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.63	3.71	0.40	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225228.847 -19550.755	
570	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.47	4.40	0.20	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225214.324 -19554.640	
571	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.93	4.21	0.20	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225209.871 -19540.836	
572	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸尾根斜面	2.36	3.04	0.40	東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225214.215 -19573.610	
573	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	3.40	2.70	0.30	北西－南東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225427.307 -19766.664	
574	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	4.94	3.13	0.40	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225394.456 -19743.361	
575	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	3.34	6.12	0.30	北	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225377.605 -19679.677	
576	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	4.69	3.29	0.20	北東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225379.382 -19671.703	
577	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸斜面	4.56	2.84	0.30	西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225370.506 -19635.340	
578	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・左岸斜面	2.85	3.30	0.20	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225293.221 -19567.428	
579	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・左岸斜面	2.20	2.15	0.20	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225287.845 -19568.476	
580	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・左岸斜面	2.97	3.28	0.20	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225279.736 -19576.276	
581	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・左岸斜面	3.66	2.12	0.40	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225275.525 -19578.552	
582	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・左岸斜面	2.25	2.30	0.20	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225260.006 -19598.207	
583	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・左岸斜面	2.70	2.64	0.30	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225261.419 -19580.159	
584	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸斜面	3.86	3.22	0.20	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225324.110 -19783.275	
585	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸斜面	3.73	4.28	0.20	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225336.231 -19804.168	

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
586	露頭掘り跡	仕出喜沢・左岸斜面	4.74	4.18	0.30	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225357.859 -19804.729	
587	露頭掘り跡	仕出喜沢・斜面	3.99	3.24	0.20	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225292.216 -19876.687	
588	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	2.73	4.30	0.20	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225245.862 -19942.537	
589	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	2.39	3.11	0.20	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225161.538 -19928.472	
590	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	3.75	3.11	0.40	南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225149.250 -19918.366	
591	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸尾根斜面	3.51	2.77	0.30	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225133.657 -19875.169	
592	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	5.52	3.49	1.00	南	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225049.893 -19851.078	周辺に岩散乱する
593	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸斜面	2.96	2.10	0.40	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224995.342 -19820.985	
594	露頭掘り跡	東屏風沢・左岸尾根斜面	2.64	2.73	0.30	西	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			224991.024 -19838.914	
595	露頭掘り跡	屏風沢水系・右岸斜面	5.73	3.84	2.00	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面に２×3mのテラス		224929.987 -19807.954	
596	露頭掘り跡	屏風沢水系・右岸斜面	4.53	3.06	0.50	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224954.807 -19802.812	
597	露頭掘り跡	屏風沢水系・右岸斜面	3.66	5.18	—	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224975.634 -19788.736	
598	露頭掘り跡	屏風沢水系・右岸尾根	5.09	3.17	0.30	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224980.040 -19807.725	
599	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	2.75	2.50	0.40	東－西	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225017.483 -19801.575	
600	露頭掘り跡	屏風沢・左岸尾根斜面	2.95	2.80	0.30	—	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225032.454 -19784.664	
601	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.27	2.97	0.30	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225041.790 -19769.800	
602	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	3.34	3.96	0.20	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			225042.767 -19771.277	
603	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	4.50	2.84	0.30	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225046.970 -19768.256	
604	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	10.65	3.00	0.50	北東－南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	南東側に排土堆積		225048.848 -19787.190	No. 605 隣接
605	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸尾根斜面	10.60	2.95	0.50	北東－南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	南東側に排土堆積		225047.579 -19786.283	No. 604 隣接
606	露頭掘り跡	仕出喜沢・右岸斜面	8.19	3.23	2.00	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？	前面に２×７mのテラス		225087.937 -19792.904	
607	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.82	2.30	1.00	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225607.990 -19792.785	No. 608、609 隣接無名異土試掘箇所カ
608	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.30	1.85	0.60	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225610.332 -19793.069	No. 607 隣接無名異土試掘箇所カ
609	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.45	1.94	0.70	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225603.383 -19799.989	No. 607 隣接無名異土試掘箇所カ
610	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	3.83	2.93	1.20	北－南	露頭掘り	楕円形		現代？			225580.929 -19859.351	No. 611 隣接無名異土試掘箇所カ
611	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	3.67	2.85	1.00	南東	露頭掘り	溝状		現代？			225572.470 -19859.586	No. 610 隣接無名異土試掘箇所カ
612	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.25	1.95	0.50	—	露頭掘り	円形		現代？			225514.134 -19905.678	無名異土試掘箇所カ
613	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.30	1.90	0.50	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225516.493 -19920.970	No. 614 隣接無名異土試掘箇所カ
614	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.60	1.60	0.50	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225512.671 -19924.720	No. 613 隣接無名異土試掘箇所カ
615	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.84	1.97	0.60	北－南	露頭掘り	楕円形		現代？			225448.434 -19943.795	無名異土試掘箇所カ
616	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.10	1.69	0.40	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225351.595 -19977.667	無名異土試掘箇所カ
617	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.60	2.10	1.00	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225341.994 -19988.201	無名異土試掘箇所カ
618	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.90	2.35	0.70	北東－南西	露頭掘り	楕円形		現代？			225337.568 -19989.320	無名異土試掘箇所カ

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
619	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	3.00	2.14	0.70	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225324.146 -20000.586	無名異土試掘箇所カ
620	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.85	1.60	0.30	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225313.313 -20012.567	無名異土試掘箇所カ
621	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	3.70	2.40	1.00	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225294.029 -20035.818	無名異土試掘箇所カ
622	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.06	1.57	0.50	北西－南東	露頭掘り	楕円形		現代？			225271.438 -20054.499	無名異土試掘箇所カ
623	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	1.95	1.70	0.50	―	露頭掘り	円形		現代？			225250.508 -20198.369	無名異土試掘箇所カ
624	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.38	1.47	0.60	東－西	露頭掘り	楕円形		現代？			225242.864 -20195.450	無名異土試掘箇所カ
625	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	1.63	1.56	0.50	―	露頭掘り	円形		現代？			225236.580 -20188.995	無名異土試掘箇所カ
626	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	1.95	1.45	0.40	東－西	露頭掘り	楕円形		現代？			225231.680 -20189.418	無名異土試掘箇所カ
627	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.20	1.77	0.40	東－西	露頭掘り	楕円形		現代？			225217.102 -20186.086	無名異土試掘箇所カ
628	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	1.60	1.60	0.60		露頭掘り	円形		現代？			225212.418 -20188.549	無名異土試掘箇所カ
629	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.35	1.57	0.50	西	露頭掘り	溝状		現代？			225197.914 -20192.267	無名異土試掘箇所カ
630	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	2.45	1.52	0.50	西	露頭掘り	溝状		現代？			225192.053 -20188.936	無名異土試掘箇所カ
631	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	1.57	1.42	0.50	西	露頭掘り	馬蹄形		現代？			225185.432 -20182.246	無名異土試掘箇所カ
632	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	1.40	1.80	0.40	南東	露頭掘り	馬蹄形		現代？			225124.937 -20100.769	無名異土試掘箇所カ
633	露頭掘り跡	青野嶺・尾根斜面	1.90	1.44	0.30	東－西	露頭掘り	楕円形		現代？			225501.845 -19919.139	無名異土試掘箇所カ
634	石組み遺構	仕出喜沢・右岸	9.30	2.16	1.02	東	―		仕出喜四ツ留番所カ	江戸期	中央部が 1.23m あく	有	224948.910 -19500.225	
635	石組み遺構	松ヶ沢・右岸	3.05	3.00	0.72	北東	―	コの字形		江戸期		有	225199.046 -19383.270	
636	間歩跡	松ヶ沢・左岸	0.20	0.77	―	東	坑道	不明		江戸期		有	225199.894 -19373.006	坑口埋没
637	間歩跡	松ヶ沢・右岸	0.50	0.60	2.35	南西	坑道	方形？	秋田権右衛門新切山	江戸中期	坑口前面に 4.14 m×2.03 のテラスあり	有	225252.313 -19414.839	
638	露頭掘り跡	松ヶ沢・右岸	3.91	3.30	0.40	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		少量有	225163.659 -19371.391	
639	炭窯跡	松ヶ沢水系・沢内	2.58	2.52	0.60	北西－南東	―	楕円形		近世～近代	入り口幅 1.25 m		224961.891 -19281.910	
640	露頭掘り跡	玄道川・右岸斜面	2.49	2.74	1.00	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？			224215.306 -19951.251	
641	露頭掘り跡	玄道川・右岸斜面	1.82	1.69	0.40	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			224096.490 -19907.501	
642	露頭掘り跡	玄道川・右岸斜面	6.41	2.30	1.00	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224120.823 -19923.065	
643	間歩跡	しなみ沢・右岸	―	―	―	南東	坑口	不明	しなみ沢新水貫間歩ヵ	江戸期	3.8 × 1.7 mの掘込み		223650.263 -20134.051	湧水あり
644	間歩跡	しなみ沢・右岸	―	―	―	南東	坑口	不明	しなみ沢新水貫間歩ヵ	江戸期	12.2 × 9.5 mの掘込み		223624.096 -20111.505	湧水あり
645	間歩跡	しなみ沢・左岸	1.80	0.47	2.00	南西	坑道？	不明		江戸期			223762.253 -20173.462	湧水あり。坑口わずかに開口
646	間歩跡	荒町川上流(大滝)・尾根斜面	0.20	0.38	2.93	南西	坑道	不明		江戸期		有	225503.321 -18974.996	坑口わずかに開口
647	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・尾根斜面	4.31	2.82	0.40	南東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		有	225504.608 -18950.015	
648	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・尾根斜面	4.98	4.91	2.50	北東	露頭掘り	不整形		戦国～江戸初？		有	225510.768 -18959.222	坑口の存在する可能性あり。石英岩盤露出
649	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・尾根斜面	3.06	2.76	0.50	―	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？		有	225519.217 -18962.724	

観 察 表

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
650	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・尾根斜面	7.38	5.27	1.80	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	225520.620 -18970.238	石英岩盤露出
651	間歩跡	荒町川水系(大滝)・右岸斜面	0.50	0.20	2.15	南東	坑口・斜坑？	不明		江戸期		有	225535.556 -18966.439	坑口わずかに開口。石英岩盤露出
652	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・尾根斜面	3.97	2.80	1.20	北東	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？	前面に２×１ｍの作業道あり	有	225536.138 -18979.706	
653	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・右岸斜面	14.78	1.82	0.60	東－西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225550.336 -18984.535	
654	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・沢右岸斜面	8.02	3.00	0.50	東－西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225553.831 -18986.888	
655	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・右岸斜面	4.59	4.06	1.50	北東	露頭掘り	馬蹄形		戦国～江戸初？		有	225514.171 -18953.603	石英岩盤露出
656	間歩跡	荒町川水系(大滝)・沢右岸斜面	0.43	1.17	16.38	東	坑道・水平坑	方形		江戸期		有	225510.157 -18937.161	
657	間歩跡	荒町川水系(大滝)・右岸斜面	1.10	1.00	6.64	北東	坑道・水平坑	台形		江戸期		有	225516.775 -18927.699	
658	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・沢右岸斜面	8.53	2.85	1.00	北東－南西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225542.269 -18959.831	
659	間歩跡	荒町川水系(大滝)・右岸	0.62	1.08	3.90	東	坑道・水平坑	不明		戦国～江戸初？		有	225544.920 -18941.314	
660	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・沢左岸	3.89	3.04	0.50	北－南	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225549.142 -18918.826	
661	間歩跡	荒町川水系(大滝)・左岸斜面	1.80	1.00	5.80	南東	坑道・水平坑	台形		江戸期		有	225536.317 -18910.711	
662	間歩跡	荒町川水系(大滝)・沢右岸	2.10	1.97	15.48	東	坑道・水平坑	方形	弥吉間歩ヵ	江戸～近代	坑口前面に石垣による土留め	有	225536.291 -18886.724	
663	間歩跡	荒町川水系(大滝)・右岸	1.40	2.00	5.00	南東	坑道・水平坑	方形	大滝間歩ヵ	江戸～近代			225476.264 -18903.499	滝壺付近に坑口
664	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・左岸斜面	3.82	2.90	0.25	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		少量有	225542.073 -18925.413	
665	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝･)尾根斜面	2.54	2.21	0.40	―	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225524.860 -19012.230	
666	試掘坑	荒町川水系(大滝)・左岸斜面	0.91	1.14	1.49	北東	坑道	方形		江戸期			225474.337 -19026.427	
667	試掘坑	荒町川水系(大滝)・左岸斜面	0.62	0.99	2.66	北	坑道	方形		江戸期			225479.429 -19039.854	
668	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・右岸尾根斜面	3.65	2.65	0.30	東－西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？			225527.138 -19212.434	
669	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・右岸尾根斜面	2.46	2.40	0.20	―	露頭掘り	円形		戦国～江戸初？			225521.880 -19195.057	
670	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・右岸尾根斜面	5.93	3.30	1.00	東－西	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	225337.403 -18991.736	
671	間歩跡	蛇谷・右岸斜面	0.38	0.72	1.02	南東	坑道？	不明		江戸期			224638.394 -20640.695	坑口埋没。
672	間歩跡	蛇谷・左岸斜面	0.63	0.50	0.81	北西	坑道？	不明	中水貫ノ口ヵ	江戸期		有	224680.437 -20534.725	坑口埋没。
673	露頭掘り跡	甚太郎百枚沢・右岸尾根斜面	7.26	3.40	0.80	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224744.271 -20170.256	
674	露頭掘り跡	玄道川水系・右岸斜面	4.92	1.74	0.40	南東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？		有	224697.197 -20124.227	
675	露頭掘り跡	玄道川水系・沢斜面	9.11	6.36	1.00	東	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			224718.109 -20125.437	
676	露頭掘り跡	玄道川水系・沢斜面	5.19	3.10	0.40	北東－南西	露頭掘り	楕円形		戦国～江戸初？		有	224692.730 -20117.422	
677	塚跡	西五十里道脇	7.58	6.23	1.20	東－西	露頭掘り	楕円形	（西五十里道）	戦国～江戸初？	石積み。石祠あり		224871.885 -20378.987	
678	塚跡	西五十里道脇	7.20	5.26	1.00	東－西	露頭掘り	楕円形	（西五十里道）	戦国～江戸初？			224877.932 -20384.005	
679	間歩跡	西屏風沢・右岸斜面	0.20	0.48	3.40	東	坑道・斜坑	不明		江戸期			224963.340 -20087.499	
680	間歩跡	西屏風沢・右岸斜面	0.73	0.70	5.85	東	坑道・水平坑	方形		江戸期			224963.863 -20076.093	
681	間歩跡	西屏風沢・右岸斜面	0.57	0.92	0.60	北東	坑道・斜坑	不明		江戸期			224943.061 -20070.156	
682	露頭掘り跡	西屏風沢・右岸斜面	5.36	5.54	3.00	南東	露頭掘り	不明		戦国～江戸初？			224877.447 -20011.867	

No.	種別	立地	長さ・高さ(m)	幅(m)	深さ(m)	向き・長軸向き	掘削方法	形状	名称	時期区分	附属遺構	ズリ	X座標 Y座標	備考
683	間歩跡	西屏風沢・右岸斜面	0.50	0.70	1.88	南東	坑道・斜坑	不明		江戸期			224842.688 -19993.029	
684	石造物	荒町川水系(大滝)・右岸	1.10	0.60	0.30	南	石塔	自然石	七字名号塔	大正15年			225452.730 -18912.333	「南無妙法蓮華経」の7字名号・大正5年5月に名畑スマコ氏建立
685	寺院跡	荒町川・左岸尾根斜面	—	—	—	—	—	不明	本福寺跡	中世？	礎石らしき礫散乱		225220.852 -18687.451	伝承では本福寺の前身となる堂宇があったといわれる
686	テラス状遺構	桐ノ木沢・右岸	—	—	—	—	—	不明	上相川番所跡	江戸期	左岸に石垣		225704.863 -20686.041	
687	テラス状遺構	桐ノ木沢・右岸斜面	—	—	—	—	—	不明		江戸期			225686.414 -20630.043	
688	間歩跡	南沢右岸斜面	—	—	—	南	坑道	不明	茶屋平間歩・茶屋平坑	寛保3～延享1？			225301.458 -20465.368	坑口埋没。湧水あり。
689	石造物	大工沢・右岸斜面	0.76	0.27	—	—	—	地蔵菩薩立像	(金北山道)	江戸期			225458.862 -20548.740	頭部破損。原位置不明。金北山道に伴う石造物
690	間歩跡	大工沢・右岸斜面	—	—	—	西	坑道	不明	茶屋平間歩	寛保3～延享1？			225390.051 -20551.993	坑口埋没。湧水あり。
691	塚跡	南沢・左岸斜面	5.74	4.60	1.50	北-南	—	楕円形		江戸期			224970.237 -20581.572	
692	塚跡	道脇	10.57	5.29	2.08	北-南	—	楕円形		江戸期			225408.087 -20566.696	
693	石造物	青野嶺・尾根斜面	0.42	0.17	0.15	北	—	石塔	地蔵菩薩立像	近代ヵ	26㎝の地蔵菩薩彫刻		225873.198 -19580.889	小(古)岩大神社参道入口に設けられたもの
694	露頭掘り跡	荒町川水系(大滝)・左岸斜面	6.00	4.00	1.00	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225901.230 -19384.211	
695	石造物	荒町川水系(大滝)・左岸斜面	0.66	0.45	0.29	南西	—	石祠	地蔵菩薩坐像	江戸～近代	祠内に4体の地蔵菩薩あり		225977.074 -19095.010	小(古)岩大神社参道に設けられたもの
696	小(古)岩大神社	荒町川水系(大滝)・左岸斜面	—	—	—	—	—	堂宇		江戸～近代	参道石段に鳥居複数あり		225895.670 -18919.250	堂宇までの石段倒木多く荒廃している
697	テラス状遺構	三瀬川水系・左岸	15.00	5.00	—	東-西	—	長方形		江戸～近代？	周辺部に池跡と思われる落込みあり		225797.183 -18740.994	
698	露頭掘り跡	松ヶ沢水系・左岸斜面	10.00	1.50	0.50	南	露頭掘り	溝状		戦国～江戸初？			225519.990 -19498.789	
699	テラス状遺構群	荒町川水系(大滝)・左岸	—	—	—	—	—	各種		近代～昭和21	石垣を伴うテラス群		225465.548 -18881.277	
700	冷却水プール	鶴子沢・右岸	—	—	—	—	—	方形		近代～昭和21	河川からの導水路あり		223772.751 -20383.739	コンクリート製、コンプレッサー冷却用プール
701	研磨機台座	鶴子沢・右岸	—	—	—	—	—	方形	鍛冶小屋跡	近代～昭和21	西側斜面に土留めの石垣を伴う		223796.486 -20386.950	鍛冶小屋跡。研磨機を設置していた台座。鉄製部品残る
702	テラス状遺構群	鶴子沢・右岸斜面	—	—	—	—	—	方形		江戸期ヵ	テラス南側に石垣を伴う井戸跡あり	有	223805.788 -20405.245	断面徳利形の江戸期の井戸跡
703	テラス状遺構群	鶴子沢・左岸	—	—	—	—	—	平面扇形	事務所跡、作業員小屋	江戸～昭和21	コンクリート製風呂桶	有	223779.779 -20362.043	作業員用風呂桶
704	コンプレッサー台	鶴子沢・左岸斜面	—	—	—	—	—	三字状		近代～昭和21	三字状に台座が並ぶ		223840.611 -20348.121	コンプレッサー台座

要　　約

1　鶴子銀山跡は、佐渡市沢根・沢根五十里・相川羽田町地内に所在し、現況は山林、原野等である。

2　遺跡は、大佐渡山脈丘陵地の山中に立地し、総面積は約 850,000㎡を測る。

3　遺跡は、天文 11 年（1542）に発見と伝えられ、戦国時代末から江戸時代初期にかけて最盛期を迎え、昭和 21 年（1946）に閉山した鉱山遺跡である。

4　調査は、保存を目的とした遺跡範囲確認のため、平成 14 年度から平成 18 年度にかけて実施した。調査面積は約 3,130,000㎡である。

5　調査の結果、室町時代から昭和時代までの遺構が確認された。

6　確認された鶴子銀山跡の遺構は、露頭掘り跡 556 基、ひ押し掘り跡 4 基、間歩跡 108 基、試掘坑跡 7 基、石組み遺構 4 基、テラス状遺構 9 基、石造物 2 基、近代化遺産 4 基、性格不明遺構 1 基である。このほかに西五十里道に関連する塚跡 4 基、石造物 1 基、古岩参道に関連する石造物 2 基、寺社跡 2 基、炭窯跡 1 基である。また、地表面で採集した遺物は、磁器 1 点、土器 2 点、羽口 3 点、鉱滓 6 点である。

7　尾根や沢の上流部の露頭鉱脈を掘削した露頭掘り跡に対し、これらが集中する山裾には露頭掘りの所在する方向へ向かう間歩跡があって、同一の鉱脈を掘削していることが確認された。

8　同遺跡に関連する江戸時代の絵図が多く現存し、銀山に関連する表記や記述が掲載された文献史料が多く残されている。また、これらの絵図や文献史料の間歩と現地の遺構を照合した結果、間歩名の判明した事例がある。

9　分布調査と史料調査を通じて、主要な間歩の開発期間や開発域や周辺村落の変遷が明らかになった。

10　史料上で確認できる間歩の数は、82 ヵ所であった。

11　鶴子銀山は、戦国時代以降、銀山の開発とともに形成された陣屋や鉱山集落が、相川金銀山の発展とともに相川へと移転し、急速に衰退していく変遷をたどりながら、昭和期まで操業が続けられた鉱山であり、相川金銀山発展の端緒となった鉱山といえる。

Abstract

1. The remains of Tsurushi silver mine are located in Sado City (Sawane, Sawane Ikari, and Aikawa Hanedamachi). The region is now covered with forest land and wilderness.

2. The site spreads over the hilly terrain in the mountains of Osado and the total area amounts to approximate 850,000m^2.

3. As legend goes, the silver mine was discovered in 1542 (11th of Tenmon) and it experienced the most prosperous periods from the end of Age of Provincial Wars to early Edo Period. It finally closed in 1946 (21st of Showa).

4. This research was carried out for the purpose of defining the remains' boundaries for preservation over the fiscal years of 2002 and 2006, covering an area of approximate 3,130,000m^2.

5. The research discovered the remains belonging to the periods from Muromachi Era to Showa Era.

6. The confirmed remains of Tsurushi silver mine contain dug out outcrops (556), dug out remains following deposits (4), mineshafts (108), test pits (7), stone arrangements (4), terraces (9), stone works (2), modernization heritages (4), and an unclear structure (1). In addition to them, there are some other remains including those related to an ancient highway called West Ikari Dou containing mounds (4) and a stone work (1); those related to Furuiwa approach (to the shrine) containing stone works (2); temples and shrines (2); and charcoal kiln (1). The remains collected from the surface soil are a piece of china, earthenware (2), tuyeres (3) and slag pieces (6).

7. The mountain ridges and runoffs have the remains of dug out outcrops in their upper areas. The skirts of mountain where the said remains gather have the remains of many mineshafts; which implies the same lodes of outcrops were aimed.

8. There are many pictorial diagrams and historical materials created in Edo era related to Tsurushi silver mine. When descriptions and images in them were compared with actual remains, it was discovered that the designations of some mineshafts were identified.

9. Study of distribution of remains as well as historical materials has clarified the development periods and areas of main mineshafts and changes of neighboring villages.

10. The number of mineshafts that historical materials indicate was 82.

11. Tsurushi silver mine set a precedent for the development of Aikawa gold and silver mines. Its mining camps and settlements prospered with the growth of the mine but its prosperity ebbed away rapidly after the age of provincial wars because those camps and settlements moved to Aikawa where gold and silver mines were newly exploited. However, Tsurushi silver mine continued operation till early Showa era.

引用・参考文献

≪引用・参考文献≫

相川町史編纂委員会編　1973 『佐渡相川の歴史』資料集三　佐渡金山史料　相川町

相川町史編纂委員会編　2002 『佐渡相川郷土史事典』 相川町

相川町教育委員会　2003 『佐渡金銀山　間歩調査寺社分布調査報告書』 相川町教育委員会

磯部欣三　　2000 「第４章　吉田松陰」『幕末明治の佐渡日記』 株式会社恒文社

岩木文庫史料集編纂委員会　1994 『佐渡近世・近代史料－岩木文庫－』上巻　金井町教育委員会

岩木文庫史料集編纂委員会　1995 「枰陵堂随見随記抄」『佐渡近世・近代資料集－岩木文庫』下巻　金井町教育委員会

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　1989 『角川日本地名大辞典』15　新潟県　角川書店

岩本　擴　　1927 『相川町誌』 相川町

株式会社 TEM 研究所　1985 『図説佐渡金山』 株式会社ゴールデン佐渡

上林章造　　1998 「鶴子陣屋と「鶴子千軒」の賑わい」『図説　佐渡の歴史』 郷土出版社

川路聖謨・川田貞夫校注　1973 『島根のすさみ－佐渡奉行在勤日記』 平凡社

神蔵勝明・小林巌雄　1993 「佐渡の自然誌　第五章　佐渡の生い立ち（地質）Ⅱ金鉱床のできかた」『図説佐渡島　自然と歴史と文化』 財団法人佐渡博物館

計良勝範　　1968 「金銀山稼方取扱一件」『佐渡相川志』解題　佐渡高等学校同窓会

小菅徹也　　1991 「シンポジウム　みんなで構築しよう新しい鶴子銀山像」配布資料　佐和田町教育委員会

小菅徹也　　1992 「第２回鶴子銀山シンポジウム」配布資料　佐和田町教育委員会、佐和田町公民館

小菅徹也　　1995 「佐渡の金・銀山」『中世の風景を読む　第４巻　日本海交通の展開』 新人物往来社

小菅徹也　　1998a 「上杉氏の金山政策」『図説　佐渡の歴史』 郷土出版社

小菅徹也　　1998b 「佐渡の金銀山」『図説　佐渡の歴史』 郷土出版社

小菅徹也　　1998c 「大久保長安の鉱山経営」『図説　佐渡の歴史』 郷土出版社

小菅徹也　　2000 「佐渡西三川砂金山の総合研究」『金銀山史の研究』 高志書院

小菅徹也　　2008 「上杉謙信の軍資金」『新編上杉謙信のすべて』 新人物往来社

児玉信雄・田中圭一・本間寅雄　1998 『図説佐渡島歴史散歩』 河出書房新社

坂井定倫・大場実　1977 「佐渡鉱山の地質鉱床」『佐渡博物館研究報告第７号』 佐渡博物館

佐藤俊策　　1994 「相川・鶴子のやきもの」『第 14 回全国天領ゼミナール記録集』 金井町教育委員会

佐渡郡教育会編　1940 『佐渡年代記続輯』 佐渡郡教育会

佐渡市教育委員会　2005 『佐渡金銀山　相川地区石造物分布調査報告書』

佐渡市教育委員会　2006 『佐渡金銀山山師　味方家寄託資料目録』

佐渡市教育委員会ａ　2008 『佐渡金銀山　鶴子銀山跡分布調査報告書』

佐渡市教育委員会ｂ　2008 『佐渡金銀山　佐渡金山遺跡上相川地区調査報告書』

佐渡市教育委員会　2009 『佐渡金銀山　カジ屋敷遺跡・せりば遺跡調査報告書　一般県道静平西三川線改良事業発掘調査報告書』

佐和田町史編さん委員会　1982 『佐和田町史』資料編上巻　佐和田町教育委員会

佐和田町史編さん委員会　1988 『佐和田町史』通史編Ⅰ　佐和田町教育委員会

佐和田町史編さん委員会　1991 『佐和田町史』通史編Ⅱ　佐和田町教育委員会

佐和田町史編さん委員会　1996 『佐和田町史』資料編下巻　佐和田町教育委員会

佐和田町史編さん委員会　2001 『佐和田町史』通史編Ⅲ　佐和田町教育委員会

沢根町公民館編　1935 『沢根町誌稿』第一輯　沢根町教育会

沢根町公民館編　1951 『沢根町誌稿』第二輯　沢根町教育会

式正英・鈴木秀夫　1964 「佐渡島の自然」『佐渡　自然・文化・社会』 平凡社

島根県教育委員会・大田市教育委員会　1999 『石見銀山遺跡発掘調査報告１－平成５～ 10 年度調査・石銀地区－』

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会編　1999 「第２章　歴史　４技術と経営」『石見銀山遺跡総合調査報告書第１冊【遺跡の概要】』 島根県教育委員会
橘　正隆　　1959 『河崎村史料編年志』 河崎村公民館
田中圭一編　1968 『佐渡相川志』(復刻) 県立佐渡高等学校同窓会
田中圭一　　1984 『佐渡金銀山文書の読み方・調べ方』(古文書入門叢書５) 雄山閣出版
田中圭一　　1986 『佐渡金銀山の史的研究』 刀水書房
田中圭一編　1986 「ひとりあるき」(佐渡高校舟崎文庫所蔵文書)『佐渡金銀山の史的研究』 刀水書房
田中圭一　　1998 「幕府最大の一国天領」『図説　佐渡の歴史』 郷土出版社
永井次芳　　1974 『佐渡風土記』 臨川書店
新潟県　　1989 『新潟県地質図(改訂版)』
新潟県編　　1984a『新潟県史』資料編 12 近世七　幕末編
新潟県編　　1984b『新潟県史』資料編 18 近代六　産業経済編２
新潟県教育委員会　1998 「相川街道松ヶ崎街道」『歴史の道調査報告書』第 12 集
新潟県教育委員会　2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 98 集　県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書　平田遺跡』
新潟県佐渡郡役所編　1973 『佐渡国誌』 名著出版
新潟県立佐渡高等学校同窓会　1986 『佐渡国略記』上巻(復刻)
新潟県立佐渡高等学校同窓会　1986 『佐渡国略記』下巻(復刻)
西尾銈次郎　1943 『日本鑛業史要』 十一組出版部
西川明雅・原田久通　1974 『佐渡年代記』 佐渡郡教育会
日本ゆり板の会　2001 『日本ゆり板の会学報』学報 22 号
農商務省鉱山局編　1992 『鉱山発達史』(復刻) 原書房
長谷川伸　2009 「平成 21 年度　天地人リレー講演会　景勝・兼継と[佐渡]国－佐渡金銀山の開発と支配－」 配布資料
長谷川利平次　1991 『佐渡金銀山史の研究』 近藤出版社
平井栄一　　1950 『佐渡鉱山史(稿)』 太平鉱業株式会社佐渡鉱業所
麓　三郎　　1956 『佐渡金銀山史話』 三菱金属鉱業
南魚沼郡教育会編　1998 『新潟県魚沼郡志』(復刻) 千秋社
山本　仁　　1980 『佐渡古城史』上　佐渡文化シリーズⅨ　中村書店
山本　仁　　1998 「上杉氏在番衆」『図説　佐渡の歴史』 郷土出版社
山本　仁・田中圭一・本間澪子編　2005 『佐渡江戸時代史年表』 佐渡史学会
山本修之助編　1973 「佐渡志」『佐渡叢書』第２巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1973 「撮要佐渡年代記」『佐渡叢書』第４巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1974 「佐渡国寺社境内案内帳」『佐渡叢書』第５巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1975 『北溟雑誌』第２巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1975 『北溟雑誌』第３巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1975 『北溟雑誌』第４巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1977 「佐渡四民風俗」『佐渡叢書』第８巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1957 「佐州巡村記」『佐渡叢書』第 10 巻　佐渡叢書刊行会
山本修之助編　1982 「吉田松陰　東北遊日記」『佐渡叢書』第 16 巻　佐渡叢書刊行会
湯之奥金山遺跡学術調査団編　1992 『湯之奥金山遺跡学術調査報告書　湯之奥金山遺跡の研究』 湯之奥金山遺跡学術調査会
汰板の会　　1993 「上杉景勝の鶴子銀山外山代官屋敷の発掘報告Ⅰ」『汰板』５号

≪鶴子銀山に関係する絵図・図面類≫

○ 相川郷土博物館所蔵絵図

1「佐渡一国海岸図」(天保 13 年)石井文海筆〔第 13 図〕＊海岸図

2「相川及び百枚鑛区實測圖」(明治 29 年)石井文海筆＊鉱区図面

○ 赤石利蔵家文書所蔵絵図

1「佐州金銀山の内屏風澤の勝景雪園写」＊岡絵図、屏風沢の間歩及び周囲の景色を描く。

2「佐州金銀山之内彌十郎間歩鋪内墨引」〔第 19 図〕＊敷岡絵図、弥十郎間歩鋪内、番所、鍛冶小屋、建場を描く。

○ 岩木文庫所蔵絵図　＊〈　〉は目録番号。

1「松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図」(原図慶安 5 年、安政 6 年写)〈354〉〔第 14 図〕

＊岡絵図舟崎文庫所蔵の「松ヶ沢・仕出喜沢屏風沢絵図」(原図慶安 5 年、天保 2 年写)〈1211〉とほぼ同じ内容。

2「鶴子・滝沢等鉱山墨引」〈350〉

・「鶴子百枚間歩御穿鑿場所墨引」＊敷絵図

・「年暦不知今井新次郎控写鶴子間歩平兵衛墨引」＊敷絵図

・「鶴子前立合墨引(岩間)」＊敷絵図

・「鶴子水貫椎並沢取明墨引」＊敷絵図

3「秤陵模写諸絵図面集(大小五拾弐枚)」〈355〉

・「鶴子間歩図」2 枚　＊敷絵図

・「享保十八年御直山百枚間歩惣敷絵図」＊敷絵図

○ 株式会社ゴールデン佐渡所蔵絵図

1「大滝(金作敷吉五郎敷)」＊敷絵図

2「百枚間歩敷内絵図」〔第 23 図〕＊敷絵図

3「百枚間歩敷内図」＊敷絵図

4「弥十郎間歩鋪内墨引」〔第 22 図〕＊敷絵図

5「佐渡鉱山関係施設等設計図」(新潟県指定文化財)　＊鶴子銀山関係施設図面等を抜粋。〈　〉は指定番号。

・「高任、鶴子間　索道ステーション之図」(昭和 20 年 2 月 4 日)〈354〉

・「高任－鶴子間索道　吊箱案内車及立軸之図」(昭和 20 年 2 月 24 日)〈355〉

・「高任－鶴子間　ブレーキ及クラッチ之図」(昭和 20 年 2 月 14 日)〈356〉

・「鶴子側　鑛石積込用搬器之図」(昭和 20 年 5 月 3 日)〈357〉

・「本山－鶴子間索道　鶴子側綱受取付臺之図」(昭和 20 年 5 月 7 日)〈358〉

・「本山－鶴子間索道　鶴子側緊張シーブ及分解図」(昭和 20 年 5 月 14 日)〈359〉

・「本山－鶴子間　索道減速機及カップリング之図」(昭和 20 年 5 月 14 日)〈360〉

・「本山－鶴子間索道　搬器組立及分解図」(昭和 20 年 5 月 2 日)〈361〉

・「本山－鶴子間索道　ステーション綱受車之図」(昭和 20 年 2 月 28 日)〈362〉

・「本山－鶴子間索道　本山側ステーション綱受車之図」(昭和 20 年 5 月 12 日)〈363〉

・「高任－鶴子間　索道運搬器分解図」(昭和 20 年 2 月 23 日)〈364〉

・「高任　鶴子間　索道運搬器組立及分解図」(昭和 20 年 2 月)〈365〉

・「本山－鶴子間索道　鶴子側ステイション綱受車並立軸之図」(昭和 20 年 5 月 8 日)〈366〉

・「鶴子側ステーション配置図」(昭和 20 年 3 月 23 日)〈367〉

・「本山－鶴子間索道　傳導用歯車之図」(昭和 20 年 5 月 3 日)〈368〉

・「金銀銅鑛試掘鑛区図」(昭和 25 年 6 月 11 日出願)未指定・整理番号Ｈ -12 ＊鉱区図面

○ 貨幣博物館絵図

1「鶴子百枚間歩鋪内稼所振矩墨引」＊振矩図

2「弥十郎間歩敷内絵図」＊敷絵図

○ 舟崎文庫(新潟県立佐渡高等学校同窓会)所蔵絵図　＊〈　〉は目録番号。

1「銀山岡絵図」(延享 4 年)〈1210〉＊岡絵図

2「松ヶ沢・仕出喜沢屏風沢絵図」(原図慶安 5 年、天保 2 年写)〈1211〉　＊岡絵図、岩木文庫「松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図」(原図慶安 5 年、安政 6 年写)〈354〉とほぼ同じ内容。
3「鉱山金坑絵図」(年代不明)〈1224〉〔第 16 図〕＊岡絵図
4「鶴子間歩壱通御取明御普請目論見墨引」(年代不明)〈1226〉＊敷絵図
5「鶴子屏風沢坑口絵図」(年代不明)〈1232〉＊岡絵図、目録名称間違い。絵図内容は仕出喜沢の坑口を描いた岡絵図。
6「御料局佐渡鉱山之図」(明治 23 年)〈1235〉〔第 25 図〕＊岡絵図
7「御料局佐渡鉱山之図」(明治 23 年)〈1238〉〔第 25 図〕　＊岡絵図、明治 26 年に再版。

○ 真柄家所蔵絵図

1「鶴子惣振矩図」(元禄 14 年写)＊振矩図

○ 味方家所蔵絵図(新潟県指定文化財)　＊〈　〉は目録番号。

1「〔鶴子しなみ沢煙貫釜ノ口開発風合式供物図〕」(文久 3 年ヵ)〈13〉〔第 24 図〕＊鉱山祭祀図
2「弥喜知間歩」(安政 5 年ヵ)〈28〉〔第 21 図〕＊敷絵図
3「鶴子間歩御取明御普請之節、煙貫新規ニ切立相成、和田与太郎新口を結び候図」(文久 2 年)〈39〉＊坑口図
4「弥喜知間歩墨引」(安政 7.2.5、元治元年追加)〈68〉〔第 21 図〕＊敷絵図
5「銀山岡絵図」〈109〉〔第 17 図〕＊岡絵図
6「〔絵図入袋〕」(表書きに慶安 5 松ヶ沢・仕出喜・屏風沢山形のある袋あり)〈139〉
7「〔鶴子立合筋見取図〕」(天保 9 年)〈141〉〔第 18 図〕＊岡絵図
8「百枚間歩墨引」〈143〉〔第 23 図〕＊敷絵図
9「弥十郎間歩鋪内墨引」(文久 3 年)〈152〉＊敷絵図
10「鶴子間歩惣敷絵図」(宝永 3.8 元図ヵ)〈195〉〔第 15 図〕＊敷岡絵図
11「鶴子沢重一郎間歩墨引」(慶応 3 年)〈196〉〔第 24 図〕＊敷絵図
12「〔鶴子本口脇より岡割目論見墨引図〕」(安政 5 年)〈197〉〔第 19 図〕＊岡絵図

○ 山田家所蔵絵図

1「相川・鶴子古絵図」(年代不明)　＊岡絵図、相川金銀山・鶴子銀山の一部を描いた岡絵図。

○ 八幡藤沢家絵図

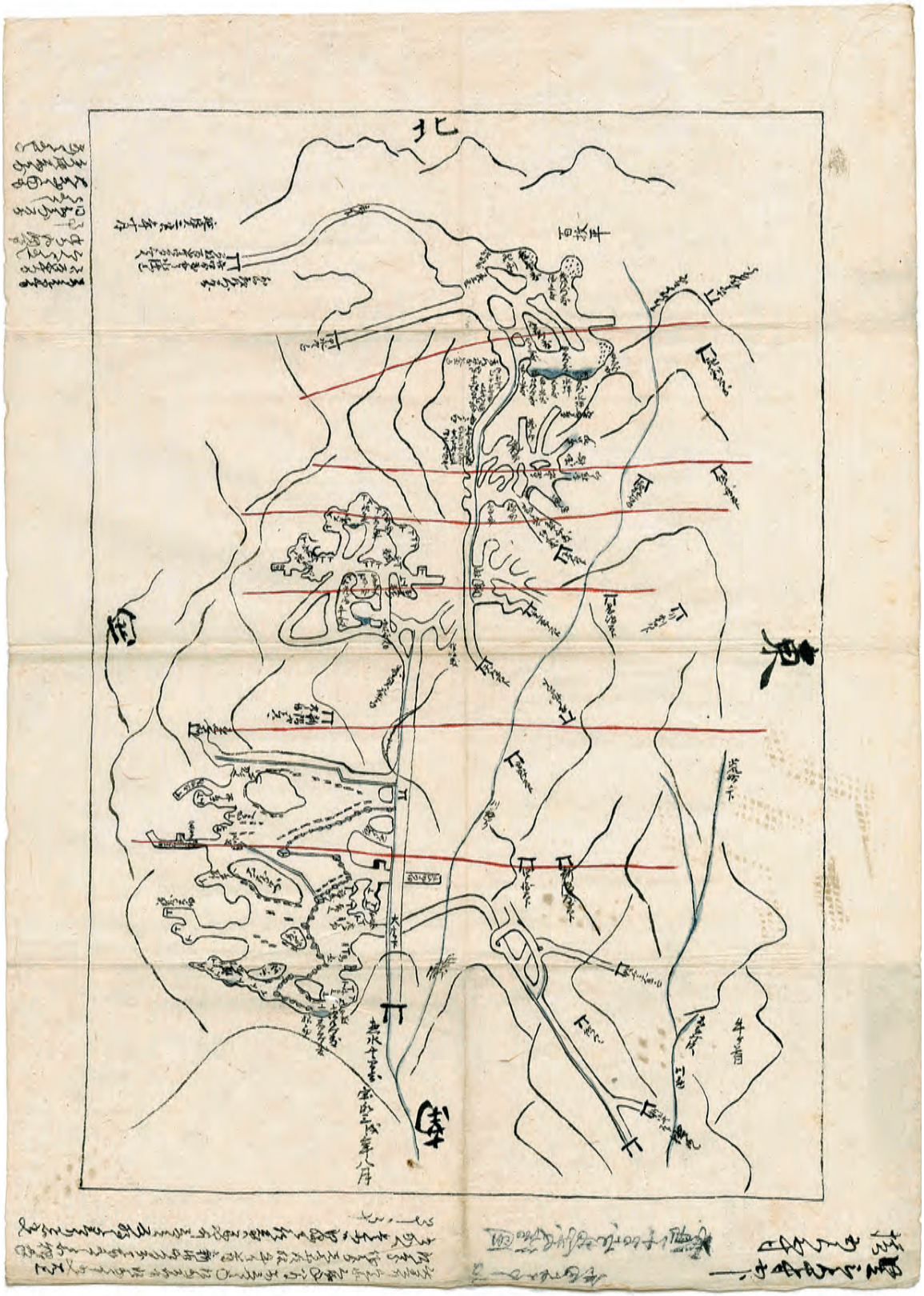
1「西五十里村ノ内仕出喜間歩敷絵図」(延享 3 年)　＊敷絵図、仕出喜間歩の坑内を描く。

関 連 資 料

第13図　「佐渡ー国海岸図」（天保13年（1842））沢根村から窪田村付近抜粋

（相川郷土博物館）

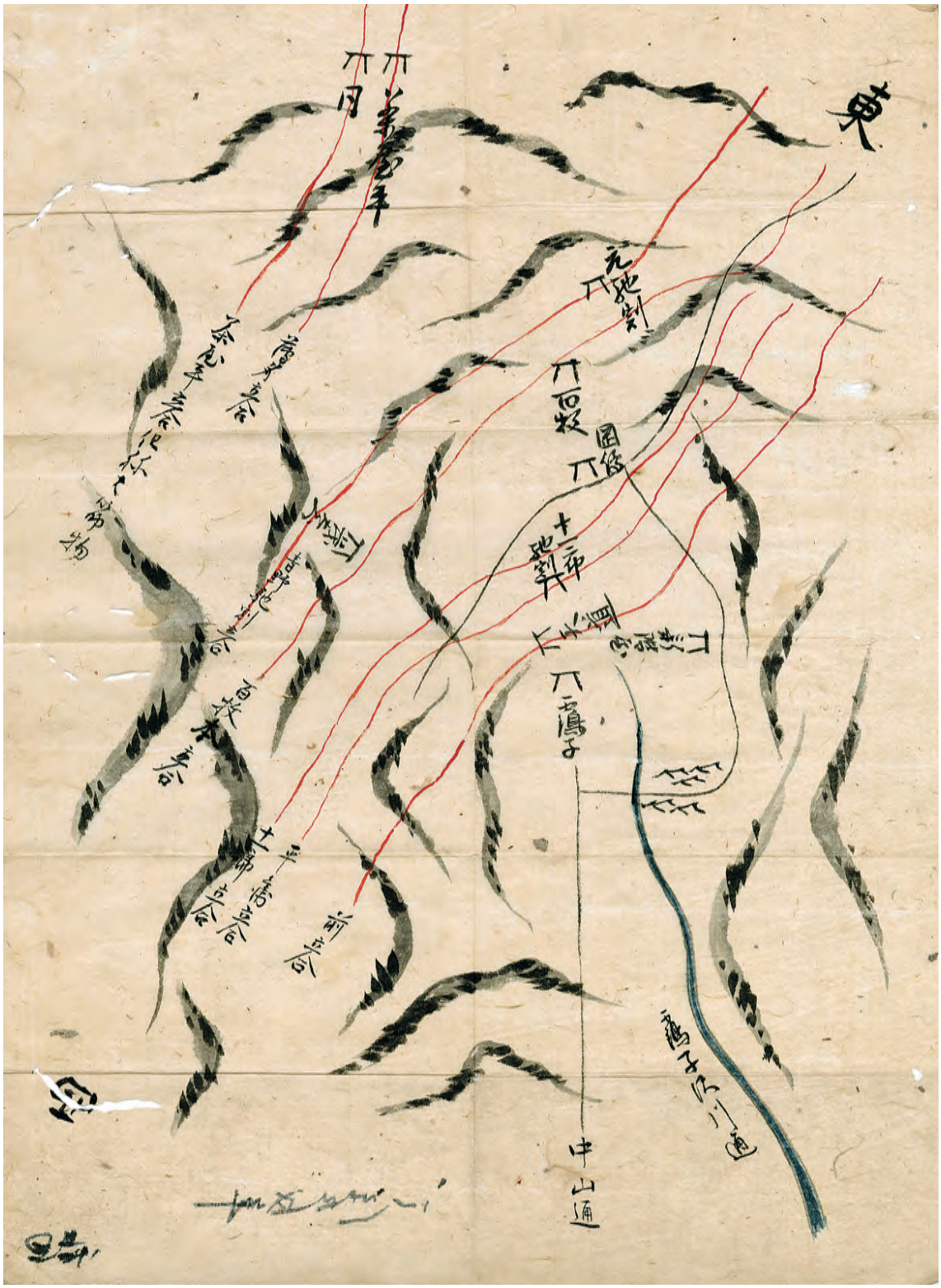
第14図　「松ヶ沢・仕出喜沢・屏風沢草見立絵図」〔安政6年（1859）写、元図慶安5年（1652）〕　（岩木文庫）



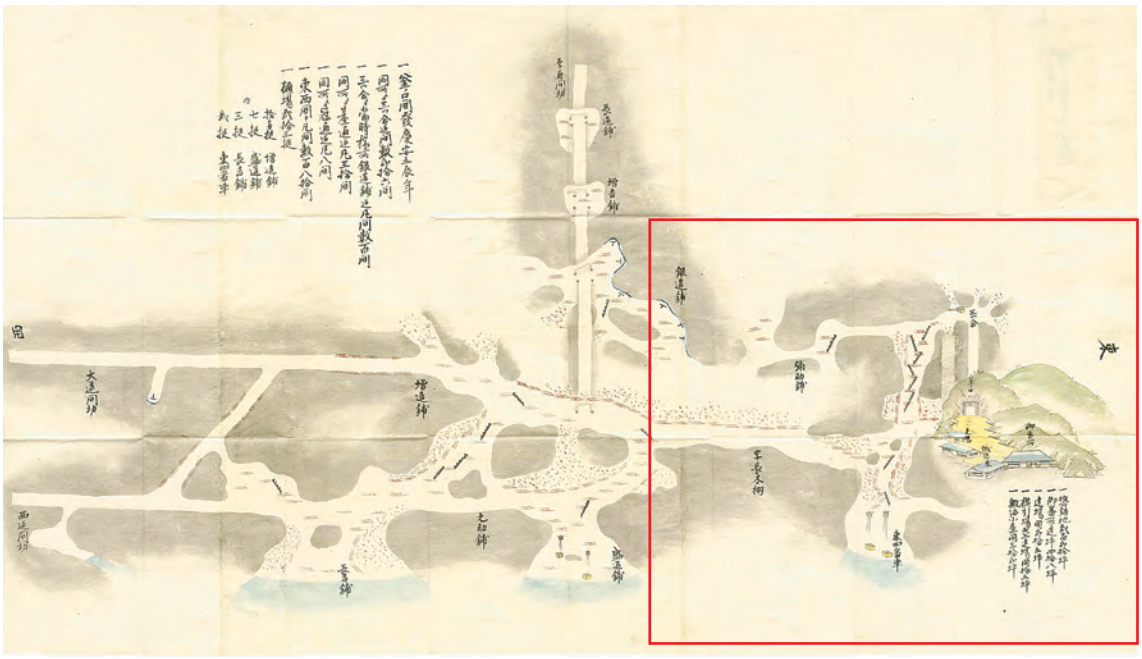
第15図　「鶴子間歩惣敷絵図」〔元図宝永3年（1706）か〕　（味方家寄託資料）

第16図　「鉱山金坑絵図」〔年代不明〕　（舟崎文庫）

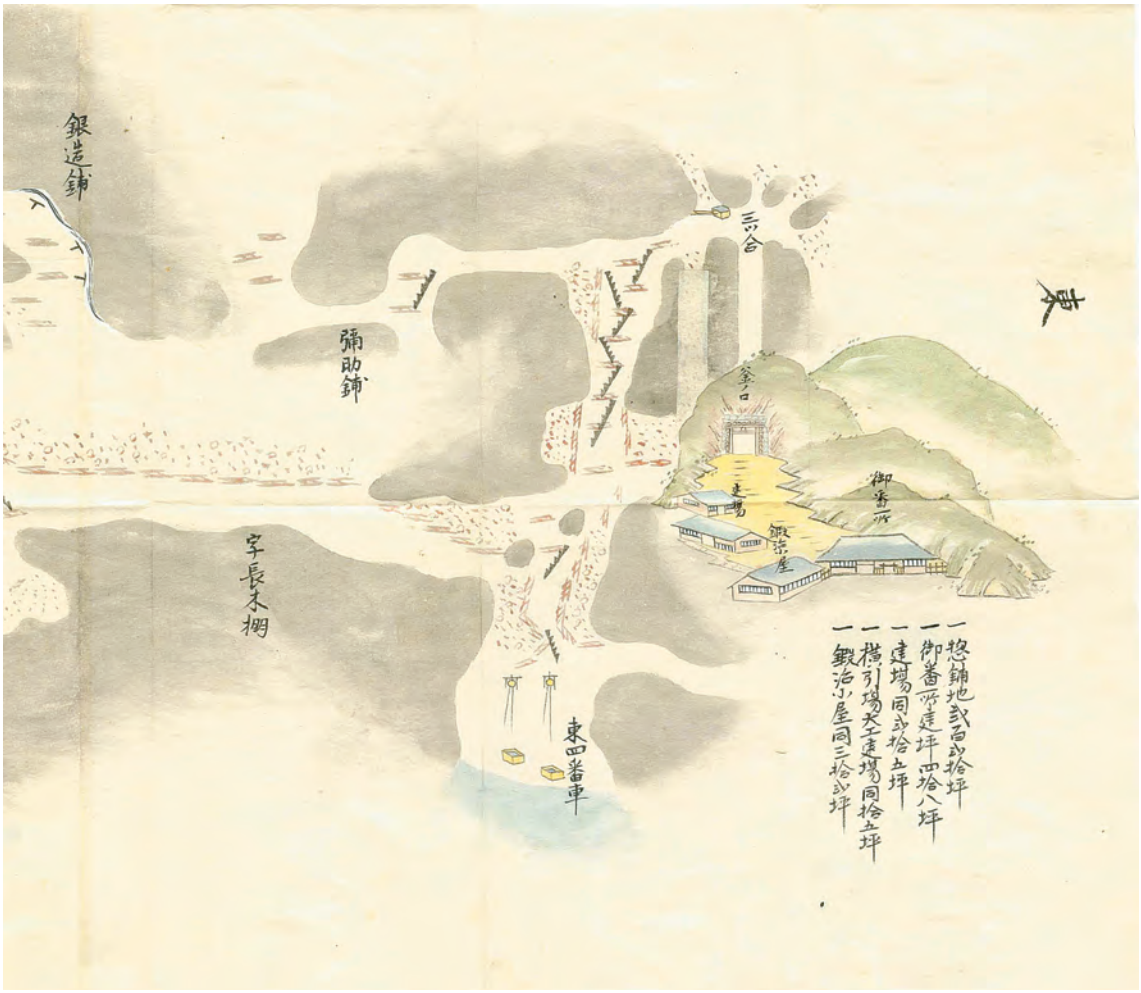
第17図　「銀山岡絵図」〔年代不明〕　（味方家寄託資料）



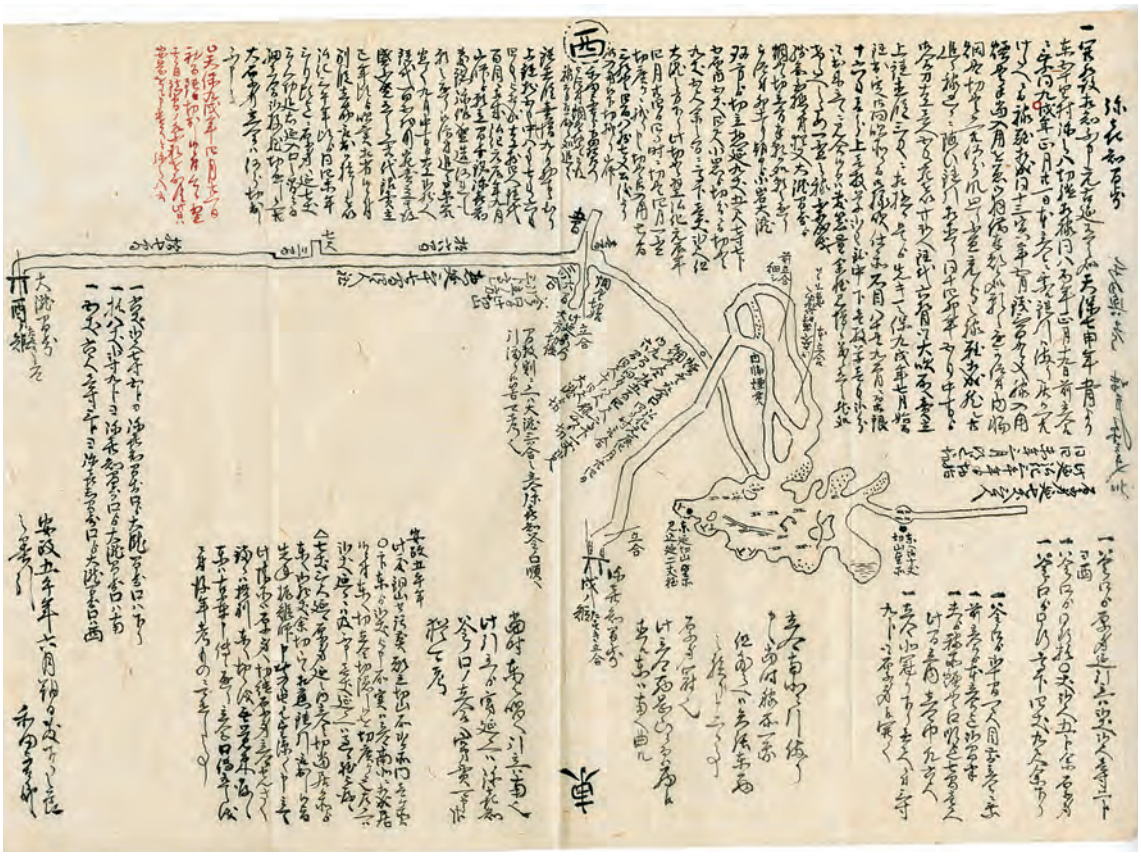
第18図　「〔鶴子立合筋見取図〕」〔天保9年(1838)〕　（味方家寄託資料）



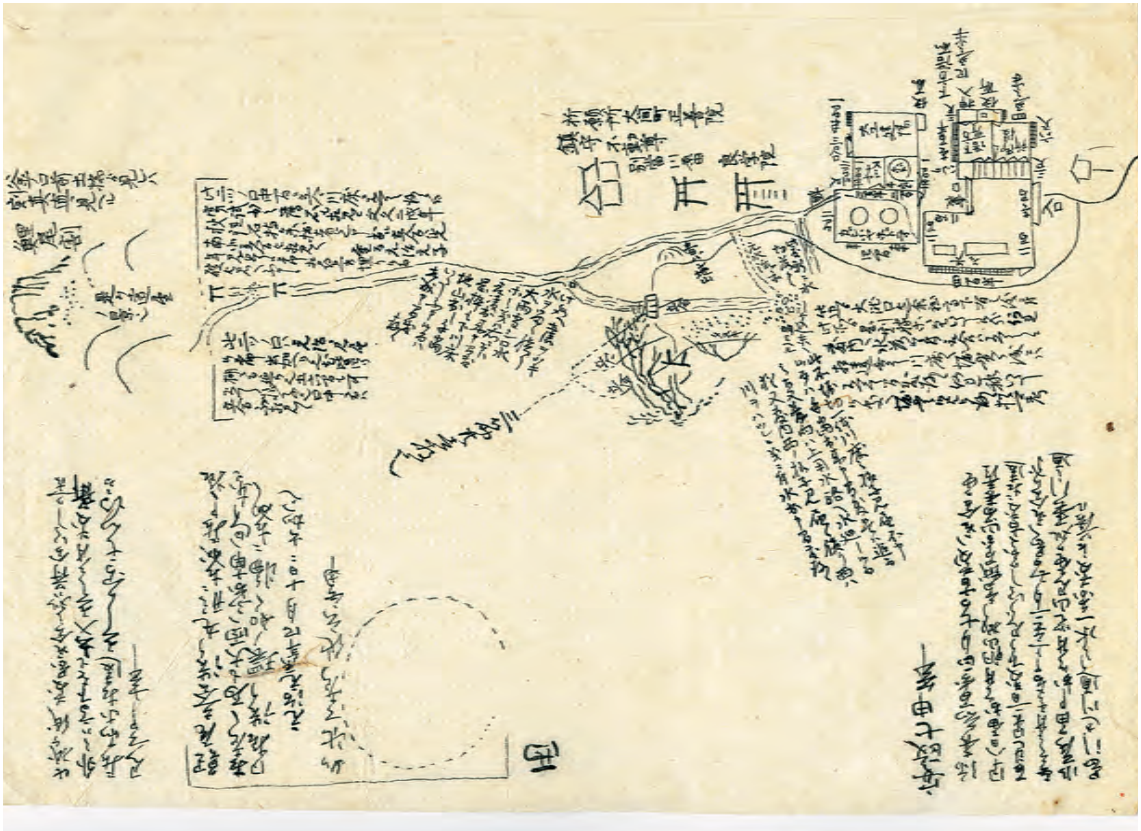
第19図　「佐州金銀山之内彌十郎間歩鋪内墨引」〔年代不明〕　（群馬県赤石家文書）



上図釜ノ口部分　抜粋



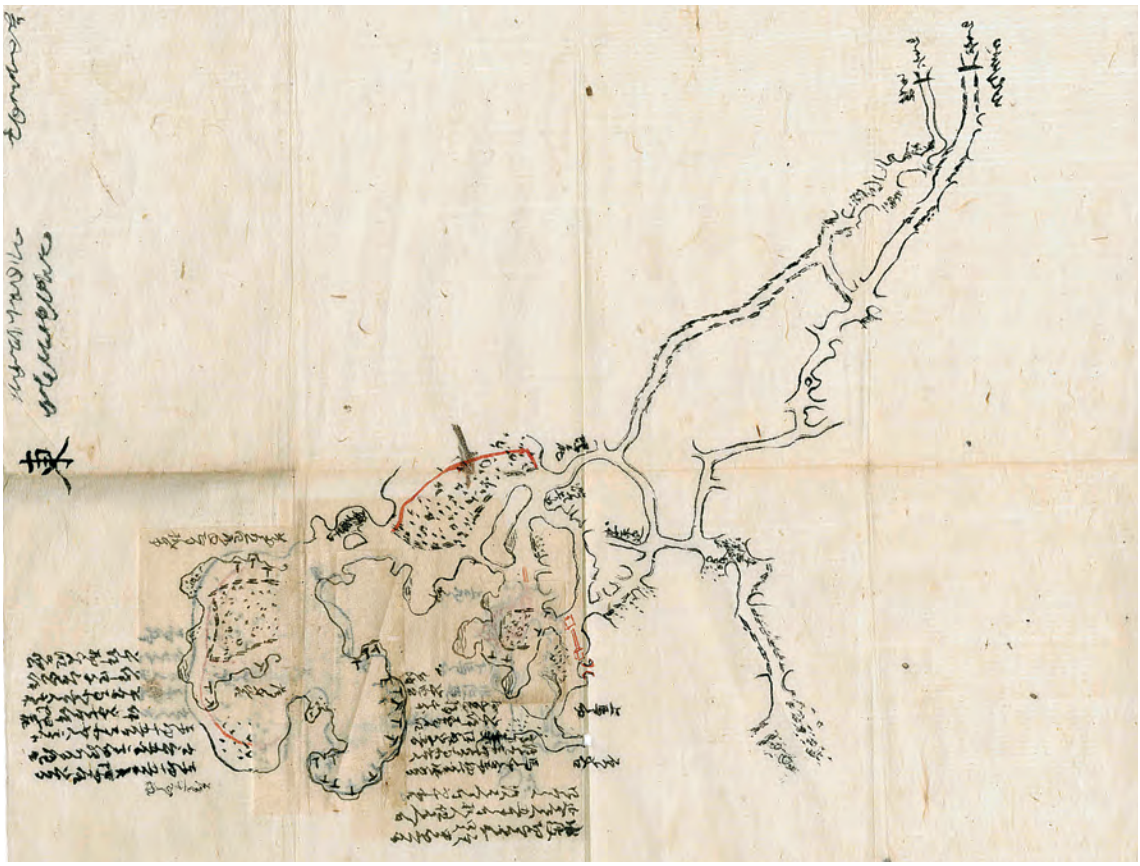
第20図　「弥喜知間歩」〔安政5年（1858）か〕　（味方家寄託資料）



第21図　「弥喜知間歩墨引」〔安政7年（1860）〕　（味方家寄託資料）

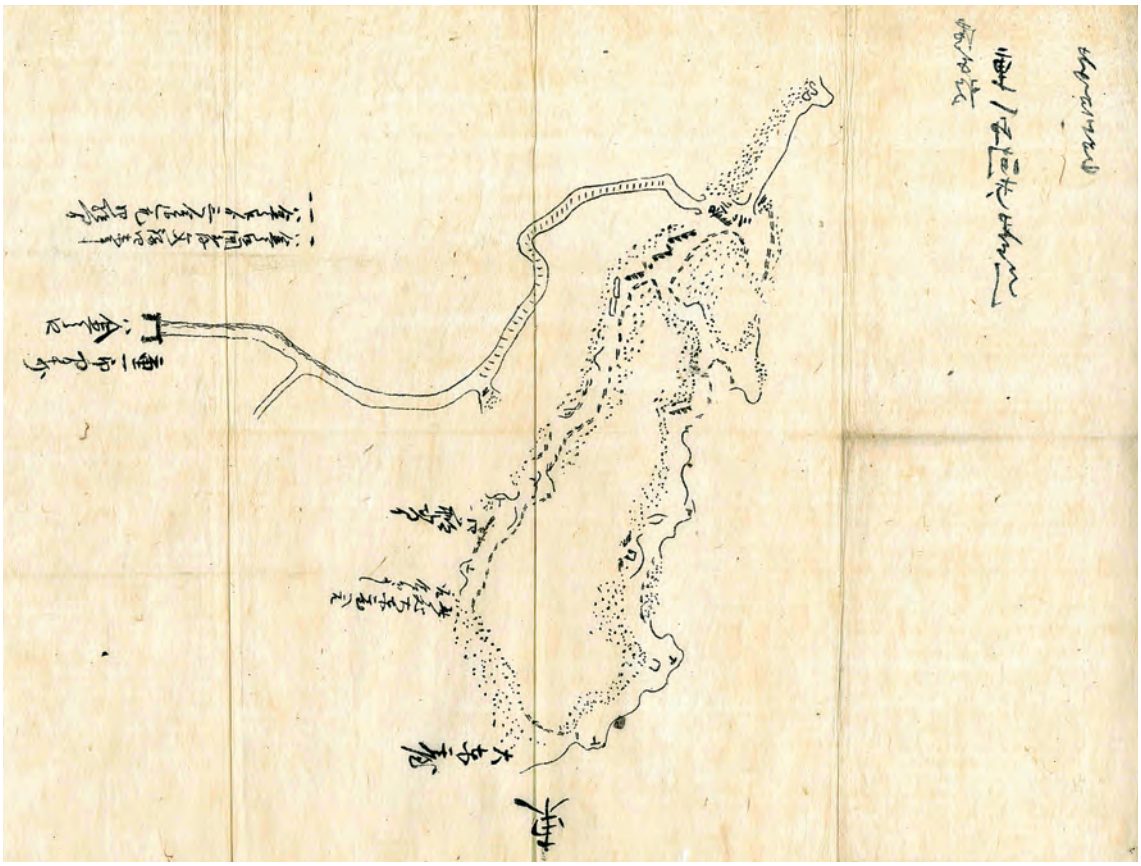
第22図　「弥十郎間歩鋪内墨引」〔年代不明〕　（株式会社ゴールデン佐渡）

上図釜ノ口部分　抜粋

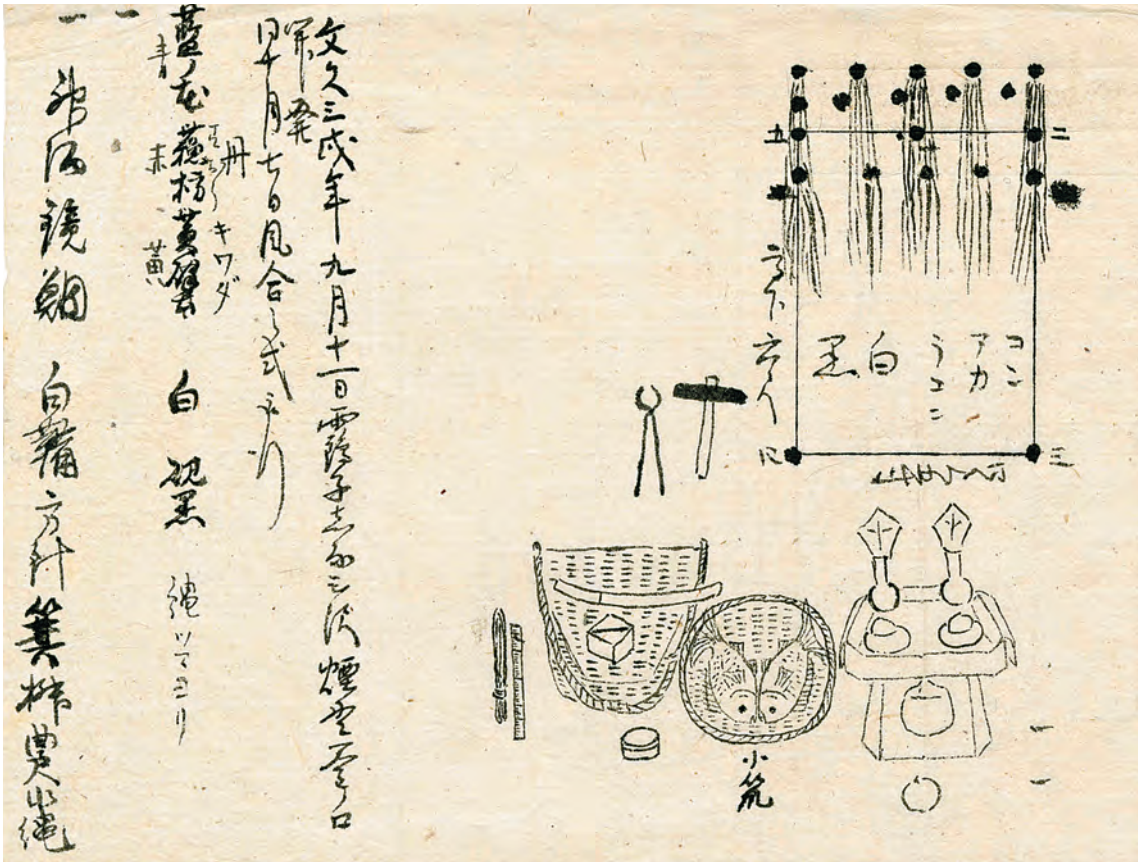


第23図　「百枚間歩墨引」〔年代不明〕　（味方家寄託資料）

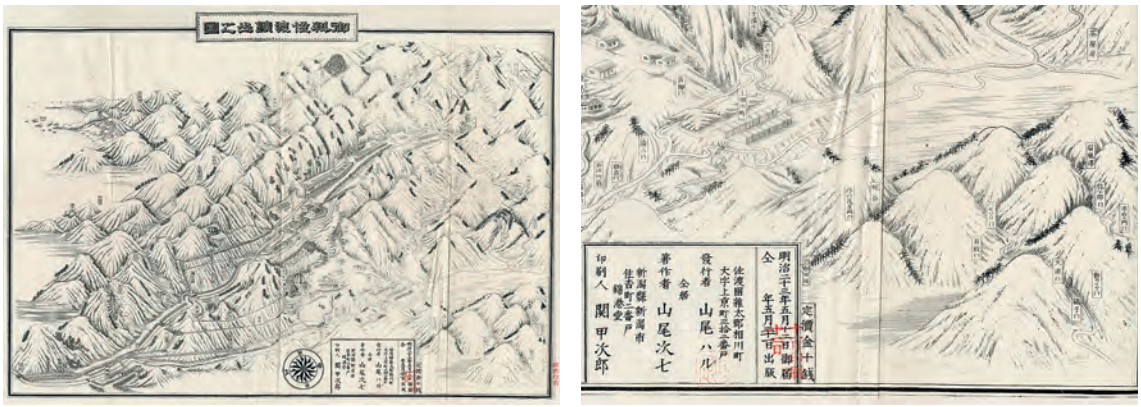
第24図　「百枚間歩敷内絵図」〔文化年間〕　（株式会社ゴールデン佐渡）



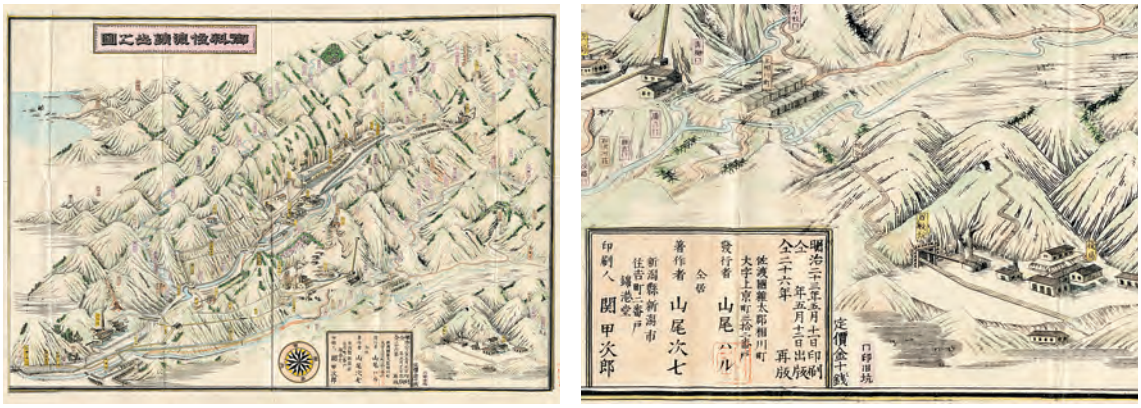
第25図　「鶴子重一郎間歩墨引」〔慶応3年（1867）〕　（味方家寄託資料）



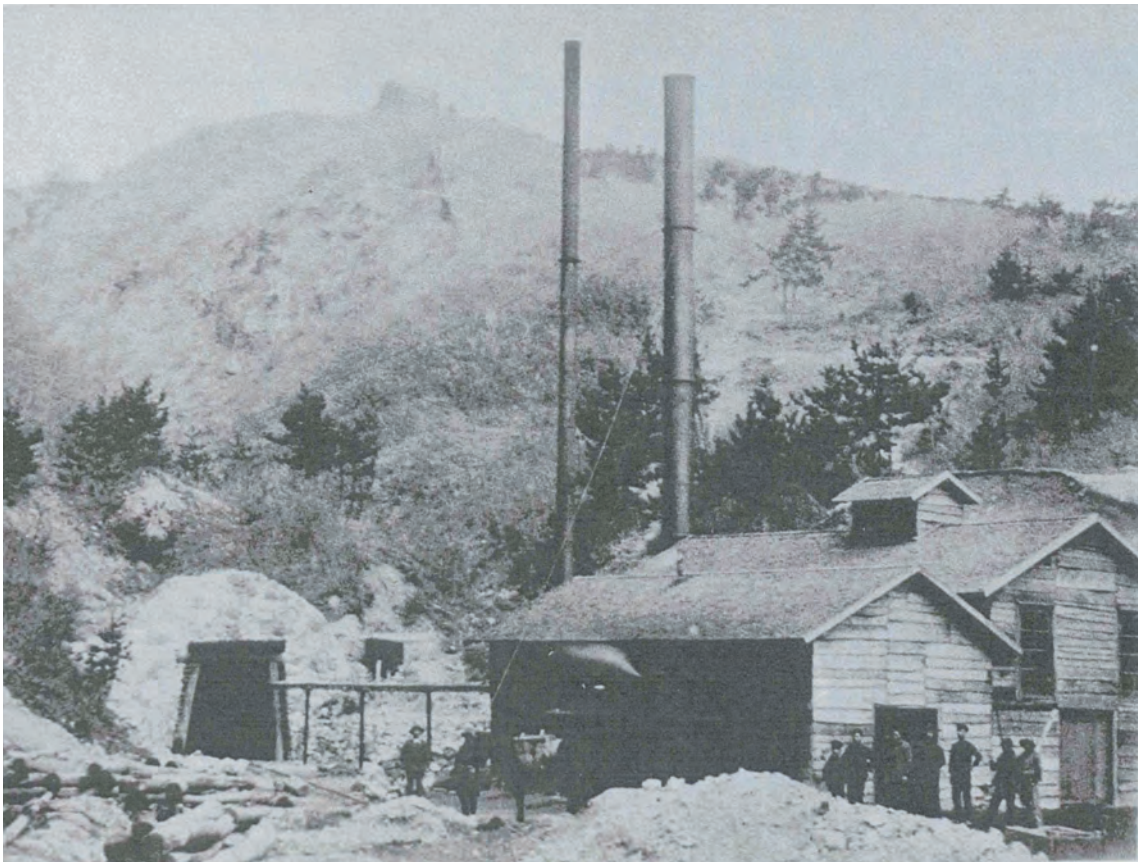
第26図　「鶴子しなみ沢煙貫釜ノ口開発風合式供物図」〔文久3年（1863）か〕　（味方家寄託資料）



第27図　「御料佐渡鉱山之図」〔明治23年（1890）・同部分（右図）〕　（舟崎文庫）



第28図　「御料佐渡鉱山之図」〔明治23年（1890）・同26年再版・同部分（右図）〕　（舟崎文庫）



第29図　大正初期の鶴子坑

鶴子銀山跡関連文献資料

凡　例

【附編】では、鶴子銀山跡に関連する史料を収録した。
・収録した史料は、原則として末尾に出典を記した。
・収録した史料は、それぞれの原典の記述に従っているため、必ずしも統一された表記となっていない。
・一部旧漢字については、読みやすくするために新漢字に変更した。

A　鶴子銀山の発見と概要

史料一　『佐渡年代記』にみる銀山の発見と開発

鶴子銀山は天文十一年越後の国の者来りて土地の者と計り沢根の地頭本間摂津守に訴へ運上銀百枚を出して銀山を稼ぐ是を外山茂右衛門間歩と云　茂右衛門は越後より来たりし人の名也
天正年中景勝分国となりては外山と云所に陣屋を構へ代官山口右京をして守らしむ慶長二酉年よりは河村彦左衛門代ると云又本口といふ間歩は文禄四年五月廿四日石見の国の者三人　忠左衛門忠次郎忠兵衛　来りて初て稼くと云

『佐渡年代記』一

史料二　『佐渡古実略記』にみる銀山の発見と開発

鶴子銀山立始り之事　一、鶴子銀山ハ天文十一卯年越後国茂右衛門ト云者数年当国へ商ニ渡海、或時夜ニ入沢崎沖ヲ馳通リ船中ヨリ見レハ、沢根ニ当リ鉄吹炎ノコトク光空ニ移リ怪シケレハ、近ク船ヲ寄セ見レハ沢根ノ奥山ニ金気ノ立ニテソ有リケル、則此所ノ者ヲ語ヒ地頭本間摂津守ニ訴、壱ヶ月ニ銀百枚ノ運上ヲ指上銀山稼次第ニ盛リ、是ヲ外山茂右衛門間歩ト云、又百枚平トモ云　又此所ニ有之拾壱両間歩ト云ハ毎月金拾壱両宛ノ運上ヲ差上稼依而間歩ノ名トス其後四十八年ヲ経テ天正十七丑年在々地頭亡上杉景勝分国ト成故当初外山ニ陣屋ヲ立上杉目代山口右京差置此所本口ノ銀山ハ文禄四乙未五月廿四日石州忠左衛門同弟忠四郎石田忠兵衛三人ニテ稼初メ其比相川ハ無之　此所陣屋天正十七丑年以前ヨリ有之トモ云慶長二酉年ヨリ同八卯年迄七ヶ年川村彦左衛門同九辰年ヨリ同十五戌年迄七ヶ年保科喜右衛門相守此所町筋モ当時相川ノ通上大工町中大工町下大工町四十物町京町各三町宛有之

「佐渡古実略記」四『佐渡国略記』上巻

史料三　『佐渡志』にみる銀山の発見と開発

銀
天文十一年の夏越後の国の商船沢根の浦に纜を繋て終夜天色を望むに金銀の気空中を衝くを怪み逆旅の主人に相議りて地頭本間氏に告け鉱脈を尋ねて鶴子山に開きけれとも功いまた成さるを嘆き後越後の国の領主上杉謙信にかくと訴えけれは入道が下知として同国魚沼郡上田村の金穿人夫数百人を渡らしめて天文の末弘治の頃までに銀銅を得たる中に金も少しく交りたれとも費用を補ふに至らす〈後略〉

『佐渡志』巻之十五

史料四　『撮要佐渡年代記』にみる銀山の発見と開発

一、五月四日より佐渡鶴子銀山始る。或記五月廿日より始ると云忠兵衛、忠次郎、忠左衛門、三人稼方の頭なり。

「撮要佐渡年代記」『佐渡叢書』第四巻

史料五　『佐渡四民風俗』にみる銀山の発見と開発

（天保十一年追加）
一、佐州金銀山の開発は、文禄三午年越後国の商人渡海の節夜中に棹崎　当時の沢崎　の沖を馳通候処、北方に当り鉄吹炎のことき光相見え候故、船を漕寄見候処、沢根の奥山に当て立登る地気に候儘能々見定置、其後右の船人共当国え来り、沢根の地頭え訴え候て、件の光気立候処え至り考を以て相稼、莫大の盛を得申候由、旧記に相見え申候。又一説に、文禄四未年石見忠左衛門、同人忠四郎、石田忠兵衛此三人佐渡え来り、鶴子にて稼所を見立、同年五月より相稼夥敷盛を得る。是佐州金銀山の始祖也。此節相川は山林竹林木茂り候て、人家漸く五六軒有之、陣屋は鶴子に有之由相見え申候。此両説の内、文禄四未年より開発の節宜敷御座候半歟、山師共旧記を以て十二年先延享二丑年銀山見分衆え書出候も、文禄四未年と申事に御座候。但鶴子陣屋の場所は近年迄御稼有之鶴子にては無之、沢根の近辺元鶴子と申所に有之、町名も当時相川中通の町名何れも鶴子を移し候由に御座候。且又相

川銀山開発の義は慶長六丑年三浦治兵衛、渡部儀兵衛、同弥次右衛門と申者共鶴子にて相考、北の高山草木の生立、岩根の重り様慥に金銀有之所と相考、其辺に至て鮎河（当時の濁川）を伝て分登り、金銀山稼の所を見立稼入候へは、次第に盛を得、其後段々稼方相増鶴子に御陣屋有之候ては御用向差支候に付、大久保石見守殿御支配、慶長九辰年相川え御陣屋を御引移被成候由に御座候。右同年より同十四酉年迄六ヶ年の間に伊豆、石見両国より金銀山の巧者を御呼寄山仕と名付候て（享保年中より山師と御改被成候）金銀山を御預け被成候。人数凡三十六人、稼所三十六ヶ所一人に一ヶ所宛御預被成候由、則山仕為御合力一ヶ年に御米蔵二百俵つゝ被下、其外油、鑽炭、留木、松蝋燭等迄被下候由申伝。

『佐渡四民風俗』

史料六　『佐渡国誌』にみる銀山の間歩

鶴子銀山

佐渡ノ銀山中最古キモノナリ鶴子ハ元一小区域ノ地字ナリシモ後ニハ近傍諸坑ニ冠スル総称トナリ時トシテハ沢根五十里ノ両町ヲモ合セタル名トシテ用ヒラレタリ其ノ諸坑今ハ全部廃業シタレトモ猶ホ絶望スヘキ鉱区ニ非スト云フ坑名頗ル多ク中ニ往昔産額ノ優ナリシモノモアリ

鶴子間歩　十一郎間歩　茂右衛門間歩　百枚間歩　佐兵衛間歩　長右衛門間歩　天道間歩

新階屋間歩　三右衛門間歩　下戸間歩　岡島間歩　太郎太夫間歩　以上ハ沢根ノ地域ニ属セリ

仕出喜間歩　弥十郎間歩　藤兵衛間歩　松ヶ沢間歩　大瀧間歩　市右衛門間歩　庄右衛門間歩　以上ハ五十里ノ地域ニ在リ

『佐渡国誌』

史料七　『鉱山発達史』にみる銀山の発見と開発

発見の時代及沿革

発見ノ時代詳ナラス口碑ノ伝フル所ニ依レハ遠ク天文十一年中越後ノ商某鶴子山ニ於テ初メテ金銀鉱脈ヲ発見セリト云フ然レトモ当時未ダ採掘ノ業ニ着手セズ文禄二年ニ至リ西三河金山ヲ開キタルモ事業極メテ微々タリ降テ慶長六年ニ至リ該鉱業主鶴子山ノ北ニ方リ磐石草木ノ他山ニ異ナルアルヲ望見シ踏検シテ濁川ヲ遡リ清次大切両山脈間父山ト称スル処ニ於テ新ニ金銀脈ヲ発見セリ〈後略〉

『鉱山発達史』

史料八　『佐渡四民風俗』にみる佐渡島内の金銀山の概要

（天保十一年追加）

一、往古鶴子相川其外在々の金銀山ヶ所慥成書物所持不仕候。寛永十三子年頃は相川、鶴子、入川、大津、（当時の大須と相見申候）田切須、新穂是等のヶ所に相見え申候。十カ年以前寛延元辰年江戸より御越候御勘定神山三郎左衛門殿、吉田宇内殿え差出候古今の稼所間歩名相知れ候分総て百四十六ヶ所其内相川銀山稼捨古間歩九十二ヶ所、在々銀山稼捨古間歩三十三ヶ所、相川にて稼有之間歩々々二十一ヶ所、如此に候。此二十一ヶ所も其後段々稼捨候場所多く御座候。

『佐渡四民風俗』

史料九　『枌陵堂随見随記抄』にみる間歩の開休坑年歴

枌陵堂随見随記抄（巻五）

（慶長～明治）

諸山開休坑年暦

今ハ大竪・高任・大切等ノ総名ノ下ニ採掘サレテ居ルガ、旧時ニハ十数ノ鉱区ガアッテ、稼人ニ由テ制度ヲ異ニシテ居タソウデアル

○本途八ヶ所

〈中略〉

屏風沢

弥十郎　開　承応元年　休（不詳）　再坑　天保九年　休　慶応二年　三坑　明治二年

○御仕入稼十一ヶ所　内一ハ雲子

〈中略〉

○御直山

百枚　文禄四　不詳　再　天保七　再休　明治卅二

弥吉　不詳　不祥　再　天保七

〈中略〉

崔子（鵜）仕出来　延享二年六月開

〈中略〉

崔子（鵜）天道　同年（寛延）八月開

〈後略〉

『佐渡近世・近代史料集―岩木文庫―』下巻

B　近世の鉱山開発

史料一〇　慶長九年　草見立史料（鶴子銀山関係のみ抜粋）

〔一〕つるしの内遊白ふる間歩者遊白五貫目ふるまふ二口おさらへ可申候くさりハ少成共あい申候ハハ可申上候我等しんろう分之儀ハ石州銀山かなこなみニ可被下候若油断仕候ハハ御山めしはなさるへく候、以上

たつ卯月八日　　しやうないぬいのしやう　㊞

〔二〕ひやうふ沢之内草みたて候事つるニつき次第ニちうしん可申候仍如件
慶九　四月廿九日　　柏崎の藤左衛門　㊞
つるしより

〔三〕つるし弥十郎間歩まへのことにて御座候善次間歩可然成候ハハ弥十郎間歩もふしん申付以て可被成候御けんし御たて候て可被下候みせ申度候事
辰四月七日　　ほしの　久　三　郎　㊞
ながた　久左衛門　㊞
八嶋長吉　様

〔四〕沢根ゆふえん間ふさらへニ申請御座候旨仰付候而可被下候鏈ニ相申候者早々御注進可申候、以上
辰ノ五月十四日　　松田権右衛門　㊞
御　奉　行　様

〔五〕於鶴子遊円間歩さらえニ被仰付候而可被下候就其者つる□出来申候ハハ早速可申上候、以上
辰卯月廿九日　　松田　権右衛門　花押
進上

〔六〕さわねノ袖山ノ内草見たて仕候ハハ即ちう進可申上候為其一筆如此候、以上
たつ卯月廿六日　かわらたノ　　新　み　立
御奉行衆様参

〔七〕さわね袖山ノ内草見たて仕候くさりニ付候ハハ即ちう進可申為其一筆如此候
卯月廿六日　　松田おふみ
孫　左　衛　門　㊞
御奉行衆様参

〔八〕びやうふ沢之内草みたて候事
つるニつき次第ニちうしん可申候仍如件
慶九　四月廿九日　つるしより　　柏崎の藤左衛門　㊞

相川郷土博物館所蔵「乙種文書」『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一一　慶長十一年　佐州銀山諸御直山鍛冶炭渡帳（鶴子銀山関係のみ抜粋）

〔一〕（九月十日）
同日　鶴子屏風沢大横相
一、拾俵　同所　　山主　弥三兵衛
三右衛門
平太夫

〔二〕同日　鶴子わり間歩
一、拾俵　いかり御十分一　　山主　四人

〔三〕十一月八日　鶴子内山大水貫之内切りたて御
普請候
一、十俵ハ　いか里御十分一ニて　　山主　かゞ四兵衛

〔四〕十月廿七日　つるしびやうぶ沢江戸横相
□拾俵ハ　同所ニて　　山主　江戸勝右衛門
〈中略〉
同廿八日　つるしわり間歩
□拾五俵ハ　同理り　　山主　漆谷与三左衛門

〔五〕（二月十四日）
同日　鶴子屏風沢大横相
一、拾俵　いかり御十分一ニて　　山主　弥三兵衛
三右衛門
平太夫

〔六〕（六月十九日）
同日　鶴子大横相近江左兵衛間歩
一、拾俵　同理り　　山主　才兵衛

〔七〕（十一月）
同廿二日　鶴子わり間歩
一、拾俵　同所ニて　山主　四人

〔八〕同月十五日　鶴子屏風大横相
一、拾俵　五十里御十分一ニて
山主　大坂宗夕

〔九〕（十一月廿四日）
同日　鶴子内山寄合間歩入用
一、拾表ハ　五十里御十分一ニて
山主　丹波清兵衛
坂井才二

〔一〇〕五月十二日　鶴子どろ間歩へ
一、拾五俵ハ　いか里御十分一ニて
山主　五人
同十四日　鶴子屏風沢江戸大横相
一、拾俵ハ　同理り　山主　江戸勝右衛門

〔一一〕十月廿八日　鶴子わり間歩
一、五俵　いかりニて　山主　四人
同日　鶴子屏風沢大横相
一、拾俵　同所ニて　山主　大坂宗夕

〔一二〕（十月）
同七日　鶴子番やノ下わり間歩
一、拾俵　同所ニて　山主　四人

〔一三〕（五月三日）
同日　屏風沢宗徳大横相
一、拾俵ハ　同所ニて　山主　田中助兵衛
丹波清兵衛

（五月）
同四日　屏風沢江戸大横相
一、拾俵ハ　同理り　山主　江戸勝右衛門

〔一四〕（卯月）
同七日　鶴子どろ間歩
一、拾五俵　同所ニて　山主　味方孫太夫
関原主兵衛
若狭弥兵衛
鶴賀七介
かゞ藤右衛門

〔一五〕（十月廿日）
同日　鶴子内山より相間歩
一、拾俵　同所　山主　坂井才二
丹波清兵衛

〔一六〕同廿三日　鶴子内山大水貫
一、拾俵ハ　同所ニて　山主　かゞ四兵衛

〔一七〕（九月）
同十六日　鶴子番や下わり間歩
一、拾俵　同所　山主　四人

〔一八〕（三月カ）
同廿八日　鶴子屏風沢同横相
一、拾俵　同所ニて　山主　江戸勝右衛門
同日　鶴子同横相
一、拾俵　同所ニて　山主　近江左兵衛
同日　鶴子屏風沢宗徳横相
一、拾俵　同所ニて　山主　田中助兵衛
丹波清兵衛

〔一九〕同廿四日　屏風横相へ
一、五俵ハ　同ことハり　番衆　内藤伝内

〔二〇〕（卯月）

同廿五日　鶴子どろ間歩へ
一、十俵ハ　同ことハり　山主　五人

〔二一〕同廿三日　鶴子屏風沢横相
一、拾俵ハ　同所ニて　山主　大津市右衛門
〈中略〉
同日　鶴子かゞ四兵衛大水貫之内今度
新成ノ普請
一、拾五俵　同所ニて　山主　かゞ四兵衛

〔二二〕（三月廿四日）
同日　鶴子屏風沢
一、拾俵　山主　大坂宗夕

〔二三〕同日　鶴子屏風沢大横相
一、拾俵　同所ニて　山主　弥三兵衛
三右衛門
平太夫

〔二四〕（十二月三日）
同日　鶴子四兵衛大水貫
一、拾俵　同所ニて　山主　かゞ四兵衛
船頭中

〔二五〕同五日　鶴子わり間歩へ
一、拾俵ハ　同所ニて　番衆　漆谷与三左衛門
〈中略〉
同日　鶴子大横相
一、拾俵ハ　同所ニて　山主　味方孫太夫
わかさ弥兵衛
関原主兵衛

〔二六〕□□日　鶴子大横相近江左兵衛間歩
□□俵　同断　山主　近□□□□□□
□□日　鶴子屏風大横相
□□俵ハ　同所ニて　山主　□□□□□□

「川上家文書」第一号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一二（慶長十年又は十一年ヵ）佐州銀山諸御直山蝋燭渡帳（鶴子銀山関係のみ抜粋）

〔一〕□□廿一日　鶴子屏風沢上絃間歩
□□□五千丁　同理り　番衆　岩乗甚兵衛
岩井兵吉

〔二〕同日　鶴子山先弥右衛門大よこ相
らうそくなり　番衆　もちや善右衛門
□□五千丁ハ　御運上屋ニて　小川彦八
谷林少介

〔三〕同日
□　五千丁ハ　鶴子かゞ四兵衛大水抜
らうそくなり　番衆　塩津又佐
御運上屋ニて　宮田次兵衛

〔四〕三月九日
一、五千丁ハ　鶴子屏風沢横相
同所ニて　番衆　岩乗甚兵衛
岩井兵吉

〔五〕同日
一、五千丁ハ　鶴子屏風沢御横相
同理り　番衆　岩乗甚兵衛
岩井兵吉

〔六〕廿日
一、壱万丁ハ　鶴子屏風沢横相
同理り　番衆　岩乗甚兵衛
岩井兵吉

〔七〕同日
一、五千丁ハ　鶴子屏風沢大横相

同理り　　番衆　岩乗甚兵衛
　　岩井兵吉

〔八〕卯月廿日
一、壱丁丁ハ　屏風沢上つる間歩　　山主　近江左兵衛
　　同理り　　番衆　岩乗甚兵衛
　　岩井兵吉

〔九〕同
□　五千丁　鶴子屏風沢横相　　番衆　岩乗甚兵衛
　　同所ニて　　岩井兵吉

「川上家文書」第二号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一三　（慶長十～十三年ヵ）佐州銀山諸御直山鍛冶炭渡渡帳（鶴子銀山関係のみ抜粋）

〔一〕同八日
一、拾五俵ハ　鶴子屏風大よこ相　　山主　大津市右衛門
　　同所ニて

〔二〕十日
一、廿俵ハ　屏風沢大横相宗徳間歩　　丹波清兵衛
　　いかりノ同所ニて
〈中略〉
　　同日
一、廿俵ハ　鶴子六人間歩　　番衆　安田藤五郎
　　いかりノ御十分一ニて

〔三〕同廿二日
一、拾五俵ハ　屏風沢大よこ相　　番衆　岩乗甚兵衛
　　いかりノ御十分一ニて
　　同廿三日
一、拾俵ハ　屏風沢大横相　　山主　江戸勝右衛門
　　同所ニて

〔四〕同日
一、廿俵ハ　鶴子内山大よこ相　　山主　五人
　　同所ニて
〈中略〉
　　同日
一、廿俵ハ　つるし左兵衛間歩　　山主　近江左兵衛
　　同所ニて
　　同廿七日
一、拾俵ハ　ひやうふ沢横相　　山主　大津市右衛門
　　同所ニて
　　同日
一、拾俵ハ　ひやうふ沢大横相　　山主　田中宗徳
　　同所ニて

〔五〕正月廿七日
一、拾俵ハ　鶴子六人間歩　　番衆　安田藤兵衛
　　いかり御十分一ニて

〔六〕同日
一、拾俵ハ　鶴子江戸横相　　山主　ゑと勝右衛門
　　同所ニて

〔七〕（正月）
　　十六日
一、拾俵ハ　鶴子わり間歩　　番衆　漆沢与三左衛門
　　五十里御十分一ニて
　　同日
一、拾俵ハ　屏風沢宗徳横相　　田中助兵衛ニ
　　同所ニて

〔八〕十二日
一、拾五俵ハ　さわね山かうかさわ
　　御公方山御用也　かちすミ

〔九〕
一、拾俵ハ　かちすミ　山先弥右衛門ニ渡し
　　右ハさわね山東横大横相ノ御用ニ候。以上

五月二日　　宗佐
木町ノ御十分一にて　岩惣
草勝

〔一〇〕申ノ八月二日
一、五俵者　五十里沢御番や下大横相
いかり御十分一ニて渡
山主　弥五右衛門

〔一一〕九月二日
一、弐拾俵ハ　屏風沢大横相鍛冶炭
木町ノ御十分一にて
奉行　岩乗甚兵衛
大工頭　平太夫

〔一二〕（十三日）
同日
一、拾俵ハ　鶴子屏風沢江戸横相　同
同所ニて　江戸勝右衛門

〔一三〕（九月十三日）
同日
一、弐拾俵ハ　屏風沢大横相　同
同所ニて　田中宗徳内□□□□□

〔一四〕（九月九日）
同日
一、廿俵ハ　鶴子屏風沢横相　同
同所ニて　奉行　岩乗甚兵衛

〔一五〕（九月十七日）
同日
一、拾俵ハ　鶴子内山近藤間歩
同所ニて　山主　五人ニ渡ス

〔一六〕同日
一、弐拾俵ハ　屏風沢大横相　同
同所ニて　奉行　岩乗甚兵衛

〔一七〕（十月）
二日
一、拾俵ハ　鶴子江戸よこ相　同
同所にて　江戸勝右衛門ニ渡ス
〈中略〉
同日
一、弐拾俵ハ　鶴子大よこ相　田中宗徳
同所ニて　□□□□
〈中略〉
同日　鶴子屏風沢大よこ相
」

〔一八〕（十三日）
同日
一、拾俵ハ　鶴子わり間歩大よこ相　同
同所ニて　奉行　漆谷与三右衛門

〔一九〕（十月）
廿二日
一、廿俵ハ　屏風沢大よこ相
いかりノ御十分一にて
大津市右衛門ニ渡
同日
一、廿俵ハ　鶴子近江左兵衛間歩へ
同所ニて　近江左兵衛ニ渡し

〔二〇〕同廿三日
一、廿俵ハ　鶴子屏風沢大よこ相　丹波清兵衛
いかりノ御十分一にて
〈中略〉

同日
一、拾俵ハ　屏風沢江戸横相
　　木町ノ御十分一にて　江戸勝右衛門
〔二一〕同日
一、廿俵ハ　屏風沢大よこ相
　同所にて　奉行　岩乗甚兵衛
〔二二〕同日
一、拾五俵ハ　鶴子近藤間歩　山主　山田太左衛門
　いかり御十分一にて　江戸勝右衛門
　玄竹
　余後久兵衛
　江戸勝右衛門
〔二三〕（霜月）
　十五日
一、弐拾俵ハ　屏風沢大横相　同（かちすミ）
　五十里ノ御十分一にて
　奉行　岩乗甚兵衛
　同日
一、弐拾俵ハ　鶴子内山六人寄合間歩
　五十里ノ十分一にて　さかい才次ニ
〔二四〕同日
一、五俵ハ　五十里沢御公方新切山
　同所ニて　山主　黒介
〈中略〉
　同日
一、五俵ハ　五十里沢大石間歩
　同所ニて　山主　江戸平太夫
〔二五〕同十七日
一、拾俵ハ　屏風沢江戸よこ相
　同所にて　江戸勝右衛門ニ
〔二六〕（七日）
　同日
一、拾俵ハ　屏風沢江戸横相
　同所にて　江戸勝右衛門ニ
〔二七〕同十一日
一、五俵ハ　いかり沢床や平清十郎間歩
　いかり十分一ニて　山主　清十郎
　同日
一、拾俵ハ　五十里沢大瀧下大横相
　いかり十分一ニて渡　山主　次郎兵衛
〔二八〕同廿一日
一、廿俵ハ　屏風大横相　大津市右衛門
　五十里ノ御十分一にて
〔二九〕（極月）
　三日
一、弐拾俵　鶴子とう間歩　久右衛門
　同所にて　源五
　次介
　甚左衛門
　遊白
〔三〇〕（極月）
　六日
一、弐拾俵　屏風沢大横相
　同所にて　番衆　岩乗甚兵衛
〔三一〕極月廿六日
一、廿俵ハ　鶴子ひやうふ沢田中宗徳大よこ相
　いかり御十分一にて　山主　丹波清兵衛

〔三二〕九日
一、弐拾俵ハ　屏風沢田中宗徳横相
　　同所にて　　丹波清兵衛
〈中略〉
　同日
一、三拾俵ハ　鶴子屏風沢大よこ相
　いかりノ御十分一にて
　　山主　大津市右衛門

〔三三〕同十六日
一、廿五俵ハ　鶴子江戸横相
　　同所　　山主　ゑど勝右衛門

〔三四〕十三日
一、拾五俵　屏風大横相　　山主　大津市右衛門
　同理リ

〈中略〉
　同十五日
一、拾俵ハ　鶴子大横相　　近江左兵衛門
　同理リ　　山主　才兵衛

〔三五〕卯月十八日
□　拾五俵ハ　屏風沢大横相
　　同理リ　　山主　大坂宗夕

〔三六〕同日
一、廿俵ハ　鶴子屏風沢大横相　同
　同所　　奉行　岩乗甚兵衛

〔三七〕
一、拾俵ハ　鶴子わり間歩
　五十里ノ御拾分一ニて　与三右衛門

〔三八〕同日
一、廿俵ハ　鶴子屏風沢御横□□□□□□□□□□
　同所ニて　　□□□□□□□□□□

〈中略〉
　十五日
一、拾俵ハ　鶴子近藤間□□□□□□□□□□
　同所ニて　　□□□□□□□□□

〔三九〕同十七日
一、廿俵ハ　鶴子内山横相　　番衆　前田藤五郎
　同所ニて　　山主　小野新兵衛
　　坂井才次

　同日
一、廿俵ハ　つるし内山八郎左衛門間歩
　同所ニて　　山主　味方孫太夫
　　鶴賀七介
　　弥兵衛
関原主兵衛
かゞ善右衛門
　同日
一、廿俵ハ　つるし内山かゞ四兵衛□横相
　同所ニて　　山主　□□四兵衛

〔四〇〕（九日）
　同日
一、五俵ハ　五十里沢床や平清十郎間歩
山主　清十郎

〔四一〕十八日
一、五俵ハ　五十里沢襠□間歩
　同所ニて　　山主　茂兵衛

「川上家文書」第四号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一四　慶長十一年　御前江上ヶ申跡書（鶴子銀山関係抜粋）　岩下惣太夫の陣屋から

〔一〕一、いかり山かハる儀無御座候、乍去よこあい之儀者宗佐談合仕無油断様ニ申付候
事

〔二〕一、つるし山ノ儀も無油断申付候、番屋ノ下わり間分、四兵衛大横相わきノ小山共より鏈少づつ出申候御事

〔三〕一、鶴子内山ニ坂ノ下間歩と申右間歩、さらゑニ渡申候処ニ大きなる鶴ニ相申候、ちと御普請申付候間、吹ミの儀ハ後より御注進可申上候、何も鶴子此以前よりハ御運上も可有御座候と奉存候、いかり沢御横相とも無油断御普請申付候事

〔四〕一、鶴子山相かハり不申候、萬主膳と談合申、是も無油断様に申付候事

〔五〕一、鶴子、いかり沢、小河何れも無油断申付候事

〔六〕一、いかり沢如御意横相とも切々見まわりやうす申付切セ申候、殊に伊豆あいこまの御横相之様子なとをも、いつこにも申聞情（精カ）を入申候事

〔七〕一、鶴子当年ハ山姿能く御座候主膳談合〈後　欠〉

「川上家文書」第七号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一五　慶長年間鍛冶炭渡帳ヵ（断片）

〔一〕同十八日　鶴子内山より相間歩
一、拾俵　同所ニて　山主　丹波清十郎
坂井才二

「川上家文書」第九号Ⅱ『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一六　慶長十五年　御前言上留書（鶴子銀山関係抜粋）

〔一〕一、鶴子外山茂右衛門間歩も谷より〈後欠〉

〔二〕一、鶴子諸間歩之儀主膳と致〈後欠〉

〔三〕一、鶴子外山相替儀無御座候事

〔四〕一、鶴子之儀も河主膳と談合〈後欠〉

〔五〕一、同所ひやうふ沢さらへ共鏈ニ付申候、壱荷ニ二三十目ふき御座候、是ハ□□惣兵　衛所ニて御座候間、さくをもいわセ、能番之者を口屋間歩共ニ申付候、其上切々参仕無油断様ニ申付候事

〔六〕一、鶴子内山かゝ四兵衛大水貫之内より右之外山茂右衛門間歩へ切申候横相も、ことのほかつち音ちかく御座候て、御渡海之節ハ打貫可申候と奉存候事
一、鶴子屏風沢、先書ニ如申上候、宗徳間歩の下ニ上つる共御座候而、弐三ヶ所申付候所ニ何も鏈ニ相申候、吹身も二三十目吹ほと御座候、手□ノ所ニ御座候間、主膳致談合能番衆へ申付候事

〔七〕一、鶴子外山茂右衛門間歩、此〈後欠〉
（少ツヽ）

〔八〕一、鶴子諸間歩ヨリ鏈出申候、茂左衛門間歩、兵介間歩も御ふしんてかたく申付候、先度時分ハ□□□□へいろニ罷成候、つるか〈後欠〉

〔九〕一、鶴子諸間歩も相かハる儀無御座候事

〔一〇〕一、鶴子外山茂右衛門間歩、敷なをり申能鏈出申候、同所兵介間歩も敷なをり申候、猶主膳と談合仕、方々御ふしん無油断申付候事
一、同所ひやうふ沢諸間歩、鏈ニ付申候、猶さけすゝミ申、能所へ〈後欠〉

「川上家文書」第十号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一七　（慶長十一～十五年）駿府戸田藤左衛門宛の留書（鶴子銀山関係抜粋）

〔一〕一、鶴子外山茂右衛門間歩、相替不申候事
一、同所かゝ四兵衛間歩ノ内よりノ横相かせかセ申候、二三日以前ニも参、指図をいたし手堅申付候
〈後欠〉

〔二〕一、鶴子外山孫太夫ニ被仰付候茂右衛門間歩、あいかハり不申鏈上り申候事
一、同所ひやうふ沢諸間歩、あいかわる儀無御座候事
一、鶴子相河鏈ぬけ道無油断夜待を出し申候事
一、諸りんし物取あつめうり申候事
一、戌ノ四月分諸御直山入用一毕並相河鶴子山衆間歩
〈後欠〉

〔三〕一、鶴子諸間歩、相替儀無御座候、是ハ主膳ヨリ悉可申上候

〔四〕〈前欠〉

無油断改申候、鶴子之儀も主膳と談合申、右同前ニ申付候、鶴子諸間歩之儀は、主膳ヨリ可申上候、替儀御座候は、追々御注進可申上候、以上

岩　惣太

〈後欠〉

「川上家文書」第十一号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一八　鍛冶炭渡帳（断片）ヵ

〔一〕〈前略〉
□月廿七日　鶴子屏風大横相　　山主大阪□□□
□拾五俵　　五十里御十分一ニて

「川上家文書」第十四号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料一九　（慶長）諸御横相油渡ス帳・諸山試鏈銀納帳ほか

〔一〕〈前欠〉
鶴子わり間歩へ　　番衆　渋谷与三左衛門
同理り
ひやうぶさわ宗徳大横相　　山主　田中助兵衛
□　同理り　　丹波清兵衛
〈中略〉
鶴子寄合間歩　　山主　丹波清兵衛
同理り
〈後欠〉

〔二〕□□日
□壱樽ハ　鶴子百枚□弥十郎　番衆　かちや善十郎
右同理り
〈中略〉
□□日
□一樽ハ　鶴子とろ間歩　番衆
右ハ同理り

「川上家文書」第十五号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料二〇　湧水により銀山開発に支障が出る

（慶長十三年）
今年二月大久保石見守佐州に渡海し検断する所掘返し地形と海の深サゆゑ、水湧出て金穿等も詮方なく其術計を失ふ趣書を呈して言上すと云長安は猶佐州に留りて来夏越後田畑広狭を改信州を歴て美濃国中境界を按検すと聞ゆ　但掘返せしといふは西三川金山の事ならんか或は鶴子銀山をさして云しも志るへからす
（註記）武徳編年集成に堀込とあり　本文記す如く返は込の誤ならんには西三川砂金山の事ならす金銀山敷内の事なるべし

『佐渡年代記』一

史料二一　佐渡奉行所より荻原重秀に送られた書状留

申六月廿九日宿（次を以）江戸へ上候状之留
宿次御証文を以江戸へ上候状之留
申六月十五日宿次ニ而江戸□□□□

〔一〕一、鶴子惣水貫間歩樋拾三艘目より西向へ山主十左衛門切山仕申候処ニ当月廿六日
白　銀鏈ニ

申
六月廿九日日付ノ状ニ誌
〔二〕一、鶴子惣水貫間歩山主加賀重左衛門儀当夏加州へ罷越申候所ニ秋時分より相煩先月十七日病死仕候由申来候、十左衛門二代勘内年弐拾九ニ罷成申候其身も慥成者ニ而御座候、御直山御預ヶ可被成候哉奉得御意候御事

「川上家文書」第二十一号『佐渡相川の歴史』資料集三

史料二二　山師秋田権右衛門より仕出喜間歩の大工飯米の依頼

（元和六年）
申、秋田権右衛門自分山西野村仕出喜間歩大工飯米御願申上候

「佐渡古実略記」六『佐渡国略記』

西野仕出喜間歩秋田権右衛門自分山也大工飯米願書有之

『佐渡風土記』中巻

史料二三　山仕秋田権右衛門による仕出喜間歩の開発

承応元辰年ヨリ万治元戌年迄七ヶ年ニ山主秋田権右衛門自分入用を以西野村仕出喜間歩百八拾間余切置、戌年ヨリ三拾四年過元禄四年正月ヨリ前立合切継

『佐渡国略記』

※同様の記述が『佐渡風土記』中巻にあり

史料二四　元和年間の御直山十六ヶ所の中に鶴子間歩の名がみえる

（元和八年）
此節御直山十六ヶ所ありて金穿の大工壹人に米四斗宛大工頭壹人に米八斗宛貸渡す事あり手形裏判は鎮目市左衛門なり右十六ヶ所の御直山と云は〈中略〉鶴子御直山間歩〈後略〉

『佐渡年代記』一

史料二五　元和八年の鶴子諸役銀高

元和八年ノ諸役銀高覚書ニ左ノ数ヶ條アリ
一銀十八貫二百五十五匁五分　鶴子小役
一銀九百二十目　鶴子試鏈
一同五百二十五匁戌五より八まで　鶴子試鏈
一同二百七十匁　鶴子沢ずり
一同九匁　佐兵衛間歩　下鏈三荷試

『佐渡国誌』

史料二六　鎮目市左衛門奉行治世時の御直山

鎮目市左衛門様御仕置十ヶ年之内御直山之覚（寛文四年　山主書上）
〈前略〉
一　鶴子百枚水貫間歩御直山　　山主　早川　甚太郎
　　京　孫左衛門
是は山所高く御座候故御休め被成候
〈中略〉
一　鶴子仕出喜間歩　　山主　秋田権右衛門

『佐渡年代記』二

史料二七　竹村九郎右衛門奉行治世時の御直山

竹村九郎右衛門様御仕置五年之内御直山の覚（寛文四年　山主書上）
〈前略〉
鶴子下戸間歩御直山　　山主　関東十三郎
是は先年大盛能時分は一十日に鏈弐千荷三千荷程宛出申候
鶴子重一郎間歩御直山　　山主　早川　仁兵衛
是は先年鏈千四五百荷弐千荷宛一ヶ年に出申候
鶴子天道間歩御直山　　山主　柿本　久右衛門
是は先年少々宛鏈出申候捨り申候

『佐渡年代記』二

史料二八　寛永年間における銀山史料に鶴子の名が出る

（寛永十三年）
銀山個所　相川　鶴子　入川　大津　新穂　田切須　何も御勘定帳ニアリ

『佐渡風土記』中巻

史料二九　鶴子総水貫間歩（御直山）の山師が任命される

（正保元年）
鶴子総水貫間歩公儀入用ニ而宗岡七左衛門山主ニ被仰付候

『佐渡風土記』中巻

史料三〇　鶴子総水貫間歩（御直山）の開発許可が出る

正保二年
酉閏五月十三日、久保新右衛門江戸ヨリ帰リ候節、鶴子御直山惣水貫間歩普請可致由御奉行ヨリ申来ル

『佐渡国略記』四

史料三一　鶴子総水貫間歩が御直山となる

（正保三年）
鶴子御直山総水貫間歩被仰付候御書付久保新右衛門持参

『佐渡風土記』

史料三二　屏風沢銀山で災害が発生する

（正保三年）
屏風沢銀山急破有之

『佐渡年代記』二

史料三三　鶴子間歩が御直山で無くなる

（正保四年）

鶴子御直山を止る

『佐渡年代記』二

鶴子并與次右衛門大切山御直山御止被成候

『佐渡風土記』中巻

※同様の記述が『佐渡国略記』四にあり

正保四年鶴子各坑ノ官営ヲ停メ私営ニ移シ継続セシム

『佐渡国誌』

史料三四　鶴子間歩（御直山）で鉉に切り当る

（慶安二年）

鶴子御直山立合に切当る

『佐渡年代記』

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

鶴子並味方次郎四郎大切山弐ヶ所ニ付鉉候事

『佐渡風土記』中巻

史料三五　山師味方次郎四郎・秋田権右衛門が屏風山の開発を願い許可が出る

（承応元年）

右両人（味方次郎四郎・秋田権右衛門）青野村屏風山稼願候ニ付被仰付候

『佐渡風土記』

史料三六　茂右衛門間歩、私費で稼がれたが経営難のため官営となる

寛文四年鶴子茂右衛門間歩ヲ私費ニテ稼キタル者其ノ経営ニ窮シ官営ニ移ス

『佐渡国誌』

史料三七　この時期大盛を迎えた間歩の中に鶴子間歩の名がみえる

（寛文十二年）

子三月十六日於江戸ニ山主和田与右衛門御金三千両御拝借被仰付、諸書物左ニ記ス　〈中略〉子三月御金拝借致入川銀山西三川砂金山七助間歩取明、割間歩小風呂ヲ相尋たらひけずり横ヲ通リ試候処、七枚棚大盛其外鶴子日向諏訪大盛致候由、〈後略〉

『佐渡国略記』五

史料三八　茂右衛門間歩が開発される

（延宝二年）

割間歩鶴子茂右衛門間歩大切山間歩中尾間歩其外銀山共弥無油断稼候様に可被申付候猶期後音之時候　〈後略〉

『佐渡年代記』四

※同様の記述が『佐渡国略記』五にあり

史料三九　鶴子屏風銀山の役屋敷が雪崩の被害を受ける

（延宝二年）

十二月廿四日の夜鶴子屏風沢銀山役屋敷に竹本市右衛門住して此夜他行せし跡妻女并其弟辰之助と共に火爐を擁して臥し居し処へ山より雪なたれ落重り役屋を押潰し両人共押にうたれ臥し居し儘即死す

『佐渡年代記』四

※同様の記述が『佐渡国略記』五、『佐渡国誌』にあり

史料四〇　鶴子間歩惣横目が褒美をもらう

（延宝三年）

〈前略〉

同　五　枚　鶴子同（間歩惣横目）　鳥井　嘉左衛門

〈中略〉

右拾三人之者共御奉公致大切御後聞き儀不仕候処当年銀山盛申候依之御褒美可被下哉之事

『佐渡年代記』四

史料四一　下戸番所～鶴子間歩間・鶴子間歩～百枚間歩間の道法

（天和元年）

〈前略〉

下戸番所ヨリ鶴子釜ノ口迄三拾壹町三拾四間三尺

鶴子ヨリ百枚釜ノ口迄四町五拾五間

〈後略〉

『佐渡年代記』四

※同様の記述が『佐渡国略記』六にあり

史料四二　荻原重秀奉行入国時の間歩

（元禄四年）

一　御奉行（荻原重秀）入国之節、御直山弐ヶ所自分稼之銀山九ヶ所之内、間切三拾六ヶ所、直切ニ被仰付、壱ヶ所三間程宛、切山其外銀勝間切、四拾ヶ所余御払被下、其後鶴子間歩樋四拾五艘、日向間歩之樋拾参艘、御下被成、新間歩新通道御普請有之、右拾九ヶ所之銀山寅四月九日、山留平弥平間歩、石坂、此三ヶ所御取立
拾九ヶ所銀山
〈中略〉鶴子間歩〈後略〉

『佐渡年代記』五

※同様の記述が『佐渡国略記』七にあり

史料四三　和田高運の訴訟中に鶴子開発の願がある

（元禄五年）
申十二月、和田高運江戸江差上候訴訟左ニ記
乍恐御訴訟申上候
〇殿様御入国被為成候御時分、新保村銀山、大津村銀山、田切須村銀山、鶴子共ニ四ヶ所御山之儀ニ付金子壱万両拝借仕度旨訴訟奉差上候得共、善悪之御詮不奉承候故、今度内藤兵右衛門殿、山田与次兵衛殿御召被為成候ニ付、幸ニ奉存重而御訴訟申上候御事〈中略〉此度之拝借金被為仰付被下候ハ、四ヶ所之御山ニ而弥御忠節可申上と奉存候御事右之趣被為聞召上、御慈悲を以金子壱万両拝借被為仰付被下候ハヽ難有奉存候、以上
元禄五年申極月　和田高運
御奉行様

『佐渡国略記』七

※同様の記述が『佐渡風土記』下にあり

史料四四　山師秋田氏により仕出喜間歩が開発されるも排水費がかさみ放棄される

（元禄）
同九年是ヨリ先キ仕出喜間歩山師秋田某私費ニテ稼キ盛況ニ会スルコト数回本年モ一十日千三百荷ノ鏈ヲ得タルモ此ノ坑ハ湛水深ク排水ニ多費ヲ要スルニ苦ミ更ニ本口ヨリ水道ヲ開鑿セントシ起工シタルモ中途ニ疲レテ之ヲ放棄セリ

『佐渡国誌』

史料四五　江戸より銅山稼ぎを望む者が鶴子間歩を視察する

（宝永五年）
子、江戸ヨリ当国江銅山望来リ、鶴子間歩敷内并並吹立候様子聞届、請山稼ニ者逢不申候由早速罷帰申候、江戸和泉や吉左衛門手代伊左衛門

『佐渡国略記』七

史料四六　神保佐渡奉行の視察

（正徳三年五月）
同十一日、天気能、七ツ過ヨリ風吹、両御奉行広間役中江御廻リ、新五左衛門（神保長治）様茶被召上、自夫鶴子間歩江御越、九ツ半時ニ御帰リ被成候、案内内田三郎兵衛

『佐渡国略記』八

史料四七　鶴子番所役・同山師が処罰される

（正徳四年）
同五月五日、鶴子番所役長嶋小右衛門・同山師山本重左衛門ハ閉門、翌日御免

『佐渡国略記』八

史料四八　鶴子間歩敷内で湧水による事故がおきる

（正徳五年）
正月廿八日鶴子間歩敷内水湧出樋引壹人死す

『佐渡年代記』五

史料四九　鶴子間歩の本樋を廃止し、市兵衛敷のみ稼がれる

（享保二年）
四月より鶴子間歩本樋六拾四艘相止市兵衛敷計相稼くと云

『佐渡年代記』六

※同様の記述が『佐渡国略記』九にあり

史料五〇　鶴子間歩山師が山師召上となる

（享保八年）
六日カ
卯九月十三日、鶴子間歩山師山本重左衛門・村上善左衛門当山之山師召上、弥兵衛間歩山師被仰付

『佐渡国略記』九

史料五一　鶴子及び在用に道具を持つよう命じる

（享保八年八月）
同廿三日、山方役向後鶴子并在用ニ道具ヲ為持候様被仰付候

史料五二　この頃、鶴子間歩・屏風沢が自分山で開発される

（享保九年）
〈前略〉
銀山請山之義は新穂村銀山西三川金山年々御運上に而請山に仕候帳面御座候此外鶴子間歩大須村銀山立嶋村銀山青野屏風沢銀山入川村銀山何れも自分山に御座候都て相川銀山之義と申は慶長十八丑年より以前之書物は無御座古来より請山と申は在郷銀山に限り候と相見え申候

『佐渡年代記』六

※同様の記述が『佐渡風土記』下巻、享保八年『佐渡国略記』九、『佐渡国誌』にあり

『佐渡国略記』九

史料五三　百枚間歩開発の様子

享保十四年ノ文書ニ「九月より百枚間歩鎚立て中十日より三百荷つゝ」トアリ

『佐渡国誌』

史料五四　百枚間歩が御直山となる

（享保十五年五月）
同廿一日、鶴子百枚御直山ニ被仰付候

『佐渡国略記』九

史料五五　鶴子間歩山師が稼ぎ方間違いにより処罰される

（享保十六年五月）
同廿三日、鶴子間歩山師和田与左衛門・寺崎太郎左衛門閉門、稼方間違ひ有之候

『佐渡国略記』九

史料五六　百枚間歩の鍛冶小屋が雪崩により被害を受ける

（享保十七年）
同二月三日巳刻、雪なたれ有之、鶴子百枚ニ而鍛冶小屋痛吹子拾六人相果候、沢根鍛冶（欠）・間山小兵衛・大間権助・材木源助（以下欠）

『佐渡国略記』九

史料五七　鶴子間歩本口の開発が官営により再興

（享保）
仝十八年冬鶴子間歩本口ノ開鑿ヲ官営ニテ再興シ〈後略〉

『佐渡国誌』

史料五八　鶴子間歩敷内の火災により稼ぎを止める

（享保十九年）
寅八月廿八日ヨリ九月五日迄、鶴子間歩御取分之敷内より火差発リ、穿子拾人疵を得稼方止

『佐渡国略記』九

史料五九　鶴子間歩本口の水貫のため、しなみ沢という古敷の取明が始まる

（享保十九年）
鶴子間歩本口水貫のため志なみ沢と云古敷を取明普請を始る

『佐渡年代記』六

史料六〇　享保年間の鶴子間歩の開発状況

（享保十九年）
鶴子間歩は銀銅山に而近年出方不足御失墜多候に付去冬中敷内普請申付其後は少々宛御入用相減候得共未御失墜に有之然共此山に携候ものとも多人数に而稼相止候而は渡世に離れ難儀に及ひ候に付右之通申付置候
此山十七八年以前迄は銀銅多ク候処敷内へ水込入候故樋を仕掛水替候処御入用余計相掛樋を止候由此度吟味之上亦々樋を仕掛水替候はゝ十七八年以前迄の通り銀銅出来可申旨其節相稼候山師かなこ共申立役人共も同様申聞候に付樋仕掛方吟味之上十七八年以前之出方を以差引候得は以前より御費少く御座候是は敷内地底迄水替宜穿場取出し相稼候積御座候

『佐渡年代記』六

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料六一　鶴子間歩本口の水貫普請が終わる

（享保二十年）
鶴子間歩本口水道取明成就し引捨より上向の水は水道へ流れ出るといへとも壹通りには溜り水湛へしに付引捨より上向にて銅稼をなす

『佐渡年代記』六

（二月）
同十三日夜、鶴子間歩御取分之新口より水貫成就

『佐渡国略記』九

史料六二　享保二〇年の鶴子間歩銀銅高入用高差引き覚

享保二十年十一月　鶴子間歩銀銅出高入用高差引き覚
一　鶴子間歩水抜普請成就ニ付、銅出高と御入　用差引之義申上候書面左之如し
　鶴子間歩水抜不申以前と銅出高と御入用差引覚
　去寅一ヶ年出高月割ニ仕一ヶ月分
一　銅拾五貫四百三拾匁余　出高
　此印銀弐百八拾目余
　是者去寅年迄ハ銭吹方御入用を以申付候ニ付、此銅ニ而銭仕立候故、印銀ニ直シ如斯
右銅より絞リ取候
一　山吹銀弐百九拾目余
　此印銀八百五匁
二口合印銀壱貫八拾五匁余
　右掘方吹立諸入用
一　印銀三貫百参拾六匁余
　右銀銅出高掘方入用と差引
　　印銀弐貫五拾壱匁余　去寅年一ヶ月分御　失墜
　当閏三月水抜候以後出方と御入用差引覚
　　当卯五月以来出方月割仕一ヶ月分
一　銅九拾五貫目百七拾弐匁　出高
　此印銀弐貫百三拾六匁余
　是者去秋相伺銭座請負申付出銅銭座之者江御　払ニいたし直段を増如此
右銅より絞出候
一　山吹銀壱貫三百八拾四匁余
　此印銀壱貫八百三拾三匁余
一　印銀三貫七百八拾弐匁余
　是者水抜成就仕候以後掘方之諸入用減候分
三口合印銀九貫八百拾壱匁余
　右掘方吹立諸入用
一　印銀七貫三百六拾六匁余
　右銀銅出方と掘方入用差引
印銀弐貫四百四拾五匁余　一ヶ月分御徳用
右之通ニ而当年より鶴子間歩之方ハ御失墜相止申候、此以後猶又宜鏈有之候掘場出次第猶以御徳用之方ニ罷成候、水抜入用去六月より当閏三月迄、印銀四拾貫目余掛リ候得共、此分ハ去丑年段々吟味仕、相川銀山諸入用減候故、此四拾貫目余も臨時之増ニも罷成不申候、以上
　卯十一月

萩原源左衛門
井戸三五郎

『佐渡年代記』六

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料六三　鶴子間歩の産出高が回復したがすぐに産出高が減少し官営を停止した

（享保二十年）
当年より鶴子間歩の方は御失墜相止申候云々而シテ掛役人等褒賞セラル然レトモ排水ノ効果は未タ充分ナラス坑底ニハ至ル能ハスシテ胴部ニ於テノミ採掘セリ此ノ如クスルコト数年ナリシカ遂ニ盛況ヲ見スシテ寛保三年ニ至リ官営ヲ停止セリ

『佐渡国誌』

史料六四　鶴子間歩へ山方役らが見分に向い番所役・山師らが処罰される

（享保二十一年）
辰九月七日、故有而、鶴子間歩へ山田治部左衛門、山方役松永藤太夫、御目付役萩野善左衛門罷越、敷内見分之上、則番所役丸田喜市郎・河野伝太夫・古屋作左衛門御役御免、山師味方孫太夫・味方与次右衛門・松木八郎右衛門・下田利左衛門・和田与左衛門山師被召上、柴町久兵衛・紙屋町治右衛門両人所預
同日、鶴子番町（所カ）役、岩間杢右衛門・野上孫右衛門・井口祖兵衛・山師秋田権右衛門・大阪惣左衛門、各被仰付

『佐渡国略記』十

史料六五　佐渡奉行（井戸弘隆ヵ）が鶴子銀山を視察する

（享保二十一年）
辰十月廿六日、御奉行鶴子江御越、則沢根ニて引網見物、〈後略〉

『佐渡国略記』十

史料六六　金銀山の自分稼ぎを公募する町触が出る

元文元年　金銀山自分稼ぎにつき町触

一　同十三日当国佐渡銀山請山ニ可被遊旨、江戸ヨリ申来候間、望之者者可申出由在相川へ御触被遊候得共、望候者無之由同廿日請け書差上申候処、猶十月十八日被仰出両度触左ニ記ス

申触候

一中尾間歩　一清次間歩　一鳥越間歩　一雲子間歩　一鶴子間歩　一甚五間歩

右六ヶ処、請山ニ被仰付候間、望之者当月廿日書付を以、御広間江可申出候、尤請山在方之儀〈後略〉

『佐渡国略記』七

史料六七　仕出喜間歩が再興したが、活況を呈せずして廃止となる

元文元年仕出喜間歩ヲ再興シタルモ亦盛ナルニ至ラス寛延元年二月末廃止セリ

『佐渡国誌』

史料六八　佐渡奉行（井戸弘隆または美濃部茂孝）が鶴子間歩を視察する

（元文二年）

巳五月八日、御奉行銀山江御登、翌日鶴子間歩へ御越

『佐渡国略記』十

史料六九　再度金銀山自分稼ぎの申し触れが来る

（元文四年九月）

同十三日、当国銀山請山ニ可被遊旨江戸ヨリ申来候間、望之者者可申出由在相川へ御触被遊候得共、望候者無之由同廿日請書差上申候処、猶十月十八日日仰出、両度御触左ニ記ス

申触候

○中尾間分・清治間分・鳥越間分・雲子間分・　鶴子間分・甚五間分、右六ヶ所請山ニ被仰付　候間、望之者当月廿日書付を以御広間江可申　出候、尤請山仕方之儀〈後略〉

『佐渡国略記』十

史料七〇　江戸銀座より銀山請山を希望するものが来島し、鶴子銀山を見分する

（元文五年六月）

六日、江戸銀座年寄平野六兵衛当国銀山請山望之由ニ而左之者とも江戸ヨリ申来、同十日羽田町米屋作左衛門方へ落着、相川銀山鶴子銀山等見分致、〈後略〉

『佐渡国略記』十

史料七一　鶴子間歩が休山となる

（寛保三年）

七月より鶴子間歩を休山とす

『佐渡年代記』

※同様の記述が『佐渡風土記』下巻にあり

史料七二　百枚間歩を取明ける

（延享元年）

八月羽賀間歩御損ニ付御休ミ鶴子百枚間歩又御取明

『佐渡風土記』下巻

史料七三　百枚間歩が休山となり、代わりに馳割間歩を取明ける

（延享二年）

鶴子百枚間歩又御休ミ鶴子地（馳カ）割間歩ニ御立替被成候

『佐渡風土記』下巻

史料七四　山師秋田権右衛門・下田利左衛門が仕出喜間歩の開発を行う

（延享四年）

山師秋田権右衛門下田利左衛門相願候去々丑年秋より大道間切入用ヲ以西野仕出喜間歩致取明鏈ニ逢候ハヾ右の間切代御入用ニ被成可被下若鏈ニ付不申候ハヾ返納可仕旨御吟味の上被仰付取明候処今般鏈ニ付候とて十月朔日山師秋田権右衛門麻上下ニ而ミクレ鏈御広間え上ル則十月初十日より御直山ニ被仰付只今迄大道間切入用銀大概八拾貫目余掛ル

『佐渡風土記』下巻

史料七五　仕出喜間歩の開発を止める

（寛延元年）

西野村仕出喜間歩当二月迄にて稼を止る

『佐渡年代記』七

西野仕出喜間歩二月末十日迄ニ而一円御止被成候

『佐渡風土記』下巻

史料七六　天道間歩取明のため拝借銀を貸す・桜間歩の取明を行う

（寛延元年）

八月朔日鶴子市兵衛願の上同所天道間歩取明の儀聞届候処拝借印銀壹貫五百目是又願出るに付貸遣ス山師寺崎太郎右衛門下平御林内桜間歩取明願出稼をなす

一　八月朔日鶴子市兵衛願ヒ同所の内天道間歩自分ニ取明致シ三十日ニ取明四十日より鏈切出し可申間鶴子馳割并ニ大工拾人分御払銀可被下候右為仕込印銀壹貫五百目拝借被仰付可被下旨願御吟味の上被仰付候

『佐渡年代記』

史料七七　馳割間歩の稼ぎを止める

（寛延四年）
同閏六月二日、大切山・清治・雲子・茶屋平・馳割・割間歩、右六ヶ所御稼相止、此減人九拾七人、〈後略〉

『佐渡国略記』十四

史料七八　馳割間歩の稼ぎを止めたため、失業者に扶持を渡す

宝暦元年　金銀山間切切山につき町触
一　同閏六月二日、大切山・清次・雲子・茶屋平・馳割・割間歩右六ヶ所御稼相止、此減人九拾七人同御広間江被召出、当分壱人ニ付壱人扶持宛被下、尤割間歩者頭壱人御抱置被成候〈後略〉

『佐渡国略記』十四

史料七九　百枚間歩を銅山として立始め、広間役らが見分のうえ、銅吹立が始る

（宝暦十三年五月）
同廿五日、外吹買石夕白町庄助・坂町伊兵衛銅床被仰付、六月十五日普請所定役宇佐見忠右衛門・御目付役太田権左衛門、其外並役井戸多兵衛・原田為右衛門・藤木初太郎各掛り被仰付、八月四日銅山鶴子百枚立初、翌日広間役今井新次郎・山方役岩間為助・御目付役野田五左衛門各登山、八月廿五日銅吹立

『佐渡国略記』十七
※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料八〇　夏目信政奉行が沢根村の川流しを視察する

（明和三年）
御奉行様沢根村川流御見分ニ御越

『佐渡国略記』十八ノ上

史料八一　天野正景奉行が百枚・相川一丁目銅床を視察する

（明和元年七月）
同九日、御奉行天野助次郎様銀山并鶴子百枚銅山壱町目銅床江御越

『佐渡国略記』十八ノ上

史料八二　屏風沢銀山が稼ぎを始める

（明和四年）
屏風沢銀山稼を始まる

『佐渡年代記』十
※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料八三　沢根・五十里の海岸で浜流しが始まる

（明和四年）
久保田十左衛門御代官所佐州沢根五十里二見三ヶ所之濱通ニ砂金見ゆるニ付去冬御勘定所え掛合之上役人附置相川浜川流之もの請負ニなし追々取揚し処砂金弐百拾九匁四分出る

『佐渡年代記』十

史料八四　佐渡奉行（夏目信政ヵ）が屏風沢を視察する

（明和四年四月）
同六日、御奉行様屏風（沢脱カ）銀山江御越

『佐渡国略記』十八ノ上

史料八五　鶴子川通りの川流しが始まる

（明和五年）
下戸町惣兵衛二町目小兵衛と云もの共願ひて鶴子川通り川流しを始る

『佐渡年代記』

子八月廿八日、地方頭取役矢ケ崎登吉・山方役内藤兵右衛門・金銀改定役堀口市太夫、各鶴子川通見分、是者下戸町惣兵衛・弐丁目小兵衛川流願ニ付、十月十四日被仰付、同廿三日より流ス

『佐渡国略記』十八ノ下

史料八六　長山直英奉行が鶴子間歩の旧稼所を視察する

（明和八年三月）

同十五日、御奉行百助様鶴子間分江御越、元稼所御見分、是ヨリ沢根江御越、暮六つ時御帰

『佐渡国略記』十八ノ下

史料八七　佐渡奉行（菅沼定堅ヵ）が鶴子を視察する

（明和八年七月）
同廿八日、御奉行様鶴子江御越、暮六つ半時御帰

『佐渡国略記』十八ノ下

史料八八　佐渡奉行（柘植三蔵ヵ）が鶴子を視察する

（安永三年七月）
同六日、御奉行様鶴子江御越、山方役太田彦次郎・山師味方孫太夫各御案内

『佐渡国略記』二十

史料八九　高尾奉行が沢根村の砂金流しを視察する

（安永四年）
高尾孫兵衛沢根村砂金流を見分す

『佐渡年代記』

未八月廿一日、御奉行高尾孫兵衛様・御組頭猪坂又兵衛様・御広間役柑本斉蔵、各沢根七場江御越、砂金流御見分

『佐渡国略記』二十

史料九〇　鶴子番所役家の雪による被害が出たが、翌年以降の積雪では被害はなかった

（安永五年）
〈前略〉昔延宝二寅年十二月上旬より雪降り同廿四日夜鶴子番所役竹本市右衛門他行の跡ニ而役家押潰し妻女弟とも即死し翌卯年十二月二日夜地震之後雪降積り七八尺程埋り正徳三巳年も雪降積りしといへ共家屋当損せしとも聞へす　〈後略〉

『佐渡年代記』十

史料九一　天道間歩敷内で怪我人が出る

（安永六年）
六月八日鶴子天道間歩敷内に而稼人怪我して即死す

『佐渡年代記』十一

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

（六月八日）
同日、三町目浜町（欠）鶴子天道間歩敷内ニ而致怪我死、年四十二、倅当年十（欠）ニ罷成、翌日御広間へ被召、銭壱貫文被下

『佐渡国略記』二十一

史料九二　本目奉行が鶴子銀山を視察する

（安永八年）
二月廿九日本目隼人鶴子銀山を見廻る

『佐渡年代記』

※同様の記述が『佐渡国略記』二十二にあり

史料九三　東円間歩・大滝間歩の古敷のうち、大滝間歩の開発願いが出され、山方役らが見分に向う

（天明四年三月）
七日、弐町目紺屋弥兵衛、西五十里村之内東円間歩・大滝間歩両古敷有之、大滝間歩稼方之儀御願申出ニ付、見分として山方役藤木武兵衛・床屋掛リ橋本三之助・山師喜多平太夫、其外敷役人罷越、間鍵等御役所江指出、稼入用拝借御張紙出目銭弐百貫文御貸渡被仰付、当月廿日ヨリ稼初ル

『佐渡国略記』二十二

史料九四　大滝間歩の稼ぎが始まる

（天明四年）
二町目弥兵衛と云もの願之上西五十里村大瀧間歩稼を始る

『佐渡年代記』十一

史料九五　鶴子間歩本口取明が決まり、しなみ沢の取明が始まる

（天明八年）
鶴子間歩本口取明伺済の上三月朔日掛り役人を極同五日より水道字しなみ沢取明に懸る

『佐渡年代記』十一

史料九六　鶴子銅山取明大工の世話人が決まる

（天明八年四月）
三日、石扣町伴五郎御雇町人並被仰付、是者鶴子銅山御取明大工入立セ話被仰付、諸山

壱ヶ年御手当之内ヨリ御給銭被下候積リ、但壱ヶ月三貫文之由

『佐渡国略記』二十三

史料九七　鶴子間歩の水貫のため佐渡中より水替を出すよう命じられ、相川では三百人を出すよう命じられる

（五月）

廿四日、鶴子間歩水貫御普請ニ付、国中一同石水替被仰付候ニ付、相川町中より、三百人可差出旨被仰付、廿六日より七人宛、二三日之内入立、其余ハ一日三人宛入立可申由、壱人賃銭弐百九拾弐文、昼夜之積、右懸り名主太右衛門・太郎兵衛・新兵衛・伊左衛門申渡ス、六月十二日右四人ニ而ハ手配り指支候由相断ニ付、名主武右衛門・嘉十郎・此両人差加へ被下候様、与助様へ申上候所、御指支ニ不相成候様取計可申由被仰聞、右両人指加へ申渡ス

『佐渡国略記』

史料九八　しなみ沢の水道取明で度々火災が発生したので新しく煙貫を付け、四月より排水を始める

（寛政二年）

鶴子沢しなみ沢水道取明の内度々矢先より火燃出に付新規煙貫切替道等を附取凌鶴子間歩え取貫四月より溜り水汲上にかゝり候処水勢至て強く捗取兼るに付七月より往古の水上輪樋を用ひ水汲取

『佐渡年代記』十二

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料九九　鶴子間歩の取明普請が湧水により中止となる

（寛政三年）

沢根村鶴子間歩前立合取明御普請の様子二月中申立候処程能見切候方に可有之旨松平越中守殿被仰渡候に付評議の上御普請御差止の積り五月中申上る

但鶴子間歩水勢強く在相川人足を以種々為指働候へ共人力およひかね終に廃せし也此頃の水替賃一昼夜弐百八拾文つゝ番所におゐて直渡灯油は人足とも自分入用を以調候事也

『佐渡年代記』十二

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料一〇〇　鶴子間歩御入用材木請負前の拝借銀の質を見分する

（寛政三年三月）

廿六日、材木町三次郎家質見分、御目付役山西与三兵衛・小頭横田・我等、是者鶴子間歩御入用材木請負前拝借ニ付

『佐渡国略記』二十四

史料一〇一　鶴子間歩の取明中止により貸付銭の返納を命じる

（寛政三年六月）

八日、鶴子間歩御取明ケ相止候ニ付、右稼方之もの前御貸附銭有之候ニ付、返納之儀月割ヲ以可相納由被仰付候、町々之者返納之分面付書付可相渡間、町年寄ヨリ取立相納可申由八太夫様被仰聞候、当六月ヨリ来子三月迄ニ而返納皆済之積り、横帳面銘々御請印形町役人奥印取揃候帳面御渡被成、当六月分ヨリ取立、手形改御役所へ掛合、御小蔵へ相納

『佐渡国略記』二十四

史料一〇二　鶴子間歩荷揚人足の触書が出る

寛政三年　鶴子間歩荷揚人足につき触書記録

一　十五日鶴子間歩跡向荷揚人足四百弐拾人、是ハ日雇取駄賃持面付ニ而入立、壱人ニ付一昼夜弐百八拾文宛被下候積り、尤一日十四人ツ、三十日分、十五六才之もの ニ而も不苦よし、荷数減少に応シ駄賃御減鶴子番所ニ而直御渡、尤油ハ人足共自分入用ニ而燈可申由御触書ヲ以被仰出候間、十七日より入立之積リニ而御触書名主嘉十郎へ相渡、於町会所面付取調へ候様申渡ス

『佐渡国略記』二十四

史料一〇三　百枚間歩の稼ぎを止める

（寛政五年）

鶴子百枚間歩去る戌年（寛政二年カ）より穿鑿稼有之処今年九月より相止

『佐渡年代記』十二

史料一〇四　百枚間歩の稼ぎが始まる

（寛政八年）

鶴子百枚間歩穿鑿稼始る

『佐渡年代記』十二

寛政八年ニ至リ又之ヲ試掘シタルモ亦久シカラスシテ之ヲ廃セリ

『佐渡国誌』

史料一〇五　朝比奈奉行ᵏᵃが鶴子銀山を視察する

（寛政九年）
六月十三日朝比奈次左衛門鶴子銀山より沢根辺を見廻る

『佐渡年代記』十二

史料一〇六　百枚間歩頭が病気のため、奉行所より鳥目を渡される

（文化元年三月）
同五日、百枚間歩頭大工壱町目浜町梅助義、長病ニ付、為御救島（鳥カ）目五貫文於山方役所致頂戴候

『佐渡国略記』二十七

史料一〇七　牢抜けした江戸水替が百枚間歩敷内に隠れたが、同所の稼人に見つかり召捕られる

（文化六年）
入牢人鹿伏村貫教江戸水替庄次九月十六日暁牢抜いたし行衛不相知候に付近郷手分の上相尋候処昼頃鶴子百枚間歩敷内にて忍び居候を敷内稼人共見咎御役所え注進申出に付町同心を遣し為召捕如元入牢

『佐渡年代記』十四
※同様の記述が『佐渡国略記』二十七にあり

史料一〇八　百枚間歩が再興される

文化八年百枚坑ヲ再興シ一十日鏈代五百五十匁差引金十五両三分ノ公益アリ

『佐渡国誌』

史料一〇九　信州の者が大滝間歩の試稼ぎを願い出る

（文化十一年）
九月二日、下京町茂市方江揚り候旅人信州安曇野郡稲扱村半兵衛相願候者、当国西五十里村川内山大瀧間歩試稼致度段、宿茂市・町役人加印ニ而願之

『佐渡国略記』二十八

史料一一〇　大滝間歩の試稼場で雪崩により被害がでる

（文化十二年一月）
廿四日、信州安曇野郡稲扱村半兵衛亥五十歳、此者儀塩硝製法之儀ニ付、去戌四月十一日赤泊湊江揚、下京町茂市方江落着、其後西五十里村大滝間歩自分入用を以試稼致度旨ニ而、当亥四月迄月延願置相稼罷在候処、昨廿三日於小屋場雪なだれにて被築埋、早速穿出し候処、大造成怪我いたし、手近之場所故宿茂市身寄五十里籠町長八方へ引取療治相加へ候得共届兼、廿五日四半時相果候、右為検使御目付役小田切仁右衛門、宿茂市被召連出役有之

『佐渡国略記』二十九

史料一一一　弥十郎間歩の産出高

（文化十二年）
金銀山間歩々々所多に穿鑿いたし候処相川山にて一十ヲ日鏈代三貫七百目余の出方に相成屏風決（沢カ）弥十郎間歩をも打合候得は一十ヲ日四貫目以上の出方にて追々様子よろしく一十ヲ日四貫目以上の出方は寛政十二申年以来無之趣牧野備前守殿え書面進達

『佐渡年代記』十四

同（文化）十二年（金沢水野）〈中略〉此ノ頃銀山一ト十日三貫七百目ノ出方トナリ屏風沢弥十郎間歩ヲ平均スレハ四貫目以上ニ及ヘリ

『佐渡国誌』

史料一一二　弥十郎間歩で採掘が行われている

（文化十三年）
西五十里村の内屏風沢弥十郎間歩穿鑿稼立置候処一ヶ月鏈代壹貫六百目余に成出方御入用差引御益も有之候に付本途稼の義牧野備前守殿え伺候処先両三年は去亥年の振合を以穿鑿稼為致弥引続出方相進候はゝ其節相伺候様被仰渡

『佐渡年代記』十四

史料一一三　百枚間歩の景気がよくなる

文政二年ノ文書ニ「鶴子雲子（雲子ハ相川ニ在リ）両間歩景気宜敷相成云々」トアリ即チ百枚坑ノコトナラン

『佐渡国誌』

史料一一四　鶴子沢の川流しが始まる

（文政七年）
鶴子沢川流始ル

『佐渡年代記』十五

史料一一五　鶴子沢の川流しをしたところ、出方がよかった

（文政七年十一月）

十二日、五郎左衛門町八太郎、鶴子本口裾通り流いたし候処、格別出方宜に付、当日麻上下ニ而被召出、鶴子沢流し引受人被仰付、年始御交代御礼席之儀者、銅稼銀山世話煎並被仰付

『佐渡国略記』三十

史料一一六　勝正朝奉行が屏風沢銀山・鶴子沢を視察する

（文政八年）

八月七日勝桓（勘カ）兵衛西五十里屏風沢銀山并鶴子沢見廻る

『佐渡年代記』十六

史料一一七　弥十郎間歩の落水・気絶を防ぐため、市右衛門間歩へ切延べる

（文政九年）

西五十里村字屏風沢弥十郎間歩出方も有之候之処落水并けたへの障り有之に付御入用融通を以東之方市右衛門間歩え為切延候処当三月中迄に切貫候に付追々出方も有之様罷成候はゝ取調相伺候積り水野出羽守殿え申上ル

『佐渡年代記』十六

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料一一八　しなみ沢の川流しについて、吟味の筋があるため、役人預けとなる

（文政十年）

鶴子志なミ沢川流三町目八太郎、右証人材木町名主久右衛門、御吟味筋有之町役人預ケ

『佐渡国略記』三十一

史料一一九　弥十郎間歩の産出高

（天保七年）

屏風沢弥十郎間歩大吹所取扱に而年来少々宛出方有之処去夏より模様付今年に至り次第に景気相進み十二月中十日鏈代壹貫八百目に成ル

『佐渡年代記』十八

『佐渡国誌』

史料一二〇　天道間歩の試稼・藤兵衛間歩取明が行われる

（天保七年）

当秋已来青柳間歩弥平間歩諏訪間歩鶴子天道間歩等追々自他国之もの願出試稼いたすといへとも吹実少く引合兼手を引屏風沢藤兵衛間歩取明も取掛る大切山銅稼は追々様子宜趣に而大工仕掛銀銅出る弥十郎間歩に而功をなせしを羨み頻に古間歩稼願出しならんと云

『佐渡年代記』十八

史料一二一　弥十郎間歩の産出高

（天保八年）

金銀山去申年出方之様子并西五十里村屏風沢銀山弥十郎間歩一ヶ月鏈代弐貫四百目程出来一廉之山所に相成候旨〈後略〉

『佐渡年代記』十九

史料一二二　弥十郎間歩の出方がよいため、酒鰯が同所へ出される

（天保八年）

屏風沢弥十郎間歩出方相進候に付右間歩并大吹所え酒鰯を遣す

『佐渡年代記』十九

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料一二三　弥十郎間歩の出方がよく、本途稼ぎの申請をして許可され、相川より大工を流用することとなった

（天保八年）

西五十里村字屏風沢銀山弥十郎間歩之義一ヶ月鏈代四貫八百目余の出方に相成候に付本途稼之義并大工五千人増御断申上書面十月十一日水野備前守殿え進達之処本途稼之義は伺之通相心得大工人数之義は是迄之御断高三萬人之内を以繰合取計候積を以御入用御蔵断之義取調直可申上旨十二月廿二日御下氏有之戌正月十日到来

『佐渡年代記』十九

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料一二四　弥十郎間歩の本途稼ぎが決まる

（天保九年）

西五十里村屏風沢弥十郎間歩本途稼御下知正月十日到来に付出方永久いたし候様厚く心掛為相勤可申渡新規山方役御番所役等申渡

『佐渡年代記』十九

史料一二五　弥十郎間歩の本途稼ぎ

（天保九年）
弥十郎間歩本途稼之儀に付御下知之趣を以大工繰合方は得と取調追而申上候積御蔵断取調直二月中進達

『佐渡年代記』十九

史料一二六　弥十郎間歩の番所・鍛冶小屋を建替え、釜ノ口化粧棚を結び替える

（天保九年）
弥十郎間歩番所鍛冶小屋共建替釜ノ口化粧棚結ひ替御普請有之

『佐渡年代記』十九

史料一二七　弥十郎間歩の本途稼ぎ

（天保十一年）
弥十郎間歩去々戌年本途稼に付雇之者へ為買請候御払米当子年迄三ヶ年之御断引続来丑より来ル卯迄三ヶ年之間是迄之通増御断被成下候様同断伺之通御下知有之

『佐渡年代記』十九

史料一二八　弥十郎間歩の本途稼ぎ

（天保十一年）
弥十郎間歩相応出方に罷成去々戌年本途御稼入之上大工五千人増御断申上候処本途稼は伺之通御下知有之大工之儀は同年より三ヶ年之間五千人増御断被成下当子年に而年限相至候間引続来丑より卯迄三ヶ年是迄之通五千人分増御断有之候様前同断

『佐渡年代記』十九

史料一二九　『島根のすさみ』にみる川路奉行の弥十郎間歩視察

（天保十一年九月）
八日　天気殊によろし弥十郎間歩といふ銀山江参る往は駕にて十町計り参り水車にて金銀山の鏈といふものをこなす所江参る　人力を用ひす水車にて石をつきくたき又はふるひなどいたす也二十年来の工夫也と云　そこより駕はをり戸といふ所江馬共に廻し組頭山本丈右衛門同道に而　田口加賀従弟貞実なる人也　弥十郎間歩江参る険阻の山坂五十町也からむとう坂をこへ笠取嶺江懸るこゝよりは能登越後の山々よくみゆる恵ひす湊より国中筋といふこゝにての打開たる耕地みゆ巾五里余あるといふ今日は至而のなき故漁舟夥し木の葉を流せるごとく沖にみゆ笠取嶺にてしようきにかゝり遠目かねを出し又は茶を煮させなとしてしはしいこひこゝより下坂八九町計にして弥十郎間歩に至る役人共御門の前に出迎ひたる様おくの銀山の釜の口　是は穴江入口也神を祀る額あり石窟のことくみゆる　等遥にみゆる画かける大江山の鬼の住家の門前に類すこゝにて夫々のこと畢り持行たりし菓子を組頭以下江振舞ひぬ〈後略〉

『島根のすさみ』

史料一三〇　『島根のすさみ』にみる弥十郎間歩の様子

（天保十一年十月九日）
〈前略〉佐州は山師という諺の出し本国なるべし。今盛んに金銀出る弥十郎間歩という所あり（間歩とは金銀の出る穴也）。この間歩に初かゝりたる（近きこと也）男、おもいの外に金銀の気薄く、損而已にて、ある時に首くゝりて果る積りに成り、夫となく友を呼び、酒振舞いていとま乞せしに、かくの次第とて困究〔窮〕に陥りたるよしかたりしに、其座のものより銭四十貫文（四両二分余也）与えしによりて、右を以て三、四日を凌ぐうちに盛山して大富豪に成りしとぞ。一人当れば、其一族迄右のかなこにも成り、諸色の請負人にも、穴中へ用る油を商うものにも成りて、みなとみくらす事也。

『島根のすさみ』

史料一三一　『島根のすさみ』にみる屏風沢の様子

（天保十一年十一月）
十二日　風雨　寒気余程まし山は雪あり〇重輔屏風沢といふ銀山江参る其みちのかさとりたむけにて昨日弁当もちの女三人被吹落候而少々怪我いたし候由也此辺みな雪也といひき屏風沢はきのふ往来絶て其上弁当如右なれは役人ともみな絶食にてかのかたに止宿せしよし申出る此かさとり嶺雨雪煮て往来絶るは冬の常也けしからさる風当之所也

『島根のすさみ』

史料一三二　『島根のすさみ』にみる屏風沢の様子

（天保十二年正月）
十八日　雪　けふ屏風沢銀山へ例の通参る俊蔵帰てのちきゝしに四人つれ也しかいくたひも雪ふみまよひて深雪のなかにおち入ては互に助けあひて今帰りしとなへて五尺六尺もあるへしと深きところは丈余なることいふにも及はさること也この雪のうちに晴間あれは一しきり宛あられふる也あられは雪のうちはなきものなるかこゝはけしからぬこと也

『島根のすさみ』

史料一三三　文化九年から天保十一年の鶴子間歩の産額

天保十二年文化以後鶴子間歩ノ産額（売立鏈代）ヲ記タルモノ左ニ表示ス
（鏈代一貫目ニ対スル鉱石ヨリ製出スル山吹銀ハ凡一貫三百九十匁内外トス）

文化九年	二五五八	文化　十年	一五一八二	文化十一年	一二七九八
同十二年	三五八四六	同十三年	九六二四六	同十四年	六一一〇二
文政元年	四九三五八	文政二年	二四一二一九	文政三年	四一二六四一
同　四年	四一二六四一	同　五年	二八九八四九	同　六年	二〇八二一六
同　七年	二七一〇三三	同　八年	二一四五四一	同　九年	五一四四〇九
同　十年	三五七五二六	同十一年	二六五〇八四	同十二年	一五四五八七
天保元年	二〇二三九六	天保二年	三二六〇七九	天保三年	三〇一五二三
同　四年	三六二三〇四	同　五年	二八八六一三	同　六年	一五八二三五
同　七年	一一四七〇四	同　八年	一六七六一七	同　九年	二一七二一〇
同　十年	三三〇六一八	同十一年	二四八六一三	合　計	六〇九八二〇八
				平　均	二一〇二八三

弘化三年（羽田中島）官営　青盤、中尾、清次、鳥越、弥十郎、　五ヶ所　本途山ト唱フ　ノ外私山六ヶ所ノ内甚五、市ノ勢、両坑ハ有望ニテ　〈後略〉

『佐渡国誌』

史料一三七　弥十郎間歩で出方が進まなくなる

（弘化四年）

弥十郎間歩春以来出方不進にて別而当七月頃に至候而は極難渋相成候処山方稼に携り候者共格別丹精いたし其後鏈引取出し追々代銀増方并度々勤増致し当時一山弐貫目余売立一統差はまり宜敷故に付手当として銭百貫文遣す旨十二月十一日書取を以申渡

『佐渡年代記』二十二

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料一三八　弥十郎間歩間切に切当る

同（嘉永）三年

弥十郎間切ニ切当リ十月初十日ヨリ鏈ヲ売立ツル事トナル

『佐渡国誌』

史料一三九　鶴子間歩平兵衛敷を取明ける

（嘉永三年）

鶴子間歩平兵衛敷取明御普請有之御入用積八百八十四貫六百七十九文広間役当分助水品孫十郎始役々掛り申渡す

『佐渡年代記』二十二

史料一四〇　弥十郎間歩、間切鏈に切当り、古例のとおり鏈を奉行所へ差し出す

（嘉永三年）

弥十郎間歩厚身間切鏈に切当堀取候ミクレ鏈古例之通十月六日御役所へ差出且右間切にて十月初十日より代銀売上候に付同間歩へ酒五樽青盤外三ヶ間歩并自分稼所へ同二樽つゝ為祝儀遣之

『佐渡年代記』二十二

史料一四一　『東北遊日記』にみる吉田松陰の弥十郎間歩視察

（嘉永五年二月）

金鉱鶴子山為始。文禄年時也。今所堀則異干此。其所生。則金銀銅耳。旧有鉛鉱。近年以利薄廃。有銕砂。以不知淘鎔之術未起。下三河有金砂山。」〈中略〉

『佐渡国誌』

史料一三四　弥十郎間歩排水のため、藤兵衛間歩を取明ける

（天保十三年）

屏風沢弥十郎間歩水吐之ため藤兵衛間歩取明普請いたす

『佐渡年代記』二十

史料一三五　弥十郎間歩の本途稼ぎ

（天保十四年）

弥十郎間歩之儀去ル戌年本途稼相成同間歩雇之もの御払米一ヶ年分六拾四石八斗之分是迄之高え相増候儀三ヶ年宛年限を以相伺当卯年々限相立候処同間歩追々出方相進弥永続可仕様子に候間前書御払米引続来辰年より以来年々為買請候様仕度旨十二月三日土井大炊頭殿真田信濃守殿え書面進達伺之通被仰渡

『佐渡年代記』二十一

※同様の記述が『佐渡国誌』にあり

史料一三六　弘化年間の本途山に弥十郎の名がみえる

晦日。寒風粟烈。時々飛雪。金鉱吏松原小藤太。為吾輩導。観採鉱製金。先抵勝場。観粉鉱淘粉。已而登屏風沢。観撰石鍛鑿。欲更入坑中観穿鉱。小藤太乃発大工二名為導。各名携油灯一盞。吾輩脱衣。着一短幣衣。以縄為帯。竪帯短刀。頭蒙天辺。以紙屑為之。入坑二十間許。坑分為左右。乃入左坑。坑中或登或下。或横木為梯。或刻木為梯。坑中四分。或穿而登。或穿而下。或右或左。入十四五町。坑中有光。打声丁々歌声浪々。入而視之。則穿鉱者也。観穿鉱者五六処。転路至樋場。視棄水。如浚井状。坑中甚暖。傴僂曲折而行。満身生汗。出坑則雪片触身。甚清爽。如離地獄出人間界。〈後略〉

『吉田松陰　東北遊日記』

史料一四二　弥十郎境間歩の鉱石品位

嘉永五年二月五日頽雪ノ為ニ弥十郎坑大工建場倒潰シ圧死二人負傷七人アリシカハ死者一人ニ付銭十三貫文宛傷者ニハ十貫文宛ヲ恤給シ羽田奉行ヨリ死傷者共ニ各米二斗宛ヲ恵與セリ此ノ頃ノ記録ニ弥十郎坑鉱石の品位ヲ挙ケタルモノアリ左ノ如シ

上鉱百貫目ニ付
　銀八百八十目　代金八十七両三分
　右銀ニ仕立候入用　金三二両二分
　差引　御益　金五十五両一分
中鍵百貫目ニ付
　銀四百六十目　代金四十五両三分二朱
　右銀に仕立候入用　金三十三両
　差引　御益　金十二両三分二朱
下鍵百貫ニ付
　銀二百四十目　代金二十三両三分二朱
　右銀に仕立候入用　金十八両二分
　差引　御益　金五両一分二朱

『佐渡国誌』

史料一四三　弥十郎間歩の開発

（嘉永五年）

近来金銀山不盛に陥り候処去秋中より弥十郎間歩敷模様立直り別て当年の儀は同間歩本途稼入出来無之景気にて格別の代銀高取詰候様相成〈中略〉

子十一月十六日被仰出

『佐渡年代記續輯』

史料一四四　天保九年から安政六年までの弥十郎間歩の産出鏈代

安政六年調査セル以前二十二年間ニ於ケル弥十郎坑産出鏈代左ノ如シ

天保九年	三七四六一	天保十年	五二〇八六	天保十一年	四五四三〇	天保十二年	四三四八九		
天保十三年	五〇〇三七	天保十四年	七二三五六	弘化元年	八三一三四	弘化二年	三八二六八		
弘化三年	三二八三八	弘化四年	三二一一二	嘉永元年	三二一〇三	嘉永二年	一二七四三		
嘉永三年	六四〇三	嘉永四年	一二七四三	嘉永五年	九九九五五	嘉永六年	五四九七六		
安政元年	一一〇〇三	安政二年	一九五一五	安政三年	一五三五三	安政四年	九九七七〇		
安政五年	七三二二	安政六年	六三四九	合計	八〇一一五五	平均	三六四一六		

『佐渡国誌』

史料一四五　弥十郎間歩

（安政七年）

別紙写広間役衆より被相渡向後武術修業等申立相越し候は勿論一体の旅人の内へ紛居候儀等も難計候間一同申合猥に逗留等為致間敷旨談し有之候に付及御達候早速御順達止より御返却可被成候　以上

閏三月十二日　弥十郎間歩

御番所外

青盤　鳥越　中尾　清次

『佐渡年代記續輯』

史料一四六　万延元年の諸間歩初十日分の記録

万延元年

諸間歩申八月初十日分

鐵代七百三匁二分　青盤
同　三十一匁三分　鳥越
同　百五十八匁二分　中尾
同　五十三匁七分　清次
同　二百五十四匁九分　弥十郎
合鐵代一貫二百六匁三分

右之通目利仕候處心障無御座候御定法三割九分出来立申上候也

申八月十六日

庄次郎印
栄蔵印
吉五郎印
長五郎印

右之通相改候処相違無御座候依之奥印いたし候也

季三郎印
貞蔵印

金銀改定役
成瀬文蔵
渡保右衛門

金銀改役
尾町成之助
渡部甚助
井口巻三郎
小澤小兵衛
坂井傳之丞

『佐渡年代記續輯』

史料一四七　弥十郎間歩鍛冶小屋で火災が起きる

（万延元年）

去月廿二日於弥十郎間歩鍛冶小屋より出火及類焼候始末右鍛冶小屋番并釜ノ口吟味の上今般御咎申付候右は掛り役人番所勤番泊番ともいたし罷在候もの火の元は勿論都て圍内不締の義無之様可致処畢意心得方等閑より右次等に及候義に付急度可申付所今般の義は不及可等の沙汰以後向々右様の義有之におゐては江戸表の御振合に准じ夫々吟味の上御咎可申付條兼て其旨可相心得候

右向々不洩様

『佐渡年代記續輯』

史料一四八　文久元年における諸山の経費（鶴子銀山関係のみ抜粋）

諸山地入用内訳

弥十郎　一ヶ月分

一　手傳穿子五拾九人
　此賃銭五貫八百三十七文　但一人ニ付九十五文ツヽ、
一　丁場穿子弐拾九人五分
　此賃銭一貫二百五拾八文　但一人ニ付四十一文ツヽ、
一　荏桐油九升四合四勺
　代三貫百八拾三文　但一升ニ付三百三十六文ツヽ、
一　炭六俵
　代七百弐拾四文　但一俵ニ付百二十文宛
一　小入用銭三貫五百文
一　灯心百目
　代弐百拾二文
一　大一丈五尺二本
　代百七拾八文
一　大一丈八本
　代五百二十文
一　大弐間弐拾本
　代一貫三百拾八文
一　九尺拾本
　代二百拾六文
一　矢木拾五本
　代二百弐拾四文
一　留木五拾五本に付揚駄賃五百弐拾九文
一　油九升四合四勺に付同断五文
一　〆銭拾七貫七百弐十文
　此金二両二分永三拾一文五分四厘　八分四厘
　但一十ヲ日ニ付三分永九十三文
地水替入用
弥十郎
一　銭三百六十貫文
一　荏桐油七斗九升二合　水替人数九百人
　代二拾六貫七百弐拾九文　但一升ニ付三百三十六文ツヽ、
　〆銭三百八十六巻七百弐十九文
　此金五五両永二百四拾七文一分七厘　但一両ニ付七貫文替　文九分三厘
　但一ヶ月ニ付金四両弐分永百三　拾四文六分四厘
　一十ヲ日ニ付金一両弐分永三

諸間歩大工如人当御入用
弥十郎間歩　同断（一十日分但九日稼）
一　大工拾人
　此肩九拾枚　此賃銭七貫百廿七文　但一枚に付七十六文ツヽ、
一　鑽通拾弐人　此賃壹貫八拾四文　但一人八十七文ツヽ、
一　荷揚拾二人　此賃一貫九百拾二文　但一人百五拾七文ツヽ、

一　吹子差拾人　　此賃六百三十四文　　但一人六十一文
一　鍛冶一人半
　　此給米一斗五升　　此代七百四十八文　　但一升四十八文
　　給銭二百廿四文
一　中割鐵一貫七百拾匁品渡　代九百六十文　但一貫目五百六十二文
一　刃鐵八百拾匁品渡　　代三百八十一文　　但一貫目四百七十二文ツ、
一　荏桐油弐升五合六勺
　　但荏桐一升種九合ツ、
　　此種弐升三合四勺　　代八百五十七文　　但種一升三百七十文
一　炭五俵五分　　但穿鑿大工にて請取候節は揚駄賃共
　　代六百六十二文　　百六十七文ツ、
　　〆拾四貫六百六文　　但一俵揚駄賃共
　　外　　百二十文ツ、
　　二百六拾六文　　前同様
　　〆拾四貫八百七拾二文　　せんさく大工十人分
　　同断

右稼日数割合
十二貫九百八十文　八日稼
十三貫二百廿一文
十一貫三百五十八文　七日稼　弥十郎
十一貫五百六十七文
九貫七百三十六文　六日稼
九貫九百十六文
八貫百十四文　五日稼
八貫二百六十一文
〆

弥　十　郎
同断（御仕掛大工十人）
一　鏈代百目　　此出来銀百三十九文
　　此　吹　立
面筋金二分　　但出来銀一貫目に付面筋金　一匁二分

　　此成代七分　但面筋十匁出来候へば三十五　匁成代
残山吹銀百三十八匁三分
　　此　吹　分
　　分筋金二匁四分　但山吹銀一貫目に付分筋金十七匁六分
　　灰吹銀百三十匁七分　右同断に付灰吹銀九百四十五匁三分
右　金　直
　　面分筋金合二匁六分
　　此金一分永百二十七文　但筋金百目に　付金十四匁二分
　　灰吹銀百三十匁七分
五に金直七両永二百二文　　但灰吹銀一貫目に　付金五十五両永百三文五分三厘
　　同九十九両永廿八文七分三厘
九に同直拾三両永四十一文
元印銀二十九匁七分　　三二上納鏈代
　　此銭一貫四百八十二文　　但印銀一貫目に付四十八文
　　此永二百十二文二分　　但一両七貫文
　　〆五に金七両三分永四拾一文二分　　出方
　　九に金拾三両弐分永三拾文二分
　　御入用
一　金二両一分永拾三文　　粉成吹入用
　　此銭十五貫八百四十文　　但出来銀一貫目に付午年假目当高　百五十八貫
　　四百十七文
一　同二両永八拾六文六分　大工拾人分稼入用
　　〆金四両一分永九拾九文六分　　御入用
　　此銭三拾貫四百四十六文
　　差引
　　五に金三両一分永百九拾一文六分　御益
　　九に同九両一分永三十文六分

史料一四九　久三年の弥十郎間歩一ヶ年分の鏈代

『佐渡年代記續輯』

文久三年弥十郎間歩一ヶ年分鏈代左ノ如シ当時相川ノ官坑五ヶ所ノ内青盤間歩ノ外ハ皆収支相償ハサリシトイフ

一鏈代一貫二十五匁五分

此出来銀見積リ高一貫六百八十九匁五分之ヲ嘉永年中ノ例ニ依リテ計算スレハ製錬

費用ヲ差引キ一ヶ年僅ニ金七十八両ヲ余スノミナレハ特ニ一箇鉱区ヲ開キ居リ難カリケン久シカラスシテ廃業セリ而シテ鶴子ニハ又全ク槌聲ヲ絶テリ

『佐渡国誌』

史料一五〇　鶴子間歩の開発

（慶応二年）

鈴木君

鶴子間歩取明の義寛政度半途にて見切相成当時水埋相成居候由の処右場所水貫御普請有之候へは必相応の稼も可出来趣見込申立候者も有之候に付此度場所及び見分候処見込の趣尤に相聞当時米売諸色とも高値にて難渋の折柄相暮候細民とも働き為致相応の賃銭遣はして活計の一助とも可相成候に付御救筋をも兼品々水抜御普請取懸り候ては如何哉差向御益差引に不抱勘辨談義の事

但右御入用は年割上納金を以出方取計いたし別段の伺に不及申上にて取掛候手続に可至哉夫是勘辨の事

右御書取慶応二寅三月五日弥十郎鶴子間歩へ御登山有之同六日に出る

『佐渡年代記續輯』

史料一五一　諸間歩大工入用

（慶応二年）

諸間歩大工拾人当御入用

米一斗五升

一　弥十郎

銭拾五〆五百文

差引銭一〆七百八十七文減

『佐渡年代記續輯』

史料一五二　百枚間歩の開発

（慶応二年）

一　百枚間歩是は増方出来可致哉の趣にも相聞　吟味の事

『佐渡年代記續輯』

史料一五三　鶴子間歩台通取明御普請諸品物納通ひ

（表紙）

（表紙）

「　慶応三卯年従十一月

鶴子間歩大台通御取明

御普請諸品物納通ひ

五十里籠町

請負人　惣兵衛　」

十二月中十日分

十一日

一上叺百枚

一普請縄十束

一小笊五十枚

十四日

一敷草り三拾足

一上叺百枚

一小笊五十枚

一大筵拾枚

一普請縄十束

〆

〈後略〉

「沢根籠町　下山チヨノ氏所蔵」『佐和田町史』資料編上

史料一五四　当時御稼間歩并銀山内一件之事

〈前略〉

一弥十郎間歩　惣敷地坪数弐百弐拾坪

御番所建坪四拾八坪

鍛冶小屋建坪弐拾八坪五歩

建場小屋弐軒

此間歩之儀慶安五辰年開発、以後度々中絶仕、寛政享和之頃よりも自分稼御直山等有之、文化十三子年一十ヲ日鏈代五百五拾目余売立候ニ付御直山被仰上相成候処、先両三年も穿鑿稼為致引続弥出方相進候ハヽ其節御伺之儀ニ御下知有之大吹所取扱ニ而自分稼人江御合力大工被下、天保六未年別段之鏈引をも切出し追々出方相進、同八酉年六月より煙貫切山水貫間切越も御立被下御手厚ニ穿鑿被仰付候処、同年八月ニ至り一十ヲ日壱貫六百目余之代銀高ニ相成候ニ付、同年被仰上之上翌戌年二月中十日より御直山ニ被仰付、同年四月御番所并鍛冶小屋御建替、釜ノ口化粧棚結ひ替御普請被仰付候

釜ノ口三ツ合迄間数弐拾六間余

当時御稼敷々弐敷

山師
秋田権左衛門
帳付壱人
油番壱人
穿子遣頭壱人
山留頭壱人
穿子遣弐人
山留弐人
小遣弐人
荷ノ番壱人
かなこ壱人

『ひとりあるき』

史料一五五　幕府は英国鉱山技師ガウルを雇い、現地探査のうえ鶴子間歩再興を決める

（慶応三年）

同年幕府ハ英国鉱山技師「ガウル」ヲ雇聘シ佐渡金銀山ヲ視察調査セシメ採掘製錬ノ方法ヲ改良セントシタリシカ「ガウル」ハ本年九月渡来シ各所ノ鉱区ヲ測量探査シタル結果鶴子間歩再興ノ議決シ其ノ費用ヲハ一昨年来ノ市郷上ヶ金ノ内ヲ以テ之ニ充用スルコトヽナリ左ノ書面ヲ山方役ヨリ提出シ銀山掛広間役意見ヲ附シ奉行ノ許可ヲ得テ之ヲ実行スル期ハ明治元年ニ入レリ

尺〆二千六十四本七分七厘
一御林木一萬千三百五十本
一銭六萬八千七百四十九貫百四十二文
金二〆八千四百八十七両二分余

右者鶴子間歩台通リ御取明被成下候に付御入用見積り取調候様御沙汰有之候処年久敷水埋相成居候敷所故敷形等も相弁候者無御座古書申伝等を以推考取調候義に付聢と見居も附兼候得共精々押引為積立候間追而之模様に随ひ猶取調目当を十日十日に正遣に而御渡被下候様仕度木品之儀買上に而者御不丈夫に而御入用嵩にも罷成候に付御林木に而御渡相願度尤仕事師飯米之儀外並之通夫々御渡被下候様仕度奉存候依而御入用之積帳并墨引相添奉伺候以上（積帳等略）

然ルニ此ノ工事未タ落成セサル間ニ維新ノ改革ニ会ヒ遂ニ之ヲ中止シタルカ此ノ際ノ事記録欠ケテ今明カナラス

『佐渡国誌』

史料一五六　鶴子山の取り扱いについて

〈前略〉

鶴子地所之儀、沢根村之内ニ而、御代官支配ニ付、宝暦八寅年、石谷備後守殿当国御支配之節、御代官所より銀山一体引渡之砌、鶴子銀山向後取扱之儀御掛合有之、池田喜八郎殿より御勘定所江伺之上申来候由ニ而、翌卯年喜八郎殿より被申越候ニ付、備後守殿より御返翰被遣御掛合相済候通左ニ記ス

一、鶴子銀山向後取扱之儀ニ付、先達而及御対談候趣、御勘定所江御申達之処、地所屋数人別は弥御代官所沢根村江附候筈ニ申来り候由、依之以来拙者共支配町人百姓ニ而も、右鶴子之内新切山并古間歩稼揚柄山所ニ願人有之節は、地山吟味之儀は其許へ申進村方障有無之儀御糺御申越可被成候、右地山より被揚候金銀稼方粉成吹立等之儀は、拙者共支配町人百姓は不及申、其御支配所之者ニ而も都而金銀山稼方ニ附候職分一体之吟味は、此方支配ニ而取扱、尤其御支配之者ニ而も、右職ニ付候而は咎御仕置等拙者共方ニ而可申付儀は、御心得被成候由致承知候

『ひとりあるき』

史料一五七　在々金銀銅山古間歩大概にみる古間歩

西野村　　西野村
仕出来間歩、松ヶ沢新切山間歩、　屏風沢庄右衛門間歩、三右衛門間歩、佐兵衛間歩、新階屋間歩、天道間歩、百枚間歩、
沢根村
鶴子百枚平水貫長右衛門間歩、鶴子間歩、太郎太夫間歩、十一郎間歩、下戸鋪間歩、茂右衛門間歩、岡嶋間歩、

『ひとりあるき』

史料一五八　諸国金銀山心得方并皆済方諸記事（欠年）

一　鶴子銅山
是者請負稼ニ而山内取計方都合銀山ニ似寄分申候、勿論金百両ツヽ、銅之方方江、前貸有之、出銅之分佐渡奉行御役所取立置鋳銭座江相渡申候、且筋金、灰吹銀者御買上ニ相成、外吹筋金灰銀之上口金者小判ニ吹立、灰銀者其儘御蔵納ニ相成、尤、鶴子銅山稼所九ヶ間歩有之由ニ御座候

「舟崎文庫」『新潟県史』資料編9近世四

史料一五九　佐和田町史掲載秋田権右衛門開発史（関係部分抜粋）

〔一〕慶安二年
（七月二十六日）秋田権右衛門、鶴子仕出喜日向平の川通りに仕出喜惣水貫の開発を願い出る（八月朔日許可）

（八月十三日）秋田権右衛門は鶴子仕出喜日向平に本間歩の煙貫の新設を願い出る（八月十六日許可）
秋田権右衛門は鶴子仕出喜日向平の平兵衛間歩の再開発を願い出る（八月十六日許可）

〔二〕慶安三年
（五月十三日）秋田権右衛門、鶴子仕出喜平長崎間歩を本敷東延の煙貫きに開発したいと願い出る（六月朔日許可）
（七月二十四日）秋田権右衛門、鶴子仕出喜東平の八右衛門間歩を中山九右衛門間歩東切山の煙貫きに開発したいと願い出る（八月朔日許可）
秋田権右衛門、鶴子仕出喜東平佐兵衛門間歩を長崎間歩への取明口に開発したいと願い出る（八月朔日許可）
山師秋田権右衛門が鶴子仕出喜西平藤庵間歩を惣水貫間歩の煙貫として再開発したいと願い出て許可された。
（十月五日）山師秋田権右衛門は鶴子屏風沢加賀藤兵衛間歩の再開発を願い出る。
同人は鶴子屏風沢大津市右衛門間歩を藤兵衛間歩の煙貫として稼ぎたいと願い出る。
（十月十七日）山師秋田権右衛門が鶴子屏風沢の五太夫間歩の再開発を願い出る。

〔三〕慶安四年
（三月十二日）秋田権右衛門は鶴子屏風沢の藤兵衛間歩の大水貫である次郎右衛門間歩の再開発を願い出る。

〔四〕慶安五年
（六月二十日）秋田権右衛門は松ヶ沢、仕出喜沢、屏風沢一帯の古間歩さらへと草見立及び新規の大水貫の開発を願い出て許可された。

〔五〕承応四年
（一月二十日）松井長右衛門は鶴子左兵衛間歩の権利半分を秋田権右衛門に印銀三百目で売った。なお、万治三年七月朔日に残り半分を売り渡す。
秋田権右衛門は近藤間歩、喜兵衛間歩、三右衛門間歩の再開発を願い出る。（二月十七日許可）

〔六〕万治二年
（六月十九日）秋田権右衛門は、鶴子百枚西平に三右衛門の煙貫の草見立を願い出る。（六月二十一日許可）
（七月二十日）秋田権右衛門は、鶴子百枚市兵衛切捨を近藤間歩の水貫として開発したいと願い出る。（七月二十一日許可）
（八月十九日）秋田権右衛門は、鶴子百枚平の助右衛門間歩を近藤間歩の煙貫に開発したいと願い出る。（八月二十一日許可）

〔七〕万治三年
（六月十一日）秋田権右衛門は鶴子百枚平水貫長水衛門間歩の再開発を願い出て、四十年前に屏風坂峠に堤を作って切流しをしたため、がら山に埋まってしまった二十七・二十八ヶ所の良き間歩を取り明けたいと願い出る。

〔八〕寛文十年
（二月十日）相川権九郎は鶴子内山銅平助左右衛門間歩の再開発を願い出る。

〔九〕天和二年
（三月十一日）山師嶋川惣兵衛と大坂宗左衛門が鶴子内山立鉉平に草見立を願い出て許可された。

〔一〇〕享保二十年
山主和田与左衛門が鶴子沢之内岡嶋間歩、割間歩の古間歩さらへを願い出て許可された。
『佐和田町史』通史編Ⅱ

史料一六〇　『沢根町誌稿年表』にみる鶴子銀山開発史

商工業（鶴子銀山関係のみ抜粋）

慶長六年
相川鉱（山脱カ）盛んになるに反し鶴子が支辨出来ないため関東御料に併せられた。
慶長九年
港湾として沢根に番所を設け首府を相川に移された。
寛文四年
相川盛んになり鶴子衰え鶴子の茂右衛門私費にて稼ぎたれど経費に窮し官営に移した。
正保四年
鶴子各坑の官営を停め私営に移したが慶安二年に再び官営に移した。当時の鶴子の町数は三町あり床屋もあったことが記録にある。
元禄七年
沢根を地方役所の支配となし、相川町奉行の管轄となる。
元禄九年
山師秋田某私費にて試掘せるも一時は盛んなりしが排水多量のため中途にて廃した。

享保三年
笹井甚兵和船を造り海運業の魁をなしたが鶴子小屋は十七軒人数六十人という衰績を来たした。
享保十八年
鶴子間歩本口の開鑿を官営にして再興したが寛保三年排水充分ならざる為め官営を停止した。
宝暦八年
代官より鉱山全部を奉行所に返付せしめられ、其際鶴子に関しては戸地家屋人口等に因る行政上の処分は因より代官の管轄に属すべき事も鉱政に渉るものは奉行の処理することに協定し幕府の指令を得た（鶴子全部休止）。
宝暦十三年
幕府の命により鶴子百枚坑を採掘し掛役人を出張させた屏風沢も明和四年に再興した。
安永五年
古書により廻船一艘米三〇七石積浜田屋治右衛門二三七石積播磨屋儀右衛門二六〇石積金子屋伊右衛門四二四石積仝人四二四石積加賀屋太兵衛三九七石積同人とあり沢根の輸出入も漸く盛んとなった。
寛政四年
鶴子坑は幕府の命により休止す。
文化八年
百枚坑を再興し鏈代五百五十匁差引十五両三分の公益を得た。
文政元年
笹井治右衛門海運業を開業す
文政二年
文書に鶴子雲子（雲子は相川に在り）両間歩景気宜敷相成云々とあり鶴子漸く盛んとなった。当時沿岸漁師多く出来たためこの年八月窪田五十里籠町五十里炭屋町田中村の漁師三十五名に依り漁場取極めをした。
天保七年
弥十郎坑を始め、鶴子全山盛んとなり惣出量一一、四七〇匁四天保十年には三三、〇六一匁八となり同十四年には弥十郎坑出鉱の永続すべき見込みあれば附属雇員　の払米買受を定例となすことを幕府は許可した。
弘化四年
弥十郎坑算出鏈代三、二一一匁二
八月に至り玉目一貫目大筒四挺新規鋳立す。場所は元鶴子床屋跡（今の金糞平）へ仮役所並に鋳立小屋を建て御用旅宿は田中村斉藤作兵衛と文書にある材料は大阪銅座より輸入す
嘉永三年
伏見屋利兵衛新階屋市太郎越中屋太右衛門和泉屋吉兵衛等廻船業を開業し京阪富山石川県北海道に廻航して貨物の輸出入に努めた。
安政四年
安政年間は弥十郎坑盛んなれども四年産出　鏈代九、九七七匁同五年七、三二二匁同六年六、三四九匁と漸次下り坂となった。
文久三年
盛んなりし弥十郎坑も間歩一ヶ年鏈代一貫二百十五匁となり同年の製鏈費を差引き僅かに一ヶ年七十八両余すのみなれば鉱区を開き居ること出来ない（当時鶴子はこの鉱区一ヶ所のみ開坑して居れり）ので廃業した。これより鶴子全山には鎚聲絶えた。
然しこの頃青野屋半五郎千石積みの萬徳丸青徳丸を造船して四国より藍玉、中国より塩を積み佐渡へ輸入し特に藍玉は佐渡一手販売とした。
慶応三年
幕府は英国鉱山技師「ガウル」を雇聘し採掘製錬の方法を改良せんとし同年九月同氏の渡来により測量探査したる結果、鶴子間歩再興と決し実行は明治元年に入り沢根の商業界も活況を呈した。

『沢根町誌稿』第二輯

C　近代の開発

史料一六一　ガウルによる鶴子銀山への木製龍吐水の導入進言について

（明治元年）
佐渡金鉱山坑師方中へ　通　辯　鈴　木　知　四　郎
ツルシ鉱山におゐて新規井戸龍吐水并機械等相設候迄仮に相用へき木製龍吐水并樋筒之図面を其御許方へ相送らんと欲す右は曲尺二寸を以て一尺に対す〈後略〉

右龍吐水必要いたし且目論見に応せん事を希望す謹言
大君土下坑師
於相川慶応第四年一月廿一日　エラスムス、ユゲエムカウル
西暦千八百六十七年第二月十四日

『佐渡年代記續輯』

史料一六二　百枚間歩・弥喜知間歩の粉成吹入用目当高

（明治二年）
粉成吹御入用一〆目当

目当高
一　銭五百七〆二百三十九文　百枚
弥喜知

『佐渡年代記續輯』

史料一六三　弥喜知間歩の覚書き

（明治三年）
覚
午七月分　但三十日
弥喜知間歩西立合延
一　切山壱ヶ所但加勢　竪五尺横三尺　荒揃
此大工拾弐人分　但二十　日分

『佐渡年代記續輯』

史料一六四　百枚間歩納品帳（抄）

（表紙）
明治七年甲戌
百枚間歩品物納帳
一月吉日
明治七年甲戌年（相川）（富田）
百枚間歩大敷　大工町　権助
明治六酉十二月迄〆
一　百四十八貫三百十七文
内札三両　戌一月九日受取
引而　百拾八貫三百十七文　下り
内　五両三月九日受取　夫　嶋蔵
残り　六十八貫三百十七文
〈中略〉
百枚文中敷　（略）
百枚間歩小敷　（略）
百枚間切　（略）
弥十郎間歩　（略）
弥十郎御普請場　（略）

「沢根篭町下山ハツ氏所蔵史料」『佐和田町史』資料編下

史料一六五　百枚坑を再興する

（明治）
仝十五年八月百枚坑　沢根町地域内　ヲ再興ス

『佐渡国誌』

史料一六六　鶴子坑再興のため竪坑開鑿を起工する

（明治二十三年四月）
此ノ月鶴子坑ノ再興ヲ計画シ鶴子百枚弥十郎三坑ノ中央点ニ竪坑開鑿ノ工ヲ起ス

『佐渡国誌』

史料一六七　鶴子坑の開鑿が行われる

（明治二十三年九月二十五日発刊）
鶴子坑開鑿の運び
本坑開鑿ハ去る四月中より取り掛かりしになるが工夫等の勉強にて存外はかどり竪坑三百尺の内百三四十尺を掘下げ当坑は横に千六百尺を通りおりしを以て是か曲りを直し狭きを広げ漸々「レール」を布き行くことなれば最早大概ハ出来あがり此先き八百尺を掘りぬけば正しく竪坑と連絡を通し工事一層手広くなり暫次許多の人夫を要すれば成るべく沢根五十里等地元より雇い入れらるゝよし

『北溟雑誌』第三十五号

史料一六八　百枚・鶴子鉱区の測量が行われる

（明治二十四年十月二十五日発刊）
鉱区測量
御両局技手高津政衛氏は〈前略〉山々を隈なく測量し目下百枚、鶴子、等に着手せりと何か将来開鉱の見込みてもあるもの呼

『北溟雑誌』第四十八号

史料一六九　鶴子竪坑に排水坑道を繋げることに決定する

（明治二十五年）
五月鶴子竪坑深サ三百尺ニ達シタレハ之ニ八百尺ノ水道ヲ連堀スルニ決セリ

『佐渡国誌』

史料一七〇　鶴子坑の排水のため達磨ポンプを設置し、排水に着手する

（明治二十五年五月二十五日発刊）

吾御料鉱山の現況

鶴子坑の排水　同坑ハ元相川鉱山の本家とも云ふべきものにて慶長の古へ一時隆盛を極めしも全く出水の為に稼がれざるとなりしものなり故に今これを再興せんにはまづ排水法に力を入れさるを得さるより三百尺の竪坑及び八百尺の疎水道何れも成就せしかば引続き疎水道の口に当り蒸気釜を仕掛けこれより鉄管を疎水道中に通ふして蒸気を送り正しく当坑の処には達磨喞筒を据附け是等の準備充分行届きしかば去る廿四日を以ていよ排水に着手せりこゝに於てか数百年来行きかふ人だになかりし鶴子坑口に始めて汽笛を鳴らしたりと云ふ

『北溟雑誌』第五十五号

史料一七一　世界博覧会用に鶴子坑等の写真を取る

（明治二十五年六月二十五日発刊）

妙案

当御料局にては此度農商務省の求めにて来年の世界博覧会へ出品先とて製鉱場、搗鉱場、高任坑、鶴子坑等の写真を取ることとなり〈後略〉

『北溟雑誌』第五十六号

史料一七二　鶴子坑・鶴子竪坑の取明けが行われる

（明治二十六年三月二十五日発刊）

吾御料鉱山の近況

〈前略〉鶴子坑は排水の工合ひもよく只今はチナミ（しなみ）沢の当疎水道を鶴子坑の方へ向ひ取明け亦竪坑（百枚坑の最寄にあり）より鶴子坑への連絡は（二千尺あり）疾く通せしが此度は弥十郎坑（千六七尺あり）通せんと坑道を設けたれり聞く所に由ればゆくゆく当坑より掘出す鉱石は沢根へ出しこれより海上相川製鉱場へ運ぶ都合なりと云ふ

『北溟雑誌』第六十五号

史料一七三　鶴子・百枚二坑の再興と百枚役局等が完成する

（明治二十六年八月五日発刊）

第二の相川

当郡沢根村は一の港なれば多少船舶の出入もあり且つ相川に達する要路に当れば戸数人口も可なりにありてなかなか繁華の一駅村なりしが一昨年より御両局支庁にて同地の鶴子、百枚の二坑再掘に着手し今日ハ百枚役局其他鉱夫小屋、鍛冶小屋等種々の新築も出来諸器械の据付も備りて目下盛んに採掘中なるが故石炭其他諸物品の運搬或は選鉱女人足等凡て同村民中より雇るゝ故村民の喜び大方ならず且つ同山に在る坑夫等の買物等より自然諸商業に景気を来たし昼夜の賑ひ一方ならず今にも両坑の一大鉱脈に掘進せば其時こそ第二の相川になること必然なりと

『北溟雑誌』第六十九号

史料一七四　鶴子坑の開鑿が行われる

（明治二十六年九月二十五日発刊）

岩村御両局長の来航

〈前略〉鶴子坑開鑿　これハ往時廃坑に属したりし当坑を更に開鑿するの事業にて已に百八十尺迄進行せしが追々隻良の鉱脈を発見し頗好績を得るの見込なるといへり

『北溟雑誌』第七十一号

史料一七五　往時の佐渡鉱山として各間歩の開発年代が記載される

（明治二十七年四月二十五日発刊）

往時の佐渡鉱山

◎鶴　子　　沢　根　村

一外山茂右衛門間歩（天文十一壬寅年開発し寛　保三癸亥年廃ス

一鶴子本口　（文禄四乙未年開発シ享保拾　九甲寅年水抜南沢ヲ取明

一仕出喜坑　（寛永四丁卯年鉱山調出ツ延　享二乙丑年取明寛延元戊辰年廃ス

一重一郎坑　寛文四甲辰年同上

『北溟雑誌』第七十九号

史料一七六　鶴子坑の開鑿と軽便鉄道の敷設が行われる

（明治二十七年四月二十五日発刊）

鶴子坑開鑿　は毎々本誌に記載せしが去月中より正しく鉱石を見るに至りしが其採掘せしものハ畳々として坑口に堆積せるに就き臨時に仮小屋を設け選鉱場を開きたり又播磨屋川に傍ひて設けし新道にハ近日の内「レール」を敷きて是より鉱石を沢根港の御用地に運び同港よりは船廻しとして相川の製鉱場に送る都合なりとぞ

『北溟雑誌』第七十九号

（明治二十七年）

鶴子坑ノ鉱石ヲ相川へ航送スルタメ鶴子ヨリ沢根ノ海岸ニ通スル軽便鉄道敷設ノ工事ヲ起ス

『佐渡国誌』

史料一七七　往時之佐渡鉱山として各間歩の開発年代が記載される

（明治二十七年五月十日発刊）

往時の佐渡鉱山

一西五十里村大瀧坑（天明四辰年開発
文化十二乙亥年試稼

『北溟雑誌』第八十号

史料一七八　『佐渡国誌』にみる鶴子銀山開発史

（明治）
仝十五年八月百枚坑　沢根町地域内　ヲ再興ス
（明治二十三年四月）
此ノ月鶴子坑ノ再興ヲ計画シ鶴子百枚弥十郎三坑ノ中央点ニ竪坑開鑿ノ工ヲ起ス
（明治二十五年）
五月鶴子竪坑深サ三百尺ニ達シタレハ之ニ八百尺ノ水道ヲ連掘スルニ決セリ
（明治二十六年）
八月鶴子坑ノ役員詰所鉱夫部屋及ヒ附属建物等悉ク落成シ採鉱ニ従事セリ
（明治二十七年）
鶴子坑ノ鉱石ヲ相川へ航送スルタメ鶴子ヨリ沢根ノ海岸ニ通スル軽便鉄道敷設ノ工事を起ス

『佐渡国誌』

史料一七九　佐渡鉱山売買契約

佐渡生野両鉱山及大坂製煉所売買契約書
御料ニ属スル佐渡生野両鉱山及大坂製煉所ノ払下ニ付売主御料局長男爵岩村通俊ヲ甲トシ買主三菱合資会社業務担当社員男爵岩崎久弥ヲ乙トシ甲乙ノ間ニ左ノ条々ヲ約定ス
第一条　甲ハ左ニ記載スル鉱山及土地物件ヲ明治二十九年十月三十一日ノ現形ニ於テ乙ニ売渡スヘシ
一佐渡鉱山ニ属スル相川百枚二鉱区及附属油戸鉱区ノ採掘権及営造物諸器械器具用地並ニ鉱山備林
〈後略〉

『新潟県史』資料編一八近代六（ゴールデン佐渡株式会社所蔵）

史料一八〇　『佐渡鉱山史（稿）』にみる操業記録

〔一〕明治三十二年
二月　弥十郎、高任間に鐵索架設成り操業す

〔二〕明治三十年度
鉱場課関係
百枚坑　主なる採鉱場を瓢箪口に設け台割、腰割を行ったが富鉱ぶの区域狭少五十尺程度で望み薄であったが開坑は鶴子掘下西延外十三個所で各坑と共に探鉱に主力を傾倒した
坑内起業
一、百枚弥十郎北延（延長九四尺）弥十郎脈の開発であるが良況を呈せず
一、仝　下延（延長四九尺）

〔三〕明治三十一年度
鉱場関係
百枚坑　瓢箪口蔵之助及び薄身台の三工場を稼ぎ瓢箪口産鉱多かったがが概して普請の為め本年八月の改革期に於て休止した
坑内起業
一、百枚坑弥十郎探鉱（延長二八三尺九寸）弥十郎脈に対する徹底的探鉱にして探鉱切羽九個所を設け其目的を達成したが結果良好でなかった

〔四〕明治三十二年度
起業
百枚弥十郎西掘下　貫通の目的を達す

〔五〕大正四年度
探鉱
百枚坑　三菱引継以来十有八年放棄しありし百枚坑取明に着手した

〔六〕大正五年度
起業探鉱
其他百枚坑南延、百枚北延弥十郎坑、鶴子坑等取明を行ふ百枚南延着鉱し良況を呈した

〔七〕大正六年度
起業探鉱
百枚南延及掘上、南延鉱況衰況に陥り富鉱部より掘上起工含金銀銅鉱を産す同時に鶴子坑取明を行ふ

〔八〕大正七年度

起業探鉱
百枚坑南延含銅方鉛鉱を産するに至り鶴子坑天道脈西延は当坑を辿り支柱掘進中

〔九〕自昭和七年十月至仝八年三月　第三〇期
探鉱及び採鉱
鶴子坑、百枚坑の取明は前期着手し天道脈のひ押を行ひ良下鉱を産した

〔十〕自昭和八年四月至仝年九月　第三一期
探鉱及び採鉱
鶴子天道脈も漸次良好（鉱カ）を出鉱するに至った

〔十一〕自昭和九年十月至仝十年三月　第三四期
探鉱及び採鉱
鶴子坑は期□気機を据付け其他新穂、戸地、北狄等支鉱区探鉱中なるも一般に振はず

〔十二〕
其他昭和十年度に於ける坑内の探鉱強化、鶴子坑の開発による鉱源探査に努めた

〔十三〕自昭和十一年四月至仝年九月　第三七期
起業探鉱
鶴子坑掘下開始した

『佐渡鉱山史（稿）』

史料一八一　百枚・鶴子竪坑の坑道延長距離（関係部分抜粋）

縦横坑道数及其延長
〈中略〉
百枚竪坑　一〇六，〇〇（メートル）
鶴子竪坑　一〇〇，〇〇

『鉱山発達史』

史料一八二　「佐渡鉱山事業報告」にみる戦前の開発記録

自昭和十四年十月　佐渡鉱山第四拾四期事業報告
至昭和十五年三月
本山
第一　緊急起業
F－32鶴子竪坑開鑿　未着手
F－33鶴子四〇馬力捲揚機新設　全工事進行程度　九三・〇％
ロープ道捲座ノ開鑿及ビ保坑並ニ竪坑小枠ノ布設ヲナス。
F－34二二〇馬力圧気機鶴子坑移転　全工事進行程度　一〇〇・〇％
F－35鶴子排水設備　一〇〇・〇％
F－36鶴子諸建家　四〇・〇％
F－37鶴子工作場及器械設備　未着手
〈中略〉
第三　採鉱
〈中略〉
天道脈
鶴子坑ノ鉱石ハ主トシテ天道脈ニ仰ギ脈幅一米内外金品位三乃至四％ナリ。
〈後略〉

「第四十三期 第四十四期 分事業報告」『新潟県史』資料編一八近代六
（ゴールデン佐渡株式会社所蔵）

D　経営体系

史料一八三　豊臣秀吉朱印状

豊臣秀吉朱印状
越後・佐渡両国金山之事、其方え被預置候條、直江代官（兼続）申付可運上候、猶浅野彈正少弼（長政）・石田治部少輔（三成）可申也、
正月十七日　朱印（豊臣秀吉）
羽柴越後中納言（上杉景勝）殿へ

『佐渡国誌』

史料一八四　浅野長吉書状

浅野長吉書状
「（瑞裏ウハ書）　浅野少（浅野彈少弼）
――――――――――――――――――――
（墨引）　石田少殿（石田治部少輔三成）　長吉
□御□□
態令啓候、越後・佐渡両国金山之儀、中納言（上杉景勝）殿へ被仰付、如此被成、時分柄にて候間、急金子御掘らせ被成候へく候、中納言殿へ可被仰達候、恐々謹言、
正月十七日　長吉（浅野）（花押）

史料一八五　直江兼続の金銀山開発における覚書

おぼえ
一、作（佐）州たいりうのうち、くゐ米の外船につむへからす、同ひんせんの事
一、金山にて知人親類成共付合候事無用也、並あそひの事
一、山を請て銀ほるへからさる事
一、身の米にまきれて他之兵粮金山へ入へからさる事
一、如何やう成義候共金山にて物かすましき事、並此度はうはいなかの用所たすましき事
以上

右条々□上失念有間敷候、仍如件
二月二十八日　（黒印）㊞

岡村源左衛門とのへ
山庄喜兵衛とのへ
まいる

「山庄小左衛門家文書」『佐渡金銀山の史的研究』

史料一八六　直江兼続の庄内金山の仕置

直江兼続条書
庄内金山仕置之注文
一、堀場祝儀役已下、諸事仕置、去年従浅野殿奉行人申付候通、能々聞届、小茂無相違様ニ可申付事、
一、金山おゐて米以下、しやうはひものゝ分一役等、右同断之事、
一、堀手共我儘之振舞於有之者、自他国之者よらす、成敗すへき事、
一、庄中をはしめ御分国中、去年金堀にて、金山仕置等たんれん之者数多可有之候、其内才覚なる者召出し、為案内者万事可申付事、
一、金山諸役、壱ヶ月宛算用相究、毎月に一紙小日記共さしこすへき事
右之条々、分別用捨有之而、可申付者也、
文禄四年
正月廿三日　　兼続在判
立岩喜兵衛殿
志田(忠)修理殿

「葛山衆御朱印物等写」『新潟県史』三九五二

史料一八七　河村彦左衛門・田中清六の佐渡支配任命

四　去年上杉景勝会津籠城の事ニよりて、家臣等も御勘気を蒙る処、今年河村彦左衛門赦免せられ、佐渡の公務を沙汰すべき旨命ぜられ、田中清六へ被下御朱印、左の如し
一　佐渡国銀山如前々、金穿共召集候事
一　河村彦左衛門儀、赦免候条、彼国有事仕置等可申付者也、仍如件
慶長六年五月五日
田中清六とのへ

『佐渡年代記』一
「佐渡古実略記」四『佐渡国略記』一

史料一八八　運上入札制の記録

大けたへ間歩、たつの五月十四日卯刻より同十九日卯刻まで、御運上参拾四貫目ニ御請申候、右之日限之内ニも御運上まし申人御座候ハハ可被成御渡、弥々御山能なり次第注進可申上候、仍如件
たつ五月十四日　　京新五郎（花押）
小宮山民部様
吉岡出雲様
宗岡佐渡様
長谷川伝右衛門様

「相川郷土博物館所蔵文書」『佐渡金銀山の史的研究』

史料一八九　運上入札制の記録

中山ニ弥十郎間歩見立仕申候、少成共くさり御座候ハハ御安（案）内可申上候、我等しんらうふんハ石州銀山なみニ可被下候、以上
たつ卯月八日　　久右衛門　㊞
佐兵衛　㊞
うけちよう

「相川郷土博物館所蔵文書」『佐渡金銀山の史的研究』

史料一九〇　御直山制の記録

金銀山の内山仕共を雇ひ御入用を以穿出す所を御直山と云山仕の入用を以稼間歩を自分山と云此時御直山三十六ヶ所有て右の山仕三拾六人へ俸米百俵宛を與へ炭留木鐵松蝋燭等十分に渡せしと也

『佐渡年代記』一

史料一九一　御直山制の記録

山仕共自分山をば運上金銀を出して稼きし也山の出方により運上も同しからす〈後略〉

『佐渡年代記』一

史料一九二　銀山奉行の任命

（慶長十八年～元和三年）

慶長十八丑年ヨリ元和三巳年迄　田辺十郎左衛門御支配五ヶ年之内最初銀山衰依之一ヶ年分公納鏈全体御用捨其上他国ヨリ諸色入役一通リ御取立相川諸運上御免被下無程銀山大盛仕候

『佐渡国略記』五

史料一九三　御直山制の記録

（元和八年）

此節御直山十六ヶ所ありて金穿の大工壹人に米四斗宛大工頭壹人に米八斗宛貸渡す事あり手形裏判は鎮目市左衛門なり〈後略〉

『佐渡年代記』一

史料一九四　鉱山開発権の売買

一、我等先祖ヨリ持来候銀山之分、今度貴殿へ相渡し申候義ハ、拙者親伊左衛門遺言仕候上、山主名を貴殿ニ付替萬事ヲ願申御事

山数之覚

一、ヶ代下大横相間歩并ニ小屋屋敷手形

一、下り松平伊勢源左衛門間歩并ニ小屋屋敷手形

一、采女平河端間歩并ニ小屋屋敷手形

一、采女平参次間歩并ニ右同断

一、同上口間歩　〃

一、越中仁兵衛間歩并ニ右同断

一、大弥三右衛門間歩并ニ右同断

一、右之沢越中才兵衛間歩并ニ右同断

一、西野沢仕出喜間歩并ニ山札

合九ヶ所、此所内何れニ而も出来仕候者、山主成之金銀半分我等ニ御分可被下候、か様ニ相極候上ハ我等先祖（子孫の意味）ニいたり此外ニ何事ニ而も出入申間敷候、為後日手形取かわし如此ニ御座候、以上

天和二年

戌十二月十三日

山渡し主

山師　河上治左衛門㊞

証人　高田孫左衛門㊞

村上善左衛門様

「味方家文書」『佐渡金銀山の史的研究』

史料一九五　御直山制の崩壊と小浜奉行による鉱山仕法改革

（享保九年）

御直山を請負稼ぎとするよう江戸より達するに付、小浜奉行の意見書

一佐州御直山は従来山師等鉱区を発見して稼く所に必要の諸費諸品を給與し只穿大工のみは総て山師の自弁とす金児は山師に属し坑内を区分して各之を稼くか古来の慣例なり又合力大工と称し具賃銭を官給し採鉱の内四分上納六分金児一分山師に給するものあり此鉱石は一旦買石に印銀にて売渡し製錬したる金銀をは又悉く買上くる例にて相場の差違か即ち　官の利益となるなり（摘要以下皆同し）

一請負山は総費用を山師金児等自弁し出鉱の内其良否に依り十分一より七分一許を上納するのみにして其余は山師金児等の所得とす而して鉱石の製錬及売買等は前條に仝そ若し今請負稼となさんか山師等目前の利益をのみ貪り永久の策を講する者はあらさるへく且つ運上銀も盛衰に拘はらす一定すれは衰へたる時は益あるか如きも盛なる際には損なり若又出鉱の良否多少に応して運上銀を課せんか買石等種々の奸策を用ひて其成績を隠蔽すへし果して然らは役人如何に監督したりとも鉱石より純金銀に至る迄幾回の淘汰練磨を経る間到底之を検出すること能はすして畢竟不取締に了らんのみ

一相川銀山請負稼となすならは山師金児等は忽ち其職を失ふへし現今山師十二人金児七十三人其外関係者約三百人は自然離散せさるへからす加之鉱山勤務役人大小七十八九人の内多くは失職困難すへし

以上の如くなれは請負山となすことは停めらるゝかた隠当ならん只従来の方法を改良して諸費に於て減額する様別愚見を陳する左の如し

一坑数を減すへし

坑数多けれは其費亦多くして収支償はす故に良坑のみを撰みて其の数を減すへし

二合力大工を廃すへし

金児等私傭の大工を減して合力をのみ使用す故に金児の利益応多くして官費愈増す断して之を全廃すへし

三官給の大工を使用すへし

合力を廃すれは金児等稼所を減すへし其の廃跡へは官給の大工を差はし採堀せしめ

出鉱は全く之を官納し内山師等に十分一を給せは官益必す多からん

四官立の床屋を創め製錬せしむへし

従前買石等鏈を競売するに当り務めて下直に買落し或は全く買受けさること屢有り依て去秋より官費を以て臨時製錬所を設け製出の多少に応し四分上納二分は製錬費に其残額を金児に與ふる規程を設けしに以来金児共稼所を増加したり依て買石六十六人の内正実なる者十一人に減し役人を派遣監督せしめしに従前より製錬上五割を増せり製錬所は官営となすを至当とす

五粉成所一軒再興すへし

古来間吹と唱へ役人監督の粉成吹所二軒ありしを三十年来之を廃せしに買石等粗鉱をは買取らすなりし故金児も自然之を採取せす今年四月粉成所一軒を官設し専ら粗鉱を製錬したるに金児等も自ら稼所を増し来れり

『佐渡国誌』

E　鶴子陣屋

史料一九六　『佐渡相川志』にみる陣屋の設置と移転

鶴子陣屋

鶴子銀山、天文十二癸卯年ヨリ始マル。此所沢根地頭本間摂津守領分ナリ。外山ニ陣屋アリ。一説ニ天正十八庚寅年上杉家来山口右京ヲ置カル。其時陣屋作事有ト言フ。慶長二丁酉年ヨリ四奉行此所ニテ一国ヲ成敗セリ。同八癸卯年此陣屋ヲ相川ニ移ス。翌年甲辰ヨリ同十五庚戌年迄保科喜右衛門ヲ置カル。是レ銀山支配トモ言ヘリ。

『佐渡相川志』

史料一九七　肴町屋敷の諸役免除

以上

肴町屋敷壱間（軒）

本屋敷為替諸役

御免ニ出置者也

仍如件

慶長六年七月朔日　　河村　花押

田中　花押

（由脱）

斎藤勘解左衛門尉

「沢根五十里　斎藤おもや文書」佐渡博物館所蔵

『佐和田町史』資料編上

史料一九八　『佐渡古実略記』にみる鶴子陣屋の移転

〈前略〉慶長八卯年宗岡弥右衛門渡海鶴子外山ノ陣屋ヲ相川ニ移シ〈後略〉

「佐渡古実略記」四『佐渡国略記』

史料一九九　『佐渡古実略記』にみる鶴子陣屋の移転

石見守当国エ渡海人数之事

銀山奉行　宗岡佐渡　初号弥右衛門本国長州高二百俵慶長五子年ヨリ石州銀山支配同八卯年当国エ渡海鶴子外山之陣屋ヲ相川ニ移当国銀山支配石見守知行二万石之内五百石合力毎年石見佐渡交代シテ同十八丑三月十六日於当国卒一向宗沢根町専得寺ニ葬法名釈道雪子孫宗岡安兵衛当時御家人ニテ高六十俵三人扶持被下於石州組頭役御金蔵役相勤

銀山奉行　吉岡出雲　初号隼人本国泉州高百俵被下石州銀山役相勤慶長九辰年石見守ニ随身当国ニ渡海同十四酉年迄地方銀山支配同十九寅年於石州卒子孫吉岡藤市当時御家人ニテ高三十俵二人扶持被下於石州御林預り役相勤

「佐渡古実略記」五『佐渡国略記』

史料二〇〇　大久保長安時代の銀山担当

慶長九年

横地所左衛門原土佐吉岡出雲等石見守に従ひ来り所左衛門は赤泊に住し水津迄の郷村を預り土佐は小木の古城に住し西三川迄を預り出雲は銀山の事を沙汰す

石見守言上して浪人の筋目を糺し佐州へ遣し夫々の役に当つ今年具し来りし者の内保科喜右衛門は鶴子銀山を預り堀口弥右衛門は河原田城付地方を預り鳥井嘉左衛門は夷組大野組代官となり何れも俸米百俵以上三百俵迄を給ると云又野田監物川村覚助と云ものを相川の町奉行とすといふ

『佐渡年代記』一

F　山師

史料二〇一　年不詳　沢根町町人由緒書（巻二）

〈前略〉

沢根町奉行

一、田中清右衛門　寛永十酉八月廿二日卒

一、宗岡七左衛門

父宗岡佐渡、初号弥右衛門、大久保石州ニ随分代当国エ渡海ノ趣意略記二ノ巻ニ記ス、

爰ニ一向宗沢根町専徳（得）寺開基修栄、他国ニ而近付ノ好身ヲ以専徳（得）寺エ山壱ケ

所寄進、宗岡氏慶長十八巳三月十六日卒、法名道雪則、当寺ニ葬、墓所後ノ山ニ四ツ石ニ而塚ヲ築、脇ニ松四本有之、宗岡家来助三ト云者其節出家シテ此所庵堂ヲ建、墓所ヲ相守候由、右七左衛門当国ニ居テ相川米屋町ニ居住、山主相勤、正保三戌九月廿三日卒、法名了勝、専徳（得）寺ニ葬ル

一、同七左衛門
父宗岡七左衛門
正保二酉八月廿日卒、法名西性、専徳（得）寺ニ葬
〈中略〉

『佐渡近世・近代史料集―岩木文庫―』下巻

史料二〇二　山師秋田権右衛門家の由緒書

秋田権右衛門
先祖古口権兵衛相川ニ銀山ヲ見立ツ、是ヲ古口間歩ト言フ。元和之頃西野村仕出（喜脱）御直山ノ節山師ニ御抱入名跡権右衛門生国羽州秋田ナリ。寛永十癸酉当国へ渡リ寛文五乙巳年三月十日ニ卒ス。承応元壬申年ヨリ七ヶ年仕出（喜脱）、百八拾間自分ニ切継ク。先祖ヨリ六代同苗権右衛門銀山稼方巧者故元禄ノ頃鳥越間歩大盛ヲ得同十六癸未六月十六日卒ス。浄楽ト言フ。

『佐渡相川志』

史料二〇三　鶴子の買石

買石
先年ハ銀山敷内ノ出鏈ヲ人夫ニ掛テ金銀ニ吹立ツ。是ヲ山買石ト言。又自分ニヤス鏈捨石或ハ川通ヲ流シ椀ノ蓋ニテ陶リ立ツルヲ御器買石ト言。慶安ヨリ寛永ノ頃迄買石六百人アリ。一軒ニ人数五六十口其外新穂、滝沢、鶴子、入川、寛永三丙子年ヨリ戸地ノ水車買石アリ。〈後略〉

『佐渡相川志』

史料二〇四　吉祥寺行事木札

慶安五年七月
西野古岩山吉祥寺の行事木札
（表）
聖王天中迦陵頻伽声
種子　大行事帝天王今日戒師地蔵菩薩
干時慶安五暦壬辰七月十九日本願
再興　秋田権右衛門
権大僧都快遍古岩山別当吉祥寺
仕出喜喜兵衛　本間三郎左衛門　施主
本願　本間　吉兵衛　田中忠右衛門　敬白
斉藤　新兵衛　斉藤　甚作
仕出喜喜左衛門
（裏）
願以此功徳普及於一切
種子　我等与衆産皆共成仏道

「吉祥寺文書」（土屋龍太郎氏所蔵）『佐和田町史』資料編上

史料二〇五　吉祥寺の秋田権右衛門由緒

秋田権右衛門由緒
一　出羽国秋田之武士ニ秋本権左衛門と申侍有、一子ニ権右衛門と申テ一国武勇之侍有、然ルニ有時同役と為口論終ニ敵ヲ打取岩崎団右衛門と申者致一道、寛永元年甲子ノ春生年廿五才にシテ渡リ当国へ　寛保二戌年迄百十九年ニ成　西五十里村ニ居住シテ扇（屏）風ノ辺リ、しでのき古岩之左右方より金銀之宝石ヲ掘出ス事日々夜々ニ数万両、然共一子無之故秋田より権九郎と申甥ヲ呼寄為名跡、其弟ニ庄之助と申人有、是も当国へ渡ル、国を片取テ則秋田権右衛門と名乗、実名ハ盛巌宗雪と言フ、寛文五巳年三月十日ニ死去ス　寛保二戌年迄七十三年ニ成　一子権九郎名ヲ改テ秋田権右衛門と云、彼一道いたしたる団右衛門河原田大坂町ニ居住ス、一子ニ左次右衛門と申有、寛保二年戌暦迄九十二才ニ罷成、其養子ニ勝右衛門申人有、親ト共居住ス、彼宗雪代ニ五十里城ノ下ニ多門寺と申寺有、彼寺之持分ニ西いかり村ニ多クノ空地有、依之多門寺ヲ西五十里村へ引上セ建立之ヲ、其近所ニ金北山之宮有、此宮ヲ村中へ引、多門寺空地へ造立ス、彼寺ヲ改テ名ク吉祥寺と、如古法、金北山之為別当ト、彼権現ハ真光寺鎮守大山之元宮成、金北山之縁紀別ニ有而已
善映敬白

「吉祥寺文書」長安寺所蔵『佐和田町史』資料編上

G　五十里十分一

史料二〇六　五十里十分一の開始年

在々浦方役
五十里色取役　当役始ノ年月不知。元禄四年辛未年止ム。役所五十里橋詰西側役家東側ニ二軒此処ニテ諸色十分一ノ色取役アリ。世ニ五十里十分一ト言フ。

『佐渡相川志』

史料二〇七　五十里に番所を建てる

（慶長六年）
〈前略〉　五十里上相川二ヶ所に番所を立るといふ

『佐渡年代記』一

史料二〇八　一ヶ年分諸番所御役并諸役納り覚

（元和八年）
一ヶ年分諸番所御役并諸役納り覚
一　弐拾壹貫八百弐拾五匁八分　五十里十分一
一　百五貫八百五拾三匁弐分　沢根
一　拾八貫五五匁五分　鶴子小役

『佐渡風土記』中巻

H　沢根番所

史料二〇九　沢根番所の開始年

沢根番所
当湊開発ノ年暦不知。番所ハ慶長年中番所役始リ定役格ナリ。正保三丙戌年ヨリ始ル。其後中絶。□□年中ヨリ町支配仰付ラル。宝暦三癸酉年五月廿五日相止ム。

『佐渡相川志』

史料二一〇　沢根番所の建替え

（宝永四年）
沢根番所を建替る

『佐渡年代記』五

史料二一一　沢根浦方番所

浦方番所
小木沢根湊水津松ヶ崎赤泊にありて各武器を配れり又二見窪田渋手西三川小泊沢崎深浦宿根木大石赤岩腰細多田尾戸野浦大川羽丹河崎白瀬浦川虫崎鷲崎願真更川矢柄高下姫津この浦々には浦目付といふものありてこれらにも大小銃を分てり

『佐渡志』

史料二一二　正徳四年　佐渡奉行所諸役人勤書

沢根番所　役人四人内壱人定番
一　米　壱石ニ付銀三匁宛
一　大豆・粟・小豆・小麦　壱石ニ付銀弐匁宛
一　大麦・稈・蕎麦　壱石ニ付銀壱匁宛
一　木綿　壱反ニ付銀三匁七厘宛
一　茶　壱斤ニ付銀弐分弐厘ツヽ
一　能登酒・越中酒　壱樽ニ付銀壱匁宛
一　越前酒　壱樽ニ付銀壱匁弐分宛
右之外絹布并万役品々有之
同所六分一色取役
一　油　壱升ニ付銀壱匁五分売
一　塩　銀壱匁ニ付弐斗売
一　葺板　拾把ニ付銀三匁売
一　四指料　壱挺ニ付銀弐匁売
一　杉丈木　壱挺ニ付銀壱匁七分売
一　灯心　銀壱匁ニ付百弐拾目売
一　鉄　品々ニ付直打高下有之
一　船澗役先規より無御座候、御役之物揚ヶ申候へハ、壱人ニ付銀七分宛取立申候
一　沢根五十里小役銀、毎月廿五日ニ門々相改、押切帳ニ書記、大印ニ何月分何屋何町之進と書、番所役人三人之名書載、中使・名主ニ相渡置、毎月朔日ニ御広間江差上、裏判取申候而御勘定所へ相納、負判いたし置、御運上屋江御役銀相納、則納札ヲ取御勘定所江致持参、右之負判欠申候、古大印者壱ヶ月切ニ中使名主方より相返し申候間、御広間江納申候事
一　河原田小役門改之儀、毎月廿六日ニ定番役人壱人罷越、町々致吟味、帳面ニ書記、銀高相究、中使名主為致印判、窪田浦目付役江右之門改帳相渡申候、則帳面之通取立、毎月三日ニ窪田浦目付より御運上屋役へ納申候御筝
一　銀山御入用候ま掛り之船ニ積参候得者、直段聞合セ、御買上可被成哉と伺申候、御買上之砌御雑蔵役人被遣候、則番所役人問屋立合、直段相極買上申候而沢根鉄蔵ニ入置、山方役請取通ひニ而御用次第度々相渡申候御事

『岩木文庫』

史料二一三　寛保元年の沢根定番役

（寛保元年六月）
同廿九日、沢根定番役岸野六左衛門並番所役二人、御広間江被召、此処江大坂舟壱艘永々

〈後略〉

『佐渡国略記』十一

史料二一四　寛保二年の沢根番所役の死去

（寛保二年十月五日夜）
同、沢根番所役太田嘉右衛門相果

『佐渡国略記』十一

史料二一五　延享四年の沢根番所役の死去

（延享四年十一月廿日）
同日、沢根番所役堀内九兵衛相果、年六拾、法名乗心

『佐渡国略記』十二

史料二一六　沢根番所の給料

（宝暦二年）
沢根番所
舟手より取立る御役銀前に同し一ヶ年御役銀の内勤料割も定役六分平役四分通り余は右松ヶ崎番所に同じ

『佐渡年代記』八

史料二一七　宝暦三年の沢根番所定番役

宝暦三年七月　佐渡の代官制採用記録
沢根定番役　　水田与左衛門　内田五右衛門

『佐渡年代記』八

史料二一八　宝暦六年の沢根番所役

（宝暦六年）
今年沢根夷湊等の番所へ長柄其外銛付道具を渡す沢根には享保七年より長柄はありし由下戸海府両番所へも今年より渡せしと聞ゆ

『佐渡年代記』八
『佐渡国略記』十五

史料二一九　宝暦十三年の沢根番所定番役

（宝暦十三年十月）
同十九日、御代官御支配沢根番所定役水田与左衛門弟嘉六被召出、〈後略〉

『佐渡国略記』十七

史料二二〇　明和三年の沢根番所定番役

（明和三年十二月）
同廿三日夜、沢根定番役久保十兵衛父新右衛門死去、年　（欠）

『佐渡国略記』十八ノ上

史料二二一　明和四年の沢根番所役の役替

（明和四年六月）
同十日、沢根番所役坪井六左衛門、松ヶ崎定役被仰付

『佐渡国略記』十八ノ上

史料二二二　明和五年の沢根定番役

（明和五年三月）
同十一日、沢根定役久保十兵衛、当分御代官所江罷出、地方御用手伝相勤

『佐渡国略記』十八ノ下

史料二二三　沢根番所へ長槍が渡される

（明和六年）
十月十五日小木番所え高張桃燈捕縄手鎚等を渡し沢根夷湊赤泊松ヶ崎等の番所え長柄を渡す

『佐渡年代記』十

（十月十五日）
同日、御門附高提灯二張・指縄四筋・手鎖四挺小木御番所江、沢根・夷・赤泊・松ヶ崎右四ヶ所御番所江鑓三筋宛、右ニ付定役方被召出、小木より金光、沢根より水田、夷より西川、赤泊より内田、松ヶ崎坪井

『佐渡国略記』十八ノ下

史料二二四　佐渡奉行が沢根を視察する

（明和六年六月）
同廿一日、天気能、御奉行青山七右衛門様・御組頭岩堀権左衛門様各々沢根江御越、五十里茂右衛門方ニ御休、御用人村瀬九郎兵衛・広間役岩間半左衛門

『佐渡国略記』十八ノ下

史料二二五　明和七年の沢根番所役

（明和七年五月）
同六日、於高瀬村ニ丹後船壱艘痛、乗組之内壱人死、御目付役天野紋右衛門・地方掛岩間孫三郎・沢根番所役堀内兵九郎・橘浦目付役保科喜右衛門各罷越〈後略〉
『佐渡国略記』十八ノ下

史料二二六　明和八年の沢根番所役

（明和八年十月）
同十六日、沢根番所役堀口（内）兵九郎娘死去、年十七
『佐渡国略記』十八ノ下

史料二二七　安永五年の沢根番所定番役

（安永五年九月）
同七日、沢根村御番所定役久保新右衛門二代三太夫、右御番所役見習被仰付
『佐渡国略記』二十一

史料二二八　安永六年の沢根定番役

（安永六年一月）
同十五日、沢根定役久保新右衛門二代三太夫御目見、沢根番所役被仰付
『佐渡国略記』二十一

史料二二九　安永六年の沢根番所役の役替

（安永六年）
同四月朔日、沢根御番所役堀内兵九郎御米蔵定役被仰付、〈後略〉
『佐渡国略記』二十一

史料二三〇　安永七年の沢根定番役の役替

（安永七年二月）
同廿日、左之通役替、山方役より沢根定役田中茂右衛門、御目付役より山方役高田六郎兵衛、沢根定役より御目付役久保新右衛門
『佐渡国略記』二十一

史料二三一　安永七年の沢根定番役の役替

（安永七年四月）
同廿七日、役替、地方掛より沢根定役益田丹右衛門、沢根定役より辰巳口定役水田与左衛門
『佐渡国略記』二十一

史料二三二　安永七年の沢根番所定番役

（安永七年）
四月廿三日より沢根番所定番役え同所町方之事をも司らしむ
『佐渡年代記』十一

史料二三三　天明元年の沢根定番役の死去

（天明元年十一月）
三日、沢根定役益田丹右衛門死去、山の神大乗寺葬、年七十
『佐渡国略記』二十一

史料二三四　天明三年の役替

（天明三年七月）
十九日、役替、〈中略〉小木より沢根へ上月五郎太夫、〈中略〉沢根より六十枚へ渡部安左衛門
『佐渡国略記』二十二

史料二三五　天明四年沢根番所役の役替

（天明四年）
五月廿五日、御役替六拾四人、〈中略〉沢根番所役菅沼太左衛門、〈後略〉
『佐渡国略記』二十二

史料二三六　沢根番所・同役家建替えの割当人足について

（天明四年）
差上申一礼之事（控）
今般於沢根御番所御扱下之村役人共御召寄被仰渡候ハ、御番所并御役家建替之節其御扱下之村方より、高割を以人足差出可申段被仰渡、承知奉畏候、然所当村之儀者是迄御伝馬相勤罷有候ニ付、高掛り人足近年御願申上候而御免被成下候哉、弥左様ニ候ハハ、右之通書付差出し候様被仰渡候ニ付、右之段相認差上ヶ申候、尤此段御役所江茂早速御願申上候積リニ御座候間、御請印形之義者先御免奉願上候、已上
天明四辰七月

雑太郡田中村
百姓代　喜一郎
組　頭　善　吉
名　主　忠左衛門

沢根御番所

「沢根五十里　土屋家文書」『佐和田町史』資料編上

史料二三七　天明五年の沢根定番役の役替

（天明五年三月）
九日、御役替、〈中略〉小木定役より沢根定役中沢善右衛門〈中略〉沢根へ渡部十次郎〈後略〉

『佐渡国略記』二十二

史料二三八　沢根番所役人の役替

（天明七年十二月）
五日、御役替
〈中略〉沢根定役丸田金兵衛、〈中略〉沢根山下四兵衛、〈中略〉沢根定番席太田彦次郎〈後略〉

『佐渡国略記』二十三

史料二三九　沢根番所役人の出役

（天明九年二月）
廿八日、小木・沢根・夷湊三御番所締リ方取調へ出役
小木　御目付役西村徳兵衛　添人　原専九郎
夷湊　同堀内台助　同　富田直次郎
沢根　手形改古屋作左衛門　同　岩崎新左衛門

『佐渡国略記』二十三

史料二四〇　寛政二年の沢根定番役の役替

（寛政二年一月）
十九日、御役替、〈中略〉御金蔵定役より沢根定番役原勇左衛門〈後略〉

『佐渡国略記』二十三

史料二四一　寛政四年の沢根定番役の役替

（寛政四年十二月）
廿二日、御役替、小木より沢根定役矢渡孫右衛門〈後略〉

『佐渡国略記』二十四

史料二四二　無宿人が沢根湊へ着船

（寛政五年）
先達而長崎奉行伺済の無宿拾八人廻船にて六月二日沢根湊え着岸に付山方役目付役出役受取来

『佐渡年代記』十二

（六月一日）
一、長崎より水替拾八人被遣、四百石積ニて沢根え着船、二日朝五ツ前相川へ入、各手鎖歩行立、出役山方役田中元之進、御目付役長嶋小右衛門、町同心吉村和多理、中川丈右衛門
但、水替名前等は別帳ニ有之

『佐渡国略記』二十五

史料二四三　沢根番所より出役

（寛政十年七月）
十七日、在々湊々出役被遣、小木江御目付役橋本権太夫、沢根へ柴野助之丞、〈後略〉

『佐渡国略記』二十五

史料二四四　享和元年の沢根番所役の役替

（享和元年七月）
十三日、当月五日稲鯨村ニ而若州小浜堀口清兵衛船難船之処、〈中略〉沢根より出役山口政五郎、難船場取計ひ不宜由ニ而材木町番所役ニ役替

『佐渡国略記』二十五

史料二四五　『島根のすさみ』にみる川路奉行の視察

（天保十二年三月）
廿二日　晴
五時〔午前八時〕前に沢根村を立出て、同所御番所を見廻り、則ち御番所の前にて船に乗り、西浦・七浦を海上よりみて、是は沢根より相川の入口下戸村を省きて、のこり七浦あれば也。

『島根のすさみ』

史料二四六　天保十三年の沢根定番役の役替

（天保十三年）
沢根番所定番役吉田藤助を広間役当分助へ五月九日申渡

『佐渡年代記』二十

史料二四七　沢根番所より出役

（嘉永二年四月）
同十五日風波にて摂州神戸村半右衛門船去申年分羽州村山郡御年貢米積請当国滝脇村沖合におゐて及難船に付沢根番所役出役之上一通り相糺候処〈後略〉

『佐渡年代記』二十二

史料二四八　沢根番所役家年中諸入用割方集帳

嘉永三戌年二月廿三日
宿城ノ下
権兵衛
御役家三軒年中諸入用割方集帳
沢根村より辰巳村迄
山中多兵衛　扣へ

一百弐拾三軒　沢根村
一八十八軒　町
一四十三軒　かこ町
一四十二軒　田中村
一二十九軒　西五十り村
一三十軒　本郷村
一三十四軒　炭屋町
一七十五軒　窪田
一八十三軒　スわ町
一百六十五軒　本町
一六十軒　八幡町
　十三人　外二人
一三十壱軒　〃新町
　九人　外二人
一六十軒　上八幡
　十四人　外三人
一九十八軒　下八幡
　二十六人　外四人
一五軒　辰巳村
〈後略〉

「沢根村　畑福家所蔵」『佐和田町史』資料編上

史料二四九　佐渡分限帳にみる御役扶持（沢根番所関係抜粋）

（慶応四年）
佐渡分限帳
沢根御番所定番役　御役扶持五人扶持　佐々木文左衛門
沢根御番所役　御役扶持二人扶持　安田良助
　竹村九十郎

『新潟県史』資料編9

史料二五〇　沢根番所の概要

沢根番所
江戸幕府の時に至り慶長九年に当港に番所を置き（相川に柴町材木町下戸の三ヶ所。郷村港湾には沢根、小木、赤泊、松ヶ崎、水津、夷湊の六ヶ番所あり。二見、姫津、鷲崎、浦川、沢崎以下十六ヶ所の浦目付所あり。）関所の体裁を具え浜に面せる方には御公札所及大筒場を設けたり。
定役、番所役、下遣頭取、下遣等の役人を置きて諸国出入の人物監視、海防船舶、輸出入の諸件を司らせたりしが維新後新潟県に併せらるゝに及て自ら廃せられたり。
一、役人名
○　定役
　内田與五右衛門富充
○　番所役
　坪井六右衛門寿久
○　同
　太田幸之進政信
（以上は宝暦三酉年五月）
○　下遣頭取
　加賀屋清兵衛
○　下遣

和泉屋吉右衛門
金子屋伊右衛門
播磨屋亥之助
新階屋市太郎
青野屋半五郎
越中屋村吉
伏見屋亀太郎
（以上は安政四巳年）下遣頭取、下遣役は問屋なり。

番所取扱の諸事
①出判（出入国の際に出切手を改め検査する）
②公文
③海防
④異国船取扱

『沢根町誌稿』第一輯

史料二五一　沢根番所大筒台場築立の人足高覚書

覚
一　人足高六十人
　内
　弐十人　沢根町
　弐十人　五十里籠町
　弐十人　沢根村
　〆如高

右者、沢根御番所大筒台場築立人足、書面之通可差出、尤、壱人ニ付五合宛、扶持米御払
灯下候段被仰渡候間、其旨相心得、無間違可差出候、以上
（文化五年カ）
辰閏六月
沢根御番所　印
右三ケ所
名主

「橘鶴堂文庫」『新潟県史』資料編十二近世七

Ⅰ　銀山と係る沢根の町・集落

史料二五二　沢根町立始め

（慶長元年）
沢根町立ち始まる

「越佐史料稿本」『佐渡江戸時代史年表』

史料二五三　沢根市街地形成の始まり

本口間歩開鑿後一時非常ノ隆盛を来タシ戸口大ニ増加ス古実略記ニ
此所町筋も当時相川の通り上大工町中大工町下大工町四十物町京町も各三町宛有之
トアルハ此ノ頃ノ事ナルヘク又寺社帳等に依レハ現存セル寺院中ニモ此ノ頃此ノ地ニ開基
シタル確証アルモノ数ヶ寺アリ又今モ鶴子千軒ノ口碑伝ハレリ而シテ豊臣領ヨリ徳川領ノ
初期　慶長三年ヨリ同八年迄　ノ間ハ此ノ地ニ首府ヲモ置キタリ沢根五十里ノ市街ヲナセ
ルモ多クハ此ノ時ニアリシナラン

『佐渡国誌』

史料二五四　鶴子大工町・四十物町の相川への移転と鶴子・相川間の道

（慶長九年）
相川銀山初りてより他国者〈中略〉大工町四十物町は鶴子銀山に在し大工町四十物町の
者移りて住し〈中略〉郷中より相川迄の往還は鶴子沢より山越にてありしと也今も其跡
残れり〈後略〉

『佐渡年代記』一

〈前略〉（相川の）大工町四十物町ハ鶴子間歩大工町四十者町ノ者此所へ引越此町ヲ開
発〈後略〉

「佐渡古実略記」四『佐渡国略記』一・二

史料二五五　沢根町の開発

沢根町開発、此所寛永十五寅六月十五日沢根町中使左京ト同専得寺地論之願書同寺ニ有之
是ヲ以相考所当町ハ慶長四亥年開発ト相見エ候

「佐渡古実略記」五『佐渡国略記』一・二

史料二五六　五十里籠町

（慶長十一年）
五十里ろう町　昔は五十里ロウ町と云今はカゴ町と唱ふ　にありし牢屋を今年八月相川へ移す

『佐渡年代記』一

史料二五七　沢根町

郡忠左殿

以上

一筆申入候、沢根へ参度候間惣太様へ被仰候而、ここにだ馬少之間御かし候様ニ御申可被下候、くら共ニ御かし被下候様ニ頼奉存候、恐惶謹言

（花押）

三月三日

尾　小兵衛ヨリ

『川上家文書』第八号

史料二五八　鶴子の町数

（慶安四年）

此頃まて鶴子に町数三町ありて勝場床屋も有之六月中小役銀取立の役人蔵田彦右衛門船岡孫右衛門か出せし帳面あり

『佐渡年代記』三

史料二五九　鶴子三町の小役銀

（慶安四年）

卯六月、鶴子三町小役銀高

〇七拾壱匁　内弐拾四匁　ねこ四筋・拾五匁　ゆり板五枚・六匁　磨二柄・弐拾三匁　小床屋壱軒・三匁　濁酒屋壱軒　右之外御役一匁成共隠置不申候、若訴人御座候ハバ曲事ニ可被仰付候

慶安四年卯六月廿九日

上大工町　蔵田彦右衛門

中大工町　中吏庄右衛門

下大工町　同　喜十郎

同　久三郎

舟岡孫左衛門

『佐渡国略記』三

史料二六〇　鶴子の鉱山集落が衰微した

明暦四年ノ年代略記ニ

相川町沢根町共至て詰り退転同前の体にて難儀の旨町々より度々御訴訟申上候に付成

明暦四年ナリ　四月分より一円地子銀御赦免

トアリ両地トモニ鉱山ノ衰微シタルカタメナリ而シテ鶴子ト云ハス沢根ト云ヘハ鶴子ノ已ニ市街ノ形ヲ失ヒタルヲモ知ラル

『佐渡国誌』

史料二六一　鶴子山下の田地売買

我等親先祖より代々只今迄持来候田地永代末代□□渡し申証文状之事

一　鶴子山下ノ田　百弐十かり　但公方かり

右御公方帳面之かり高、此御年貢米壱石八升八合七勺ハ八共ニ右末代売渡申意趣者、毎年田地作り迷ひ候故寅ノ年御年貢米御皆済不罷成候由故、米京升弐石壱斗八升五合九勺永代末代うり渡し申、米請取申所明白実正也、此田地ニおゐてハ御公方様、又脇々の書入借米少も無御座候、以来子々孫々ニいたるまで出入違乱申間敷候、若何かと申候ニおゐてハ、中吏五人組を頼、うり渡申上ハ、何時成共此証文を以可申分候、為後日手形如此候、以上

寛永拾五年寅拾弐月廿四日

証人二代　源十郎　㊞

田うり主　田上村　三郎左衛門㊞

同村証人　新左衛門　㊞

同村証人　与右衛門　㊞

同村証人　久右衛門　㊞

中使　左　門　㊞

片山勘兵衛様

旨

（裏書）

表裏之田地壱ヶ所、其方所望ニ付、代米五斗ニ永代売渡申候、右之田地ニ付、於以来此方申分有之間敷候、為其如此候、以上

承応三年午極月十五日　片山勘兵衛

田上村

彦十郎殿

「沢根五十里真後鷲次氏所蔵文書」『佐和田町史』資料編上

史料二六二　鶴子四十物町の役屋敷地売買

（延宝八年）

一　鶴子四拾物町村より牛ヶ首之間ニ立六拾間横三拾間ニ我等望取申候へ共、此屋敷入不申候ニ付、不残相返シ申候、此御地子駄中村へ米五升ニ付申候御公納其方当年より可被致候、少成とも我等出入無之候間、為其證文如此ニ渡シ申候、以上

延宝八年申四月廿七日

松浦市左衛門　㊞
田中村名主　忠右衛門　㊞
四拾物町名主　五左衛門　㊞
鶴子四拾物町　作兵衛参

（後筆）
「文久三亥正月迄百九十一年」

「沢根五十里　斎藤おもや文書」『佐和田町史』資料編上

史料二六三　沢根地区の村明細覚書

元禄七年荻原近江守検地私領入会なし
田中村など八か村の村明細覚書き
一　高四百四拾弐石八斗四升九合　田中村
〈中略〉
一　稼にハ男ハ農業の間に銀山入用の荷筵を織り売出ス、女の稼なし
〈中略〉
一　此村に銀山古間歩数ヶ所あり今ハ稼なし
一　高四百八拾四石壱斗三升三合　西五十里村
〈中略〉
一　稼にハ男ハ農業の間に銀山入用の荷筵を織り売出ス女の稼なし
一　高五百拾弐石三斗四升壱合　五十里本郷村
〈中略〉
一　稼にハ男ハ農業の間に銀山入用の荷筵を織り売出ス、女の稼なし
〈後略〉

『佐和田町史』資料編上

史料二六四　沢根町が地方役所の支配となる

元禄七年沢根河原田ノ両町ヲ地方役所ノ支配トス従来此ノ両町モ相川町奉行　後町方役ト改ム　ノ管轄スル所ニシテ共ニ小役ヲ課シタリシカ以後ハ之ヲ廃セリ

『佐渡国誌』

史料二六五　沢根より相川へ鉄を積み廻す際、沢根定番役が小早船に乗船した

（正徳五年）
小早の御船にて沢根より相川へ鉄を積廻す時沢根定番役番所役上乗せしと云是六月六日の事なり

『佐渡年代記』五

史料二六六　この頃、鶴子銀山の集落人口が六〇人ほどになる

享保四年鶴子小屋　鉱山内の家屋ヲ小屋ト唱フ十七軒人数六十人トアリ衰頽ノ状ヲ知ラル

『佐渡国誌』

史料二六七　沢根町年寄が決まる

天明八年（二月）
廿五日、沢根町加賀屋多兵衛、沢根町年寄被仰付

『佐渡国略記』二十三

史料二六八　沢根港で荒銅を積み込む

（天保三年）
去々寅年分山出荒銅弐千三百九十五貫目大坂廻りに付越後柏崎規右衛門手船沖船頭水主とも廿八人乗へ三月十六日沢根湊におゐて積渡す

『佐渡年代記』十七

史料二六九　鶴子床屋跡で大砲を鋳造する

（弘化四年）
一　海岸へ間配之候鉄砲之儀玉目三百目其以下百目五拾目にて異国船打払候儀届兼可申壹貫目以上御筒四挺浦々御備要用之場所え壹挺つゝ相廻し候様可仕江戸表より御差下しにては道中持運人夫相掛り遠海難破船之患も有之候間於当地鋳立可被仰付哉御入用千八拾九両余出廉取調候処佐州御金蔵に有之候　〈中略〉
一　右鋳立場鶴子に仮役所補理八月十一日より取掛る組頭鈴木荘五郎広間役田中八十次郎石井三郎右衛門其外役々掛申渡御届申上る

『佐渡年代記』二十二

史料二七〇　佐州順村記にみる沢根地区の様子

（宝暦年間）佐州巡村記　三巻　（沢根地区抜粋）

雑田郡　サ印
一二三の印ハ村ノ位付

サ
五十里炭屋町　家数弐拾八軒
五　人数百七人
一、高五石七斗八合
此反別八反三畝五歩
此取米壱石弐斗五升四合
無付　免弐ツ弐分内
一向宗称念寺

一、橋壱ヶ所　長八間
巾壱丈

サ
東五十里村　家数　弐拾壱軒
五　人数　百拾三人
一、高三百五拾九石壱斗九升六合
此反別弐拾弐町七反弐畝六歩
内
田高弐百八拾弐石九斗五升七合
此反別拾六町六畝四歩
畑高七拾六石弐斗三升九合
此反別六町六反六畝弐歩
取米百三拾四石六斗七升弐合
内　百弐拾五石五斗三升五合　田取米
九石壱斗三升七合　畑取米

無付　田免四ツ四分四厘内
畑免壱ツ弐分内

一、見取田壱畝四歩
内拾六歩　不作附荒引
残拾八歩
此取米壱升四合
一、同畑七畝五歩
此取米三升四合
百姓林　拾八ヶ所
小平権現
一、御年貢米ハ西五十里村組合郷蔵江詰置道法壱里半附運相川并壱里附運河原田御蔵納
一、秣場九ヶ所アリ
一、用水ハ大河内川白石川の水を引
一、村内ニ炭屋川の流アリ

サ
西五十里村　家数　弐拾九軒
人数　百五拾人
一
一、高四百八拾五石壱斗三升三合
此反別三拾町九反五畝拾五歩
内
田高三百六拾壱石七斗三升五合
此反別拾九町六反九畝廿三歩
畑高百弐拾三石三斗九升八合
此反別拾壱町弐反五畝廿三歩
取米百六拾七石六斗九合
内　百五拾壱石四斗八升七合　田取米
拾六石壱斗弐升弐合　畑取米

無付　田免四ツ弐分三厘余
畑免壱ツ三分壱厘内

一、見取田五畝廿壱歩
此取米弐升九合
一、同田六歩
此取米壱升三合
百姓林　四ヶ所
北山権現　阿弥陀堂
真言宗吉祥寺　一向宗万行寺
一、郷蔵アリ東五十里五十里本郷田中窪田組合
一、御年貢米ハ道法壱里半附運相川并壱里附運河原田御蔵納
一、秣場拾四ヶ所アリ
一、用水ハ仕出喜川沓掛川長田川并溜池の水を引

一、仕出喜間歩銀山稼跡アリ
一、村内ニ天神川の流アリ
サ
五十里本郷　家数　三拾三軒
一　人数　百六拾人
一、高五百拾弐石五斗四升五合
此反別三拾町九反四畝廿九歩
内
田高四百拾弐石七升七合
此反別弐拾壱町八反六畝廿五歩
畑高百石四斗六升八合
此反別九町八畝四歩
取米百八拾六石八斗五升六合
内　百七拾三石九斗弐升壱合　田取米
弐拾石九斗三升五合　畑取米
無付　田免四ツ二分三厘内
畑免壱ツ弐分九厘内
御林　壱ヶ所
百姓林　五ヶ所
一向宗本福寺
一、御年貢米ハ西五十里村組合郷蔵江詰置道法壱里半附運相川并壱里附運河原田御蔵納
一、用水ハ沓掛川白石川長田川の水を引
一、秣ハ居村の山ニ而刈
一、村内ニ炭屋川の流アリ
サ
田中村　家数　六拾七軒
一　人数　弐百九拾四人
一、高四百四拾四石九斗壱升三合
此反別三拾壱町五反六畝六歩
内
田高二百九拾合（石カ）八升八合
此反別拾六町三反三畝拾八歩
畑高百五拾四石四斗弐升五合
此反別拾五町弐反弐畝拾八歩
取米百四拾七石五斗三升弐合
内　百弐拾七石五斗弐合　田取米
弐拾石三升　畑取米
無付　田免四ツ四分余
畑免壱ツ三分内
一、見取畑壱反三畝六歩
此取米六升六合
百姓林　拾六ヶ所
天満宮　白山権現
一、御年貢米ハ西五十里村組合郷蔵江詰置道法壱里半附運相川并壱里附運河原田御蔵納
一、秣場拾ヶ所アリ
一、用水ハ沓掛川天神川の水を引
一、村内ニ天神川の流アリ
サ
五十里籠町　家数　五拾三軒
三　人数　弐百五拾弐人
一、拾弐石三斗三升六合
此反別壱町六反四畝弐歩
此取米弐石七斗五升壱合
無付免弐ツ弐分三厘余
禅宗総経（鏡）寺　一向宗本光寺
一、板橋壱ヶ所　長四間
巾壱丈
サ
沢根町　家数　百弐拾六軒
一　人数　五百弐拾八人　皆畑
一、高弐拾三石九斗三升六合
此反別壱町九反九畝拾四歩
此取米五石六升五合
無付免弐ツ三分弐厘余
一向宗専得寺　浄土宗大乗寺　法華宗円福寺
一、番所壱ヶ所アリ
当時勤役　矢渡孫右衛門
藤木門左衛門

山下四兵衛

一、港深サ五尋余　東風悪し　船六七艘被掛ル
サ

沢根村　　家数　百三拾六軒
一　　人数　五百三拾七人
一、高千七百拾弐石八斗壱升九合
此反別百拾五町九反八畝廿四歩
内
田高千弐百三拾五石三斗三升七合
此反別六拾六町四反九畝歩
畑高四百七拾七石四斗八升弐合
此反別四拾九町四反九畝廿四歩
取米五百七拾九石壱斗五升七合
内　五百拾五石七斗七升八合　田取米
六拾三石三斗七升九合　畑取米

無付　田免四ツ壱分八厘内
畑免壱ツ三分三厘内
一、見取畑五反歩
此取米六升四合
一、同柴畑五畝歩
此取米六合

御林　弐ヶ所　字ときの子
同庄司山
百姓林　弐拾五ヶ所
境内　三町八反五畝拾八歩
真言宗万茶羅寺　除地　田　三反弐畝廿七歩
畑　四畝六歩
真言宗道弘寺　同松林寺　同永慶寺　同長安寺
若宮権現　白山権現
一、郷蔵アリ
一、御年貢米ハ道法壱里半附運相川并壱里附運河原田御蔵納
一、用水ハ須川田上川河内川羽丹川の水を引
一、本間摂津守古城跡アリ上杉景勝佐州所々城主と合戦之節此城主味方ニ而当所江軍船を寄上陸すると申伝フ
一、村内ニ須川田上川の流アリ　砂川アリ

「佐州巡村記」『佐渡叢書』第十巻

史料二七一　鉱山用の石炭を運ぶため相川・沢根・五十里より人が出る

（明治二十四年十二月二十五日）
本州各地の概況
沢根　鉱山御用として二見港に積みある石炭は漸々相川へ船回しなるを海上荒近き季節なるため去る十日より陸運となり一たん船にて当地七場へ上げそれより中山道中日に千人余の人夫是は重に相川、沢根、五十里より出て賃銭は百斤に附き三銭五厘にて暮を目がけて意外の銭取りこれも鉱山の御陰を喜びあへり

『北溟雑誌』第五十号

史料二七二　鶴子坑から沢根までの新道が出来る

（明治二十五年十一月二十五日発刊）
沢根港　鶴子坑開鑿のため同地方は日雇人足等にて小前は勿論一般の潤ひ一方ならす●鶴子坑よりの新道は田上の間は間道を通りこれより真直くに沢根の町を貫き海に達せり此頃も佐渡国丸か積み参りし一大蒸気釜を二見港より回送なり即ち此新道より同坑へ運ひたり

『北溟雑誌』第六十一号

J　沢根地区の寺社

史料二七三　白山権現

沢根村
一、白山権現　祀官　赤塚但馬
当社勧請年歴不知、鰐口之銘に慶長十八丑年此処の町奉行田中清右衛門寄進と有之由元禄の寺社帳に有、社地四畝六歩。

『佐渡国寺社境内案内帳』下

史料二七四　神明

沢根村中山
一、神明　祀官　赤塚但馬
当社宝永年中相川祀官安岡長門を以て神明勧請、沢根村白山の祀官赤塚但馬社役を相勤。
其後同村修験金宝院宮勤め候所、明和八卯年五月当時赤塚但馬と争論に及び、同月十九日

御役所へ双方召被出、但馬支配に被仰付。

『佐渡国寺社境内案内帳』下

史料二七五　北山現

東五十里

一北山権現　社人　作兵衛

当社勧請の年歴不知と元禄の寺社帳に有之、社地拾歩御除

『佐渡国寺社境内案内帳』下

史料二七六　北山権現（金北山神社）

西五十里

一、北山権現　社人　長右衛門

当社天文十八酉年勧請、社地弐反七畝拾八歩御除、祭礼毎年八月十九日。

注（寛永年中当村仕出の喜間歩大盛の節、山師秋田権左衛門社を建立して祭礼を行ふ。神前にて能を勤め、或は山鉾を出し神輿を御旅所へ遷し、祭礼の具今に別当古祥寺に有之。）

『佐渡国寺社境内案内帳』下

史料二七七　天満宮

田中村

一、天満宮

当社慶長弐酉年勧請、社地六畝歩御除、祭礼毎年九月廿五日。

『佐渡国寺社境内案内帳』下

史料二七八　白山権現

田中村

一、白山権現

当社天文廿一子年勧請、社地拾八歩御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』下

史料二七九　曼荼羅寺

雑太郡沢根村

瑠璃山　曼荼羅寺

当寺武州護持院末、往古は京都三宝院、智積院両山末寺の由、天文三午年栄通法院三宝院より法流相続と云ふ。開基不知と元禄の寺社帳に有之、当寺応永年中沢根村地頭本間摂津守建立。摂州は応永十三戌年二月十五日卒、則当寺に葬る。法号楞迦院源昌居士と云、嫡子伊兵衛、此子孫当時羽州米沢上杉家え仕へ、沢根源四郎と改、高五百石、菩提所米沢より西荒田村本泉寺に葬る。往古は当寺金北山別当の由、薬師堂は正徳五未年五月建立、禁札は元文三午年十二月廿三日より元文元辰年京都に於て医師中山玄亨元貞願に仍て、当寺え小野随心院御門主より瑠璃山と申額を被下置、是より山号を瑠璃山と改め、元貞当国河原田中山新兵衛治春次男、享保十一午年上京して、官職は法橋、法眼、法印の三官を昇進して、明和八寅年天脈を拝し奉る。当寺境内三町八反五畝拾八歩、畑四畝六歩、米壱石五斗壱升弐合、反歩三反弐畝廿七歩、各々御除。

〈後略〉

『佐渡国寺社境内案内帳』上

史料二八〇　長安寺

雑太郡沢根村

長安寺

当寺正徳六申年（曼荼羅寺）末寺に改。開基不知、天文廿二丑年の過去帳に有之由。寺社帳にあり、境内六反八畝歩除、米壱石壱斗五升五合、反歩三反四畝廿七歩、三ケ一御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』上

史料二八一　長安寺

〇真言宗豊山派　惠日山　長安寺

由緒　開基不詳、正徳六申年曼荼羅寺末に改め天文二巳年の過去帳ある由元禄寺社帳にあり、寛永、天明二回全焼し古文書なく不明、現在の堂宇は寛政元年一月住俊賢代建立するものなり、山門は沢根城の裏門なりしものを檀那本間吉郎兵衛之を寄進し建てしものと伝ふ

『沢根町誌稿第二輯』

史料二八二　吉祥寺

雑太郡西五十里村

吉祥寺

当寺正徳六申年（曼荼羅寺）末寺に改、開基宥仙天文廿一子年建立と元禄の寺社帳に有之。一説には寛永拾酉年上相川常徳寺退転により、右寺を以て秋田権右衛門建立とも云。境内壱町四反七畝廿七歩、畑九畝廿五歩、各々除、当寺同村北山権現別当、当社天文十八酉年勧請、社地弐反七畝拾八歩除。

『佐渡国寺社境内案内帳』上

史料二八三　吉祥寺

○真言宗豊山派　金北山　吉祥寺
※秋田権右衛門由緒と同じ
〈中略〉
吉祥寺ハ元城ノ下薬師堂ノソバニアリタルモノヲ金北山ノ別当トナルニ及ンデ現在ノ所ニ移転シタルモノナリ、現在ノ庫裡ガ其当時ノ寺院ナリ正応元年ニ移リ文化二年ニ建ツ
一、寺号　吉祥寺
一、院号　多聞院
一、坊号　綾龍坊
一、山号　金北山又ハ古岩山
御維新ノ際二十三世儀天ノ時廃寺、明治三年申請復旧小鷹智本、現住少僧正小鷹英弁

『沢根町誌稿第二輯』

史料二八四　道光寺

雑太郡沢根村
道光寺
当寺開基不知、天正十七丑年改の過去帳に有之由元禄の寺社帳に有。境内三反九畝拾歩、除米弐斗七升弐合壱勺、反歩五反廿歩、三分一除。

『佐渡国寺社境内案内帳』上

※同様の記述が『沢根町誌稿第二輯』にあり

史料二八五　松林寺

雑太郡沢根村
松林寺
当寺開基宝永元子年、境内五畝廿六歩御除、当寺先の寺号を長福寺と云。享保元申年現寺号に改。

『佐渡国寺社境内案内帳』上

史料二八六　松林寺（永慶寺と合併）

元ノ松林寺ハ開基宝永元子年、当寺ハ先ノ寺号ヲ長福寺ト云ヒ、享保元申年松林寺ニ改メ、寺跡ハ現今河内村松林寺堂之レナリ

『沢根町誌稿第二輯』

史料二八七　永慶寺

雑太郡沢根村
永慶寺
当寺開基不知、慶長元午年改の過去帳有之由元禄寺社帳に有、境内三反三畝拾歩除、当寺に鉄の足駄、杖あり、是れは天正此京都より木食当国へ渡海して、右の足駄を履き、金北山へ月参して帰国の節右の品当寺に納置く。

『佐渡国寺社境内案内帳』上

史料二八八　永慶寺（松林寺と合併）

元ノ永慶寺ハ開基不詳、慶長十一年午年改メノ過去帳アル由、元禄ノ寺社帳ニアリ、寺跡現今河内村田中ハル居宅之レナリ

『沢根町誌稿第二輯』

史料二八九　総鏡寺

雑太郡五十里籠町
臨江山　総鏡寺
当寺相川総源寺末。開基元和八戌年、宝暦十一巳年寺再建立。境内八畝六歩、畑弐畝廿六歩、各々御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料二九〇　総鏡寺

○臨江山　総鏡寺　相川総源寺末
元禄十年八月の創立にして相川山の神総源寺五無訓岸存橘和尚の開基なり明治元年廃寺となりしも仝十一年十一月廿五日復旧す

『沢根町誌稿第二輯』

史料二九一　円福寺

雑太郡沢根町
円福寺
当寺京都本圀寺末、開基慶長二酉年五月十三日本山貫主少僧正日鎮上人、中興日喜寛永十七辰年五月三日遷化、当寺もと田中村に有之、宝永四亥年今の地へ遷す、もと境内一反三畝拾歩、当寺境内東西三拾間、南北弐拾三間。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料二九二　本敬寺

相川下寺町
長性山　本敬寺
当寺京都妙顕寺末、往古寺号を大法院長性寺と云、応永十七庚寅年（十九辰年）大法房日円沢根村に建立、第八世寂性院慶長十一午年今の地へ遷し、則ち寺山号を改め、享保年中第十一世慈善院上の台より当時の地へ寺を遷す。境内五畝三歩御除。
『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料二九三　本敬寺

長性山
本敬寺　境内　七間半廿三間　五畝廿二歩除地　下寺町
京妙顕寺末。前ノ寺号ハ大法山長性寺応永十七庚寅年開基大法坊真如院日円沢根村菅川ニ建立セリ同三十四丁未年六月十日ニ化ス。八世寂性院慶長十一丙午年ニ今ノ地ニ建立ス。願主付上九右衛門ナリ。第十一世慈善院日栄享保年中上ノ台ヨリ今ノ地へ移ス。〈後略〉
『佐渡相川志』

史料二九四　妙円寺

相川南沢
長光山　妙円寺
当寺一ノ谷村妙照寺末、開基久成院日実、田中村の鶴子四十物町に建立。其の後相川次助町、今の妙伝寺境内に移す。享保二酉年八月当時の地へ移す。此の所は味方孫太夫持分の屋鋪にて五拾弐間に拾七間、もと境内三反弐畝八歩御除、当寺は妙照寺の触頭にて、享保二十卯年四月本山より永聖免許。
『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料二九五　妙円寺

当寺初メ鶴子ニ開基セシ時本山ヨリ授與セシ寺山号曼荼羅脇書写ヲ得タレハ左に載ス（本紙ハ罹災今亡シ伝写誤アレトモ是正スルニ由ナシ）
当山之衆徒久成院日実発一千部読誦之誓願因俗縁扶助之便於鶴子之辺境結読経安座之草庵因茲今感勇猛精進之道心並亦任懇望之意趣号長光山妙円寺仰願者奉勧請諸尊写薫加被密借威雲一句一偈増進菩提一色一香永無退伝舎溜足給
慶長第元丙申年六月廿二日
妙法華山第十五世日誘判
其後鶴子ノ衰フルニ及テ相川ニ転シ次助町字稗畑ニ建テタリシニ享保二年更ニ今ノ地ヲ味方孫太夫ヨリ購（代銀六貫五百目換算金百三十両）シ移建セリ〈後略〉
『相川町誌』

『佐渡相川志』

史料二九六　願竜(龍)寺

相川大間町
片貝山　願竜寺
当寺京都東本願寺末、開基良典、慶長七寅年雑太郡田中村に建立、別に相川弥十郎町に順光寺と云一寺あり、寛永十酉年願竜寺を弥十郎町に遷す。両寺一寺として願竜寺相続とも云。其の後紙屋町に遷す。元禄年中当時の地に遷す、境内七畝拾七歩町屋鋪の外に中畑拾七歩。
『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料二九七　願龍寺

当寺初世、明専、沢根町鶴子ニ創建シタルヲ後当町弥十郎町へ移転正保中再ヒ紙屋町ニ移リ順光寺ヲ併ヒ宝永二年ニ今ノ地ニ転スト云フ当寺絵像裏書ニ左ノ如クアリ。
一祖師像　慶長七年二月廿八日本願寺教如
佐州澤田郡川原田郷鶴子村願龍寺願主明専
〈後略〉
『相川町誌』
『佐渡相川志』

史料二九八　満行寺

雑太郡西五十里村
満行寺
当寺上中興村西蓮寺末、開基慶長四亥年、境内九畝拾八歩。
『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料二九九　満行寺

○大悲山　満行寺　真宗大谷派末
開基は宗玄法師と称す越前国今村の人で織田信長の臣で根木満綱と称す天正五年丁丑三月大阪平野の役の後顕如上人に就て得度し慶長七壬寅年当国に渡航し鶴子銀山の麓川原田郷に一宇を創立し其後鶴子坑の衰運と共に町筋へ移転せり後昭和十五年三月二十七日の五十里大火に焼失し後継者もなく今は沢根専得寺に合併さる
『沢根町誌稿第二輯』

史料三〇〇　勝広寺

加茂郡湊町
知恵海山　勝広寺
当寺京都東本願寺末、開基立賢羽州浜松浄願寺より天正元酉年当国へ渡り、原黒村に庵を結び、仝十午年新穂村大工沢に遷す、慶長元申年田中村鶴子に遷す。寺号を照光寺と改、立賢仝十四酉年三月廿四日に卒す。第二世良誓仝十五戌年二月港町へ遷す。勝広寺と改む、元和の初め此所に服部伊豆守殿住居に付き、当寺を原黒村境に遷す。今に此の所道場口と云。仝十年豆州隠居に依て今の地へ移す。寛永元子年、元禄十四巳年の両度に再建立、本願人湊町北伝兵衛寛保（完）、法名浄閑、境内三反拾弐歩御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料三〇一　専得寺

雑太郡沢根村
専得寺
当寺京都東本願寺末、開基修栄、江州高嶋郡安部村源助次男、天正年中当国へ渡り、仝十八寅年六月沢根町に建立。慶長四亥年此の地町屋鋪に開発に依て当時の地に遷す。此の所は大船屋半右衛門の屋鋪を寺地とし、修栄寛永二丑年四月廿一日遷化。当寺に宗岡佐渡の墓所あり、是は大久保石見守長安に随身し慶長八卯年当国え渡り、銀山を支配し、仝十八丑年三月十六日卒す。当寺に葬る。法名は道雪、当寺開基修栄好身有之、子孫当時石州大森に相続す。当寺本堂元文元辰年建立、翌巳年三月十五日入仏、境内四反六畝拾五歩、畑六畝廿壱歩、各々御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料三〇二　専得寺

〇修栄山　専得寺　真宗大谷派末
開基は修栄法師と号す河内の国の人なり俗性滝川安政と称す　本願寺に於て元亀天正の役大坂石山に篭城し鈴木重幸と協力して織田信長の軍を防戦し後本山十二代目の宗主教如上人の弟子となり諸国を行脚して当国に渡航し天正十年四月廿日雑太郡沢根町字鶴子に一宇を創立して専得寺と号す而して天正十八年三月卅一日今の地に移転せり

『沢根町誌稿第二輯』

史料三〇三　本光寺

雑太郡五十里籠町
本光寺
当寺京都東本願寺末、開基慶長八卯年と寺社帳に有之、境内壱畝廿五歩御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料三〇四　本光寺

〇相川山　本光寺　真宗大谷派末
開基派玄誓と称す生地不詳なり慶長八年の創立にして始め相川町大字上相川に在り其後沢根村字鶴子（今の十八人場）に移転し鶴子銀山の衰運と共に五十里篭町に移転す当時は仝町の山方に在りしを境内狭隘なりしため現今の地に移転せり堂宇は移転の都度旧建物を襲用したものなりと伝ふ現住職上川は上相川の上と川をとりて姓となしたるものなりと〈後略〉

『沢根町誌稿第二輯』

史料三〇五　称念寺

雑太郡五十里炭屋町
称念寺
当寺京都東本願寺末、開基慶祐、元和二辰年建立して慶安元子閏正月十三日遷化、境内七畝歩御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料三〇六　称念寺

〇本誓山　称念寺　真宗大谷派末
当寺の開基は智道法師と称す生国及俗性は詳ならず慶長三戌年沢根村鶴子に一宇を創立し其後堂宇灰燼に帰し遂に現今の地に移転せりと口碑に伝ふ明治元年十二月廃寺となりしも仝十五年十月七日復旧す

『沢根町誌稿第二輯』

史料三〇七　本福寺

雑太郡五十里本郷
本福寺
当寺能登国本念寺末、開基空了、是は西五十里村本間作兵衛出家を遂げ空了と改、慶長十四酉年建立して、万治二亥年九月八日死去。享保九辰年九月再建立。境内拾歩御除。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料三〇八　本福寺

○思議山　本福寺　真宗大谷派末

開基は空心法師と称す加茂郡椎泊村首藤々左衛門の二男なり感ずる処ありて京都にとり本山十二代目の宗主教如上人に就て得度し後国にかへりて一宇を創立し本福寺と号す然れ共其年時不詳なり明治元年十二月廃寺となりしも仝三年六月復旧す昭和十五年三月廿七日の五十里大火に焼失せしも仝十六年十月再建す別伝に西野栗川内と関係がある由なるも詳細は不明なり西野藤左衛門の東側にあったとか本福寺畑の名称残れり

『沢根町誌稿第二輯』

史料三〇九　大乗寺

雑太郡沢根町

円頓山　大乗寺

当寺京都知恩院末、開基幡誉利察、慶長二酉年四月十八日遷化。境内五反六畝廿歩、門前四ヶ所七畝廿壱歩、各々御除、境内西通りの石垣坪井六右衛門寄進、観音堂は夷町正覚寺より引き移る。

『佐渡国寺社境内案内帳』中

史料三一〇　大乗寺

○円頓山　大乗寺　京都東山知恩院末

天正七年の創立にして播誉利察の開基なり天保五年回様に付再建せり沢根町字鶴子に在りしものなりと伝ふ

『沢根町誌稿第二輯』

史料三一一　大行院妙楽山　大行院　夕白町

京都三宝院末ニテ金常寺ト号シ当山方佐渡一国ノ触頭ニシテ袈裟下七十ヶ院アリシト云フ相川ニハ十ヶ院ナリ当院元祖某文禄中佐渡ニ来リ初西三川ニ居リ次ニ鶴子ニ移リ行蔵院ト号シ慶長中更ニ相川ニ転シ初般若院ト号セシニ後夕白町ニ住スルニ及テ大行院ト改メシト云フ享延中ヨリ神明宮（今ノ大神宮）ノ別当タリシカ明治元年複飾神官トナリシカ今ハ其ノ子孫職を罷メ他ニ伝セリ。

『相川町誌』

『佐渡相川志』

付　　表

付表　1

銀山及び関連地域変遷表(1)

付表凡例

赤　字	分布調査時遺構確認・名称同定
青　字	絵図
□	御直山
⇒	継続（史料より稼動時期が確認できるもの）
→	継続？（稼動時期が推測できるもの）

記　号	［引用・参考文献］
古　略	佐渡古実略記
略　記	佐渡国略記
年	佐渡年代記
年　続	佐渡年代記続輯

風	佐渡風土記
国 誌	佐渡国誌
川	川上家文書（佐州銀山御直山鍛冶炭渡 帳・諸御直山蝋燭渡帳ほか）『佐渡相川の歴史』資料集三

佐 歴	佐渡相川の歴史
ゴ	株式会社ゴールデン佐渡所蔵絵図
舟	舟崎文庫
岩	岩木文庫

地域・施設名	主な山師・採掘企業（近代）	天文 11（1542）	弘治年間（1555～1557）	天正 7（1579）	天正 17（1589）	天正 18（1590）	文禄 3（1594）	文禄 4（1595）	慶長元（1596）	慶長 2（1597）	慶長 3（1598）
鶴子銀山経営組織		地方領主・上杉氏			上杉氏						
鶴子銀山全体	外山茂右衛門［発見者・戦国期開発］	発見［古略］［年］	［佐志］	→	⇒	→	［四民］	⇒	→	［古略］	→
鶴子外山陣屋					［年］［略記］	⇒		⇒	⇒	→	→
	代官名				山口右京					代官：河村彦左衛門	
鶴子町並					→	→	→	→	→	→	陣屋設置［沢町Ⅱ］
五十里十分一番所											
沢根番所											
沢根・五十里									沢根町立ち始る［越佐］	→	→
その他											

地域・施設名		元和 4（1618）	元和 6（1620）	元和 8（1622）	寛永元（1624）	寛永 3（1626）	寛永 4（1627）	寛永 8（1631）	寛永 10（1633）	寛永 13（1636）	寛永 15（1638）	正保元（1644）	正保 2（1645）	正保 3（1646）	正保 4（1647）	慶安元（1648）
鶴子銀山経営組織																
鶴子銀山全体		⇒	⇒	［国］	→	⇒	⇒	⇒	→	［風］		⇒	⇒	⇒	⇒	→
鶴子外山陣屋																
	代官名															
鶴子町並		→	→	［風］	→	→	→	→	→	→	［町上］	→	→	→	［沢町Ⅱ］	→
五十里十分一番所		⇒	⇒	［風］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
沢根番所		⇒	⇒	［風］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	番所開始［相志］	⇒	⇒
沢根・五十里		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
その他																

地域・施設名		延宝 8（1680）	天和元（1681）	天和 2（1682）	元禄元（1688）	元禄 3（1690）	元禄 4（1691）	元禄 5（1692）	元禄 7（1694）	元禄 9（1696）	宝永元（1704）	宝永 3（1706）	宝永 4（1707）	宝永 5（1708）
鶴子銀山経営組織														
鶴子銀山全体			⇒	⇒			⇒			⇒		⇒		⇒
鶴子外山陣屋														
	代官名													
鶴子町並		役家売買［町上］	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
五十里十分一番所		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	廃止［相志］							
沢根番所		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	番所建替［年］	⇒
沢根・五十里		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	［国誌］［沢町 2］［町上］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
その他														

地域・施設名		享保 21（1735）	元文元（1736）	元文 2（1737）	元文 4（1739）	元文 5（1740）	寛保元（1741）	寛保 2（1742）	寛保 3（1743）	延享元（1744）	延享 2（1745）	延享 3（1746）	延享 4（1747）	寛延元（1748）	寛延 4/宝暦元（1751）	宝暦 2（1752）
鶴子銀山経営組織																
鶴子銀山全体		［略記］	⇒	［略記］	［略記］	［略記］			×	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	×	
鶴子外山陣屋																
	代官名															
鶴子町並																
五十里十分一番所																
沢根番所		［略記］	⇒	［略記］	⇒	⇒	［略記］	［略記］	⇒	⇒	⇒	⇒	［略記］	⇒	⇒	［年］
沢根・五十里		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
その他																

乙　種	相川博物館所蔵文書（乙種文書） 『佐渡相川の歴史』資料集三
赤　石	赤石家絵図
仕　入	御仕入稼所取扱一件（橘鶴堂文庫） 『新潟県史』資料編 12 近世七

佐　鉱	佐渡鉱山史（稿）
味	味方家文書
相　志	佐渡相川志
ひ	ひとりあるき
佐　志	佐渡志

島	島根のすさみ
町　Ⅱ	佐和田町史通史編Ⅱ
町　上	佐和田町史資料編上
町　下	佐和田町史資料編下
沢町 2	沢根町誌稿第二輯

斉	斉藤おもや家文書
遊	吉田松陰東北遊日記
越　佐	越佐史料稿本
四　民	佐渡四民風俗
随　見	枠陵堂随見随記抄

慶長 4 (1599)	慶長 5 (1600)	慶長 6 (1601)	慶長 7 (1602)	慶長 8 (1603)	慶長 9 (1604)	慶長 10 (1605)	慶長 11 (1606)	慶長 12 (1607)	慶長 13 (1608)	慶長 14 (1609)	慶長 15 (1510)	慶長 18 (1613)
	徳川幕府											
→	［古略］	運上入札制［古略］	→	［古略］	［年］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	→
→	→	→		［古略］	→	→	→	→	→	→	廃止ヵ	
					代官：保科喜右衛門			代官：保科喜右衛門				
⇒	⇒	役所設置［斉］	⇒	［古略］	［古略］	→	→	→	→	→	→	→
		十分一役所設置［年］［古略］［町Ⅱ］	⇒	⇒	⇒	［川］	［川］	［川］	［川］	［川］	［川］	⇒
					番所設置［沢町 2］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
沢根町開発［古略］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	籠町の牢屋移転［年］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒

慶安 2 (1649)	慶安 3 (1650)	慶安 4 (1651)	慶安 5/ 承応元 (1652)	承応 2 (1653)	承応 3 (1654)	承応 4 (1655)	万治元 (1658)	万治 2 (1659)	万治 3 (1660)	寛文 4 (1664)	寛文 10 (1670)	寛文 12 (1672)	延宝 2 (1674)	延宝 3 (1675)
⇒	⇒	⇒	⇒		⇒	⇒	⇒	⇒	［ゴ］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
→	→	町数 3・勝場床屋あり［年］［略記］	→		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
⇒	⇒	⇒	⇒		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒

正徳 3 (1713)	正徳 4 (1714)	正徳 5 (1715)	享保 2 (1717)	享保 3 (1718)	享保 4 (1719)	享保 8 (1723)	享保 9 (1724)	享保 14 (1728)	享保 15 (1729)	享保 16 (1730)	享保 17 (1731)	享保 18 (1732)	享保 19 (1733)	享保 20 (1734)
	［略］	⇒	⇒			⇒	［国誌］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
→	→	→	→	17 軒 60 人［沢町 2］	17 軒 60 人［国誌］	→								
⇒	［略記］［岩］	［年］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
⇒	⇒	⇒	⇒	笹井家海運業開始［沢町 2］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
													［略記］	［略記］

宝暦 3 (1753)	宝暦 6 (1756)	宝暦 8 (1758)	宝暦 13 (1763)	明和元 (1767)	明和 3 (1770)	明和 4 (1771)	明和 5 (1772)	明和 6 (1773)
		休山［沢町Ⅱ］	⇒	⇒		⇒	［略記］	
［年］［相志］［沢町Ⅱ］	［年］［略記］	⇒	［略記］	⇒	［略記］	［略記］	［略記］	［年］［略記］
⇒	⇒	［沢町Ⅱ］	⇒	⇒	沢根村川流［略記］	沢根・五十里・二見浜で砂金採取［年］	［年］	⇒

付表　3

銀山及び関連地域変遷表(3)

地域・施設名		明和 7 (1774)	明和 8 (1775)	安永 3 (1774)	安永 4 (1775)	安永 5 (1776)	安永 6 (1777)	安永 7 (1778)	安永 8 (1779)	天明元 (1781)	天明 3 (1783)	天明 4 (1784)	天明 5 (1785)
鶴子銀山経営組織													
鶴子銀山全体			［略記］	［略記］			⇒		［年］［略記］			⇒	
鶴子外山陣屋													
	代官名												
鶴子町並													
五十里十分一番所													
沢根番所		［略記］	［略記］	⇒	⇒	［略記］	［略記］	［年］［略記］	⇒	［略記］	［略記］	［略記］	［略記］
沢根・五十里		⇒	⇒	⇒	沢根七場で砂金流し［年］［略記］	廻船問屋増［沢町 2］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
その他													

地域・施設名		文化 14 (1817)	文政元 (1818)	文政 2 (1819)	文政 7 (1824)	文政 8 (1825)	文政 9 (1826)	文政年間 (1818～ 1830)	天保 3 (1832)	天保 6 (1835)	天保 7 (1836)	天保 8 (1837)	天保 9 (1838)
鶴子銀山経営組織													
鶴子銀山全体		⇒		⇒	［年］［略記］	［年］	⇒	⇒		⇒	［沢町 2］	⇒	⇒
鶴子外山陣屋													
	代官名												
鶴子町並													
五十里十分一番所													
沢根番所		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
沢根・五十里		⇒	笹井家海運業開始［沢町 2］	⇒	鶴子沢川流し［年］［略記］	⇒	⇒	⇒	沢根湊荒銅積渡し［年］	⇒	⇒	⇒	⇒
その他													

地域・施設名		文久 3 (1863)	元治元 (1864)	慶応 2 (1866)	慶応 3 (1867)	明治元 (1868)	明治 2 (1869)	明治 3 (1870)	明治 7 (1874)	明治 23 (1889)	明治 24 (1890)	明治 25 (1891)	明治 26 (1892)	明治 27 (1893)
鶴子銀山経営組織							官営							
鶴子銀山全体		［沢町 2］			⇒		⇒		⇒	⇒	［北］	⇒	⇒	［北］
鶴子外山陣屋														
	代官名													
鶴子町並														
五十里十分一番所														
沢根番所		⇒	⇒	⇒	⇒	廃止［沢町 2］［県史］								
沢根・五十里		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	［北］	新道開通［北］	［北］	軽便鉄道敷設［国誌］［北］
その他														

天明 7 (1787)	天明 8 (1788)	天明 9 (1789)	寛政 2 (1790)	寛政 3 (1791)	寛政 4 (1792)	寛政 5 (1793)	寛政 8 (1796)	寛政 10 (1798)	享和元 (1801)	文化元 (1804)	文化 5 (1808)	文化 6 (1809)	文化 8 (1811)	文化 11 (1814)	文化 12 (1815)	文化 13 (1816)
	⇒		⇒		⇒	×	⇒	⇒	⇒	⇒		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
［略記］	⇒	［略記］	［略記］	⇒	［略記］	⇒	⇒	［略記］	［略記］	⇒		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
⇒	［略記］	⇒	⇒	⇒	⇒	無宿人廻船［年］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒

天保 11 (1840)	天保 12 (1841)	天保 13 (1842)	天保 14 (1843)	天保 15 (1844)	弘化 3 (1846)	弘化 4 (1847)	嘉永 2 (1849)	嘉永 3 (1850)	嘉永 5 (1852)	安政 4 (1857)	安政 5 (1858)	安政 6 (1859)	安政 7/ 万延元 (1860)	文久元 (1861)	文久 2 (1862)
⇒		⇒	⇒	⇒		⇒		⇒	⇒	⇒			⇒		⇒
						床屋跡で大砲鋳造［年］［沢町 2］									
⇒	⇒	［年］	⇒	⇒	⇒	⇒	［年］	［畑］	⇒	［沢町Ⅱ］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒
⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	廻船業［沢町 2］	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒

明治 30 (1897)	明治 31 (1898)	明治 32 (1899)	大正 4 (1915)	大正 5 (1916)	大正 6 (1917)	大正 7 (1918)	昭和 7 (1932)	昭和 8 (1933)	昭和 9 (1934)	昭和 11 (1935)	昭和 14 (1939)	昭和 15 (1940)	昭和 21 (1946)
	三菱合資会社												
	×		⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒					閉山×
⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒

付表　5

間歩稼動時期変遷表(1)

No.	調査No.	間歩名	開発地区〈史料地名〉	地区〈沢名〉	坑道種別	主な山師・採掘企業（近代）	天文11（1542）	弘治年間（1555～1557）	文禄4（1595）	慶長9（1604）	慶長10（1605）
1	52・53	外山茂右衛門間歩・茂右衛門間歩・外山間歩	鶴子外山	蛇沢		外山茂右衛門［戦国期開発ヵ］、味方孫太夫［慶長期］	［古略］［年］［北］	［佐志］			
2		市兵衛切捨	鶴子百枚平	鶴子沢	のち近藤間歩の水貫	市兵衛［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、万治期］					
3		鶴子内山横相※総称ヵ	鶴子内山	鶴子沢	横相	山主５人［山師名称不明、慶長期］					御直山［川］4
4		近江左兵衛間歩左兵衛間歩	鶴子	鶴子沢	横相	近江左兵衛［慶長期］					御直山［川］4
5		鶴子大横相※総称ヵ	鶴子	鶴子沢	横相						御直山［川］4
6		岡嶋間歩・岡崎（嶋ヵ）間歩	鶴子	鶴子沢		和田与左衛門［再開発、享保期］					
7		下戸間歩・下戸鋪間歩	鶴子	鶴子沢		関東十三郎［元和～寛永期］					
8		加賀四兵衛大水貫・四兵衛水貫・かが四兵衛口横相	鶴子内山	鶴子沢	水貫・横相	加賀四兵衛［慶長期］					御直山［川］2・4・10
9		鶴子内山大水貫（加賀四兵衛水貫ヵ）	鶴子内山	鶴子沢	水貫	加賀四兵衛［慶長期］					
10		九兵衛間歩		鶴子沢		九兵衛［初期開発山師ヵ］→新階屋九兵衛ヵ					
11		小丸山間歩		鶴子沢周辺？		不明					
12		近藤間歩	鶴子内山	鶴子沢		山田太左衛門・江戸源左衛門・元竹・余後久兵衛・江戸勝右衛門［慶長期］、秋田権右衛門［再開発、承応、万治期］］					御直山［川］4
13		坂ノ下間歩	鶴子内山	鶴子沢		不明					
14		作右衛門間歩		鶴子沢		作右衛門［初期開発山師ヵ］					
15		桜間歩	下平御林	鶴子沢		寺崎太郎右衛門［寛延期］					
16		沢根ノ袖山（沢根外山ヵ）	沢根袖山	鶴子沢周辺？						［乙種］	［乙種］
17		重一郎間歩・十一郎間歩・十一両間歩	鶴子	鶴子沢		早川仁（仕）兵衛［元和～寛永期］			開坑※絵図注［味№196］		
18	106	新階屋間歩	鶴子	鶴子沢		新階屋九兵衛ヵ［沢根廻船問屋、初期開発］					
19		新階屋九兵衛立会		鶴子沢		新階屋九兵衛［沢根廻船問屋、初期開発］					
20		新水貫間歩煙貫		鶴子沢	煙貫	不明					
21		助左右衛門間歩	鶴子内山銅平	鶴子沢		助左右衛門［初期開発山師ヵ］					
22		助右衛門間歩	鶴子百枚平	鶴子沢	のち近藤間歩の煙貫	助右衛門［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、万治期］					
23		長右衛門間歩・長右衛門水貫	鶴子百枚平	鶴子沢	水貫	長右衛門［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、万治期］					
24		天道間歩・天童間歩	鶴子	鶴子沢		柿本久右衛門［元和～寛永期］、鶴子市兵衛［寛延期］、三菱合資会社［昭和期］					
25		とかけ間歩		鶴子沢		不明					
26		とろ間歩・どろ間歩	鶴子	鶴子沢		（原？）久右衛門・（伊勢？）源五・（大坂？）次介・（大坂？）甚左衛門・（備前？）遊白［慶長期］					御直山［川］4・15
27		中水貫ノ口		鶴子沢	水貫	不明					
28		馳割間歩	鶴子	鶴子沢		不明					
29		八郎左衛門間歩	内山	鶴子沢		味方孫太夫・靍賀七介・若狭弥兵衛・関東主兵衛・加賀善（藤）右衛門［慶長期］					御直山［川］4
30		沢根山東横大横相	沢根山	鶴子沢周辺？	横相	山先弥右衛門［慶長期］					御直山［川］4
31	16	百枚間歩・百枚水貫間歩・百枚坑（近代～）	鶴子百枚	鶴子沢	水貫	早川甚太郎・京孫左衛門［元和～寛永期］、官営［明治期］、御料局［明治期］、三菱合資会社［明治～昭和期］			開坑［隋見］		
32	104	鶴子竪坑・百枚竪坑	鶴子百枚	鶴子沢	竪坑	官営［明治期］					
33		兵助間歩・兵介間歩	鶴子	鶴子沢		兵助［初期開発山師ヵ］					
34	1	鶴子間歩・鶴子本口間歩・鶴子惣水貫間歩・鶴子坑（近代～）	鶴子	鶴子沢	横相・水貫	石州忠左衛門・忠四郎・石田忠兵衛［文禄期］、加賀重左衛門［慶長期］、宗岡七左衛門［正保期］、山本重左衛門・村上善左衛門［享保８山師召上］、和田与左衛門・寺崎太郎右衛門［享保16閉門］、味方孫太夫・味方与次右衛門・松木八郎右衛門・下田利左衛門・和田与左衛門［享保21山師召上］、秋田権右衛門・大坂惣左衛門［享保21山師］、官営［明治期］、御料局［明治期］、三菱合資会社・三菱鉱業［明治～昭和期］			開坑［古略］［年］［北］		
36		山先弥右衛門大横相	鶴子	鶴子沢	横相	山先弥右衛門［慶長期］					御直山［川］2
37		遊円間歩・沢根ゆふえん間歩	鶴子	鶴子沢		遊円［初期開発山師］、松田権右衛門［再開発、慶長期］				［乙種］	
38		遊白間歩	鶴子	鶴子沢		備前遊白［初期開発山師］、庄内ぬいのしょう［再開発、慶長期］				古間歩さらえ［乙種］	
39		遊白五貫目山間歩	鶴子	鶴子沢		備前遊白［初期開発山師］、庄内ぬいのしょう［再開発、慶長期］				古間歩さらえ［乙種］	
40		六兵衛間歩		鶴子沢		（矢田？）六兵衛［初期開発山師ヵ］					
41		六人寄合間歩・寄合間歩・より相間歩・六人間歩ヵ	鶴子内山	鶴子沢		丹波清兵衛（弥十郎）・坂井才次（ニ）［慶長期］					御直山［川］4・9 II
42		立鉉平	鶴子内山立鉉平	鶴子沢	地名	嶋川惣兵衛・大坂宗左衛門［草見立、天和期］					

間歩稼動時期変遷表(2)

慶長11 (1606)	慶長12 (1607)	慶長13 (1608)	慶長14 (1609)	慶長15 (1510)	元和4 (1618)	元和8 (1622)	寛永3 (1626)	寛永4 (1627)	寛永8 (1631)	正保元年 (1644)	正保2 (1645)	正保3 (1646)	正保4 (1647)
［川］11	［川］11	［川］11	［川］11	［川］10・11									
御直山［川］4	→	御直山［川］4											
御直山［川］1・4	→	御直山［川］4											
御直山［川］1・4	→	御直山［川］4											
					御直山［年］［国誌］		御直山［年］	御直山［年］	御直山［年］				
御直山［川］1・2・4・10	→	御直山［川］4・10											
御直山［川］1													
				［川］10									
御直山［川］4	→	御直山［川］4											
［川］10													
［乙種］	［乙種］	［乙種］	［乙種］	［乙種］									
					御直山［年］［国誌］		御直山［年］	御直山［年］	御直山［年］				
					御直山［年］［国誌］		御直山［年］	御直山［年］	御直山［年］				
御直山［川］1・4・15	→	御直山［川］4・15											
御直山［川］1・4	→	御直山［川］4											
					御直山［年］［国誌］			御直山［年］					
［川］10	［川］10	［川］10	［川］10	［川］10									
						御直山［年］［略記］				御直山［風］	御直山［略記］	御直山［風］	御直山→自分山［年］［略記］［風］
御直山［川］2													
御直山［川］1・4・9Ⅱ・15	→	御直山［川］4・9Ⅱ											

付表　7

間歩稼動時期変遷表(3)

No.	調査No.	間歩名	慶安2（1649）	慶安元（1648）	承応3（1654）	承応4（1655）	万治元（1658）	万治2（1659）	万治3（1660）	寛文4（1664）	寛文10（1670）	寛文12（1672）	延宝2（1674）
1	52・53	外山茂右衛門間歩・茂右衛門間歩・外山間歩								自分山→御直山［国誌］			［年］［略］
2		市兵衛切捨						［町Ⅱ］					
3		鶴子内山横相※総称ヵ											
4		近江左兵衛間歩左兵衛間歩				［町Ⅱ］							
5		鶴子大横相※総称ヵ											
6		岡嶋間歩・岡崎（嶋ヵ）間歩											
7		下戸間歩・下戸鋪間歩											
8		加賀四兵衛大水貫・四兵衛水貫・かが四兵衛口横相											
9		鶴子内山大水貫（加賀四兵衛水貫ヵ）											
10		九兵衛間歩											
11		小丸山間歩											
12		近藤間歩				再興［町Ⅱ］	→	［町Ⅱ］					
13		坂ノ下間歩											
14		作右衛門間歩											
15		桜間歩											
16		沢根ノ袖山（沢根外山ヵ）											
17		重一郎間歩・十一郎間歩・十一両間歩								［北］			
18	106	新階屋間歩											
19		新階屋九兵衛立会											
20		新水貫間歩煙貫											
21		助左右衛門間歩									再興［町Ⅱ］		
22		助右衛門間歩						［町Ⅱ］					
23		長右衛門間歩・長右衛門水貫							再興［町Ⅱ］				
24		天道間歩・天童間歩											
25		とかけ間歩											
26		とろ間歩・どろ間歩											
27		中水貫ノ口											
28		馳割間歩											
29		八郎左衛門間歩											
30		沢根山東横大横相											
31	16	百枚間歩・百枚水貫間歩・百枚坑（近代～）											
32	104	鶴子竪坑・百枚竪坑											
33		兵助間歩・兵介間歩											
34	1	鶴子間歩･鶴子本口間歩･鶴子惣水貫間歩･鶴子坑(近代～)	自分山→御直山［年］［略記］［風］	⇒	○							大盛［略記］	→
36		山先弥右衛門大横相											
37		遊円間歩・沢根ゆふえん間歩											
38		遊白間歩											
39		遊白五貫目山間歩											
40		六兵衛間歩											
41		六人寄合間歩・寄合間歩・より相間歩・六人間歩ヵ											
42		立鉉平											

延宝３ (1675)	延宝８ (1680)	天和元 (1681)	天和２ (1682)	元禄元 (1688)	元禄３ (1690)	元禄４ (1691)	元禄５ (1692)	元禄14 (1701)	宝永元 (1704)	宝永３ (1706)	宝永４ (1707)	宝永５ (1708)	正徳３ (1713)
										［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
								［真］		［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
								［真］		［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
										［味№195］			
		［年］［略記］						［真］		［味№195］			
［年］	→	［年］［略記］	→	→	※荻原奉行任期中［川］21	自分山［年］［略記］	［年］［略記］［風］	［真］	→	［味№195］	→	［略記］	［略記］
										［味№195］			
			草見立［町Ⅱ］										

付表　9

間歩稼動時期変遷表(5)

No.	調査No.	間歩名	正徳5（1715）	享保2（1717）	享保8（1723）	享保9（1724）	享保14（1728）	享保15（1729）	享保16（1730）	享保17（1731）	享保18（1732）	享保19（1733）	享保20（1734）
1	52・53	外山茂右衛門間歩・茂右衛門間歩・外山間歩											
2		市兵衛切捨											
3		鶴子内山横相※総称ヵ											
4		近江左兵衛間歩左兵衛間歩											
5		鶴子大横相※総称ヵ											
6		岡嶋間歩・岡崎（嶋ヵ）間歩											古間歩さらへ［町Ⅱ］
7		下戸間歩・下戸鋪間歩											
8		加賀四兵衛大水貫・四兵衛水貫・かが四兵衛口横相											
9		鶴子内山大水貫（加賀四兵衛水貫ヵ）											
10		九兵衛間歩											
11		小丸山間歩											
12		近藤間歩											
13		坂ノ下間歩											
14		作右衛門間歩											
15		桜間歩											
16		沢根ノ袖山（沢根外山ヵ）											
17		重一郎間歩・十一郎間歩・十一両間歩											
18	106	新階屋間歩											
19		新階屋九兵衛立会											
20		新水貫間歩煙貫											
21		助左右衛門間歩											
22		助右衛門間歩											
23		長右衛門間歩・長右衛門水貫											
24		天道間歩・天童間歩											
25		とかけ間歩											
26		とろ間歩・どろ間歩											
27		中水貫ノ口											
28		馳割間歩											
29		八郎左衛門間歩											
30		沢根山東横大横相											
31	16	百枚間歩・百枚水貫間歩・百枚坑（近代～）					［国誌］	御直山［略記］		［略記］			
32	104	鶴子竪坑・百枚竪坑											
33		兵助間歩・兵介間歩											
34	1	鶴子間歩･鶴子本口間歩･鶴子惣水貫間歩･鶴子坑(近代～)	［年］	［年］［略記］	自分山［略記］	自分山［年］［風］	→	→	［略記］		御直山･再興［国誌］［沢町2］	火災により休止［年］［略記］［北］［岩№113］	水貫完成［年］［略記］［国誌］
36		山先弥右衛門大横相											
37		遊円間歩・沢根ゆふえん間歩											
38		遊白間歩											
39		遊白五貫目山間歩											
40		六兵衛間歩											
41		六人寄合間歩・寄合間歩・より相間歩・六人間歩ヵ											
42		立鉉平											

享保 21 (1735)	元文元 (1736)	元文 2 (1737)	元文 4 (1739)	元文 5 (1740)	寛保元 (1741)	寛保 2 (1742)	寛保 3 (1743)	延享元 (1744)	延享 2 (1745)	延享 4 (1747)	寛延元 (1748)	寛延 4/ 宝暦元 (1751)	宝暦 8 (1758)
							閉坑［北］						
										［舟］1210			
											取明［年］［風］		
										［舟］1210			
										［舟］1210	取明願［年］［風］		
									［風］		取明願［風］	休止［略記］	
								間歩取明［風］	休止［絵］［風］	［舟］1210			
［略記］	［略記］	［略記］	［略記］	⇒	⇒	⇒	御直山→休止［年］［風］［沢町 2］［国誌］			［舟］1210			

間歩稼動時期変遷表(7)

No.	調査No.	間歩名	宝暦13（1763）	明和元（1767）	安永6（1777）	天明8（1788）	天明9（1789）	寛政2（1790）	寛政3（1791）	寛政4（1792）	寛政5（1793）	寛政8（1796）	寛政9（1797）	寛政10（1798）
1	52・53	外山茂右衛門間歩・茂右衛門間歩・外山間歩												
2		市兵衛切捨												
3		鶴子内山横相※総称ヵ												
4		近江左兵衛間歩左兵衛間歩												
5		鶴子大横相※総称ヵ												
6		岡嶋間歩・岡崎（嶋ヵ）間歩												
7		下戸間歩・下戸鋪間歩												
8		加賀四兵衛大水貫・四兵衛水貫・かが四兵衛口横相												
9		鶴子内山大水貫（加賀四兵衛水貫ヵ）												
10		九兵衛間歩												
11		小丸山間歩												
12		近藤間歩												
13		坂ノ下間歩												
14		作右衛門間歩												
15		桜間歩												
16		沢根ノ袖山（沢根外山ヵ）												
17		重一郎間歩・十一郎間歩・十一両間歩												
18	106	新階屋間歩												
19		新階屋九兵衛立会												
20		新水貫間歩煙貫												
21		助左右衛門間歩												
22		助右衛門間歩												
23		長右衛門間歩・長右衛門水貫												
24		天道間歩・天童間歩			［年］［略記］									
25		とかけ間歩												
26		とろ間歩・どろ間歩												
27		中水貫ノ口												
28		馳割間歩												
29		八郎左衛門間歩												
30		沢根山東横大横相												
31	16	百枚間歩・百枚水貫間歩・百枚坑（近代～）	5月銅山として再興［略記］［沢町2］	［略記］				［年］	［年］	［年］	休止［年］	再興［年］	→	→
32	104	鶴子竪坑・百枚竪坑												
33		兵助間歩・兵介間歩												
34	1	鶴子間歩・鶴子本口間歩・鶴子惣水貫間歩・鶴子坑(近代～)				取明伺［年］［略記］	⇒	［年］［略記］［国誌］	休止［年］［略記］	休止［沢町2］				
36		山先弥右衛門大横相												
37		遊円間歩・沢根ゆふえん間歩												
38		遊白間歩												
39		遊白五貫目山間歩												
40		六兵衛間歩												
41		六人寄合間歩・寄合間歩・より相間歩・六人間歩ヵ												
42		立鉉平												

享和元（1801）	文化元（1804）	文化 5（1808）	文化 6（1809）	文化 8（1811）	文化 14（1817）	文政 2（1819）	文政 7（1824）	文政年間※（1818 ～ 1830）	天保 7（1836）	天保 15（1844）	嘉永 3（1850）	安政 4（1857）	文久 2（1862）
								［仕入］					
								［仕入］					
								［仕入］					
								［仕入］					
								［仕入］					
								［仕入］					
								［仕入］	［年］				
→	［略記］	→	［年］［略記］	［国誌］［沢町 2］	［ゴ］	［国誌］			再興［隋見］	［ゴ］			
						景気良［沢町 2］		［仕入］			［年］	［味№ 197］	煙貫新設［岩№ 111］［味№ 39］

間歩稼動時期変遷表(9)

No.	調査No.	間歩名	文久3（1863）	元治元（1864）	慶応2（1866）	慶応3（1867）	明治元年（1868）	明治2（1869）	明治3（1870）	明治7（1874）	明治15（1882）	明治23（1889）	明治24（1890）
1	52・53	外山茂右衛門間歩・茂右衛門間歩・外山間歩											
2		市兵衛切捨											
3		鶴子内山横相※総称ヵ											
4		近江左兵衛間歩左兵衛間歩											
5		鶴子大横相※総称ヵ											
6		岡嶋間歩・岡崎（嶋ヵ）間歩											
7		下戸間歩・下戸鋪間歩											
8		加賀四兵衛大水貫・四兵衛水貫・かが四兵衛口横相											
9		鶴子内山大水貫（加賀四兵衛水貫ヵ）											
10		九兵衛間歩											
11		小丸山間歩											
12		近藤間歩											
13		坂ノ下間歩											
14		作右衛門間歩											
15		桜間歩											
16		沢根ノ袖山（沢根外山ヵ）											
17		重一郎間歩・十一郎間歩・十一両間歩				［味№196］							
18	106	新階屋間歩											
19		新階屋九兵衛立会											
20		新水貫間歩煙貫	［味№13］										
21		助左右衛門間歩											
22		助右衛門間歩											
23		長右衛門間歩・長右衛門水貫											
24		天道間歩・天童間歩											
25		とかけ間歩											
26		とろ間歩・どろ間歩											
27		中水貫ノ口											
28		馳割間歩											
29		八郎左衛門間歩											
30		沢根山東横大横相											
31	16	百枚間歩・百枚水貫間歩・百枚坑（近代～）			［年続］	［味№143］		［年続］［ゴ］	→	［町下］	再興・「百枚坑」［国誌］	⇒	［北］
32	104	鶴子竪坑・百枚竪坑										竪坑開削［国誌］［北］	⇒
33		兵助間歩・兵介間歩											
34	1	鶴子間歩・鶴子本口間歩・鶴子惣水貫間歩・鶴子坑（近代～）	［味№13］		［年続］	再興［町上］［国誌］［沢町2］［年続］	再興・「鶴子坑」［沢町2］［年続］					開削［北］	［北］
36		山先弥右衛門大横相											
37		遊円間歩・沢根ゆふえん間歩											
38		遊白間歩											
39		遊白五貫目山間歩											
40		六兵衛間歩											
41		六人寄合間歩・寄合間歩・より相間歩・六人間歩ヵ											
42		立鉉平											

明治 25 (1891)	明治 26 (1892)	明治 27 (1893)	大正 5 (1916)	大正 6 (1917)	大正 7 (1918)	昭和 7 (1932)	昭和 8 (1933)	昭和 9 (1934)	昭和 10 (1935)	昭和 11 (1936)	昭和 14 (1939)	昭和 15 (1940)	昭和 21 (1946)
⇒	[北]	⇒	探鉱［佐鉱］	探鉱［佐鉱］	探鉱［佐鉱］	探鉱・採鉱［佐鉱］	探鉱・採鉱［佐鉱］				[県史]	[県史]	閉山×
[国誌][北]	竪坑完成［佐鉱］										[県史]	[県史]	
[北]	[国誌][北]	[国誌][北]	探鉱［佐鉱］	探鉱［佐鉱］	探鉱［佐鉱］	探鉱・採鉱［佐鉱］	探鉱・採鉱［佐鉱］	[佐鉱]	[佐鉱]	探鉱［佐鉱］	[県史]	[県史][町Ⅲ]	閉山×

間歩稼動時期変遷表(11)

No.	調査No.	間歩名	開発地区〈史料地名〉	地区〈沢名〉	坑道種別	主な山師・採掘企業（近代）	慶長9（1604）	慶長10（1605）	慶長11（1606）	慶長12（1607）	慶長13（1608）
43		割間歩･番やの下わり間歩･番や下わり間歩･わり間歩大よこ相	鶴子	鶴子沢	横相	山主４人［山師名称不明、慶長期］		御直山［川］4・15	御直山［川］4・15	→	御直山［川］4・15
44	643・644	しなみ沢水貫	しなみ沢	しなみ沢							
45		喜兵衛間歩		鶴子沢～仕出喜沢ヵ		喜兵衛［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、承応、万治期］					
46		三右衛門間歩	鶴子百枚ヵ	鶴子沢ヵ		三右衛門［初期開発山師ヵ］､秋田権右衛門［再開発､承応､万治期］					
47		太郎太夫間歩		鶴子沢ヵ		太郎太夫［初期開発山師ヵ］					
―		屏風山銀山・青野屏風銀山	屏風山	屏風沢ヵ			［乙種］				
48		江戸横相	鶴子屏風沢	屏風沢	横相	江戸勝右衛門［慶長期］		御直山［川］3・15	御直山［川］1・3・15	→	御直山［川］3
49		大津市右衛門間歩・市右衛門間歩	鶴子屏風沢	屏風沢	のち藤兵衛間歩の煙貫	大津市右衛門［初期開発山師、慶長期ヵ］､秋田権右衛門［再開発､慶安期］			御直山［川］1・4		
50		加賀藤兵衛間歩・藤兵衛間歩	鶴子屏風沢	屏風沢		加賀藤兵衛［初期開発山師］、秋田権右衛門［再開発、慶安期］					
51		上絃間歩・上つる間歩	屏風沢	屏風沢		不明		御直山［川］2	御直山［川］2		
52		五太夫間歩	鶴子屏風沢	屏風沢		五太夫［初期開発山師］、秋田権右衛門［再開発、慶安期］					
53		庄右衛門間歩	屏風沢	屏風沢		（大坂、佐野、江戸？）庄右衛門［初期開発山師］					
54		次郎右衛門間歩水貫	鶴子屏風沢	屏風沢	水貫	次郎右衛門［初期開発山師］、秋田権右衛門［再開発、慶安期］					
55		宗徳大横相・宗徳間歩・田中宗徳大横相	屏風沢	屏風沢	横相	田中助兵衛（宗徳］・丹波清兵衛（弥十郎）［慶長期］		御直山［川］4・10	御直山［川］1・4・10・15	→	御直山［川］4・10
56		屏風沢大横相　※総称ヵ屏風沢横相	鶴子屏風沢	屏風沢	横相			御直山［川］2・4・14	御直山［川］1・2・4・14	→	御直山［川］4・14
57	138・123	弥十郎間歩※弥十郎坑（近代～）	鶴子屏風沢	屏風沢		丹波弥十郎or加賀弥十郎[初期開発山師]、嘉左衛門町與市[寛延期]、秋田権左衛門[天保期]、官営[明治期]、御料局[明治期]、三菱合資会社[明治期]	［乙種］	［乙種］	［乙種］	［乙種］	［乙種］
58		貞右衛門間歩		仕出喜沢？		貞右衛門［初期開発山師ヵ］					
59		佐兵右衛門間歩	仕出喜東平	仕出喜沢		佐兵右衛門［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、慶安、承応期］					
60	324・325	仕出喜間歩・仕出来間歩・仕出喜惣水貫	仕出喜日向平	仕出喜沢	水貫	秋田権左衛門［元和期］、秋田権右衛門［慶安～万治期、元禄期］、河上治左衛門→村上上左衛門に譲渡［天和期］					
61	332･368･369	仕出喜上口	仕出喜	仕出喜沢		不明					
62		仕出喜上水貫	仕出喜	仕出喜沢	水貫	不明					
63		仕出喜下水貫	仕出喜	仕出喜沢	水貫	不明					
64		仕出喜上弦間歩	仕出喜	仕出喜沢		不明					
65		四郎三郎間歩		仕出喜沢？		四郎三郎［初期開発山師ヵ］					
66		長右エ（衛ヵ）門間歩		仕出喜沢？		長右衛門［初期開発山師ヵ］					
67		藤庵間歩	仕出喜西平	仕出喜沢	のち仕出喜惣水貫の煙貫	藤庵［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、慶安期］					
68		長崎間歩	仕出喜平	仕出喜沢		長崎某［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、慶安期］					
69		中山九右衛門間歩	仕出喜	仕出喜沢		中山九右衛門［初期開発山師ヵ］､秋田権右衛門［再開発､慶安期］					
70		八右衛門間歩	仕出喜東平	仕出喜沢	のち中山九右衛門間歩の煙貫	八右衛門［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、慶安期］					
71		平兵衛間歩	仕出喜日向平	仕出喜沢		日向平兵衛［初期開発山師ヵ］、秋田権右衛門［再開発、慶安期］					
72	637	松ヶ沢新切山間歩・秋田権左衛門新切山	松ヶ沢	松ヶ沢		秋田権右（左）衛門［慶安期ヵ］					
73		松ヶ沢水貫惣水貫	松ヶ沢	松ヶ沢	水貫	不明					
74		大石間歩	五十里沢	屏風沢以東？		江戸平太夫［慶長期］		御直山［川］4	御直山［川］4	→	御直山［川］4
75		大瀧下大横相	五十里沢大滝	大滝	横相	二郎兵衛［慶長期］		御直山［川］4	御直山［川］4	→	御直山［川］4
76		御公方新切山	五十里沢	屏風沢以東？		黒介［慶長期］		御直山［川］4	御直山［川］4	→	御直山［川］4
77		御番や下大横相	五十里沢	屏風沢以東？	横相	弥五右衛門［慶長期］		御直山［川］4	御直山［川］4	→	御直山［川］4
78		清十郎間歩	五十里沢床屋平	屏風沢以東？		清十郎［慶長期］		御直山［川］4	御直山［川］4	→	御直山［川］4
79		襴ば間歩・ねば間歩	五十里沢	屏風沢以東？		茂兵衛［慶長期］		御直山［川］4	御直山［川］4	→	御直山［川］4
80	663	大滝間歩・大瀧間歩	大滝	大滝		紺屋弥兵衛［天明期］、半兵衛［文化期］					
81		東円間歩	大滝ヵ	大滝？		東円［初期開発山師ヵ］、紺屋弥兵衛［天明期］					
82	662	弥喜知間歩・弥吉間歩	大滝	大滝		弥吉［初期開発山師ヵ］					

慶長14 (1609)	慶長15 (1510)	元和6 (1620)	寛永4 (1627)	正保3 (1646)	慶安2 (1649)	慶安3 (1650)	慶安4 (1651)	慶安5 承応元 (1652)	承応2 (1653)	承応3 (1654)	承応4 (1655)	万治元 (1658)	万治2 (1659)	延宝2 (1674)	天和2 (1682)	元禄9 (1696)
											再興[町Ⅱ]					
											再興[町Ⅱ]	→	[町Ⅱ]			
				[年]		⇒		[町Ⅱ]		[風]				なだれ[年]		
						[町Ⅱ]		[岩No. 354]								
						再興[町Ⅱ]		[岩No. 354]								
						再興[町Ⅱ]		[岩No. 354]								
								[岩No. 354]								
							再興[町Ⅱ]	[岩No. 354]								
[乙種]	[乙種]							開坑［隋見］[岩No. 354]						[年][略記]		
								[岩No. 354]								
						[町Ⅱ]										
		自分山［古略］[風]	[北]		[町Ⅱ]	→	→	自分山［略記][風] [岩No. 354]	自分山［略記][風]	自分山［略記][風]	自分山［略記][風]	自分山［略記][風]			[町Ⅱ][味]	自分山→休止［国誌］[沢町2]
								[岩No. 354]								
								[岩No. 354]								
								[岩No. 354]								
								[岩No. 354]								
								[岩No. 354]								
								[岩No. 354]								
						再興[町Ⅱ]										
						[町Ⅱ]										
						[町Ⅱ]		[岩No. 354]								
						[町Ⅱ]										
					再興[町Ⅱ]											
								[岩No. 354]								
								[岩No. 354]								

間歩稼動時期変遷表(13)

№.	調査№.	間歩名	元禄 14 (1701)	宝永 3 (1706)	享保 8 (1723)	享保 9 (1724)	享保 19 (1733)	享保 20 (1734)	元文元 (1736)	元文 2 (1737)	元文 4 (1739)	元文 5 (1740)	寛保元 (1741)	延享 2 (1745)	延享 3 (1746)
43		割間歩･番やの下わり間歩･番や下わり間歩･わり間歩大よこ相		［味№. 195］				古間歩さらへ［町Ⅱ］							
44	643･644	しなみ沢水貫	［真］	［味№. 195］			古敷取明［年］［北］	水貫完成［年］［略記］							
45		喜兵衛間歩													
46		三右衛門間歩													
47		太郎太夫間歩													
—		屏風山銀山・青野屏風銀山			自分山［略記］	自分山［年］									
48		江戸横相													
49		大津市右衛門間歩・市右衛門間歩													
50		加賀藤兵衛間歩・藤兵衛間歩													
51		上紘間歩・上つる間歩													
52		五太夫間歩													
53		庄右衛門間歩													
54		次郎右衛門間歩水貫													
55		宗徳大横相・宗徳間歩・田中宗徳大横相													
56		屏風沢大横相　※総称ヵ屏風沢横相													
57	138･123	弥十郎間歩※弥十郎坑（近代～）													
58		貞右衛門間歩													
59		佐兵右衛門間歩													
60	324･325	仕出喜間歩・仕出来間歩・仕出喜惣水貫							［国誌］	⇒	⇒	⇒	2 月休止［国誌］	6 月取明［略記］［風］［北］［隋見］	⇒
61	332･368･369	仕出喜上口													
62		仕出喜上水貫													
63		仕出喜下水貫													
64		仕出喜上弦間歩													
65		四郎三郎間歩													
66		長右エ（衛ヵ）門間歩													
67		藤庵間歩													
68		長崎間歩													
69		中山九右衛門間歩													
70		八右衛門間歩													
71		平兵衛間歩													
72	637	松ヶ沢新切山間歩・秋田権左衛門新切山													
73		松ヶ沢水貫惣水貫													
74		大石間歩													
75		大瀧下大横相													
76		御公方新切山													
77		御番や下大横相													
78		清十郎間歩													
79		禰ば間歩・ねば間歩													
80	663	大滝間歩・大瀧間歩													
81		東円間歩													
82	662	弥喜知間歩・弥吉間歩													

延享 4（1747）	寛延元（1748）	明和 4（1771）	天明 4（1784）	天明 8（1788）	寛政 2（1790）	文化 11（1814）	文化 12（1815）	文化 12（1815）～13（1816）	文政 8（1825）	文政 9（1826）	文政 10（1827）	文政年間※（1818～1830）	天保 6（1835）	天保 7（1836）	天保 8（1837）	天保 9（1838）
				取明［年］［略記］	［年］［略記］［国誌］						川流し［略記］					
												［仕入］				
												［仕入］				
		再興［年］［略記］［国誌］［沢町 2］					⇒	⇒	［年］	⇒			⇒	⇒	⇒	⇒
										弥十郎～坑道開通［年］［国誌］						
														［年］		
												［仕入］				
							［国誌］	［年］［国誌］［仕入］		［年］［国誌］			［年］［仕入］［ひ］	［年］［国誌］［沢町 2］	［年］［仕入］［ひ］	御直山［年］［仕入］［隋見］
												［仕入］				
［風］［舟］1210	休止［年］［風］［北］											［仕入］				
												［仕入］				
［舟］1210																
			再興［年］［略記］［北］			再興［略記］	［略記］［北］									
			［略記］													

間歩稼動時期変遷表(15)

No.	調査No.	間歩名	天保11（1840）	天保12（1841）	天保13（1842）	享保8（1723）	享保9（1724）	享保19（1733）	享保20（1734）	元文元（1736）	元文2（1737）	元文4（1739）	元文5（1740）	寛保元（1741）	延享2（1745）	延享3（1746）
43		割間歩･番やの下わり間歩･番や下わり間歩･わり間歩大よこ相							古間歩さらへ［町Ⅱ］							
44	643・644	しなみ沢水貫						古敷取明［年］［北］	水貫完成［年］［略記］							
45		喜兵衛間歩														
46		三右衛門間歩														
47		太郎太夫間歩														
—		屏風山銀山・青野屏風銀山	⇒		⇒	自分山［略記］	自分山［年］									
48		江戸横相														
49		大津市右衛門間歩・市右衛門間歩														
50		加賀藤兵衛間歩・藤兵衛間歩			排水用取明［年］											
51		上紘間歩・上つる間歩														
52		五太夫間歩														
53		庄右衛門間歩														
54		次郎右衛門間歩水貫														
55		宗徳大横相・宗徳間歩・田中宗徳大横相														
56		屏風沢大横相　※総称ヵ屏風沢横相														
57	138・123	弥十郎間歩※弥十郎坑（近代～）	［年］［烏］	［烏］	［年］											
58		貞右衛門間歩														
59		佐兵右衛門間歩														
60	324・325	仕出喜間歩・仕出来間歩・仕出喜惣水貫								［国誌］	⇒	⇒	⇒	2月休止［国誌］	6月取明［略記］［風］［北］［隋見］	⇒
61	332・368･369	仕出喜上口														
62		仕出喜上水貫														
63		仕出喜下水貫														
64		仕出喜上弦間歩														
65		四郎三郎間歩														
66		長右エ（衛ヵ）門間歩														
67		藤庵間歩														
68		長崎間歩														
69		中山九右衛門間歩														
70		八右衛門間歩														
71		平兵衛間歩														
72	637	松ヶ沢新切山間歩・秋田権左衛門新切山														
73		松ヶ沢水貫惣水貫														
74		大石間歩														
75		大瀧下大横相														
76		御公方新切山														
77		御番や下大横相														
78		清十郎間歩														
79		禰ば間歩・ねば間歩														
80	663	大滝間歩・大瀧間歩														
81		東円間歩														
82	662	弥喜知間歩・弥吉間歩														

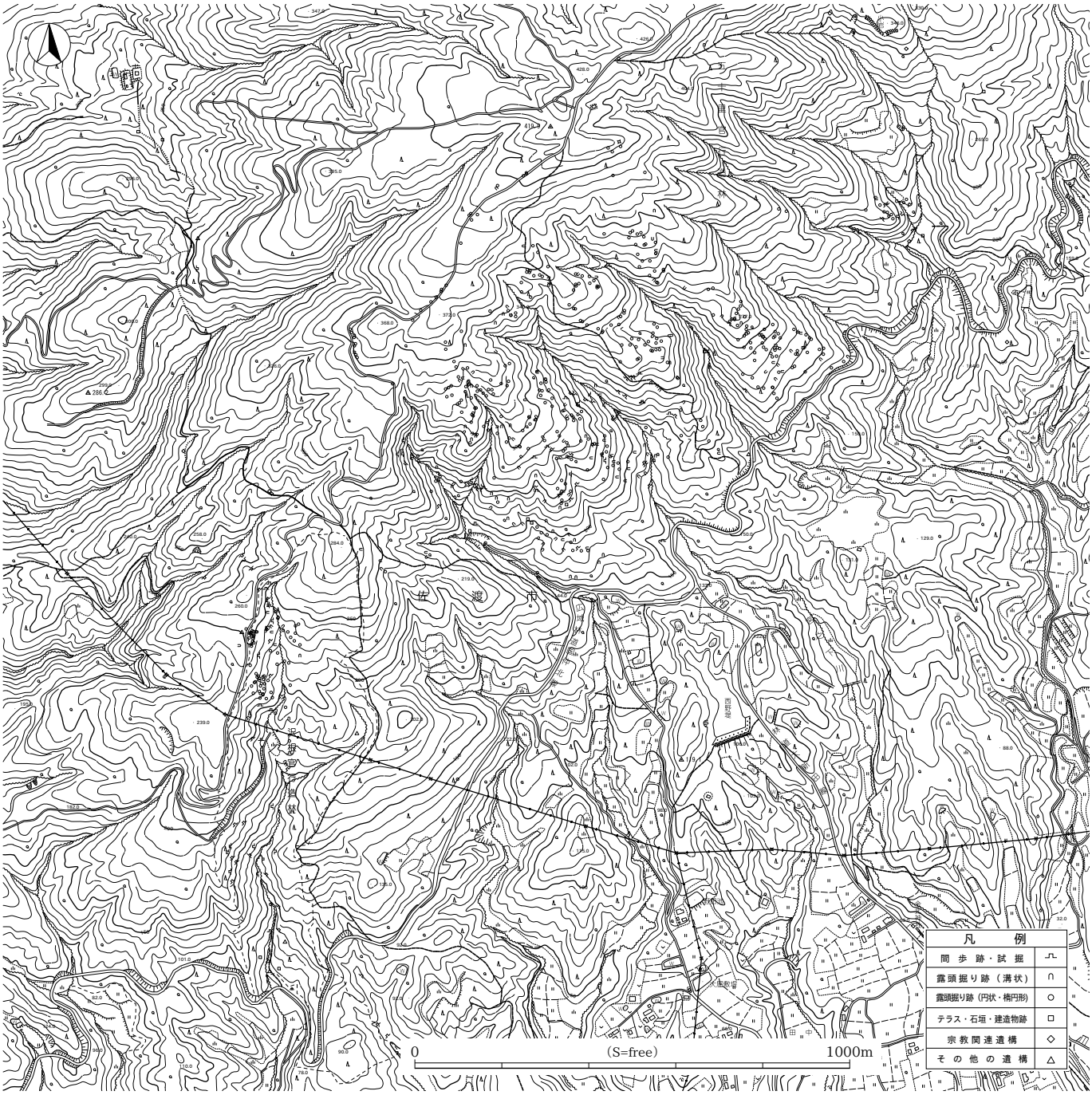
延享4 (1747)	寛延元 (1748)	天保14 (1843)	天保15 (1844)	弘化3 (1846)	弘化4 (1847)	嘉永2 (1849)	嘉永3 (1850)	嘉永4 (1851)	嘉永5 (1852)	安政4 (1857)	安政5 (1858)	安政6 (1859)	安政7/ 万延元 (1860)	文久元 (1861)	文久2 (1862)	文久3 (1863)
																[味№13]
		⇒	→	⇒	⇒	→	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	×
		[年]	→	本途稼［国誌］	［年］［沢町Ⅱ］	→	［年］	［国誌］	［国誌］［年統］［遊］	［国誌］［年統］	［国誌］	［国誌］	［年統］	［年統］	⇒	休止［国誌］[味№152][沢町2]
［風］［舟］ 1210	休止［年］ ［風］［北］															
［舟］1210																
										[味№28]						
										[味№28]			[味№68]			

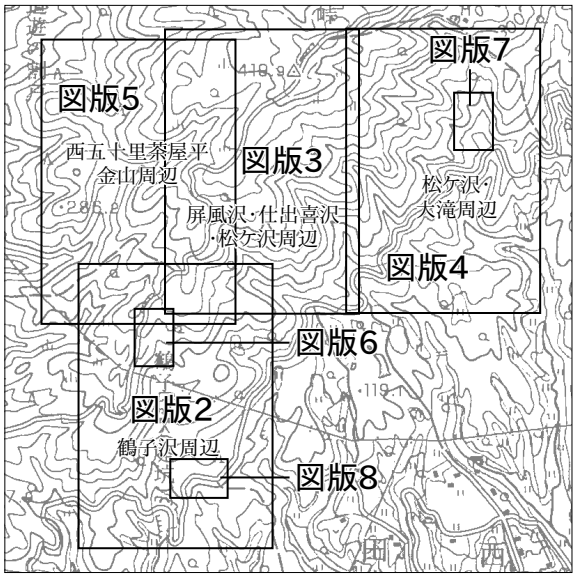
[味№13]
[味№152]
[味№28]
[味№28]
[味№68]

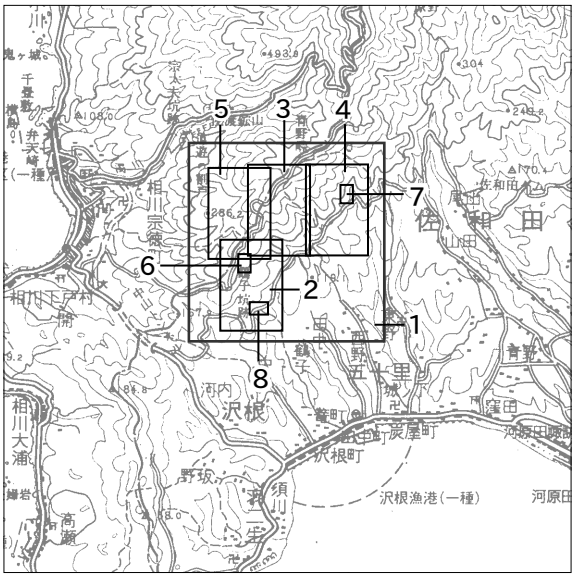
間歩稼動時期変遷表(17)

№.	調査№.	間歩名	慶応 2（1866）	明治 2（1869）	明治 3（1870）	明治 7（1874）	明治 26（1892）	明治 32（1899）	大正 5（1916）	昭和 21（1946）
43		割間歩･番やの下わり間歩･番や下わり間歩･わり間歩大よこ相								
44	643・644	しなみ沢水貫					［北］			
45		喜兵衛間歩								
46		三右衛門間歩								
47		太郎太夫間歩								
—		屏風山銀山・青野屏風銀山				⇒	⇒		⇒	閉山×
48		江戸横相								
49		大津市右衛門間歩・市右衛門間歩								
50		加賀藤兵衛間歩・藤兵衛間歩								
51		上紘間歩・上つる間歩								
52		五太夫間歩								
53		庄右衛門間歩								
54		次郎右衛門間歩水貫								
55		宗徳大横相・宗徳間歩・田中宗徳大横相								
56		屏風沢大横相　※総称ヵ屏風沢横相								
57	138・123	弥十郎間歩※弥十郎坑（近代～）	休止［隋見］	再興［隋見］	→	［町下］	［国誌］	［佐鉱］	取明［佐鉱］	閉山×
58		貞右衛門間歩								
59		佐兵右衛門間歩								
60	324・325	仕出喜間歩・仕出来間歩・仕出喜惣水貫								
61	332･368･369	仕出喜上口								
62		仕出喜上水貫								
63		仕出喜下水貫								
64		仕出喜上弦間歩								
65		四郎三郎間歩								
66		長右エ（衛ヵ）門間歩								
67		藤庵間歩								
68		長崎間歩								
69		中山九右衛門間歩								
70		八右衛門間歩								
71		平兵衛間歩								
72	637	松ヶ沢新切山間歩・秋田権左衛門新切山								
73		松ヶ沢水貫惣水貫								
74		大石間歩								
75		大瀧下大横相								
76		御公方新切山								
77		御番や下大横相								
78		清十郎間歩								
79		禰ば間歩・ねば間歩								
80	663	大滝間歩・大瀧間歩								
81		東円間歩								
82	662	弥喜知間歩・弥吉間歩		［年続］	［年続］					

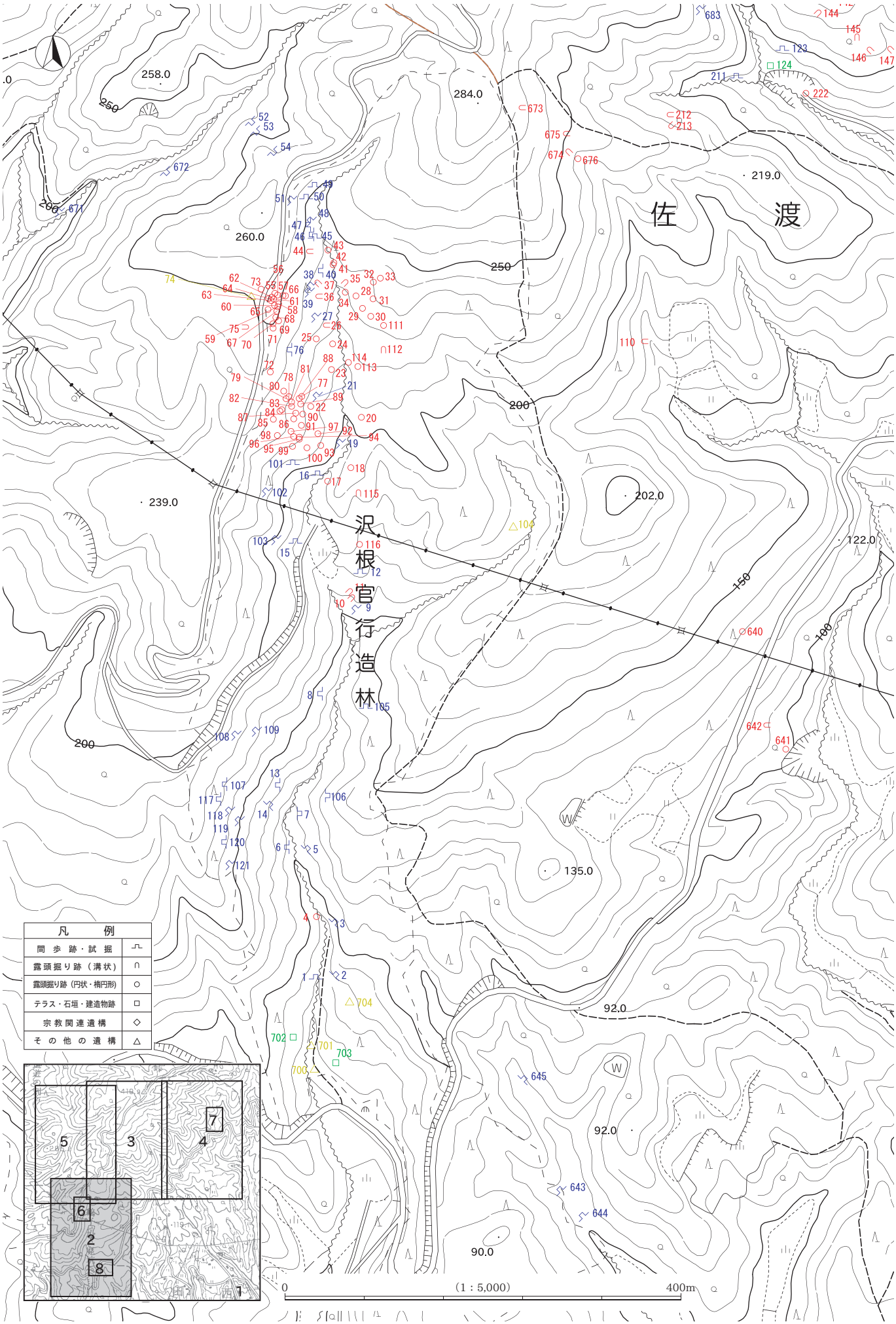
図　　版

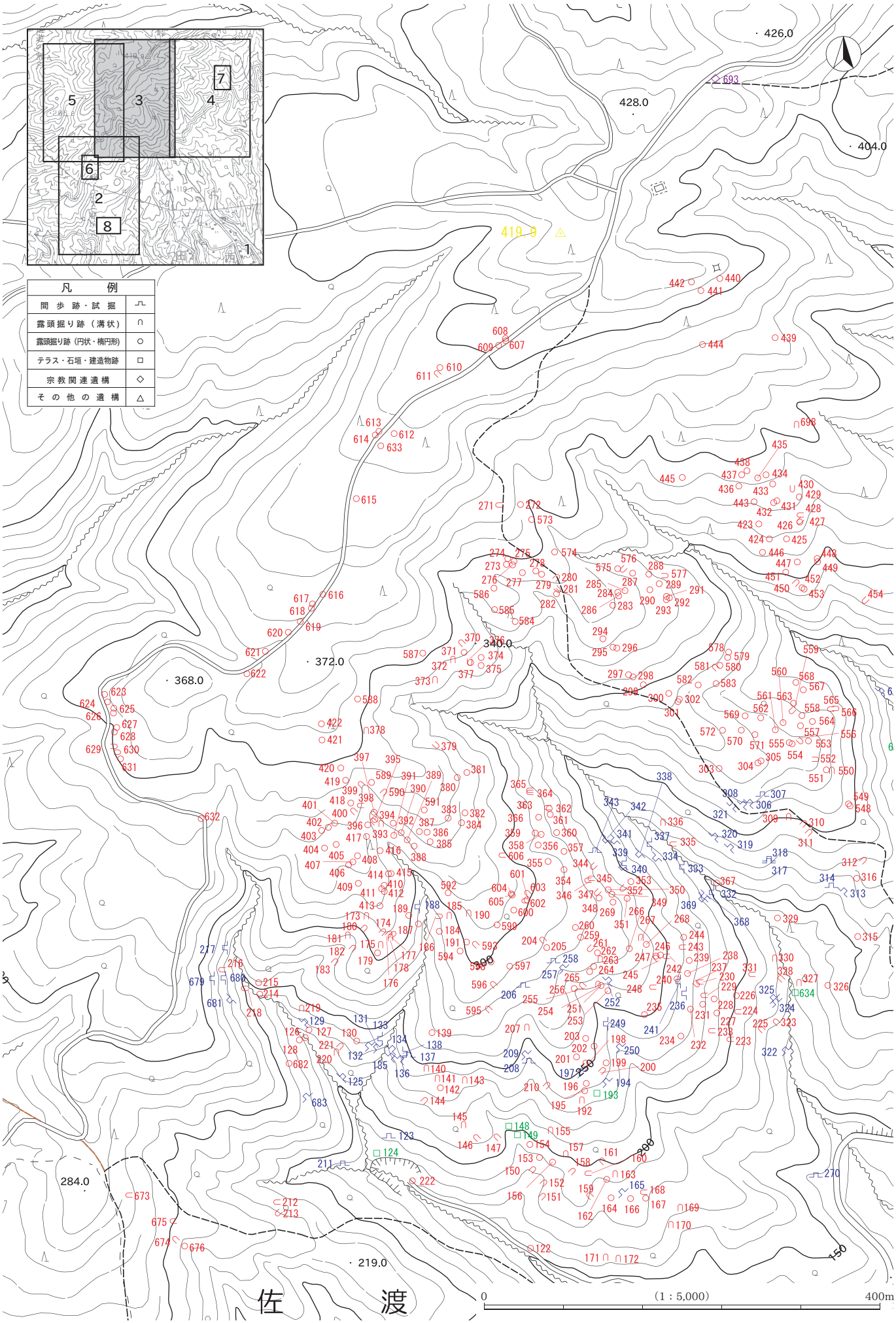

凡　例
踏査・試掘
露頭掘り跡（溝状）
露頭掘り跡（円状・楕円形）
テラス・石垣・建造物跡
宗教関連遺構
その他の遺構
0
(S=free)
1000m


図版5
西五十里蒸屋平
金山周辺
図版3
屏風沢・仕出喜沢
・松ケ沢周辺
図版7
松ケ沢・
大滝周辺
図版4
図版6
図版2
鶴子沢周辺
図版8

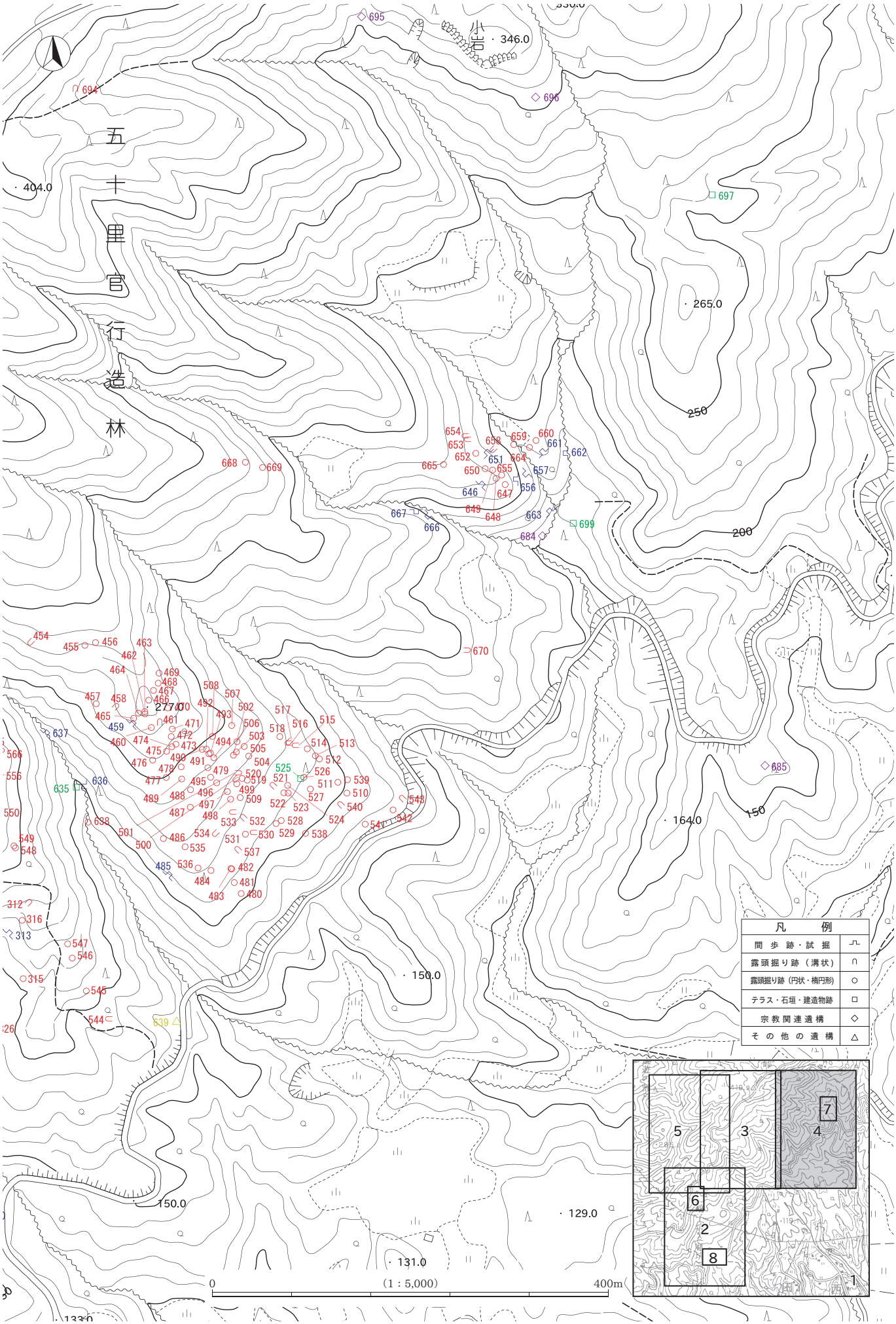

5
3
4
7
6
2
1
8
沢根
沢根漁港（一種）

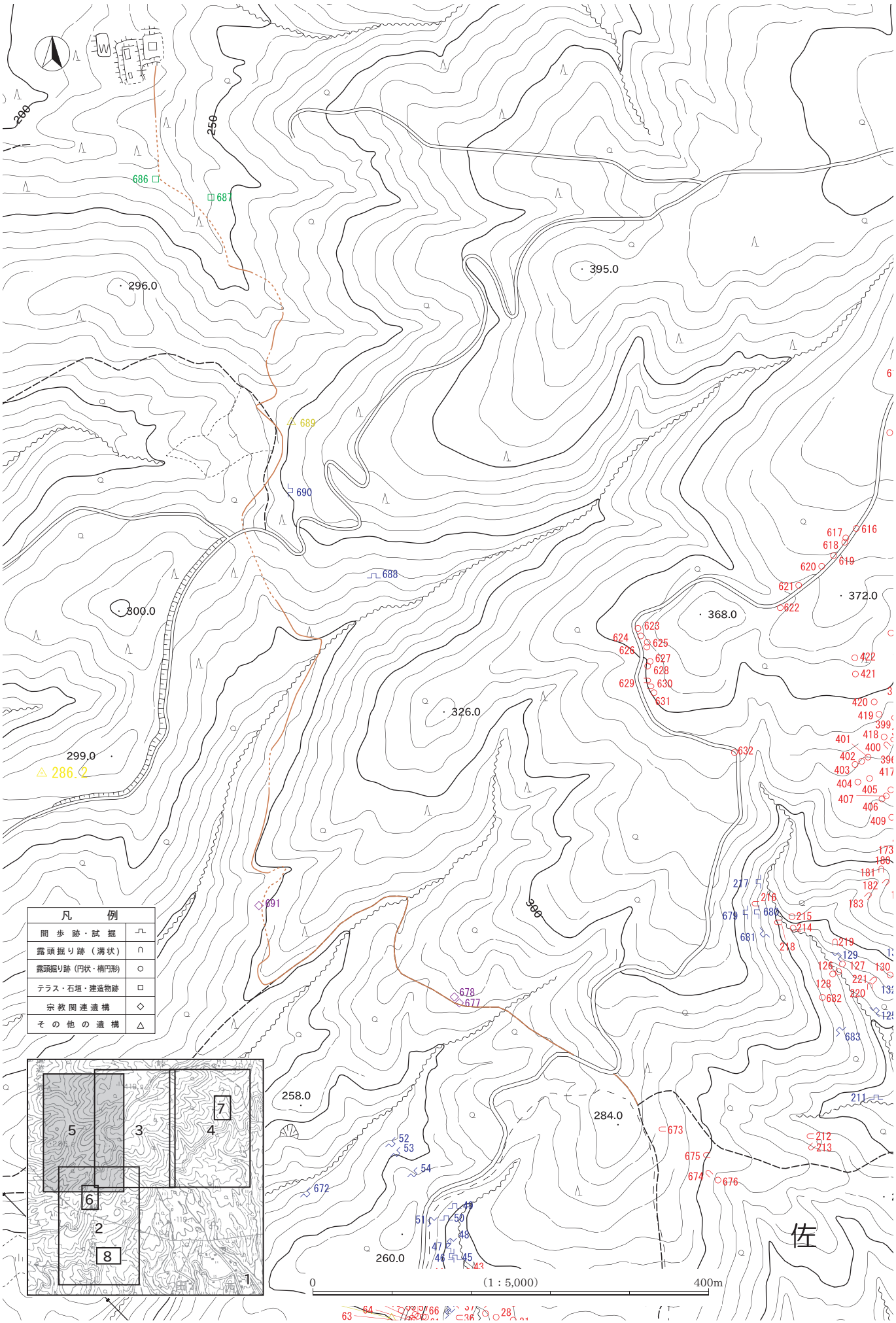
遺構分布図１（鶴子沢周辺）



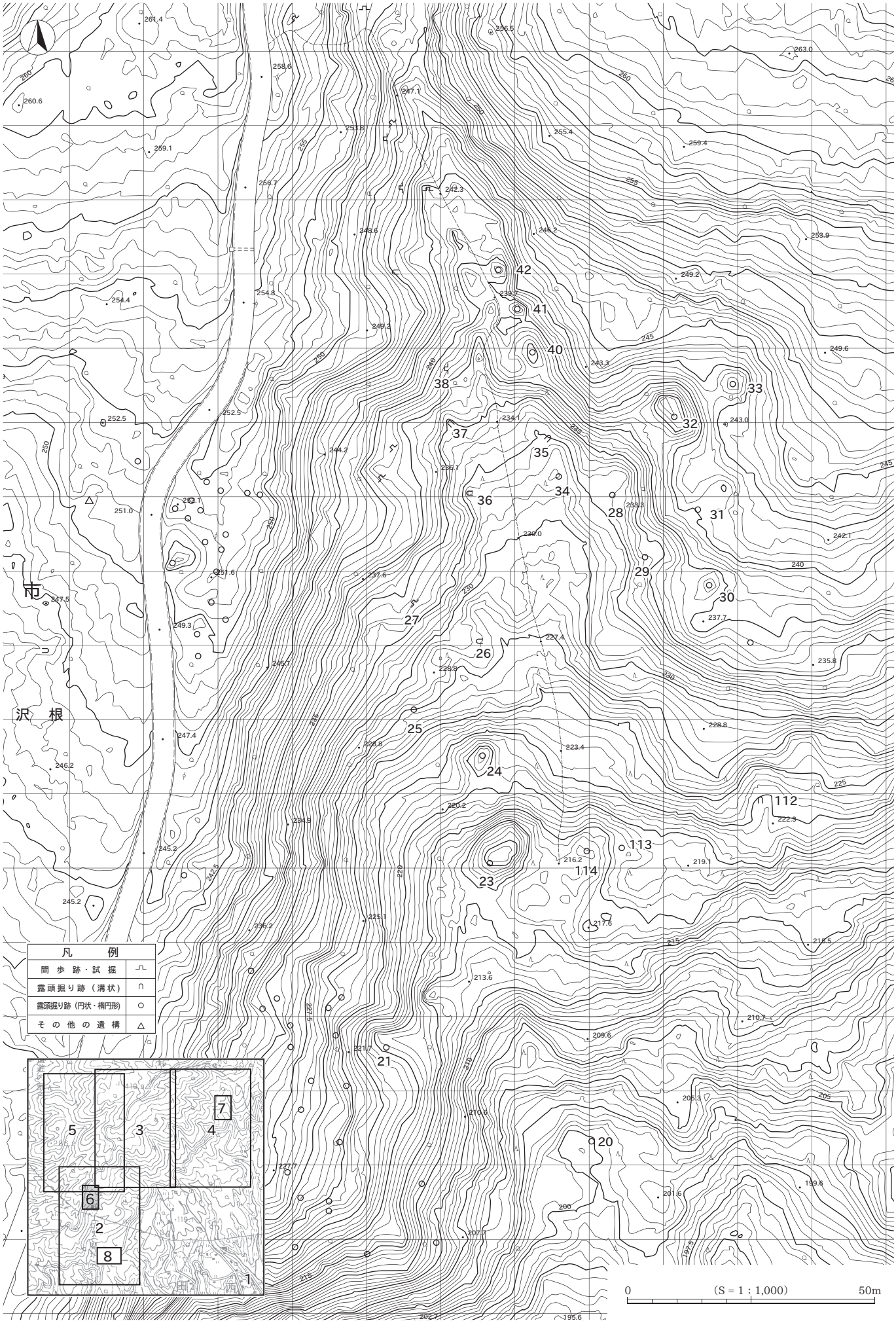

凡　例
間 歩 跡・試 掘
露頭掘り跡（溝状）
露頭掘り跡（円状・楕円形）
テラス・石垣・建造物跡
宗 教 関 連 遺 構
そ の 他 の 遺 構
1
2
3
4
5
6
7
8
· 426.0
428.0
· 404.0
419.9
· 372.0
· 368.0
340.0
· 284.0
· 219.0
佐　渡
0
（1：5,000）
400m

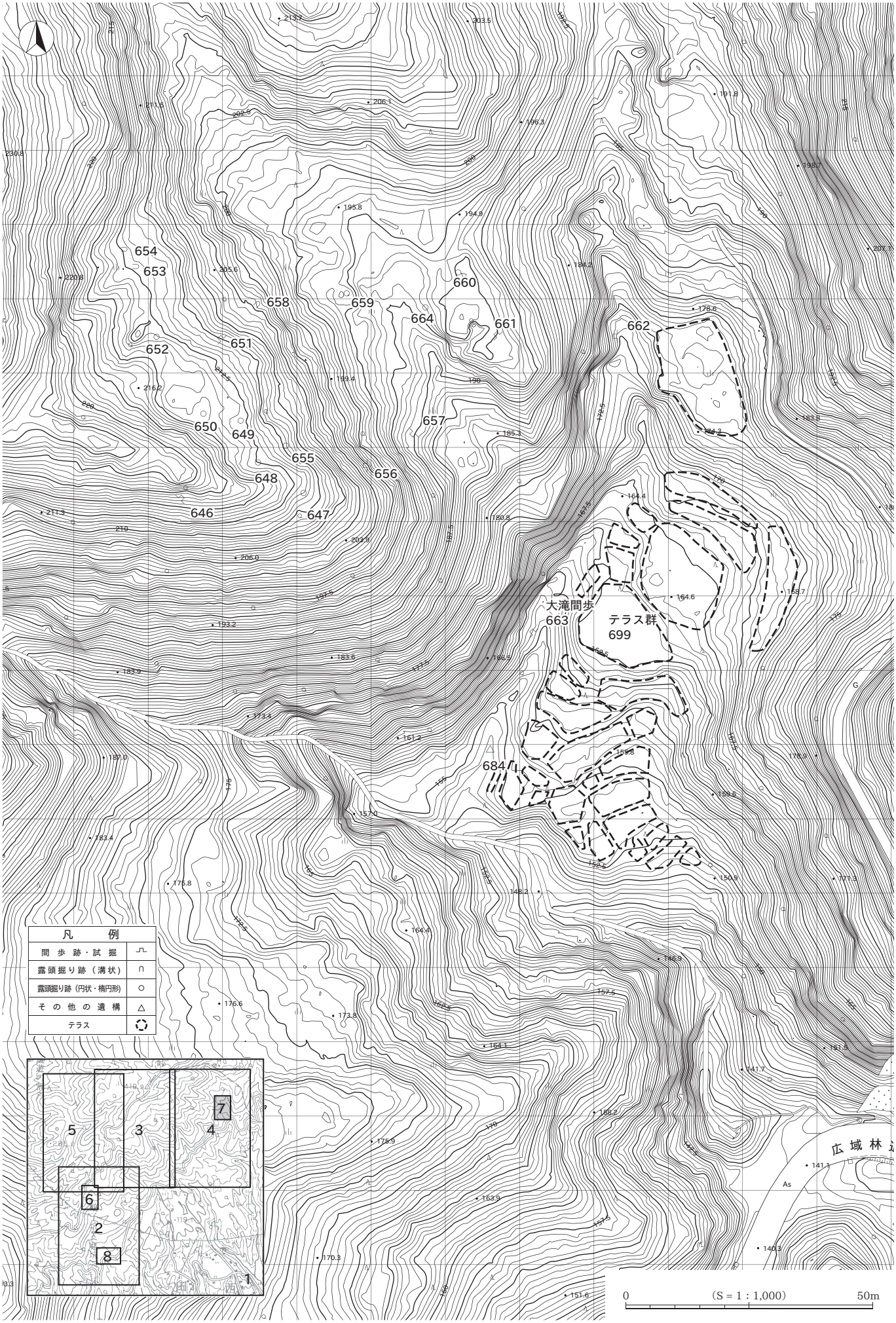
遺構分布図３（松ヶ沢・大滝周辺）



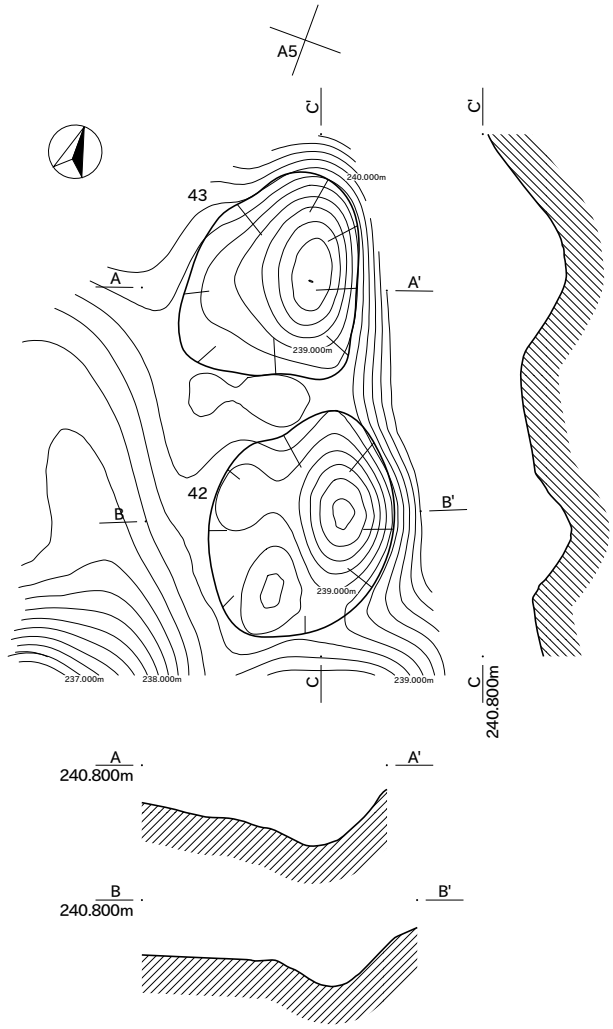

凡　例
間歩跡・試掘
露頭掘り跡（溝状）
露頭掘り跡（円状・楕円形）
テラス・石垣・建造物跡
宗教関連遺構
その他の遺構
0
（1：5,000）
400m
296.0
395.0
300.0
368.0
372.0
326.0
299.0
286.2
258.0
284.0
260.0
686
687
689
690
688
691
678
677
672
673
675
674
676
683
682
680
679
681
632
622
621
620
619
618
617
616
631
630
629
628
627
626
625
624
623
422
421
420
419
418
417
416
415
414
413
412
411
410
409
408
407
406
405
404
403
402
401
400
399
398
397
396
395
394
393
392
391
390
389
388
387
386
385
384
383
382
381
380
379
378
377
376
375
374
373
372
371
370
369
368
367
366
365
364
363
362
361
360
359
358
357
356
355
354
353
352
351
350
349
348
347
346
345
344
343
342
341
340
339
338
337
336
335
334
333
332
331
330
329
328
327
326
325
324
323
322
321
320
319
318
317
316
315
314
313
312
311
310
309
308
307
306
305
304
303
302
301
300
299
298
297
296
295
294
293
292
291
290
289
288
287
286
285
284
283
282
281
280
279
278
277
276
275
274
273
272
271
270
269
268
267
266
265
264
263
262
261
260
259
258
257
256
255
254
253
252
251
250
249
248
247
246
245
244
243
242
241
240
239
238
237
236
235
234
233
232
231
230
229
228
227
226
225
224
223
222
221
220
219
218
217
216
215
214
213
212
211
210
209
208
207
206
205
204
203
202
201
200
199
198
197
196
195
194
193
192
191
190
189
188
187
186
185
184
183
182
181
180
179
178
177
176
175
174
173
172
171
170
169
168
167
166
165
164
163
162
161
160
159
158
157
156
155
154
153
152
151
150
149
148
147
146
145
144
143
142
141
140
139
138
137
136
135
134
133
132
131
130
129
128
127
126
125
124
123
122
121
120
119
118
117
116
115
114
113
112
111
110
109
108
107
106
105
104
103
102
101
100
99
98
97
96
95
94
93
92
91
90
89
88
87
86
85
84
83
82
81
80
79
78
77
76
75
74
73
72
71
70
69
68
67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
佐

百枚平周辺遺構平面図

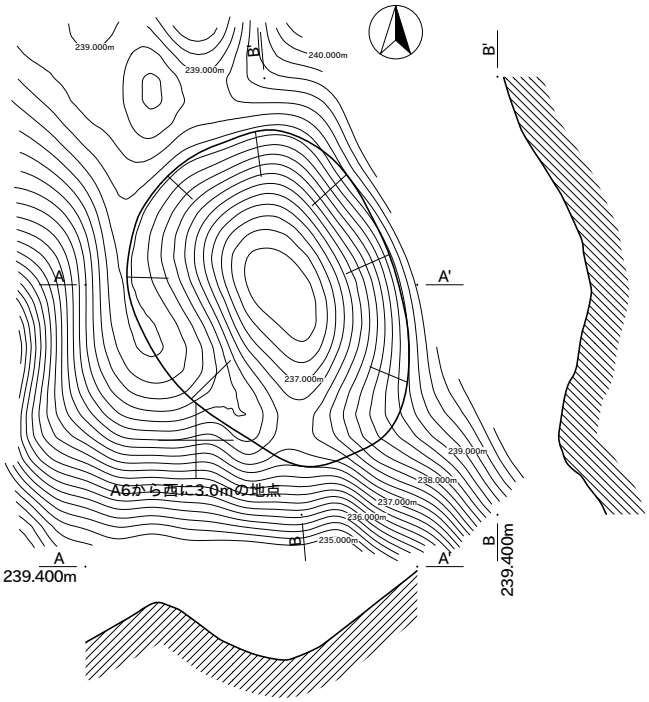



654
653
658
659
664
661
660
662
652
651
650
649
657
655
656
648
646
647
大滝間歩
663
テラス群
699
684
凡　例
間歩跡・試掘
露頭掘り跡（溝状）
露頭掘り跡（円状・楕円形）
その他の遺構
テラス
広域林道
0
（S = 1 : 1,000）
50m

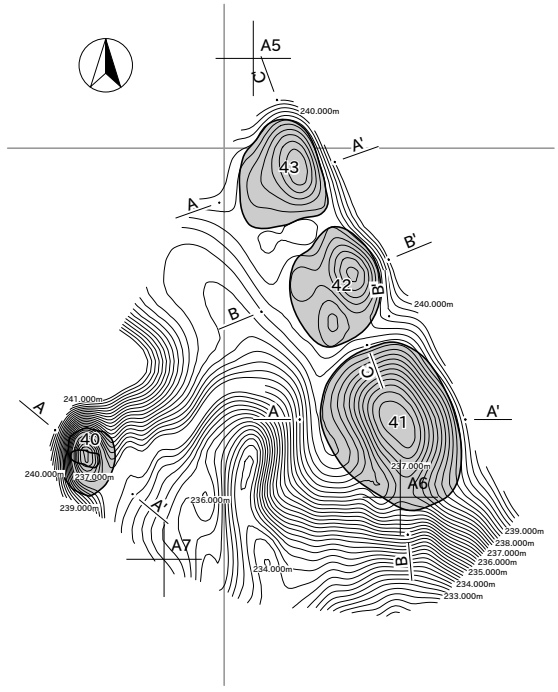
鶴子鉱山代官屋敷跡・鶴子荒町遺跡遺構平面図



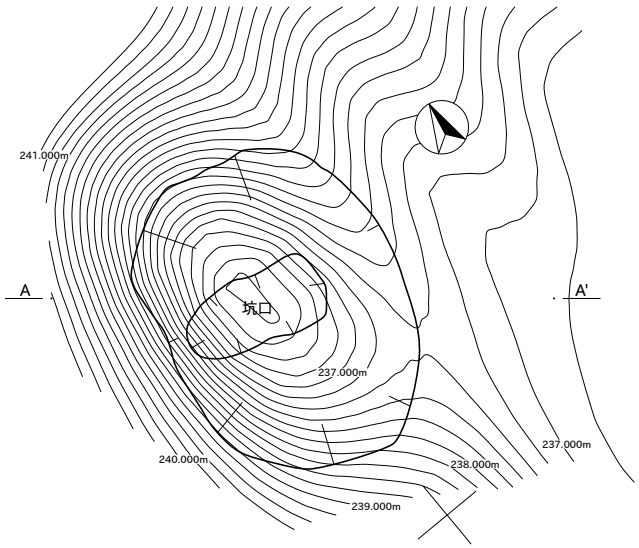
遺構No.42,43（露頭掘り）平面図・断面図

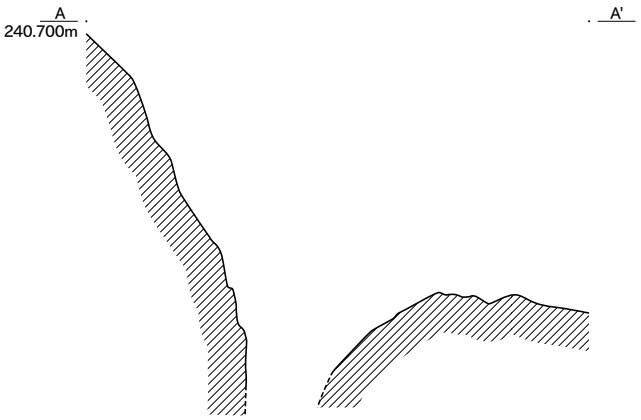


遺構No.41（露頭掘り）平面図・断面図



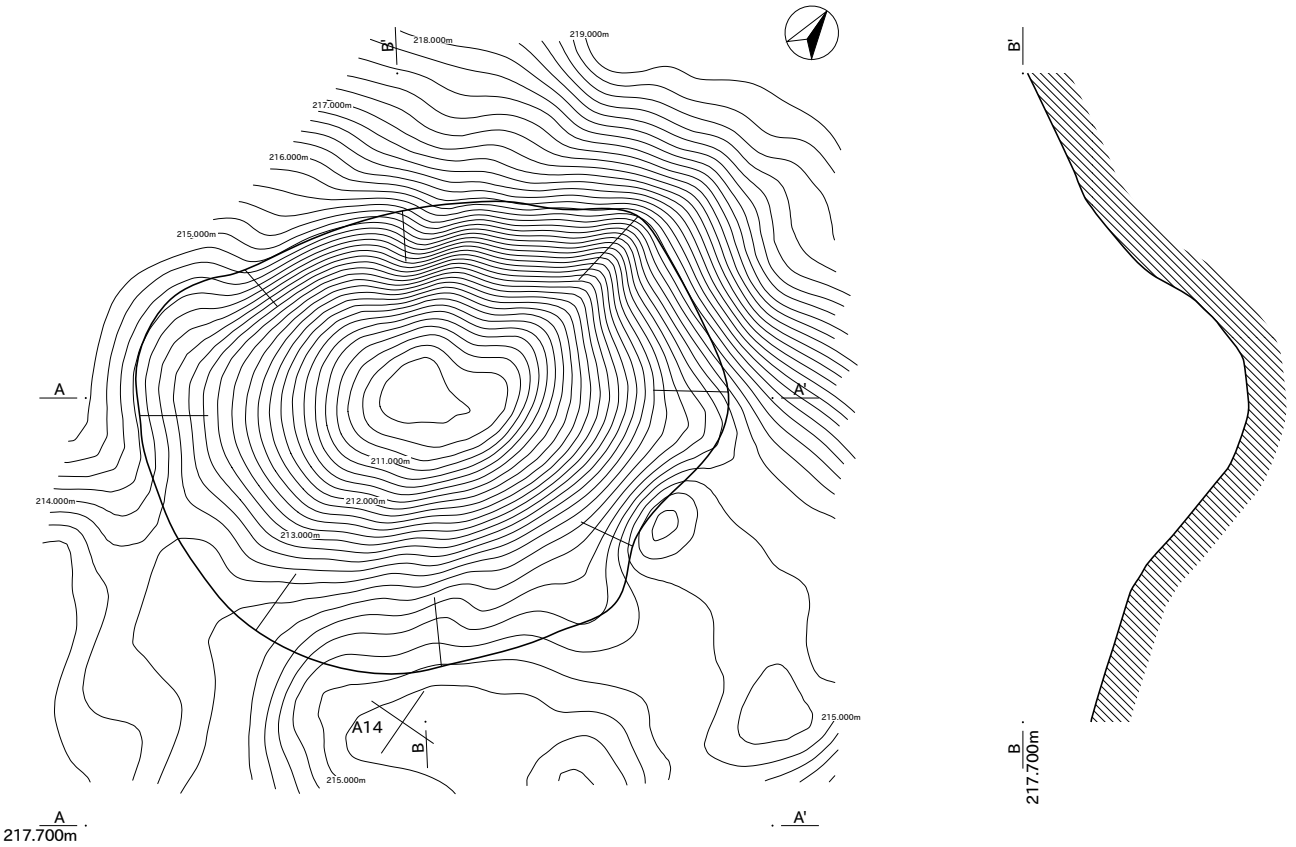
遺構位置図



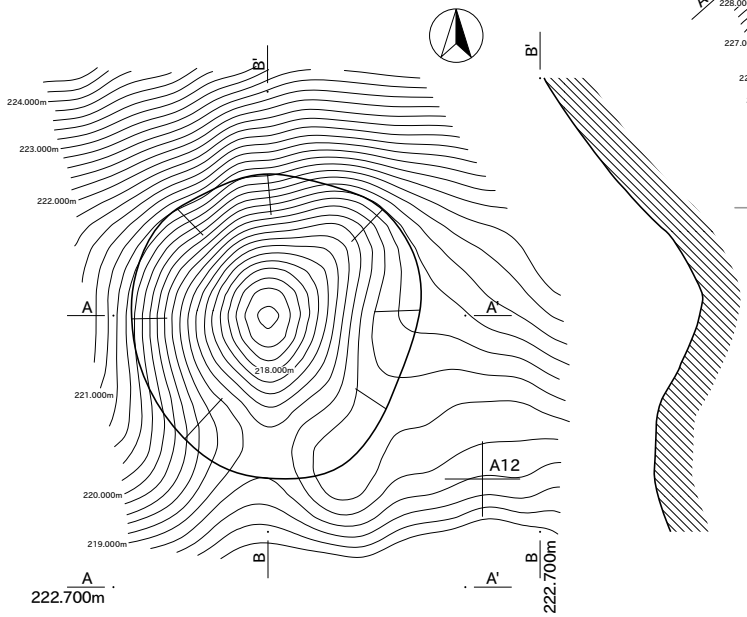


遺構No.40（間歩）平面図・断面図

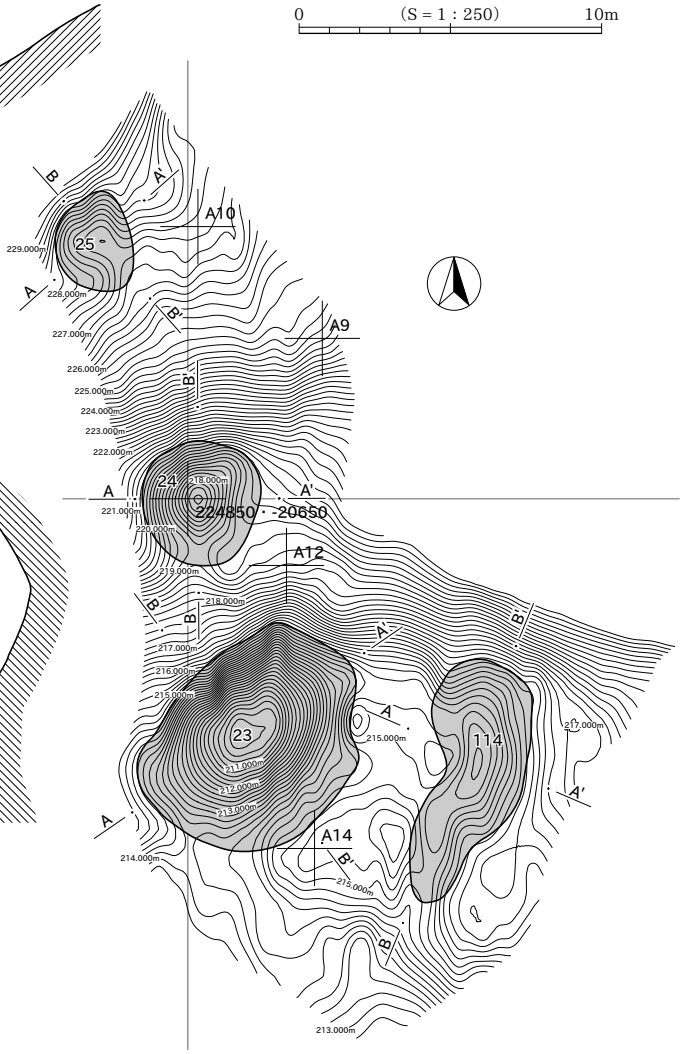
0　（No.40　S = 1 : 100）　5m　　0　（No.40以外　S = 1 : 250）　10m



遺構No.23（露頭掘り）平面図・断面図



遺構No.24（露頭掘り）平面図・断面図



遺構位置図

鶴子銀山東部採掘域（屏風沢～大滝）遠景＜写真中央の山＞（南から）

鶴子銀山東部採掘域（大滝）遠景（南から・写真中央）

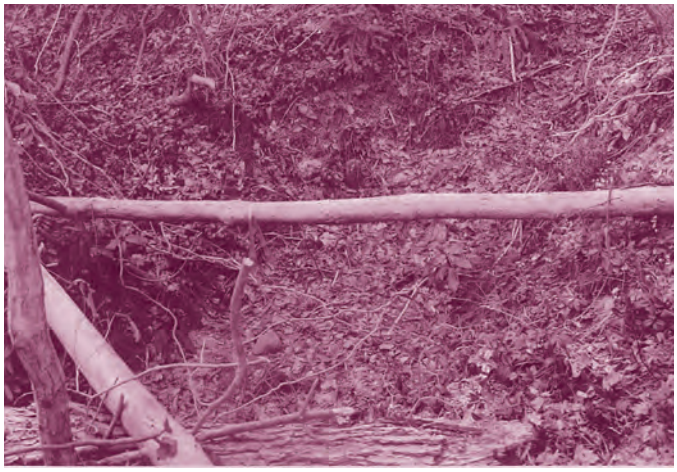
鶴子沢　No.23 露頭掘り跡

鶴子沢　No.32 露頭掘り跡

鶴子沢　No.41 露頭掘り跡

屏風沢　No.168 露頭掘り跡

屏風沢水系　No.169 露頭掘り跡

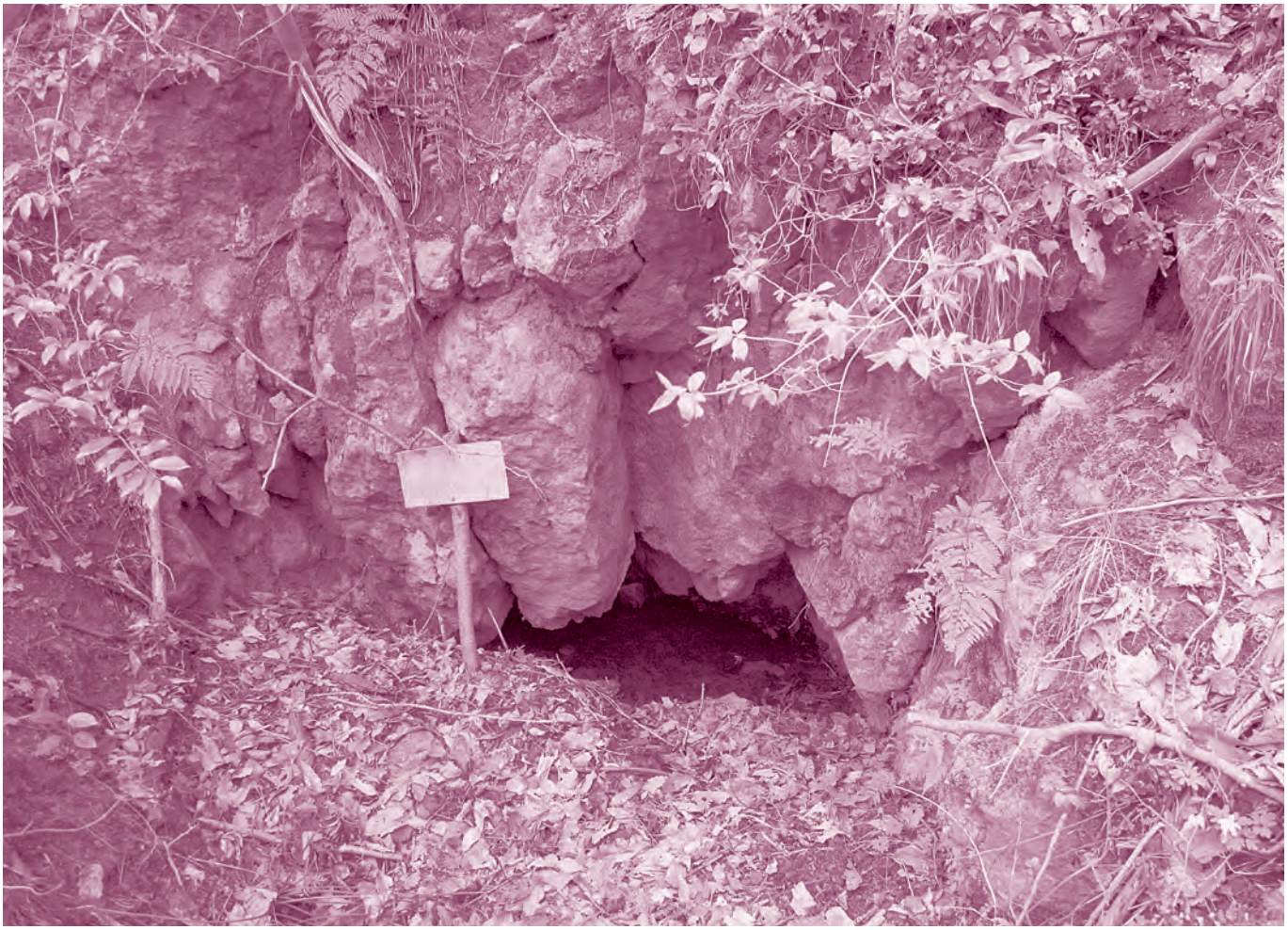


仕出喜沢　No.230 露頭掘り跡

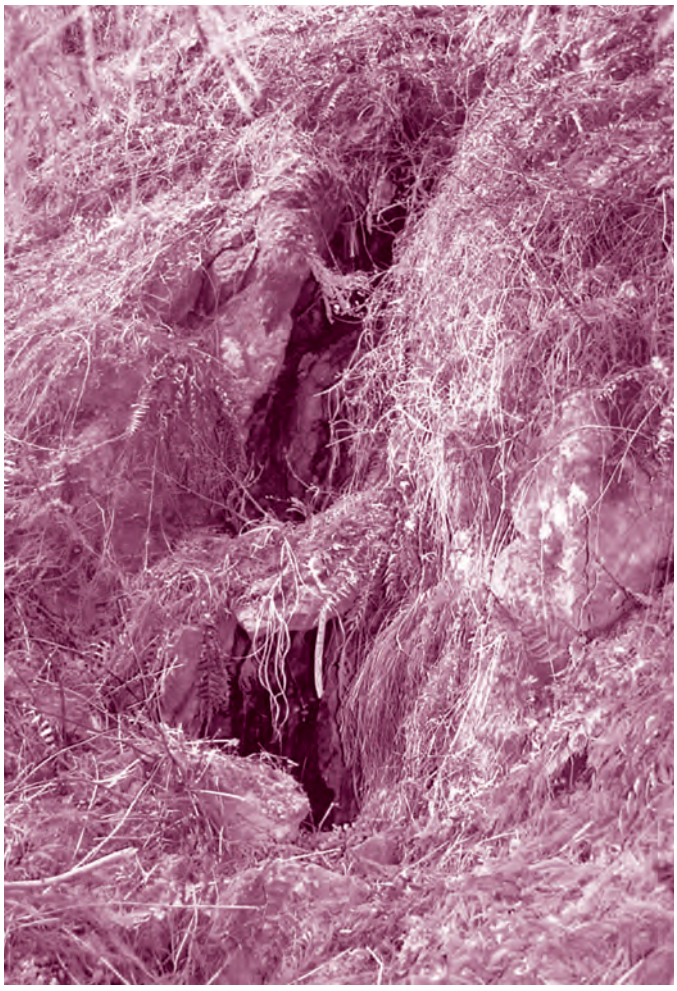
仕出喜沢　No.606 露頭掘り跡

大滝　No.650 露頭掘り跡

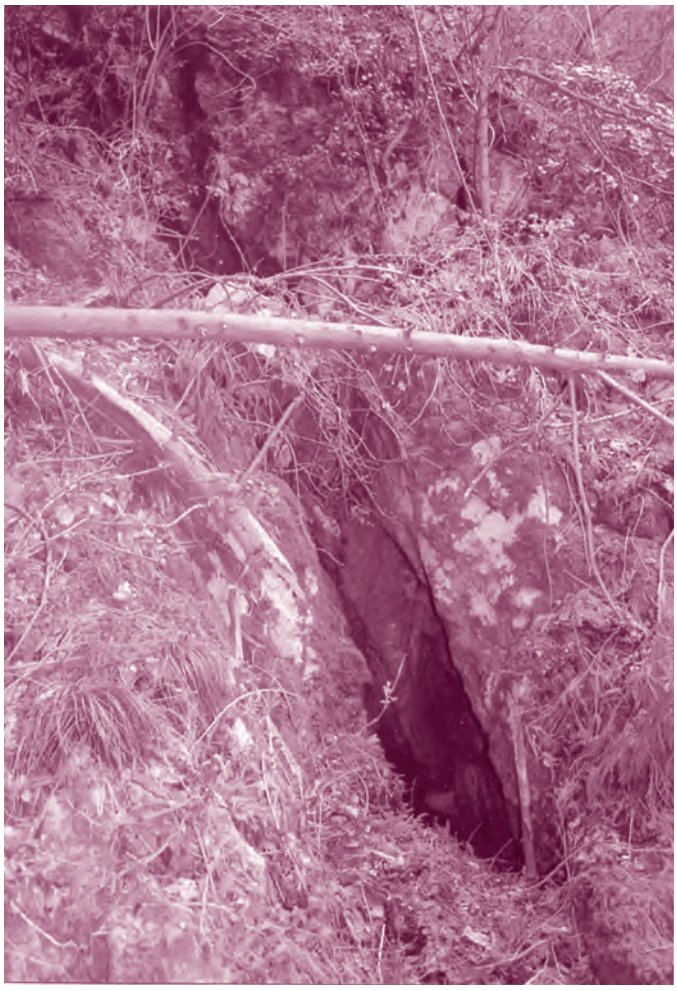
大滝　No.653 露頭掘り跡



鶴子沢　No.48 ひ押し掘り跡



屏風沢　No.133 ひ押し掘り跡



屏風沢　No.134 ひ押し掘り跡

仕出喜沢　No.307 ひ押し掘り跡

鶴子沢　No.1 鶴子（本口）間歩跡坑口（天井部分）

鶴子沢　No.1 鶴子（本口）間歩古写真

鶴子沢　No.21 間歩跡遠景

蛇谷　No.53 外山茂右衛門間歩跡坑口

鶴子沢　No.106 新階屋間歩跡坑口

屏風沢　No.680 間歩跡坑口

西屏風沢　No.129 間歩跡坑口

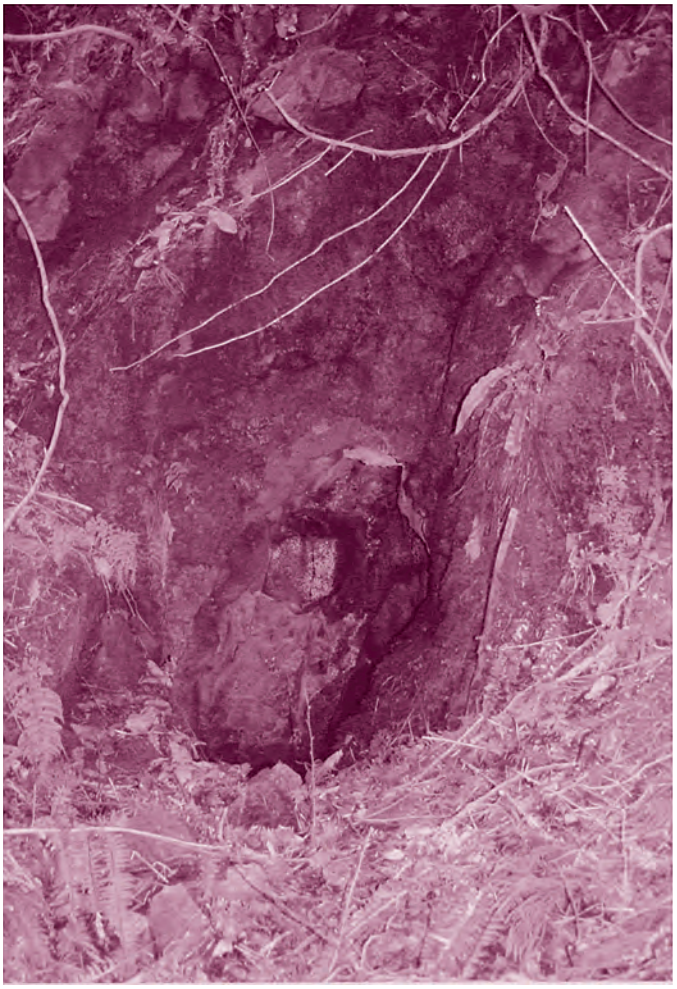
東屏風沢　No.138 弥十郎間歩跡

仕出喜沢水系　No.194 間歩跡遠景

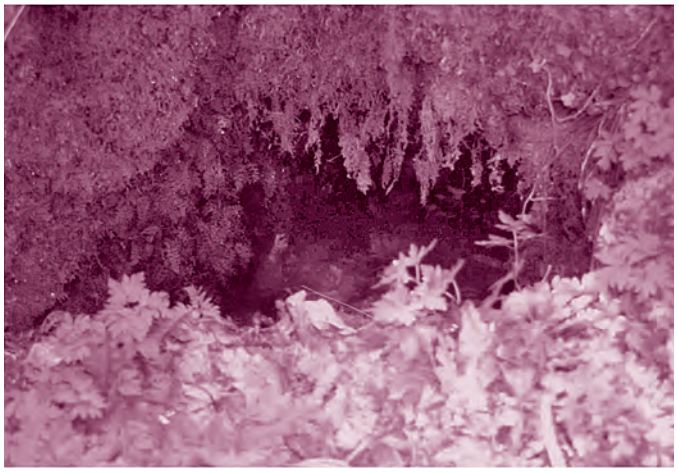
仕出喜沢水系　No.197 間歩跡坑口

西屏風沢　No.217 間歩跡坑口

仕出喜沢　No.334 間歩跡遠景（写真右・坑口）



仕出喜沢　No.334 間歩跡坑口

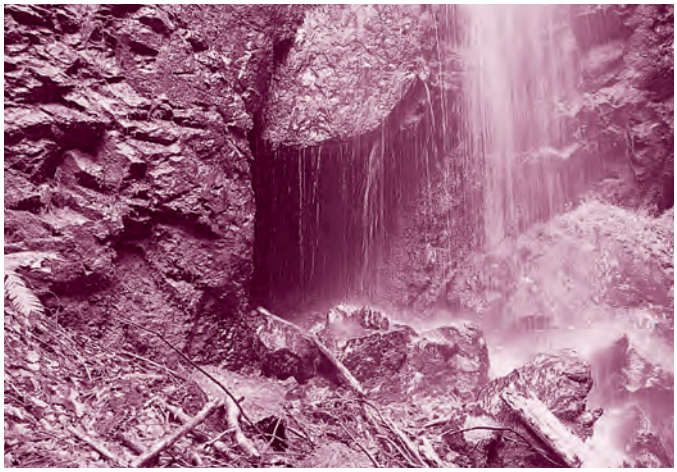


仕出喜沢　No.342 間歩跡坑口

松ヶ沢　No.485 間歩跡遠景

仕出喜沢　No.369 間歩跡坑口

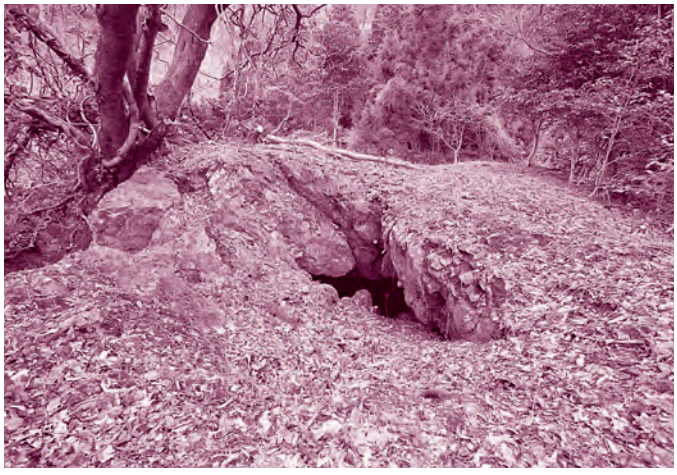
大滝　No.663 大滝間歩跡遠景



大滝　No.663 大滝間歩跡坑口

大滝　No.662 間歩跡坑口

大滝　No.656 間歩跡坑口



大滝　No.661 間歩跡遠景

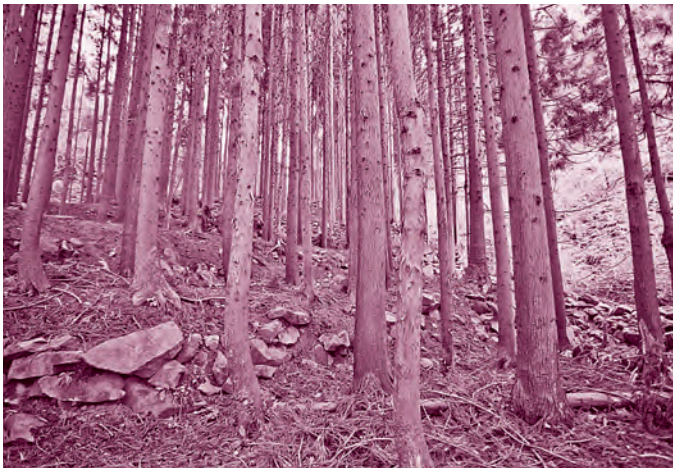
東屏風沢　No.188 試掘坑跡

仕出喜沢　No.333 試掘坑跡

仕出喜沢　No.634 石組遺構

屏風沢水系　No.149 石組遺構

大滝　No.699 テラスの石垣



大滝　No.699 テラス・石垣

屏風沢　No.124 テラス水流内の木製樋（写真中央）

鶴子沢水系　No.104 鶴子（百枚）竪坑跡

西五十里道（沢根五十里地内）

西五十里道（相川羽田村地内）

鶴子道

鶴子道（沢根側入り口）

古岩山参道

古岩山参道の石仏

相川往還（中山街道）

相川往還（中山街道）・中山一里塚

沢根元城跡遠景

沢根城跡遠景

鶴子鉱山代官屋敷跡のテラス

鶴子鉱山代官屋敷跡のテラス

鶴子荒町遺跡のテラス

鶴子荒町遺跡のテラス

鶴子荒町遺跡の井戸跡

鶴子荒町遺跡に残る御料局時代の鉱区境界杭

鶴子田中遺跡遠景

鶴子田中遺跡（陣屋跡推定地）

鶴子床屋跡遺跡

沢根五十里・山師秋田権右衛門家の墓

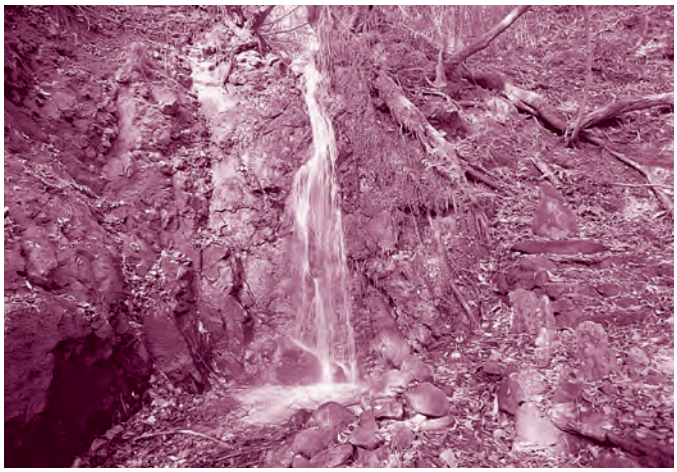
沢根五十里・吉祥寺跡

沢根五十里・金北山神社

沢根・専得寺

沢根篭町と善宝寺

天狗岩



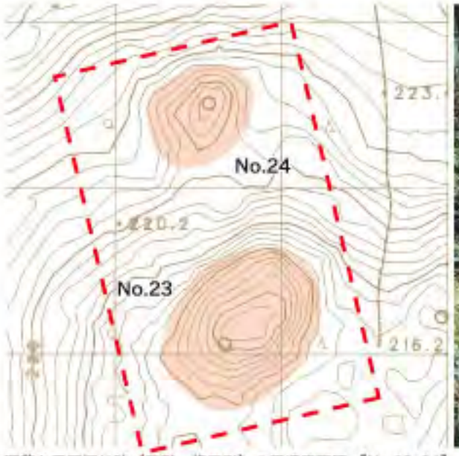
小滝

古岩大神堂宇

沢根湾全景（古写真）

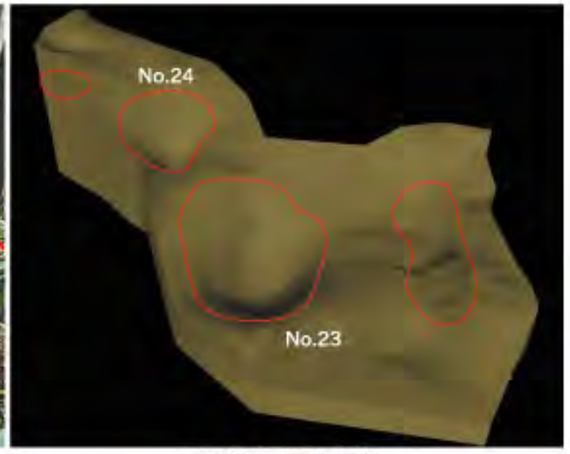
現在の沢根

現在の沢根五十里

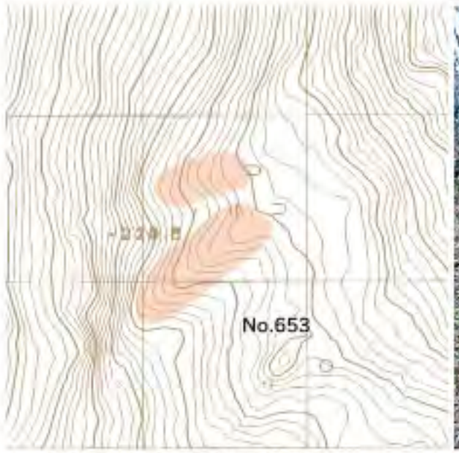


顕著な露頭掘り跡（円形・楕円形）の現況平面図［No.23・24］

No.23 露頭掘り跡　現況写真



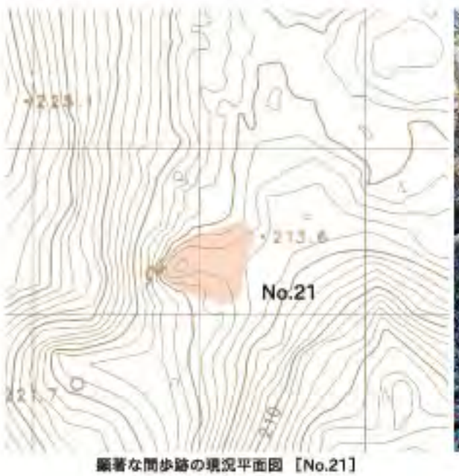
No.23・24 三次元復元情報



顕著な露頭掘り跡（溝状）の現況平面図［No.653］

No.653 露頭掘り跡　現況写真

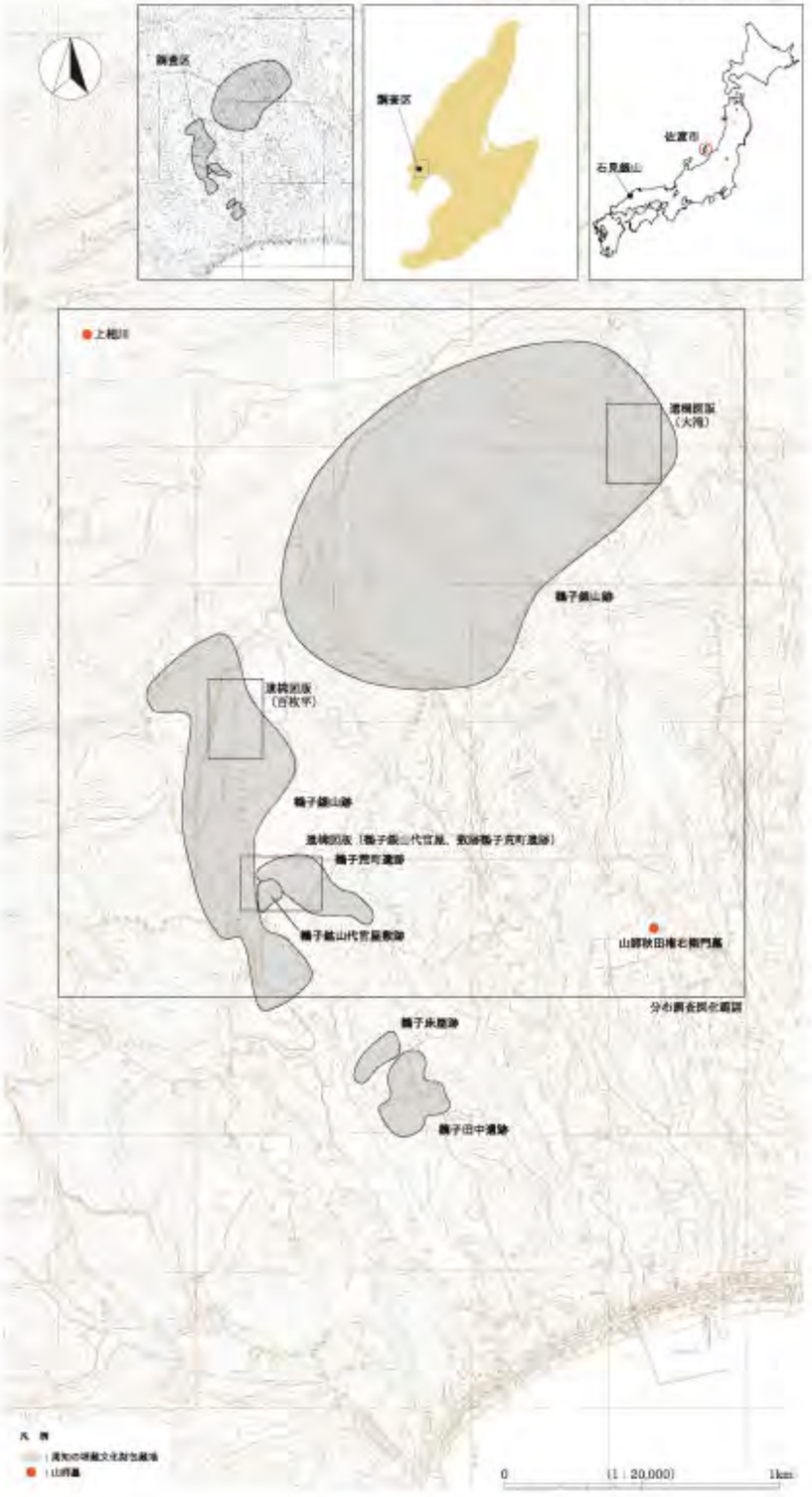
No.48 ひ押し掘り跡　現況写真



顕著な間歩跡の現況平面図［No.21］

No.21　間歩跡　現況写真

No.104 百枚整坑跡　現況写真



報 告 書 抄 録

ふ り が な	さどきんぎんざん
書　　名	佐渡金銀山
副 書 名	鶴子銀山跡調査報告書
シ リ ー ズ 名	佐渡金銀山遺跡調査報告書第 14 集
編 著 者 名	宇佐美亮
発 行 年 月 日	西暦 2010（平成 22）年　3 月　19 日
編 集 機 関	〒 952-1209　新潟県佐渡市千種 240 番地 佐渡市世界遺産推進課　TEL 0259-63-5136

遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鶴子銀山跡（つるしぎんざんあと）	新潟県佐渡（にいがたけんさど） 市沢根字桜間歩（しさわねあざさくらまぶ）他	15224	374	38 度 1 分 14 秒	138 度 15 分 53 秒	H14 年度～ H18 年度	3,130,000㎡	保存目的の遺跡範囲確認

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鶴子銀山	生産遺跡	室町～昭和	露頭掘り跡556･ひ押し掘り跡4･間歩跡108･石組み遺構4･テラス状遺構9	陶器・土器・羽口・鉄滓	銀山全体の採掘域が判明

佐渡金銀山遺跡調査報告書第 14 集

佐渡金銀山

鶴子銀山跡分布調査報告書

平成 22 年 3 月 18 日印刷
平成 22 年 3 月 19 日発行

発　　行　佐渡市世界遺産推進課
〒 952-1209　新潟県佐渡市千種 240 番地
電話　0259-63-5136

佐渡市教育委員会
〒 952-0014　新潟県佐渡市両津湊 198 番地
電話　0259-27-4170

印刷・製本　株式会社セビアス
〒 970-8026　福島県いわき市平字作町 1-3-11
電話　0246-22-6209

Sado Gold and Silver Mine

Research Report on Distribution of Tsurushi Silver Mine Remains

2010

Sado City,Niigata Prefecture
Sado City Board of Education